
異世界で生活することになりました

ないとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で生活することになりました

【Nコード】

N6133R

【作者名】

ないとう

【あらすじ】

何の準備も無くいきなり異世界に放り出された神崎悠人。そんな彼が成り行きで契約することになった精霊と共に帰り道を探するため、あちこち旅行して回ります。読者の方の暇を少しでも紛らわせることができれば幸いです。

「どうしてこうなった？」

時刻はたぶん昼、周りは深い森。

僕の目の前にあるのはボロボロの祭壇。

長らく放置されていたらしく、あちこちが大樹とコケに侵食されている。

非常に幻想的で美しい。

こういう景色を元の世界で見るのは不可能だと思う。
来て良かったってちょっとだけ思った。

『主よ、どうかしたのか？』

『・・・なんでもない』

頭の中から響く鈴の鳴るような少女の声に僕は思わず天を仰いで、
その後にとつとため息をつく。

最寄の集落まで後7日くらい、遠くに来たもんだ。

なんてことはない、昨日は普通に自室のベッドで寝ていたのを覚えている。

なのに朝起きるとベッドではなく、土の上。

おかげで腰が痛い。

しかもパジャマだったはずの服装が普段着になっていた。あと靴も

か。

誰に着替えさせられたんだよ……。
しかしここはどこなんだろう？

周りを見回す。

目の前にあるのは半分森に埋もれた祭壇、その周りは広大な森。
祭壇は墓石のような感じで、中央付近の一部が薄っすら光っていて
ひじょくに不気味だ。

森は深く、木は一本一本が異常に太い。屋久杉かと。
ただし葉の形は初めて見るタイプだ。

どうやら僕はその祭壇に捧げられる生贄のような状態で寝ていたら
しい。

次に足元、どうやら着の身着のままっけてわけではなくてバッグも転
がっていた。

中身はペンチとかiPodとか結構いろいろ入ってる、あとでちや
んとチェックしないと。

とりあえず気になるのは目の前の光物。

こんな意味不明な場所に拉致された理由がなんとなくわかるかもし
れない。

祭壇に近いづいてみると光物はどうも文字っぽい物みたいだ。

文字っぽいものは光っている部分と光っていない部分とコケとか土
が詰まってどっちだか分からない部分がある。

僕がコケを払おうと文字に触るとパキッと何かが割れるような音が
して文字は光らなくなった。

ひよっとして壊した？

なんだか非常にまずいことをした気がする。

前に日本人が重要文化財を破壊して大騒ぎになったことがあったよ
うな。

「・・・っ！」

ぞわり、と体内から何かが流れ出る感じがした。

んんっ？

いや、まった、ぞわりっっていう表現は多分正しくない。

不快ではないどころか結構気持ちがいい。

.....

.....

.....

.....

...

「いつまでもこんなところで何をしておるのだ？」

この不思議な感覚に身を任せてほけっとしてただけに心臓が口から
飛び出すかと思った。

いきなり女の子の声だよ？

なんでこんなところに？

それともこの辺ってわりとメジャーな地域なのかな？

「……」

「無視をされると悲しいのだが」

いや、無視してたわけじゃなくて驚いてただけなんだけど。

とりあえずいつまでも背中を向けてるのは失礼なので後ろを向く

今までに見たこともないくらい可愛い女の子が居た。

身長は160cmくらいでほっそりとした体、整った顔立ちに綺麗な緑の瞳。

僅かばかりのシミすらない美しい白い肌、腰まである綺麗な銀髪は下のほうでまとめられている。

緑から白のグラデーションがかったワンピースはその少女に良く似合っていた。

何より特徴的なのはその姿が半透明なところだ。

「……」

「聞いておるのか？」

「僕は夢を見ているんだ、これが現実なはずが無い」

いきなり森の中とか、半透明の女の子とかとにかく現実味が無さ過ぎる。

思わず僕は頬を抓ってみる。痛い。

「イタイ・・・」

「頬を抓れば痛いだろうに、主はどうみても起きておるぞ?」

「いやいや、現代日本に幽霊とかいないからっ!」

「ゆっ・・・幽霊だっ? あんな下級の生き物と同一視しおって、妾は精霊だっ!」

「へ?」

イマ、ナンテイッタ?

精霊?なにそれ?

いやいや、ちよつとまって、

その前の台詞にもっとおかしなところがあつたよね?

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だめだっ!このまま沈黙していても何も解決しない。

ここはひとつ、僕から彼女に質問をするべきだ。

「えーつと・・・、いくつか聞きたい事があるんだけどいいかな?」

「主になら何でも答えよう、いくらでもよいぞ」

幽霊扱いで怒っているかと思つたけれど、案外そうでもないみたいだ。

フンッ、と胸を張って精霊?は答えてくれた。

「それじゃあまずは基本的なところから」
「うむ」

「僕の名前は神崎 悠人。君の名前は?」

「妾はエルシディア、親しいものからはエルと呼ばれておる。主にもそう呼んでもらいたい」

この自称精霊の名前はエル、と。
次の質問は短いけど一番重要な。

「エル、ここの地名を教えてくださいませんか？」

相手は日本語を喋っているけれど、植生などが明らかに日本と異なる。

AVSなどで作られた非常に高度なVR環境って可能性も考えたけど、

あんなので女の子や綺麗な風景を作れるとはとても思えない。

だから、僕は納得するために聞いておきたい。

”ここは異世界なんだ”って。

「ファルド王国のウイスタ大森林だな。・・・ってなんでそんなことを聞くのだ？」

「朝起きたらいきなりここに居たんだよ。着の身着のままじゃないあたり誰かに拉致されたみたいなんだけどね。それが誰なのかわからないし、そもそもその理由も分からないんだ」

はあ〜・・・。

こういう召還モノって国とかに召還されて

しっかりとしたアフターケアを受けられるものじゃなかったっけ？
まあいつか、どうしようもないし。

エルはどう反応していいのか分からないような顔してるし、次の質問だな。

「次の質問なんだけど、何で僕が主？ エルに対して僕は何もしたことが無いし、会うのも初めてなんだけど」

「主に魔力を供給してもらったからだ。おかげでこのように不完全ながら実体化できる」

「魔力？」

「妾の魔力供給用魔方陣に触ったときに供給していたではないか」
変な文字に触ったときのあれのことか。

ちよつと意識すると体内でぐるぐる回る魔力？をはつきりと知覚できる。

多分ちよつと練習すれば放出したりするのも簡単なんじゃなかるーか。

・・・ん？

「いや、ちよつと待ってよ。魔力の供給と主従関係ってなんら関係なくない？」

「そんなことないぞ、主の魔力の波長は妾とても相性が良いのだ。こんなことは900年も生きてきて初めてなのだ。だから妾は主にとっても興味がある、嫌でなければ契約を結んでもらいたい。妾はこの大陸をある程度まわったことがあるからきつと役に立つぞ！」

900年・・・さすがファンタジー。

契約って言うのが具体的にどういうものかはさっぱり分からないけど（まさか所有権じゃないだろう）

こんなわけの分からない現状で現場に詳しそうな同行者が出来るのは素直に歓迎。

「喜んで。いろいろ途方にくれていたところだから本当に助かる」

「そうか、妾も安心した。さあ、主よ。右手を出して手のひらをこちらに向けてくれ」

にっこり笑ったエルが僕に近づき、お互いの手のひらを合わせる。手のひらを重ねると先ほどよりかなり多量の魔力がエルに流れ、少量のエルの魔力が僕に流れた。多分こうやって魔力を重ねることを契約と言っているのだろう。

「これで契約は完了だ」

「意外とあっさりだね」

僕のほうにエルの魔力が入ってきたが、体などに特に変化はない。変化があったのはエルのほうだ。

一瞬姿が光ったかと思うと、さっきまでの半透明状態では無くなりちゃんと実体を持つようになった。エルは自分の体を見てポカンとした表情をしている。なんで？

「主は今すごく疲れていたりしないか？」

「いや、全く」

魔力がガツツリ流れたので運動後の爽快感みたいな感覚はあるけど特に疲労感ってないなあ。

「失礼な質問だが主は人間か？」

「失敬な、僕は間違いなく人間だ」

「妾をはつきりと実体化させた上でまるで負荷を感じないなんておよそ人間が持つ魔力量を逸脱しておるのだが」

なんというテンプレ展開。

「負荷はよく分からないけど、魔力が多い分には困らないしいん
じゃない?」

『そうだの』

・・・うわっ!

「ちょ、今の何?」

『ん?ああ、これが。これは契約者同士が離れていても会話できる
機能だ。ちよつと集中すれば主も出来るぞ。頭の中で相手に話し
ければよい』

ファーストインプレッションだけあって驚くことが多いな。

簡単らしいのでちよつとやってみよう。

頭の中で話しかけると集中するのを同時に行つて・・・どうか?

『アアア、テステス。聞こえる?』

『うむ、しっかり聞こえておるぞ』

につこり笑ったエルが答える。

どうやらオーケーみたいだ。

充電不要の携帯電話、非常に便利だな。

対象が一人限定だけど現状僕には必要十分だ。

「さてと、このままここにいても仕方ないし、最寄の集落に向か
いたいんだけどどっちにいけばいいかな」

「ガルトが一番近いな、徒歩で7日というところか」

「・・・遠いな」

朝起きたらいきなり森の中に放置で次の集落までは7日間。
これでゲンナリしない人がいるなら見てみたい。

はあ・・・。

2010年6月15日

今日から日記を取る。特に理由は無い。強いて言つとバッグにボールペンとメモがあつたから。

記入した日付の意味があるのかは甚だ疑問だ。世界違つし。

ガルトの町まで移動開始。

幸い早々に現地に詳しいエルが仲間になつたので今後に対してあまり心配は無い。

そういえばバッグの中には野外生活に便利なものが多かつた。

浄水器やハイドレーションキット、シルバコンパスなど

役に立たないもの代表としてiPodとその充電器、鉛筆削り、GPS、USBのウェブカメラなど

鉛筆ないけどボールペンあるし、マジで何が目的なんだろう。このバッグ。

ちなみにGPSは受信できなかった、そりゃそうか。

昼食はエルに採ってもらつた果物、リンゴみたいな食感だが味はイチゴ

うまいが違和感が凄まじい。

夕方まで歩いてビバーク。

夕食は川で取つた魚を焼いたもの、残念ながら調味料が無いのであまりおいしくは無い。

油滴る魚肉だけではなんとも寂しい、何とかして塩かしょうゆか味噌を確保しなくては。

気温は低くないので体の調子を壊す心配はなさそうだ。

空を見上げると木々の陰から月が二つ見えた。
本格的に異世界だな。

2010年6月16日

移動二日目。

朝食は無し。

体の調子を心配したが全く問題ない。

あれだけ歩いたにもかかわらず筋肉痛や疲労感が全く無い。

ちよつと体に違和感があったので全力疾走するとスプリンターのよ
うな速度で走れる上にまるで息が切れない。

結局3キロほど全力疾走したがやや息が上がったくらいだ。

エルが僕のことを人かどうか疑うような目で見ていたのがちよつと
だけ悲しい。

そういえばどうやって僕についてきたのかと思ったらエルは僕に入
り込めるらしい。

昼食はエルが木の実と果物を取ってくれた。

果物は昨日と同じもの、木の実はカシューナッツの味がするどんぐ
りだった。

やはり塩が恋しい、特にどんぐりのほうはオリーブオイルを絡ませ
てから塩を振り

若干フライパンで炒めることで劇的に美味しくなるだろう。

食事中にエルに僕が異世界出身のことを話した。

半信半疑みたいなき感じだけど、浄水器をはじめとした現代のアウト
ドアグッズが証拠となり

なんとなく納得したみたい。

2010年6月17日

移動三日目。

エルに魔法を教えてもらった。

魔力を放出しながら強くイメージすると使用できる。

高枝切バサミのように使用したり、軍用懐中電灯からスタンロッドを出力したりできる。

特に炎の魔法はガスコンロとして、水の魔法は飲み水として今後非常に役に立つてくれるだろう。

実際今日は果物を取るときに便利だった。リンゴがうまい。

ちなみに魔法を使用したらエルにめちゃくちや驚かれた。

またエルが僕のことを人かどうか疑うような目で見ている。

これで二日連続、ちよつとシヨツクだ。

どうも人は魔法を使うためのステップとして

1. 魔方阵を用意する（杖に込めたりするようだ）
 2. 魔方阵に魔力を供給する
 3. トリガーとなる言葉を言う
- という手順があるらしい。

ステップを無視して使えるのがどれだけ異常かをエルは懇切丁寧に説明してくれたが、

正直詳しいところは良く分からなかった。

というかエルも似たようなステップで魔法使ってるじゃないか。（
精霊だからか？）

最初に教えてくれたあの方法は冗談のつもりだったのだろうか。

2010年6月18日

移動四日目

朝食は確保できなかったのでバッグに入ってたカロリーメイト（チーズ）を空ける。

残り二つ。バッグに荷物詰めた人？もどうせならMREでも入れておいてくれればいいのに。

体力が有り余っているので連日の移動速度がかなり速い。

エルの話が間違いないならそろそろ目的地に到着するだろう。だんだんと木が細く、まばらになっているのでそのうち草原になりそうだ。

川で水浴びし、ついでに衣類を洗っておく。さらに魚も取った。一石三鳥だが、魔法が無ければとてもできなかっただろう。

途中売ればお金になる薬草をエルが拾ってくれた。

町に着けば当然お金が必要になるが、今の今まで気づいてもいなかった。

アブネー、町についても野宿とか悲しすぎる。

今日も夕方まで歩いて野営。

夕食はどんぐり（カシューナッツ味）と魚。

携帯用ガスコンロのガスがなくなったので捨てる。

申し訳ないけど荷物は軽いほうが良い。

そういえば野生動物はおるか昆虫すら見ていない。
この森はどこかバグってるんじゃないか。

早いところガルトの町に到着したい。
そして旨い物が食べたい。

昨日から引き続き草原を歩くこと約2時間、腕時計は10時を示している。

僕の目の前にはガルトの町が広がっていた。

エルから人口や住居などは聞いていたが、数千人の人口を抱える町の光景は想像を超える。

木で出来たRPGに登場するような家や商店、宿屋。

まだ昼前だというのに薄暗い雰囲気を漂わせている酒場。

個人的にはちよつとわくわくするものが置いてあるであろう武器屋と防具屋。

自分の世界には無かった魔法の道具などを扱う雑貨屋。

活気のある町並み、行きかう人々は異世界らしくジェリービーンズのようにカラフルだ。

ただ、ジェリービーンズのようにカラフルなので黒髪の人は今のところ一人も見えない。

(サルミアツキ味とか人気ないだろうしね)

あちこち見て回るものが初めてで凄く楽しい。

どうしてこんな世界に来たのかは全く知らないが、とりあえず今は観光を楽しもう。

しかし、観光といえは金がかかる。

あたりまえだけど僕は無一文なわけで、どうしたもんか。

何とかしてお金を稼いで塩気のある料理を食べたい。

「なあ、エル」

「どうした？」

「昨日の昼過ぎに換金可能な薬草を拾ったよね。あれを換金しにい

かない？ 塩気のあるご飯が食べたいんだけど、僕たちって無一文だからさ」

「そうであった、このままでは食事も取れぬ。先に冒険者ギルドで換金してしまおう。ついでに主のギルド登録もだな」

歩くこと10分ほどで目的地についた。

冒険者ギルドはしっかりした石造りの建築物。

木で出来た看板には剣と杖をクロスさせたような絵が焼きこまれている。

中に入るとそこはまさしく冒険者ギルド。

左手奥にはおそらく依頼なのだろう、大量のメモが壁に貼り付けられている。

右手側は軽い食事や酒を出すための小さな丸テーブルと椅子がならんでいて、

まだ昼だというのに酒を飲んで騒いでいる何人かの冒険者たち。

そして中央のカウンターにはギルドの店長らしき彫りの深い顔のおっさんがいる。

「こんにちは」

「ガキが何のようだ、市場は西のほうだぞ」

店長さんに挨拶するなりいきなりひどい事をいわれた気がする。

「いえ、冒険者ギルドの登録と薬草をの換金をお願いしたくて」

「薬草はともかくギルドの登録は15歳からだ。ガキは登録できな

い、死ぬだけだからな」

「ちよつと待つてください、僕は21歳です！ 一体いくつに見えるたつて言うんですか？」

「嘘をつくな嘘を。お前は15、6、隣のお嬢ちゃんはそれよりも少し上か？」

エルのほうが上に見えるのか。
かなりシヨックだ。

「仮に15歳だったとしても登録可能な年齢じゃないですか。」

「さつきも言ったがガキは登録しない、ギルドの仕事は遊びじゃないし、何より死ぬやつも多い。そんなところに15歳ぎりぎりの奴を入れると思うか？」

店長さんに言葉の刃で切り裂かれているとエルが一步前に出て僕を見た。

なるほど、僕のことを援護してくれるんだな。

「主は成人しておったのか！ てつきり15くらいだと思っておつた」

「……」

「しかし、身長といい顔といい。……いや、すまぬ。」

ええ、そうですよ。

僕はちびですよ、そうですよ。

しょうがないじゃないか、身長なんて遺伝子で決まってるんだから！ 牛乳を毎日飲んでもわずか160cmですよ。

顔だつてなんだか子供のままでちつとも大人っぽくなりませんよ。

……グスン。

「その、すまぬ。そんなに落ち込まないでくれ」
「ありがとうございます・・・大丈夫だから」

エルが慰めてくれるが、凹むなあ。
でもまあ、とりあえず今は目的を達成しないと。

「店長さん、どうにかなりませんか？ ギルド登録できないと僕たち飢えちゃうんですよ。」

飢える、という単語を伝えると店長さんはなんだか悩んだ表情をしないでしばらく悩み始めた。

「仕方ない、登録を許可しよう。無茶して死ぬんじゃないぞ」

「ありがとうございます」

「登録は二人でいいのか？」

「妾の登録は不要だ、登録は主だけでよい」

「わかった。必要事項に記入するから二つ質問に答えろ」

紙を渡さないってことはあれか、識字率とかの問題なのかな。

発展途上国などは字がかけない人も多いだろうし、異世界ならなおさらかな？

さらっとエルが”妾”とか”主”などといってるけど無反応かよ。

僕の世界で”妾”なんていう奴がいたら注目の的だぞ、いろんな意味で。

「まずは名前だ」

『主、このあたりでは名前が先だぞ』

『ありがとう、普通に答えるところだった』

念話で素早いサポートが入る。

エルがいなかったらいろいろ困っていたんだろうな。

異世界生活初日からお世話になりっぱなし、エルに何かしてあげられることがあればいいんだけど。

「ユート カンザキです」

「変わった名前だな。次は戦闘手段なんだが・・・正直お前に出来ることがあるとは思ってない」

「それ、ひどくないですか？ 確かに戦ったことなんて無いですけど。あー、でも魔法得意ですよ、たぶん」

「ほら、戦闘したこともないだろうが。しかも魔法？お前杖も持っていないだろうが。ともかく聞くことはこれで終了だ。その椅子にでも座ってちよっとまっとけ」

「わりかました、ありがとうございます」

店長さんの視線の先を見ると軽食屋の椅子とテーブルがあるのでそこで待っているということなのだろう。

ちよつとが果たしてどの程度だかは分からないが、ともかくある程度の時間がかかるのだろう。

とりあえず一番近くの椅子に座るとテーブル挟んでの対面にエルが座った。

「さて、これからどうしようか？」

「どうするもこうするも元の場所に帰る方法を探すのではないのか？」

「いや、まあそうなんだけどさ。さすがにノーヒントだとどこから探ればいいのか」

最終目標は自宅に帰る道を探すことだけど、いきなりその目標を達

成するのはかなりハードルが高い。

なにせほぼノーヒントなのだ。

分かっていることは誰かに拉致されて来た可能性がかなり高いってことくらい。

ほかにはなーんもヒントがない、どうしろと？

「それならば古代の遺跡の探索はどうだろうか？」

「ひよつとして技術レベルが現代より高かったり？」

「かなり高いな。実際主の状況を現在の魔法で行うことは不可能だ、あるとすれば古代遺跡の遺物くらいだと考えている」

古代遺跡か、ロマンあるよね。ついでにヒントもありそうだ。

懸念事項としてやはり安全性か。

「その古代遺跡の探索は魅力的なんだけどさ、危険なんじゃないの？」

「非常に危険だ」

「いや、そんなハツキリスツキリスツパリ言われても困る。僕は知つての通りこつち来てから日が浅いし、非常に安全な国に住んでいるから戦闘能力なんて欠片も無いぞ。確かに身体能力や魔力はあるんだろうけど、それをうまく使えないんだよ」

「う、そうであつたな」

「あー、でもそうか・・・」

しばらくうだうだと実の無い会話をエルと続けていると

ギルドマスターが手に小さなカードのようなものをもって近づいてきて口を開く。

「おい、ガキ、登録が出来たぞ。こいつがカードだ、無くすと次から有料だから大事にもっておけよ？」

「ありがとうございます、無くさないように大事にバッグにしまっておきます」

カードは金属のような質感だが非常に軽く、油断すると割ってしまいそうだ。

僕はカードをバッグにしまつと、代わりに薬草を取り出す。

「あと、薬草を買い取っていたきたいのですが」

「プランタ草か、良くこんな大量に見つけたな」

「見つけたのは僕じゃなくてエルですけどね」

「そうなのか、あのお嬢ちゃんなかなかやるじゃないか。ともかく薬草は買い取るぞ。銀貨3枚と銅貨25枚でどうだ」

店長さんがそういつて銀貨3枚と銅貨25枚を丸テーブルの上に置くが、貨幣価値が分からないのでちよつと困る。

あ、でもまああんまり酷ければエルが反論してくれるか。

僕は丸テーブルの上のお金を小袋にまとめて入れた後、バッグにしまつ。

「買い取っていただいてありがとうございます」

「おう、また薬草を見つけたらもってこい。依頼を完遂するなら街中の作業にしとけよ、食うには十分稼げるはずだ」

そういつてから店長さんはカウンターに戻つた。

これでここでやるべきことは済ませたかな。

最後にさらつと言われただけが、安全な仕事もあるようだ。これで今後の食事には困らないだろう。

とりあえず今はおなかが減つたし食事に行きたい。

「さて、お金も手に入ったところでご飯食べ行こうか」
「うむ！塩気のあるものは久しぶりだ」

これって見たから見たらかなり悲しい二人組みに見えるんだろうな
！。

僕とエルはギルドを出て・・・あれ、どっちが飯屋だろう？
さつき市場は西のほうって言われたが・・・。
まあいいか、飯屋なんてどこにでもあるでしょ。

適当に町並みを歩くとちょうど昼時ということもあってあちこちで
食べ物が売られている。

屋台や定食屋はそこら辺に結構存在するようだ。

「どれにしようか？」

「妾はどの店でも良いぞ。好き嫌いなどはないからな」

「ん、そっか。じゃあ適当にその辺に入ろう」

僕は近くにあった定食屋らしきお店に入る。

外にはテーブルと椅子が並んでおり、今日の天気なら外で食べるの
も悪くはない。

「こんにちはー」

「あら、いらっしやいませ。どうぞ空いている席にお座りください」
店に入ると30くらいの高幅の良い女性が対応してくれる。

僕とエルが一度外に出て開いている二人用テーブルに座ると先ほど

の女性が黒板を持ってこちらに来了。
黒板にはミミズがのたくった様な字でなにやらメニューが書いてある。

メニューの後ろの数字はおそらく値段だろう。

「……………」

「主、どうかしたか？」

「お客様、どうしましたか？」

「いや、なんでもありません。ホロワ鳥のから揚げ定食をひとつください。……あ、エルはどうする？」

「妾はこのコルム茸の炒め物定食がよい」

「かしこまりました。ただいまお作りしてまいりますので少々お待ちくださいね」

女性がキッチンに向かい、注文の内容を伝えると再び入り口に戻る。

「主、メニューを見たとき沈黙していたがどうしたのだ？」

「文字がさ、読めるんだよね。生まれてはじめてみる文字なのにさ、こつ、ネイティブのように理解できるんだ」

そつ、僕は文字が読めるし意味も理解できる。

しかも生まれて初めて見る文字が。

知らないはずなのに知っていると世にも奇妙な感覚が僕の頭の中をぐるぐると回る。

「なんだそんなことか。それは妾との契約によるものだな。基本的にどこの言語にも対応している」

「それは……凄いな」

「そつか？」

「普通に凄いよ！ 仮に僕が契約せずにこの町まで着いていたとしたら途方にくれてたよ！・・・エルがいなかったら僕は野垂れ死んでいたかも」

「たいしたことでもないのだが、そんなに喜ばれると妾もうれしいぞ」

さらっと言ってるが本当に凄い！

この能力があれば僕はどこでもぺらぺらネイティブなわけだ。

ああ、エルと共に元の世界に返れたら確実にTOEICを受けに行くだぞ。

ライティングはエルと契約している時点で無敵、リスニングはエルと同化しておけば無敵。

間違いなく950点以上だ。素晴らしい！

あつと、思考が変なほうにすつ飛んだ。

今後の方針についてエルと話さないと。

「そうだ、今後の方向についていいかな？ さっきはなんだかうだうだ実の無い話になっちゃったからさ」

「うむ、確かに目標と方向性は決めておいたほうがいいな」

「えーっと、まずね。最終目標については元の世界に変える方法を見つけないことなんだけど、コレには僕をこちらに連れてきた人がいるわけだ。なので、ちよつと目標をブレイクダウンしてこの人を見つけないって言うのを目標とする。んで、コレも探すのは至難の業だと思つので、次点で可能性の高そうな古代遺跡を探索したい」

「なるほど、しかし古代遺跡はかなりの危険を伴うがいいのか？」

「そうなんだよ、古代遺跡の探索はさっきのエルの話聞く限りかなり危険。しかも数自体も少なくてたまにしか無いんでしょ？」

なので、と一拍置いてから。

「古代遺跡探索は当面さくつとあきらめて僕は適当に生活していつと思つ」

・・・エルの顔に縦線が三本ほど入った気がする。

「ちなみに、僕はエルをかなり戦力としてみているんだけどどうだろう？」

「主に頼られるのは嬉しいのだが・・・。精霊というのはそれほど戦闘能力に秀でた種族ではないのだ。確かに妾は精霊の中では力を持つほうではあるが、あまり期待をされると困る」

「そっか、了解。幸い魔方陣不要で魔法が使えるみたいだし、身体能力もそこそこあるみたいだからね。訓練しだいで結構がんばれるようになるでしょ」

実際経験があれば後ははずいぶんマシになると思うんだ。

なにせいくら走ってもまるで疲れない体に、大量の魔力。

二日目、三日目にいろいろ試したけどバトルライフル程度の威力の魔法ならダイレイなしでいくらでも使用できる。

もちろん本物のバトルライフルに比べて精度はかなり落ちるけど、中世レベルの文化の交戦距離では必中も狙えるだろう。

「うむ、主ならきつと大丈夫だ。・・・お、料理が来たようだぞ」

「お待たせしました。ホロワ鳥のから揚げ定食とコルム茸の炒め物定食です」

「ありがとうございます」

僕は料理を受け取りお礼を言う。

目の前に用意された定食は日本でも良く見る鳥のから揚げ定食にそっくりだ。

黄金色の衣に付け合せのキャベツのような野菜。

付属のスープはなんだかよく分らないが、十分にうまみが出てい
るように思える。

残念ながら主食はご飯ではなくパンになっているが、それでも十分
においしそうだ。

「いったただつきまーす」

まずはホロワ鳥のから揚げを一口。

うおおおおお、久しぶりの肉！そして塩気！

から揚げの中に閉じ込められたうまみが油と共に口に広がる！

異世界漂流5日目にしてようやくちゃんとした食べ物が食べれた！

次にスープを一口。

香草の香りがちょっと引つかかるが味自体はとてもおいしい。

鶏がらスープと胡椒の風味が完璧にマッチしており、全体的に非常
にバランスが取れている。

最後にパンを一口。

・・・これはちょっといただけない。

全体的にボソボソした食感で、おそらくちゃんと均一な粉を使って
いないのだろう。

焼いてから時間が経ってしまったているのも原因のひとつだと思う。

ただ、これについてはから揚げと一緒に食べたり、スープに浸しな
がら食べると結構改善する。

全体的な評価としては非常においしく、とても満足だ。

・・・ん？

エルが空になった自分の器とから揚げ皿を交互に見ている。

精霊って意外と食べるんだね。

「エル、一個食べる？」

「いいのか！ありがとう！」

ニコニコしながらから揚げをほお張るエルは見ていてとても微笑ましかった。

食事を取り終えたらあとは宿屋として安全な依頼をこなしていくますか、と。

3 (後書き)

「そういえばさ、銅貨とか銀貨とかってどのくらいの価値なの？」

「銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨10枚で金貨1枚だな」

「食事のお金が二人分で一食銅貨12枚だったよね」

「うむ、味の割りに安かったと思うぞ」

なんだか自分の世界のお金に直すと銅貨1枚100円くらいなのかな。

そうすると数日の内に金欠になるのはほぼ確定か。

早いところ金策しないとな。

昼食をとり終えた僕たちは宿を取ることにした。

初日から地面で寝る生活を続けていたので個人的にかなりうれしい。

昼食をとったお店でお金を払うついでに宿屋の位置も聞いておいて良かった。

定食屋と違って宿屋の数は少ないのでもし知らずに出ていたら見つけるまでしばらく町を彷徨ってたと思う。

お金の消費を抑えるため、宿屋に入る前にエルには同化してもらい一人部屋を取る。

エルにそれでいいか聞いたところ食事は絶対に取りたいが宿なら僕の中でいいといわれた。

ちなみに寝心地はいいらしい。

と、これが昨日の話。

そして今僕は非常に重大な局面に達している。

それは……………

お金が無いことだ！

今の僕のお金はエルが見つけてくれた薬草（プラント草だっけ？）によるものだけ。

当日の食事で銅貨23枚を使い、宿で半銀貨を1枚使用した。

つまり、一日に銀貨1枚以上は稼いでおかないと自転車操業状態に

なるということ。

たとえば僕が風邪を引いて1週間くらい行動不能になるとしよう。そのときに必要なお金は宿代で銀貨3枚と半銀貨1枚、食事で銀貨2枚弱程度。

このお金が無い場合は下手すれば命の危機になりかねない。

幸い僕の体はかなり丈夫になったみたいだし、体調もすこぶる良い。だけど、世界が変わるといってもない事態に巻き込まれたわけ。

個人的にはいつ風邪を引いてもおかしくないんじゃないかとは思っている。

そうなると悲しい事実が浮かび上がってくる。

それは、”ある程度以上安定した生活を狙う場合、安全な街中の依頼だけではかなり困難である”ということ。

昨晚エルに話を聞いたが、街中の依頼は荷物運びや土木の手伝いなど丸一日使う仕事で大体銀貨1枚程度。

日本円換算で大体1万円なので僕の個人的感覚からすれば稼げる金額として大きいと思う。

しかし、実家で生活しているわけではないので金が足りない。本当に。切実に。どうしようもないほど。

なので、僕はちょっと危険を冒してでも収入がある程度あるギルドの依頼を受ける必要があるのだ。

昨日の今日で再びギルドに訪れる。
相変わらず閑散としているんだけど経営とか大丈夫なのかな。
まだ午前中だとはいええ、朝飯を食べる冒険者とかいてもいいと思う
んだけど。

「こんにちは」

「またお前か、今日は何だ？」

「いや、割とお金が無い状態なので何か依頼を受けようかと」

昨日の今日なのにすっかり失念していたけど、この人僕に危険な依頼とかくれるんだろうか。

外見が子供（納得イカン！）な僕には街中の依頼しか回さない気がする。

「お前は登録したてだから街中の依頼か、もしくはかなり危険度の低い依頼以外は許可しないぞ」

「はあ・・・、わかりました」

いきなり釘を刺されてしまった。

ある程度力があるところを見せられるようになるまではこりゃ自転車操業確定かな？

実際問題、戦闘になるのがわかりつきているような依頼はなかなか受けにくいと思っっているのではうなずくしかない。

僕はギルド左手奥の依頼のボードを見る。

なんか随分数が多いな、見た感じ冒険者なんてあまりいないみたいだし、

需要と供給のバランスがおかしくなってるんじゃないか？

”新規店舗の荷物の運搬作業 銀貨1枚より ランクG”

”薬の調合に必要な薬草の採取をお願いします。 プランタ草20
本 銀貨2枚 ランクF”
”薬の調合に必要な薬草の採取をお願いします。 アポシスの実1
5個 銀貨6枚 ランクE”
”カーシンの町までの護衛、到着までに5日ほどかかります。 銀
貨16枚 ランクD”

そういえばランクの説明って受けてないな、多分街中作業でGって
ことから僕のランクがGであることは想定がつくけど。
しかし・・・何故にランク表記がアルファベット？
ほかの字は相変わらずミミズがのたくった様な字なのに、何故にラ
ンク表記だけアルファベット？
意味分からん、どうでもいいか。

さて、たぶん受けられるのはランクGの仕事だけだろう。
いくつかあるようだが、身体的能力と経験（引越しのバイト）を考
えると荷物の運搬作業がいいと思う。
さくさく済ませれば収入が上がる可能性があるからね。

「店長さん、コレ受けます」
「ウリミア商店の新規店舗の搬入支援か、出て左手にまっすぐ向か
うとウリミア商店って店があるからそこでこの札を見せる」
「わかりました。
では、失礼します」

なんか超高速スポット派遣って感じだな。
ギルドの滞在時間なんて5分くらいだったよ？

そうだ、仕事の前にエルを起こしておかないと、何かとアドバイスがもらえるだろう。

『エルー、起きてー。』

今から仕事だよー』

『ん……う……、主、どうかしたのか？』

『ギルドで荷物運びの依頼を受けたから僕が変なことしないか見張つていてもらおうかと思つて。基本的な作業に関しては僕が行うからエルはそのまま僕の中にいてくれ』

『了解だ、任せてくれ……すう……』

こんな調子だけど大丈夫かな？

ともかくさつさと仕事を終わらせてなるべく早くある程度以上のお金を稼げるようになるう。

それにしてもウリミア商店はどこだ？

店長の話だとあんまり遠い場所つて印象を受けなかつたんだけど、ひよつとして結構遠かつたりするのかな。

今後は行き方だけじゃなくて距離も聞いておこう。

たつぷり10分も歩くと道端に大量の木箱と馬車があるのが見える。近づくると道具袋みたいな看板にウリミア商店と書いてあるので間違いないだろう。

「こんにちは、ギルドの依頼を受けて来ました」

「ああ、依頼してた冒険者の方だね。俺はオービル、よろしく頼むよ。今日は新店舗で大量の荷物があるからね、疲れるとは思つががんばってくれ」

「僕はユートです。体力には結構自信があります、任せてください。・・・そうだ、ギルドから札を見せておけといわれたので」

僕はギルドからもらった木製の札を見せる。

オービルさんはそれを手に取ると懐にしまいこんだ。

「ああ、これはギルドの証明書だね。仕事終了後にはんこを押して返すんだよ。これをもって帰ればギルドからお金がもらえるはずだ。ひよつとしてギルドの仕事は初めてかい？」

「恥ずかしながらそうなんです。なるべくがんばりますのでよろしくお願いいたします」

挨拶と同時に頭を下げる。

現代日本では挨拶とお辞儀は滑らかな人間関係を築く上で非常に有用だ。

・・・アレ？

なんかオービルさんが変な顔してこっちを見ている。

なんかやつちやつたかな。

お辞儀がこつちでは中指立てるような行為に近いとか？

『エル、なんか僕の行動で変なところあった？』

『いや、特に無いぞ』

『だよねえ』

どうやらそうでもないらしい、オービルさんは不思議だ。

よく分からないけどとりあえず謝っておくか。

これで解決すればラッキーだし、いずれにしろ原因は分かるだろうから次からはしないで済む。

「申し訳ありません。何か気に障ることがありましたでしょうか？」

「すまない、気を使わせてしまったね。冒険者なんてもの、特に駆け出しは早く外の危険で稼ぎのいい仕事をしたくて焦っているものだから。こういう仕事を請けると結構攻撃的な奴が多くてさ、けどユート君は落ち着いているだろう？ だからちよっと驚いてしまっただけ」

僕も結構焦ってますけどね。

実際この仕事も素早く終わらせてとつとつ次の仕事をしてお金をどんどん稼ごうと思ってますし。

とりあえずとつとつと金貨一枚くらい作っておかないとイザってときヤバイ。

「ギルドの駆け出しだとすぐに外の仕事とは行かないですし、無理にがんばると失敗しそうな気がして。ある程度危険度のある仕事については信頼と実力を勝ち取ってからです」

「本当に落ち着いているね。さあ、じゃあ仕事をお願いしようかな」「かしこまりました。この大量の木箱を店内に入れればよろしいでしょうか？」

「ああ、それでかまわないが……。あとコレは個人の好みもあると思うんだが、そんなにかしこまった喋り方しなくても構わないよ」「ありがとうございます。ちよっと僕も気が張っていたので楽になります」

オービルさんいい人オーラが凄いわ。

さあ、ゲンナリさせないためにもがんばろう。

僕は目の前に溢れかえった木箱を群れを見る。

・・・なんだこのぎりぎりなバランスは。

どう考えても馬車から降ろすことしか考えていなかったんだろう。

軽そうなお木箱の上に馬鹿にでかいがっしりとした箱が積まれており、

下の木箱がみしみしと鳴っている。

『まだ馬車にも荷物があるようだぞ、しかしその従業員は何を考えて軽いものの上に重いものを置いているのだろうか』

『うわわわわわ……。やばいやばい、ちよつととつととそこの箱どけないと！ これ以上積みまれたら荷が壊れる！』

エル、のんびりしてる場合じゃないから。

物壊れたらきつと僕のただでさえ少ない賃金がさらに少なくなっちゃうから！

そしたら僕たち飯抜きだぞ飯抜き！

僕は急いで馬車から荷物を降ろす従業員のそばに向かい、大きい荷物をどける。

ん？意外と軽い。

これなら2、3個まとめて持っていけそうだ。

とりあえず一番大きい木箱の上に中サイズの木箱を二つ積む。

ために持つてみると何とか持つていけるレベルの重さなのでそのまま店舗の中へ。

店舗に入るとカウンターや棚がすでに用意されており、荷物をぶつけないように歩くのは意外と大変だ。

この世界養生シートとか無いし。

『エル、ほかに荷物を置いてあるところとか見えない？』

『同化中だと主と同じ視界しかないので分からんぞ、ただ、倉庫つていうくらいだから奥だろう』

『なるほど、了解。ちよつと奥まで歩いてみよう』

えっちらおっちら荷物を抱えて少し歩くとエルの予想通り店舗の奥には倉庫があり、すでにいくつかの荷物が保管されていた。

僕はそこに荷物をゆっくりと地面に下ろす。
よし、次だな。

『ふう………』

倉庫を出て再び道に出るとゲンナリするほどに状況が悪化しており、下の荷物がつぶれそうになっているものが散見される。とりあえず下の荷物への加重を減らそう。

有り余る身体能力を自分が使える限りフルに使って次々荷物を救う。ついでに重い 普通 軽いの順に積み直してあとで持って行きやすいようにしていく。

ある程度荷物をまとめ終えれば次はもう持っていくだけなので楽勝だろう。

そんなわけで15分ほど積み直しを行うと、あれだけ散らばっていた荷物がある程度持ち運びやすい状態になる。

荷馬車の荷物ももう空のようで、終わってみれば大中小の荷物をまとめた山が20個ばかり出来ている。

僕は近くの荷物の山の一番下をしっかりとつかみ、そのまま倉庫に持っていく。

荷物を倉庫に格納したあとに戻ってくると視界に写ったのはなぜか呆然とした表情のオービルさんとその従業員の方。

「あの、なにかありましたか？」

「ユート君の体はどうなっているんだ？ あんな風に荷物をまとめているから何をしているのかと思ったら、まさかまとめて持っていくとは………」

呆然とした表情のままオービルさんが答えるが、なんか違和感があるな。

やり方的に問題がある場合ならもうちょっと怒ってると思うんだけど、オービルさんを見る限りそういうのは感じられない。単純に驚いているようだ。

「ええ、そのほうが効率的ですので。後で倉庫内の荷物をカテゴリー分けする作業が発生しちゃうと思いますが、あまり道に荷物を置いて置けないので」

「確かに効率的ではあるだろうが普通の人はあんなものもてないよ」

「僕が持った荷物はそこまで重くはなかったですよ？ 確かに2、3個まとめているので重いっちゃ重いですが」

「大きい木箱の中は武器やインゴットが入っているんだ。だから持つときは怪我をしないようにそのキースと協力するように言うのを忘れてて戻ったらユート君が一人で、しかも、ほかの荷物を上に積んで持っているものだから驚いてしまっただけ」

まさかそんなに身体能力が強化されているとは思わなかった。

確かによくよく考えてみれば3km全力疾走で息切れなしだったもんな。

筋力面の強化も当たり前といえば当たり前か。

「ユートさん凄いです！ 冒険者の方っていうのは皆さんこんな力を持ってらっしゃるのですか？」

キースさんが敬語で僕に話しかけてくるが、立場的には”従業員のキースさん > アルバイトの僕”なハズ。

自分から見て立場の上の人に持ち上げられる経験っていうのがほとんど無いのでちょっと対応に困る。

「どうなんでしょうか、僕は冒険者二日目なのでちょっと分からないですね。というより僕はこれが初めての仕事なので、冒険者の平均が分かってないです」

オービルさんは啞然としているし、キースさんは僕の言葉に反応すること無くキラキラとした目で僕を見ている。

なんとというか・・・そんなに驚かれることなんだろうか。あとキラキラした目線はちょっとくすぐったい感じがする。

『別に僕より筋力のある冒険者なんていくらでもいるよね？』

『たぶん主より筋力があるのはBランク以上の冒険者くらいだぞ』

ちよつとあきれたようなエルの声。

『驚いた。そんなあるのか、魔法メインでパワーファイターやる予定は無かったけどそつちも可能かも？』

『余裕で出来るだろうが、Bランクの冒険者なんてそれほど珍しくはないぞ。魔力については人のレベルを逸脱しているからちよつともつたいないな』

『そつか、なんか異常に驚かれてる気がしてさ。ちよつと気になつたから聞いただけなんだ。』

『Gランクでお手伝いさん呼んでおいて上位ランククラスの冒険者が来たら普通驚くだろう？』

『なるほど・・・納得した』

よし、ともかくサクサク仕事を済ませてお金を稼ぐぞ！

僕は会話もほどほどに切り上げて再び荷物を運び始める。

・・・うおっ、コレはさっきのと違って重い！

あれから2時間ちよつとの時間を消費して最後の荷物を倉庫に運び込んだ。

もちろんカテゴリ分けは全く済んでいないので倉庫の中はかなり力オスな状態となっている。

中に食料品などの賞味期限や消費期限があるものがある場合、きつと今日から貫徹作業だろう。

・・・オービルさんに悪いことしちゃったかな。

『これらを整理するのはかなり大変な気がする』

『主や妾には不可能だろう、なにせ商品のカテゴリが分からぬ。そりや武器かそうでないかくらいなら分かるがそれ以上は・・・』

『どうしたもんかな』

『とりあえず戻るぞ、ここにいっても意味がない』

『了解』

僕が表に戻るとニコニコしたオービルさんとキースさんがいて

「今日はありがとうございました。こんなに素早く的確に仕事をしていたで助かりました」

「いや、荷物をバラバラに積んでしまったので、きつと整理は大変だと思えます。申し訳ないのですが、僕は商品の知識に欠けるためその点でお手伝いは出来そうに無いです」

「いえ、そもそも仕事は荷物を倉庫に送り込むことでしたので・・・それをこんな極短時間で達成していただいて・・・これは報酬に色をつけねばなりませんね」

そういえばコレ丸一日で終わらせる予定の作業だったんだっけか。短時間で終わらせたので場合によっては次の依頼もすぐ受けられるだろうし、しかも報酬に色とか！
がんばってよかった。

「コート君、証明書を返すよ」

「ありがとうございます」

証明書を受け取り、ジャケットの内ポケットにしまう。

「本日はありがとうございました。今後も機会があればよろしくお願いいいたします」

挨拶とお辞儀をした後、ギルドに向けて歩き出す。

さてさて、銀貨一枚の仕事がいくらになったろう。

丸一日分の作業を3時間弱で行ったらしいし、それならひよっとして相当いけてるんじゃないか？

帰り道は初仕事を無事に終えた高揚感なのか、妙に足取りが軽い。僕はギルドの中に入ると（たぶん笑顔で）店長に仕事の完了を報告する。

「店長、仕事が終わりましたよ！」

「仕事請けてから5時間も経ってないんだが……。お前、失敗して無いだろうな」

「いや、ちゃんと証明書もちゃんともらってきましたよ」

僕は札を店長に渡す。

それを見て黙る店長

その店長を見て黙る僕。

「……………」

たつぷり30秒は見てたと思う。

札にははんこが押されているだけなので確認するだけなら5秒もいらないと思うんだけど。

「驚いた、仕事の完遂＋追加報酬か。ユート、お前意外と出来る奴だつたんだな」

ああ、なんだほつとした。

なんか失敗したかと思つたよ。

しかも名前で呼ばれるようになったよ！

「ほれ、報酬だ」

「ありがと……うお！」

「驚いたか、俺も驚いた。まさかはじめての仕事で追加報酬、しかも元の報酬よりでかいぞ」

「驚きました」

僕の手元には銀貨2枚と半銀貨1枚。

予定では銀貨1枚なわけで、そう考えるとかなりびっくりだ。

うん、今日は働かなくていいな。

「ご飯食べて魔法の練習でもしよう。」

「店長さん、ありがとございます。また明日もよろしく願います」

「店長じゃなくてカーデイスだ」

「え？」

「お前とは長い付き合いになりそうだ。いつまでも役職で呼ばれるよりは、名前で呼んでもらおうと思っただけな」

「はい、今後もお願ひします。カーデイスさん」

「んじゃ、またな」

なんかちよつと気恥ずかしいな。

認められた感っていうのかな。

実際には初仕事を終えたただだからいつお前呼ばわりに戻るかわからないところではあるんだけどね。

1 (後書き)

『ところで結局ギルドのランクってなんなの？』

『S、A、B、C、D、E、F、Gの8段階で分けられる冒険者の程度だな。』

E以下は駆け出し、半年も冒険者をやると大体Dランク程度になるぞ。』

一般的な冒険者のランクはCだな。』

Bランク以上はベテランと見ていい、特にSなんて各国に数人ずつしかいないはずだ』

『半年でDになるのになんで平均がCとかDなのか。』

ひよっとしてそこからランクを上げるのって難しいの？』

『依頼の難易度がかなり向上する、おかげで死亡率がかなり高い。』

死亡率ナンバーワンは駆け出し冒険者、次がこのCランクからBランクを目指す冒険者だ』

『うわ……』

『さらにBランクの仕事を恐れてCランクで止まる冒険者も多い、だから平均がCランクになるのだ』

『なるほど、よく分かった』

街中作業を一つ請け負い、終わらせる生活を続けること三日間。

僕のギルドランクはFとなり、簡単なものに限るが町の外の依頼を請け負えるようになった。

なので今回の僕の仕事は薬草回収。

外に出ることになるので危険が伴うが、目的が討伐ではないため危険度は高くない。

にもかかわらず街中作業と比べて報酬がかなり大きくなるのでこれらの依頼を受けない理由は無い。

何より1人日いくらで雇われる街中作業とは違うため、エルを顕現させておけるのが大きい。

エルだっていつまでも僕の中で待機は暇だと思うんだ。

時刻は午前10時。

ギルドからプラント草20本を集める依頼を請け負った後、僕たちは朝食のために町を歩く。

朝食の時間には少し遅いが、さっと食べれるものを出す屋台があちこちにあり、街中を活気付けている。

どの料理もおいしそうで迷ってしまうが、今回はあそこのデカイ肉を焼いている屋台にしようかな。

近づいてみると香草の香りと肉の焼ける香ばしい香りが強くなり食欲をそそる。

販売しているのはどうやら焼いた肉を挟んだ惣菜パン。

値段を見てみると銅貨2枚とかなり安い。

「その惣菜パンを二つください」

「あいよ！」

ケバブを販売する屋台の店主に銅貨4枚を渡し、代わりに惣菜パンを二つ受け取る。

店主にお礼を言ってから一つをエルに渡し、もう一つにはそのままかじり付く。

工業的に生産したイーストが無いからか、パンにはちょっと酸味があるがフィリングの甘辛い味付けの肉と相性が良くおいしい。個人的にはもう少しフィリングが薄味のほうが好み。

横目でエルを見るとニコニコしながらパンをほお張っている。

「コレも美味しい」

「この甘辛い味付けがたまらぬ」

「こっち来てからまずいものってあんまり食べた記憶がないや」

「・・・主はまずいものが食べたいのか？ 妾は遠慮するぞ？」

「そうじゃなくてさ、この町に着いてからコレで8食目、無作為に選んだ店舗から料理を買っているのに一つも外れが無いなんて凄いな、と」

「この町だとこのように競合が多いからな、多分評判の悪い店はすぐに人が来なくなるんだとおもっぞ」

「確かに、コレだけ店が多いとなるとそれも納得」

惣菜パンを食べながら歩くと目の前には東門が見える。

これを抜けるといよいよ治安の良い街中は終わり。

出来れば素早く薬草を回収して終わらせたいところ。

そうなれば危険な生き物に出会うことなく依頼を達成できる。

門の両脇で構える兵士の方に軽く会釈をして門を抜ける。

来るときは気にも留めなかつたけど、まるで検査とかされないのね。
この町の治安は果たして今後維持されるんだろうか？

さて、僕たちは薬草の生える森の中にやってきた。

東門を抜けてからここにいたるまでの描写は”何も無い草原をただひたすらに黙々と2時間歩く”という悲しいものなので詳細については割愛させてもらおう。

「どうやって見つけようか？」

「歩いて探すしかないだろう」

「いい方法とか、群生しやすいところか無いの？ 前に銀貨3枚分も見つけてたじゃん」

「あれは完全に偶然だ、プランタ草が群生しているのは結構珍しいぞ」

「そっか・・・うん・・・。しらみつぶしてなんだか非効率的な気がするんだけど、でもほかに方法ないもんね」

「お互いが見える範囲で少し離れて地面を探せばいいと思うぞ。それほど珍しいものではないし、20本くらいすぐに見つかるであろう」

こう、エルの知識でスパツとつてわけにはいかないか。

探せば見つかるらしいし、とっとと見つけて帰ろう。

確かオオバコっぽいデザインだったはず。

・・・お、あった、これだ。

手元にはオオバコとよく似た植物。

相違点といえば群生していないことと、花が赤いことくらいか。葉の形などはよく似ていると思うが、花の部分の印象が強くてその他はあいまいなのでひょっとするとずれた事を言っているかもしれない。

回収したプラントを左腰のドロップポーチに突っ込んで次を探す。しかしこれで銀貨3枚か、冒険者じゃなくても儲かるんじゃないの？

結局3時間も探索した段階で僕が8本、エルが17本発見して依頼は十分に達成された。

後は帰るだけ。こういう探索では無事に帰るまでがお仕事です。

「グルルルルルル」

「……はあ」

……そう、帰るまでがお仕事です。

目の前にいるのは随分と好戦的な狼たち。

数は見える範囲で4匹。

なるほど、このリスクは冒険者に払わせるに限るのかもしれない。

仮に何の戦闘能力も持たない人が出会ったら人生が終わって食料に早替り。

Fランク冒険者の平均戦闘能力がどれほど高いのかは知らないが、これって結構きついんじゃないか？

「主！ ポケッとするでない！」

どうでもいいことを考えてるうちに狼に距離を詰められたらしい。エルは狼と僕の間割り込み、魔力障壁を展開して狼の突撃をいなす。

続いて魔力障壁に頭をぶつけた狼に対してヤクザキックで対応。

狼はごろごろと転がったあと、動かなくなったところを見ると絶命したらしい。

「危なかった。ありがとう」

「落ち着くのは後だ、まだ来るぞ」

というか僕も戦わないと、いつまでもエルにおんぶに抱っこってワケにはいかない。

個人的に戦えるのに戦わないのと、戦えないから戦わないの差は大きい。

脳内物質が大量に分泌されているのか戦うことに対する、命のやり取りをすることに対する恐怖心は全く感じない。

右手で腰のホルスターから軍用懐中電灯を引き抜いてからスタンロッドを具現化。

スタンロッドの出力は最大、今までのテストから触れたものが一瞬で黒焦げになるレベルの威力であることが分かっている。

左手の人差し指と中指には魔力を集中していつでも射撃系魔法が使用可能な状態にする。

こちらを伺う一匹の狼に照準を合わせて氷の魔法による射撃を試みる。

魔力によって硬質化した氷柱がライフル弾並の速度で狼の頭に突き刺さり、哀れ狼は血を辺りにばら撒きながら吹っ飛んだ。

もう一匹に対しても射撃を行うつもりだったが、すでにかなり距離を詰められている。

僕は一步踏み込んで狼との距離を縮めてから右手を振るう。

スタンロッドは自分でも驚くほど正確に狼の頭を捉え、その威力を存分に発揮する。

一瞬で全身黒焦げになった狼は続くスタンロッドの物理的衝撃によって吹き飛ばされて視界から消える。

最後の一匹を確認しようとするするとそれはすでにエルによって倒されており、僕の人生で初めての命のやり取りは終わった。

「ふう……」

「主、大丈夫か？」

「ん、大体大丈夫。生まれて初めて命のやり取りをしたからちょっと足が震えてるくらい」

「戦闘中は初めてというのが嘘のような落ち着きっぷりだったのだが」

「なんかねー、不思議な感覚だったよ。何も感じないんだもん」

今はよく分からない感情で足がプルプルと震えている。

死ぬかも知れなかった恐怖感によるものからなのか、生き残れたことによる安堵感によるものからなのかは分からない。

ただ、生き物を殺すことに対する嫌悪感っていうのは今も全く感じない。

これは予想になるけど、敵意を向けられているならば多分人だって殺せると思う。

「主・・・」

「大丈夫大丈夫、今はちょっと震えてるけど、すぐに慣れるよ」

「本当か？ 妾は主が心配だぞ」

「ホントホント、心配要らないって。ほら、もう薬草だって集めてあるしさ、とつとと帰ろう」

「・・・」

「無理だけは駄目だからな」

そんなに心配しなくてもいいんだけどな。ただ、その心遣いは確かに僕の心に響く。がんばろう、きっと大丈夫だ。

エルと共にガルトの町に戻る。

時刻は17時を過ぎ、沈みだした太陽は辺りを真っ赤に照らす。

東門を再びくぐると朝と同じように商店はあるものの、人の姿はそれほど無い。

商人たちも最後の売込みを行っており、この売りが終わったあとはおそらく食事にでもいくのだろう。

それらの風景を見ながら僕はゆっくりとギルドに向かって歩いていく。

なんとなく三丁目の夕日を思い出させるような光景で、意味も無くセンチな気分になった。

ギルドに入ると信じられないことに活気に満ち溢れていた。

ランプによって薄暗く照らされた室内。

昼にはいつもガラガラだった酒と軽食を出す店のテーブルはほとんどが埋まり、仕事終わりの冒険者たちの喧騒があたりに響く。

掲示板の周りには明日受ける依頼を探しているのか人だかりが出来ている。

ガラガラでいつか潰れるんじゃないかと思っていたが、どうもそれは杞憂だったらしい。

しかしこのギルド、朝と昼は人がいないのか。

僕とエルは依頼されたプランタ草を渡すため、人之間を縫ってカーデイスさんのいるカウンターへ。

「カーデイスさん、朝受けたプランタ草の依頼の件ですが」
「おう、ユートか。その分だと終わったみたいだな」

この人なんで分かるの？

ひよつとしたら仕事を放棄しますとかそういう報告かもしれないじゃないか。

「よくそんなこと分かりますね。確かにその通りですけど」
「コレくらいできないとギルドマスターは務まらない」

ギルドマスターって凄いな。洞察力高すぎでしょ。

僕はドロップポーチからプランタ草を全て取り出してカウンターの上に並べる。

カーデイスさんはそれらを一つずつ確認すると納得したのかプランタ草を束にして小箱にしまった。

「ふむ・・・プランタ草の状態もいいが、何より仕事が速いのがすばらしいな」

「それは僕の力というよりはエルの力ですね、半分以上はエルが採取したものですし」

「そのお嬢さんがか、人は見た目によらないな」

「エルは本当に頼りになりますよ。もし僕一人だったら今頃野垂れ死んでいたかもしれないくらいです」

「そんな風にほめられるとちょっと恥ずかしいのだが」

「いや、でもねえ・・・」

「ははっ、仲が良さそうで結構なこった。ほれ、追加で5本あったから合計で銀貨3枚と半銀貨1枚だ」

「毎度ありがとうございます。これからもよろしくお願いしますね」「こっちこそな。・・・そういえば飯はどうするつもりなんだ？

暗い中店を探すくらいならここで食ってくと楽だぞ」

「そうですね。思えばここで食べたことがないのでちょっと楽しみです」「

「そこら辺に座ってちょっとまっとけ、フィーネが注文を取りに来てくれる」

「どうもありがとうございます」

僕とエルはちよつと歩いて誰も使っていない丸テーブルを見つけ、イスに座る。

「しかし驚いた」

「突然どうしたのだ？」

「この活気だよ。ほら、いつも昼にいたからガラガラな印象しかなくってさ」

「昼は暇なのよ、基本的に冒険者って奴は朝出て夕方帰ってくるからね」「

「ど、どちらさまで？」

いきなり会話に割り込まれるとは思わなかった。

声のほうを向くとウェイトレスらしき格好をした20代前半の美女がいた。

燃えるような赤い髪を後ろで束ね、きりつとした目鼻の彼女は男よりもむしろ女の子受けしそうな気もする。

ただ、なんだか纏う雰囲気がおかしい、なんというか・・・こう・・・

・威圧的な感じ？

「あたし？ あたしはフィーネ。ここでウェイトレスの真似事をしているよ」

「あ、さっきのカーデイスさんの言ってた人が。すいません、メニューってありますか？」

「ほい、これ。でも何も決まっていなければお任せとかでもかまわないわよ」

「エル、お任せでいい？」

「任せてしまってくれ。妾は今メニューを見て考えるのも面倒なほどに空腹だ」

「どうやらそういうことみたいなのでお任せをお願いします」

「任されたっ！ ちょっと待ってて頂戴ね」

そういつて彼女は混雑したギルドを滑らかに歩いてく。

やっぱあの人身のこなし凄いわ。

僕だったら人にぶつかりまくってる。

「お待たせ、おなか減ってるみたいだからポリュームあるのを持ってきたわよ」

5分ほどエルと異世界談義をしていると早速一品目がやってきた。持ってきてくれたフィーネさんにお礼を言って受け取るとそれはソーセージのスープ。

直径3cmほどのソーセージがぶつ切りにされ、黄金色のスープの中に浮かんでいる。

スープ中央にはキャベツの千切りが乗っており確かにおなかにたまりそうだ。

早速フォークでキャベツの千切りを食べるとどこかで食べたことのある味……ってかこれザウアークラウトだ。

塩気のあるスープがしみこんだザウアークラウトは実においしい。

続いてソーセージを一口。

ん？ これ、ひよつとしてスモークしてないのかな。

ソーセージは肉の味がしつかりとしているものの、ソーセージ特有の香りが無く少しさびしい。

ただ、パテ状の肉の中にはごろつとした肉の塊が混ざっており、一般的なソーセージと比べて肉を食べている感じが強い。

それにしても異世界来てドイツ料理を食べることになるとは思わなかった。

「うまいなー、でもパンがほしくなる」

「パンとこの野菜の相性はかなり良さそうなの」

続いてフィーネさんが持つてきてくれたのはサンドイッチ。

そういえばここってどちらかというと飲み屋だからいわゆる定食のようなものは無いのか。

それにしてもこのサンドイッチ、日本のものとはかなり違う。

日本のサンドイッチはパンを食べるために具を挟んであるが、このサンドイッチは分厚い具を食べるために薄めのパンで挟まれている。

皿に乗ったサンドイッチは複数種類あるが、目を引くのは分厚いチ

キンフライドステーキを挟んだものとたっぷり何かの肉で出来たパテを挟んだものの二つ。

どちらも見た目どおりの味とボリュームで、コレ一つ食べるだけで随分とおなかにたまる。

うまい、凄い幸せ、生きてて良かった。

特にパテのサンドイッチのほうは独特の香草が肉の臭みをかなりうまく誤魔化してあり、うまみを最大限に引き出している。

チキンフライドステーキのサンドイッチに関しては完全に見た目どおりの味なので特に何かいえることは無い。

もともと大してナーバスな気分にはなつてなかったけど、今日の嫌な気分が完全に吹き飛んだ気がする。旨い飯万歳。

ソーセージのスープとサンドイッチを完食してからコーヒーっぽいなにかを飲みつつポケットとすることおよそ1時間、そろそろ宿に戻ろうか。

「はあ？ 満席かよ、空きはないのか？」

「こっちはガルトウルフを10匹以上も狩ってきたんだ、換金は終わって金もある」

ちょっと荒っぽい男二人の声が聞こえる。

時刻は19時前、街灯の無いこの世界で今から飯屋を探すのはなかなか大変だろう。

ギルドに併設されたこの飲み屋は遅くまで開いているが、大抵の定

食屋はあまり遅くまで営業しない。

ガルトウルフ10匹がどれほど疲れるのかは分からないが、この時刻に満席というのはなかなかインパクトが強い。

声を上げる男たちを見ると、随分と戦いなれた雰囲気だ。

両方ともうらやましいことに身長は170cm以上ある。

皮をなめして作ったと思われる胸当てにかなり頑丈そうな布の服。

二人とも腰には長剣を下げている。

暗いので顔は良く分からないが、声から勝手に予想すると相当厳しい。

・・・ヤベツ、目が合った。

こんな暗いのになんではつきりとこつちを見てくるんだよ。

あー・・・こつちくるよ・・・。

「おい、なんでガキがこんなところで飯を食ってるんだ」

「すみません、もう帰りますので」

子供扱いにちょっと腹が立つがここは低姿勢でいこう。

今日はこれ以上面倒なことになりたくは無い。

僕がとつと帰ろうとすると右肩をつかまれて

「まあちよつとまてよ、隣の女はかなり美人じゃねーか。ちよつと付き合えよ」

「何で妾たちがお前らと付き合わねばならんだ？ 馬鹿は休み休

み言え」

「そんなつれないこといわないでさ」

「その口を閉じる馬鹿者共。主とならともかく妾はお前らと酒を飲む気は無い」

鈴が鳴るような声だが、その内容は攻撃的。

その人顔真つ赤だよ？

僕の肩をつかむ手に力が込められる。イタイ。

ついでに力のこもった熱い目で凝視されるが少しもうれしくない。

「このガキっ……ぼこされたいのかっ!？」

えー、なんでそれで僕に敵意を向けるわけ？

そりゃエルに向くよりはいいけどさ。

只者じゃないと思われるフィーネさんならこの状況を何とかしてくれると思つてそちらを見やると笑顔でサムズアップ。どうしろと？
しかしもうこれだと喧嘩は避けられそうに無いかな。

こんな状況だというのに周りは普通に飲んでるし騒いでるし、この状況をどうにかしようとする雰囲気があるで無い。

ひよっとすると日常茶飯事なんて可能性、ヘタすりゃ娯楽扱いなのかも知れない。

「少しは何かいったらどうなんだ!」

声と同時に振るわれる腕。

ちよつと油断してた、まさかこんな広くない室内で乱闘騒ぎを起すとは思つてなかった。

肩をつかまれているので避けることもままならない。なのでそのまま右手で受け止める。

「なっ……」

受け止められるとは思つていなかったのか驚く男を見つつ僕はその

まま左手であごを突き上げる。

悲しいほどの身長差の都合、それほど威力はないと思うが、アップパーカットってというのは直撃すると脳が揺られるので衝撃の割りにかなりダメージがでかい。

あっさり地面に倒れる男、もう一人の男はさすが冒険者というところか現在の状況を素早く理解し戦闘モードに入る。

「この糞ガキ・・・舐めた真似してくれるじゃねーか！」

よくもまあ戦いながら喋れるな、と思う。

僕ならきつと舌をかんでる。

男が突っ込んでくるが、その動きは全く早くない。

夕方の狼のほうが早いくらいだ。

相手の腕を落ち着いてはじき、タイミングを見計らって同じようにアップパーカットで脳を揺さぶってやる。

そのまま男が崩れ落ちて動かなくなることを確認してから辺りに被害がいつてないことも確認する。

右よしっ、左よしっ、辺りに被害なし。完璧だ。

とりあえず食事代だけ払っておかないと。

「すみませ〜ん、こんな状況なんで先にお会計だけ済ませちゃっていいですか？」

「意外と度胸据わってるわね」

「そうですか？ 僕は自分のことをビビリだと思っているのですが」

「ビビリは普通外に助けを求めるものよ？」

「いやいや、普通に助けもとめてましたからねっ？」

「あの視線？ あたしは”任せてください”の合図だとも思ったんだけど？」

「……。とにかくお金払います。いくらですか？」

「ソーセージのスープとサンドイッチ、コーヒー。それぞれ二人分で銅貨19枚だね」

僕はジャケットから銅貨を取り出して支払う。

そろそろ子袋に分けて保存しないと複数の銅貨を取り出すのが面倒だな。

今は財布代わりの袋にざくつと硬貨を入れているが、サイズの違う硬貨が指の隙間から零れ落ちそうになるし、何より電子マネーによる支払いに慣れた身としてはこの時間が非常に面倒に感じる。

「毎度ありっ！ またね」

「出来れば次は安全にご飯が食べられるといいのですが」

「あたしが思うにそれは運しだいね」

「そーですか……」

嗚呼、おいしいご飯による幸せ分があつという間に抜けた気がする。ともかくカーデイスさんに報告しておかないと後で面倒なことになりかねない。

それにしてもこんなことがあつたにも関わらずロクに変わらない店内の雰囲気を見るとやっぱりこういう喧嘩とか騒動とかは日常なのかな。

……嫌な日常だな、ホントに。

ギルドカウンターに向かうとニヤニヤとしたカーデイスさんが僕を待っていた。

「面白いことになってたな」

「そんな顔で見ないでください、かなり悲しくなりますから」

「大方、あの馬鹿共の対応についてだろ？ 任せとおけ」

「よろしくお願いします」

「全くあいつらも、Fランクになったばっかりだって言うのになんで喧嘩を売るほどの自信がつくのかね」

「僕に聞かれてもさっぱりですが、やっぱり生来のものってのがあ
るんじゃないですか？」

「何気にきつい一言だな。それにしてもユート、お前自分のこと魔術師って言うてたよな？」

「そうですね、何かありました？」

「いや、普通魔術師が喧嘩なんてなったら魔術でドカン、だからさ
「相手も腰に剣ぶら下げてましたけど抜いてなかったじゃないです
か。諸事情あって僕は今杖も無いです。仮にあったとしても殺意
の無い人間を殺すのはちょっと・・・」

「殺すって・・・威力押さえりゃいいだろうが」

「苦手なんですよ。暴発してギルドに穴が開いたら目も当てられな
い。ただでさえ僕は金欠なんですからね？」

「・・・・・・・・」

黙ってこちらを見つめるカーデイスさんの視線がイタイ。

「と、ともかく僕は帰ります。また明日もよろしくお願いします」

「おう、お前の来る時間はどうせお前しか居ないだろうから待つて
てやるよ」

『やることやったし、宿に帰るっ』

『了解だ』

僕はエルとともにギルドを出る。

はあ、明日はもう少しマシな一日だといいなあ。

3 (後書き)

「そういえばなんだけど。カーデイスさんは魔術/魔術師っていつてたけどさ。魔法/魔法使いとの差ってあるの？」

「魔法は御伽噺に出てくるような空想上のもの。体系化された魔方阵と魔力で実行するものが魔術だな」

「なるほど、今後自己紹介するときは魔術師のほうが良さそうだね。魔法使いなんて言った日には危ない人で見られるかもしれないってことか」

「そうだの、初日のギルドでの発言は危なかったぞ」

「・・・今後は気をつけるよ」

厄日のような昨日から一夜明けて本日。

僕は太陽の光に当てられて目が覚める。

個人的にあまり目に優しくない起き方だと思うが、そうしなかった場合起きるのは多分昼過ぎになるので仕方ない。

いつものようにとつと宿から出てギルドに向かおうとすると出口で衛兵の一人に止められる。

周りを見回すと宿には衛兵が何人もいて、そのうちの一人が泣いている女将さんと何かについて話している。

エルのがばれると金銭的にまずいことになるからお金渡して鍵をもらうくらいの接触しかしていなかったけど、女将さんかその関係者で何かトラブルがあったみたいだ。

僕を止めた衛兵の人がずっと近づいて口を開く。

「宿のオーナーであるタミナさんの御息女であるリーナさんが西の森に向かってから行方が分からなくなっている。何か知っていることがあれば教えてもらいたい」

メット被った衛兵っていうのは威圧感があるので出来れば接近はやめてもらいたい。意味も無くどもってしまふ。

「えっ……と……、申し訳ないですが昨日は特に何も無く一日を終えました。特に知っていることっていうのは無いですね」

「そうか……。答えてくれてありがとう。もし何かあれば各門の周辺に私たちの詰め所があるので報告してほしい」

情報が無いことを本気で残念がる衛兵の方と視界の端に映る弱弱しい雰囲気のタミナさんを見ると何とか協力したい気分になる。

僕が出来ることといえば薬草採取の依頼とあわせての搜索ぐらいか。

「分かりました。僕は冒険者で依頼の都合、外に出ることも多いので可能な範囲で僕も協力します。リーナさんの容姿をうかがってもよろしいですか？」

「年齢は13歳、身長は君より少し小さいくらいで髪と瞳は薄い水色。最後に目撃されたときは白のワンピースを着ていたそうだ」

「分かりました。もし何かあればすぐに報告します」

「重ね重ねありがとう、よろしく頼む」

忘れていたつもりは無いし、油断するつもりもないけどやっぱりこの世界の治安は悪い。

おいしい食事と綺麗な風景で忘れがちだったがここは異世界、気を付けないと。

時刻はおよそ10時。

僕はギルドでアトードナの根を採取する依頼を受けてから西の門を抜けて森の中へ。

ガルト西の森は木々の間隔が比較的大きく鬱蒼とした雰囲気は全く無い、それどころか太陽の日差しと相俟ってまるで憩いの場のようだ。

「それにしてもタミナさんもタミナさんだよ。なんでこんな危険地帯に娘を送るかな」

「ここは危険地帯ではないぞ、奥に入り込まない限り危険な生物などは存在しない」

ただ、現実には彼女の行方が分からなくなっているわけで。

エル話を聞くと昨日の僕のように野生生物に襲われたということはないということになる。

その場合は可能性が高いものとして誘拐か人身売買か。

年端もいかない少女に興奮する下種な金持ちなんていくらでもいるだろう。

嫌な想像が頭をよぎる。

・・・あー、やめやめ、考えてもナーバスになるだけ。

「どうして主はそんなに知らぬ人間のためになれるのだ？」

「んー、特に理由はないんだけどあえて言うならできるから、かな」
「できるから？」

「うん、僕は今冒険者としてこうやって薬草採取をしているじゃない？ んで、その際あまった時間とかにちよつと気を配ればひよつとしたらリーナさんを見つけられるかもしれない。そんなわけで、僕は自分の目的から逸脱しない範囲で手伝うことが自分の周りの最大幸福につながると思うんだよ。それにほら、今朝のタミナさんの姿みたら何とかしてあげたいって思うでしょ」

僕がちよつと長いセリフを言い切ると、エルはニコツと笑って口を開く。

「主は優しいのだな。妾は誇らしいぞ」

「誇らしいってそんな大げさな」

「大げさなものか、主が言ったことと同じことは教会にでも行けばいくらでも聞ける。ただ、それを実行できる人間はそうおらぬ」
「なんだかハードルあがっちゃった気がするけど、エルの思う主像を目指してがんばるよ」

あんまり考えなしに放った一言でなんだか妙に感動しているエルを見つつ、アトードナの花を探す。

素早く終わらせればその分早くリーナさんの搜索にリソースを割けるしね。

薬草を搜索すること約2時間、昨日も驚いたがエルの薬草採取能力は凄まじい。

僕が一つ取る間にエルは二つくらい採取している。

エルにおんぶに抱っこでかなり申し訳ないが、この調子で行けば13時にはリーナさんの搜索に移れるだろう。

・・・あ、アトードナみつけ。

タンポポに近い見た目のこの薬草は、根を摩り下ろして使うことで痛み止めになる。

回収部分は根っこなので、見つけた場合まずは辺りの土を掘る。

このとき根を傷つけないように注意することが重要で、大きな傷がついてしまうと納品対象にならなくなってしまふ。

その後長さ20cmくらいの根をゆっくりと慎重に取り出して完了。根っこは比較的しなやかなので、ドロップポーチの中に入れて込んでも中で根っこ同士がぶつかりあって破損する心配は多分ない。

よし、おっけ、これで5本目。

うまいこと進んでいればエルのほうも10本近く回収しているはず

だ。

『エルー、そっちはどんな感じ？』

『こちらは9本回収して10本目を探しているところだ、主は？』

『恥ずかしながら僕はようやく5本目を採取し終えたところ。数は揃ったからお昼を食べよう』

『わかった』

僕は魔術で精製した水を使って手を洗う。

手がきれいになったらバッグからグリル台を出して組み立てる。炎の魔術をグリル台の下で発動。ガスコンロ（魔力コンロ？）がコレで完成。

コツフェルの中に固形鶏がらスープと魔術によって精製した水を入れ、グリル台の上に乗せ、ナイフで干し肉を短冊状に切ってそのままコツフェルに落とす。

まな板が無いのでちよつと作業がしにくいが、さすがにバッグにまな板は入らない。

一煮立ちした段階で火を止めて完成。

温度が下がるにつれて干し肉にスープが染み込んでうまみが増すが、おなかが減っているので待たずに食べる予定。

さらにバッグの外側に拡張されたポーチからナルゲンボトルを取り出し、中に入っている大型で分厚いクラッカーを取り出して皿に並べる。

お店で食べるような料理とは比べるべくも無いが、それでもこの世界の携帯食料に比べればはるかにマシな食事になる。

カップにスープを注ぎ、エルに渡す。

「主、ありがとう」

「どういたしまして」

早速スープを飲む（食べる）。

元の固形スープは若干うまみが薄いところがあるが、干し肉を入れることでうまみ成分が補完されて随分とおいしくなったと思う。

町から持ってきたクラッカーはスープにも合うし、若干ある塩気のおかげでそのまま食べても悪くない。

比較的淡泊な味わいなため、蜂蜜やジャムなどもきつとよく合うだろう。

今後小さいほうのナルゲンボトルに蜂蜜とか詰めておきたいな。

「おいしかった。ご馳走様だ」

「お粗末さまでした」

食事を終えて食器、グリル台を片付けて出発の準備は完了。

早速リーナさんの搜索を開始しよう。

何かヒントになるものが見つかるといいんだけど。

「随分暗くなってしまったな、そろそろガルトに戻ろう」
「わかった」

時刻は18時、草原ならともかく日の入らない森の中では随分と暗く感じる。

途中からはたいまつ代わりにライトの魔術とサーチライト代わりに軍用懐中電灯で捜索を行ったが何の痕跡も見つけることができなかつた。

エルによると無理やり人を連れて行く場合、暴れた形跡が残るのでそれさえ見つければといていたが、残念ながら痕跡の発見はできず。

また、森の中で野盗が生活している場合、食事などのために火をおこせば煙がでる。

そこでこの世界ではありえないほどの出力を誇る軍用懐中電灯をサーチライト代わりに使って炊煙を探す作戦だったが、失敗。

僕とエルは町に戻ってギルドで薬草を換金、食事を取って宿に戻る。リーナさんは戻ってきていなかったため、明日も捜索を続けるつもり。

さすがに今日は疲れたので明日のためにも魔術の練習などはしない。水でぬれたタオルで体だけ拭いてベッドに入るとすぐに意識が無くなった。

現在時刻は11時。

昨日に引き続き僕は薬草採取の依頼を受けた上でガルト西の森にいる。

「エル、これは・・・」

「間違いなく攻撃魔術によるものだが、この辺りには野生動物も多いため無関係の冒険者によるものかもしれん」

薬草の採取中に見つけた木は炎系の攻撃魔術によって黒く焦げていて、その辺りをみるとほかにも鋭利な断面の枝や折れ曲がった木に残る血痕など、戦いの痕跡があちこちに残っていた。

10分ほど搜索したが、見つかったのは戦闘の形跡のみ。エルを見るとなんだか考え込んだような表情をしている。

「妙だな」

「ん、なにが？」

「この辺りにいるのは大抵がガルトウルフというこの地域固有の狼なのだが、討伐系の依頼で受ける場合持つて帰るのは特徴的な尻尾だけで問題ない。死骸がないのは不自然だ」

「そういえば死骸が無いね。でもほかの野生生物が食べちゃったんじゃない？」

「それなら骨が残るか肉が散乱するものだ。ほら、この部分の地面は大量の血が染み込んで変色している。おそらくここで止めを刺したのだな」

「うわっ・・・その黒い血なのか、なんだか食欲のなくなる光景

だ

「うーむ、ひよっとしたらこれは野盗共が食べるために取ったのかも知れぬぞ」

「そうだと死骸が無いのも納得できるけどさ、冒険者が食べるためについていう可能性は考えなくていいの？」

「ガルトウルフの肉は非常にまずいので普通冒険者は食べたりしない。食べるとすれば町に入って食べ物を得ることが出来ない奴ら、ということになる」

「正直、携帯食料のほうがマシな肉ってちょっと想像つかないんだけど」

「妾は食べたことがないが、どうも硬くて欠片ほどのうまみも無く非常に臭い。そんなにまずいはずが無いといって食べた冒険者の一人が青い顔をして倒れていたってという話もあるくらいだ」

「野盗っていうのは味覚が死んでいるのか？」

「・・・主、たぶんそういう問題ではないと思うぞ」

どんな光景を見たからといっておなかは減る。

レパートリーを増やすに当たって必要な材料の入手が出来なかったため、残念ながら食事は昨日と全く同じメニュー。

それでもどうでもいい話（今回は携帯電話の話をした）をしながら食べるのは結構面白く、今後へのモチベーションも向上する。

「さて、そろそろ行こっか」

「わかった、ただ、後ろの馬鹿共を潰してからだぞ？」

え？ 後ろの馬鹿共？

後ろを振り向くと藪がゆれて人影が出てくる。その数5人。

全員が帯刀しており、薄汚い服を着ている。
ひげも剃っていないので非常に不潔に見える。

・・・なんとまあ、つけられてたのか。全く気がつかなかった。

「勘のいいお譲ちゃんだな、そっちのガキはまるで気がついていなかったのに」

「大方炊煙でも見つけてこっちに来たのであろう？ 来ると分かっていたれば見つけることは難しくないのでは」

「随分と余裕があるようで・・・まさかお前らこのまま逃げられるとおもってんのか？」

「逃げる？ フンッ、それは妾たちがお前らにいうセリフだな」

それにしても野盗の集団か。

2対5という状況はともかく、うまいこと捕まえることができれば一気にリーナさんの身柄に近づくことになるかもしれない。

こいつらが完全にリーナさんと無関係って可能性もあるけど、いずれにせよ逃げられる状況ではない。

異世界生活12日目、ひよっとしたら僕は人殺しを経験することになるかもしれない。

先日と同じように左手には射出系魔術を待機状態にして右手にはスタンロッド。

出力は最低、全身に強い痺れが残るが死なないレベル、だと思う。イメージがゲームのスタンロッドで、効果が無力化だったので、正確にイメージできているならばちゃんとそっいう効果で具現化できているはずだ。

現代の住人である僕には銃のイメージが強すぎて射出系の魔術の威

力が落とせない。

命は地球より重いなんていうつもりは毛頭ないが、リーナさんの身柄を考えると最低でも一人、自殺や脅しを考えると出来れば二人以上を捕縛したい。

となると頼みの綱はこのスタンロッドか。

『エル、最低でも一人は捕縛する方向で！ 僕は右の奴からやる』
『左の奴は任せろ！』

僕は完全に油断してニヤニヤしている野盗の一人にステップイン。この後どうしてやるうかとも思っているのか完全に油断している。一足飛びで5mは移動してから男の首にスタンロッドを押し付ける。と若干の反動とともに衝撃音。崩れ落ちて動かなくなる男が泡を吹いているのを確認してから次のターゲットへ。

「糞っ！ 男は殺せ！ 女はなんとしても捕らえろ、後で売り払って金にするぞ」

なんだかとてもないことを言われた気がするけど、大量のアドレナリンのおかげで特に恐怖感とかはない。

エルのほうをチラッとみると、既にエルの足元には一人が転がっており、魔力障壁”で”ひっぱたかれてそれは二人になった。

ああ、やっぱりエルは強いな。
あんまり種族的に強くないとかいってたけどあれ絶対嘘でしょ。

こちらを向いている二人は自分たちで最後であることに気がついて

いない。

エルみたいな華奢な体格の美少女が大の大人を声も出させずに無力化できるとは思っていないのだろう。

一人はこちらに向かって剣を振り回してくるが、あまりにも遅い。魔力障壁で剣を受けてからお返しにスタンロッドで頭をしばく。情けない悲鳴を上げて倒れる野盗。残りは一名。

「吹き飛ばすが良いぞ！」

あ、エルが完全に無防備な背中に向かって風の魔術（エルの場合魔法？）を使った。

ヒュゴツ！つというような不思議な音とともに最後の一名が全力でこちらに向かって吹っ飛んでくる。

・・・ん？

・・・ちょ、やばい！ こっちに全力で吹っ飛んできてるって！

「わわっ・・・」

あわてて魔力障壁を斜めに展開して男がぶつかると同時に押し返す。男はピンボールの玉のようにベクトルを変えて再度吹き飛ばすと地面を10m以上転がっていき、木に衝突してからようやく止まった。

「すまぬ、主。久しぶりに攻撃魔術を使ったので気が高ぶって周りが見えていなかった」

「なんとか対応できたから大丈夫だよ、それよりもこいつら縛っておかないと」

バッグからパラコードを取り出して野盗たちの腕と足を縛る。
直径は4mmしかないがアホみたいに頑丈なので腕力で千切られる
ということはまず考えなくて大丈夫。

「ふうっ……。さて、これから”話し合い”をするわけだけどさ
”どうした?”」

「こういう暴力を前提とした話し合いなんてものは生まれて初めて
だからどうやって聞けばいいかな」と

「うーむ……。妾もこういった経験はないぞ。あまり力になれそ
うに無い」

「じゃあ出たとこ勝負でいくしかないか」

「なかなかおきないねー」

「水でもかけてみるべきか」

「早速やってみよう」

10分以上も待っているが彼らのうちで起きているものは一人もい
ない。

幸いにも全員脈があるので死んでいないことは分かっている。

僕は一番怪我の無い野盗の頭にじゃばじゃばと水をかける。

……。だめだこれ、起きないぞ。漫画とかだとすぐ起きてたと思う
んだけど。

衛兵の人に報告に行くのが理想なんだろうけど。ここからだといっ
て来いで4時間以上かかる。その間に逃げられたら目も当てられな

いいし、僕がエルのどちらかのみが向かうとなるとそれもちょっとラブル対応的に怖いものがある。

「ん……ぐう……糞、イテエ……」

あれからさらに20分ほど待つとようやく一人が起きる。
随分と時間がかかったなあ。薬草採取もまだ微妙に終わってないし、先に済ましてしまえばよかった。

「どうもこんにちは、僕は先ほど襲われた人です。今から質問を行うので可能な限り答えていただけると助かります」

「こんなことしてただで済むと思ってんのか！」

「どちらかというとただで済まないのはそちら様だと思えますけどね。ともかく質問に答えていただけますか？」

「……」

あれ、なんかおかしい、なんだかぜんぜん怖がられてない気がする。

『精一杯怖いオーラ出してみただけどどう？』

『主よ……すまないが丁寧なだけで全く脅せてないぞ』

『うーん、じゃあ二人でやろうか』

駄目か、この口調疲れるからやめよ。

「エル、この人駄目だ。どうしようか」

「縛って放置しておけば野生生物のちょうど良いえさになるな。それとも魔術の練習に使うか？」

「どづいつこと?」

「主は射出系魔術の威力を下げられないことをちょっと気にしておつたろう? 魔術というのは実際に使う機会がないとなかなかうまくならぬ」

「なるほど」

「妾も対象の治療を行いつつ練習すれば、一人当たり複数回魔術の練習ができるはずだ」

「ん、ありがと。早速やろうか」

男の顔を見ると先ほどとは異なり、真っ青になっている。

「こちらでいけるかな?」

『主、いい感じだぞ。そろそろ話し合いに参加してくれそうだ』

『了解』

「さて、話すか魔術の実験か、好きなほうを選んでもらっていい?」

「何でも話す、何でも話すから・・・だからやめてくれ!」

「そりゃよかった。じゃあ質問に答えてもらおうかな」

「ああ、な、なにを話せばいいんだ」

「最近リーナという薄い水色の目と髪を持つ少女が誘拐された。何か知っていることは?」

「薄い水色・・・? すまねえ、俺たちが捕まえた。可愛かったから奴隷商に売ることになっている、すまねえ!」

「いつ?」

「今夜だつ、ひつ、やめてくれ、殺さないでくれ!」

こいつらがリーナさんを誘拐したのは確定。

それにしてもやっぱり奴隷商とかあるのか、さすが異世界。

アジトの場所を聞くためにもう少し脅そう。

スタンロッドを最大出力で具現化させて、男の首に近づける。最大出力のスタンロッドは時折空気が裂ける音とともに紫電が飛び散るので見た目が大変に恐ろしい。

「主、一瞬でも間違えて当てると全身黒焦げになってしまうぞ」

その言葉で男の顔がこわばる。

今から仲間を裏切ってもらおうわけだから、コレくらいじゃないと話さないだろう。

「彼女は今どこに？」

「俺たちのアジトだ、ここから北に20分ほど歩くと洞窟がある。

さあ、話した、だから、殺さないで・・・」

「わかった、殺さないでいてやる。もう二度とやるんじゃないぞ。わかったな？」

男は言葉は発しなかったものの、真っ青になりながら全力で首を振っている。

それにしても即答するとは思わなかった。

さて、リーナさん救出に必要な情報は揃った。

仮に嘘だったら戻ってもう一度脅しなおせばいいか。

問題なのは今夜奴隷商に売る、という事実。

現在時刻は14時ちょっと過ぎ。

戻って報告したとしたら行って来いで18時になる。

そうなると時間オーバーな可能性が捨てきれない。

幸い野盗の戦闘能力は高くなさそうなので、油断さえしなければ僕とエルの二人で救助も可能だと思われる。
・・・よし、やるか。

「時間的に厳しいから二人で救助に向かいたいのだけど、エルはそれでいい？」

「妾もそれがかまわぬ。あまり時間が無いから早く向かったほうが良さそうだ」

幸いにもあの男は嘘をついていなかったようだ。

僕から見て50mほど先には洞窟の入り口がぼっかりと空いており、その入り口を守るように二人の野盗がいる。

さらに洞窟の入り口周辺の木は完全に伐採されており、これ以上ステルスで近づくのは不可能だ。

強行突破した場合、一番まずいのはリーナさんが人質に取られてしまうこと。

そうなると僕は結構どうにもならなくなる気がする。
だからこんなところで気づかれるわけには行かない。
気づかれるならもうちょっと進んでからじゃないと。

うん、覚悟はしていたけど、僕は今日、人殺しをする。

『ここからあの見張りを排除するよ』

「主……」
「大丈夫、任せて」

僕は右手と右目に魔力を集中。

右目でライフルスコープと指向性マイクをイメージすると視界が拡大され、50m先の男の表情まではつきりと分かるようになる。

「それにしてもよ。あの女今日売っちまうんだってな、全く勿体ねーよ」

「そういうなよ、やっちゃまうと価値が半分以下だぜ？」

「だけどなあ……」

13歳の少女に対してあいつらは一体何をするつもりだったのだろうか。

このままでは照準が安定しないので姿勢を体育座りに変更。

右手首を左手で固定し、ひざの骨の上にひじの骨を置いて右腕全体を支えると狙点がぶれなくなる。

右手の先に魔力を集中、氷の魔術を発動していつでも撃てる状態に。

息を止めて、撃つ。

気の抜ける音と共に発射された氷の弾丸は50m先の男の頭に正確に突き刺さり、鼻から上を吹き飛ばす。

あまりの出来事に呆然となっているもう一人にもすぐさま狙いを定めて射撃し、同じように絶命させる。

「気づかれるまでの時間はそんな無いと思う、進もう」
「わかった」

洞窟は広く暗い、あまりたいまつなどは用意していないみたいだ。魔術を扱えるものたちなら自分の周りをライトの魔術で照らせばいいけど、それが出来ないのにもかかわらず暗いのは如何なものか。

洞窟の中は昼だっていうのに暗いし、普段の生活はどうしてるんだろっ？

今回はそれがありがたいけどさ。

さくさく進んで早いところリーナさんを見つけないと。

エルには僕の中に戻ってもらい、何人かの野盗をやり過ぎつつ奥へと向かう。

さつきも言ったけどとにかく暗いので、端っこでじっとしてれば見つかる可能性はかなり低い。

注意して歩かないとこけてしまっただけで自分がばれるなんていう間抜けな展開になりかねないのがたまにキズ。

5分ほど中を歩き、ひどい臭いのするドアを開けるとそこは牢屋だった。

生まれて初めて見た実物の牢屋はなんとも嫌な雰囲気で、できればこんなところからは一刻も早く抜け出したい。

牢屋の数は全部4つ、左手奥の牢屋にリーナさんはいた。薄暗くて服装や髪の色はよく分からないが、ほかの牢屋には誰もいないので間違いない。

「こんばんは」

「誰っ！」

歳相応の可愛らしい声だが、恐怖によって震えているのがはっきりと分かる。

「あなたのお母さんの経営する宿でお世話になってる冒険者で、ユートっていいます」

「わ・・・わたしはリーナです。え・・・っと、ユートさんはどうしてここに？」

身長160cm（四捨五入）で童顔の僕が来たところで、そりゃあ救助に来たとは思わないか。

「リーナさんを助けにですよ。そのドアを開けるのでちょっと待ってくださいね」

「え？ あ、はい」

右手に魔力を集中、かんぬきの動きを阻害する鍵を氷の魔術で無理やり壊してドアを開ける。

・・・今後こういうことを考えてブリーチ用の魔術とか練習しよう。

「おっけ、じゃあついてき」

「御頭！ 表でイーザとフルカスが死んでやがった、誰かが紛れ込んだかもしれないねえ！」

すぐ側で男の叫ぶ声が聞こえた。

チツ、ステルスもここまでか。

慌しい足音も聞こえる、こりゃヤバイかもしれない。

『エル、リーナさんの護衛を！』

『わかった』

一瞬光が出たと思うとそこにはエルがいつものように立っている。いまさら疑問に思うけど、僕が箱に詰められた状態でエルを顕現するとどうなっちゃんだろう。さすがにやる気は無いけどさ。

「わわっ・・・あ、あなたは？」

「妾はエルシディア、主の命令に従い貴女を守るぞ」

「は、はい、ありがとうございます。わたしはリーナです。よろしくお願いします」

「うむ、安心するとよいぞ。主は強いし、妾も三下の盗賊ごとき相手にならぬ」

僕を立ててくれるのはうれしいがどう考えてもエルのが強いでしょうに。

ともかくこれでリーナさんの防備は完璧。

このアジトの野盗集団でエルの魔力障壁を貫通できる奴がいるとはとても思えない。

あとはもうランボーのごとく戦って最終的に脱出だ。

ステルス時に確認した野盗の残数は14人。

相手に魔術師がないならここでバリケ組み立てて籠城作戦もありだけど、わからない以上リスクは犯せない。

「突破するよ、ついてきて」

「援護は妾に任せろ」

と、意気込んでドアを開けたはいいものそこは無入。
・・・アレ？

「さつきすぐ側で声が聞こえたのになんで無人？」
「わからぬが注意したほうが良さそうだ」

軍用懐中電灯で辺りを照らすがあるそこには粗末なイスとテーブルがあるくらいで、ほかには何も無い。
辺りを照らしながら進み、不意打ちを避ける為にドアなどは全てクリアしてから先に進むが、やはり誰もいない。

「これって出口でガン待ちってことだよな」

「今度こそ間違いないだろう」

「・・・」

リーナさんが不安そうな目でエルを見ている。
確かにこの状況で不安にならないはずも無いか。

時刻は16時半くらい、こちら側は暗く、向こう側は明るいためこちらから一方的に外の様子を伺える。

・・・うわ、いるよ。

狭い室内での戦闘による各個撃破を恐れていたのか、野盗たちは広以外で待機している。

あいつら僕たちのことを数で押すつもりだな。
入り口からチョビチョビ撃たれた場合、入り口を封鎖して僕たちを生き埋めにするとも考えているだろう。

ただ、見える範囲にいる14名の野盗は全員剣で武装しているのが

救いだと思う。

仮に見逃しの数名がいたとしても、飛び道具を使う奴は少ないとみて良さそうだ。

「今度こそ戦闘開始か、生き埋めのリスクを考えると外出るしかないね」

「彼女のことは妾に任せてもらって問題ない、僅かな傷も付けることなく守りきって見せる」

「了解、よろしく頼むよ」

僕とエルは魔力障壁を維持しながら外に出る。

10mくらい先でリーダーらしき野盗がニヤニヤとした汚い笑みを浮かべて待っていた。

負けるとは欠片も思っていないらしい。

13名の野盗はこちらを囲むように広がっていて、全員がギラギラとした目で剣を構えている。

「随分な余裕を持っているようで、さすが魔術師様だよ。お前ら全員で突っ込め、魔術は連射がきかねーから数で潰すぞ！」

「「「「やってやるぜええええ！」「」「」」」

え？ こいつら弓矢などの遠距離武器を持った奴を回りに伏せさせてないのか？

いきなり突撃を命令するとは思わなかった。こりゃ相手は自殺行為じゃないか。

しかも魔術は連射ができないとか何を言ってるんだ？

さすがにフルオートは出来ないけど、秒間2発程度には連射が利くぞ。

相手の意図が僕にはさっぱり分からないが、それでも迎撃の必要があることには変わりない。

こちらへ突っ込んでくるアホ共に対して魔術を撃ち込む。狙うのは足、出来ればひざ。運がよければ助かるだろう。

エルは風の魔術で吹き飛ばしているらしく、骨の折れる嫌な音が何度か聞こえた。

氷の魔術を4発撃って中央付近の4人を無力化。

続いて最大出力のスタンロッドを具現化させて左翼に位置する3人のアホ共に突っ込む。

一人目が反応出来る前に首筋にスタンロッドを叩きつけると髪の毛の嫌な臭いがして一瞬で絶命する。

二人目が振るう剣を魔力障壁ではじき、三人目の剣にはスタンロッドを叩きつけて感電させる。その隙に胸を蹴りつけると2mは吹っ飛んだ後に動かなくなる。

一度ステップアウトし、左手の魔力を魔術に変換して2発撃ち込む。チャージ量が少なかったため最初の魔術ほどの威力は無いが、それでもわき腹と右足を抉り、死亡していないものの戦闘不能状態にさせることができた。

これで半分の敵が無力化。

次はエルの援護と思ったけど、既に残り一名。

それもたつた今風の魔術で吹き飛ばされて戦闘不能に。

リーナさんを完璧に守りながらも殲滅速度は僕とほぼ同じ。

もう全部エル一人でいいんじゃないかな。

野盗のリーダーは目の前の光景が理解できないのか完全に固まっている。

メンバーは全員が倒れており、既に戦闘の意欲は無い。

「まだ生きている人は多いですし、応急処置だけでもしたほうがいいですよ?」

「・・・見逃してくれるのか?」

「そもそも僕は快樂殺人者ではないので、こちらから攻撃することはありません」

「そうか・・・ありがとう」

うわっ、まさか野盗のリーダーにお礼を言われるとは思わなかった。しかも口調がまるで違うので違和感が凄い。

・・・いや、違和感があるのはそれだけが原因じゃないな。

ほら、僕、なんせ、殺してるからね。

「・・・エル、リーナさん。帰ろう」

「わかった」「わかりました」

覚悟はしていたけどなんだか一線を越えた気がして嫌な気分になる。帰っておいしいものでも食べて忘れてしまいたいが、忘れられるだろうか。

「あっ、忘れてた!」

「突然どうしたのだ?」

「昼過ぎのあいづら、放置したままだった」

「・・・ああ、そういえばそうであったな」

どうしても良さそうにエルが答える。

そう、僕らは昼過ぎにパラコードで縛っておいた野盗の集団を完全に忘れていた。

現在時刻は17時過ぎ。あときから既に3時間が経過している。

「それでどうするのだ?」

「衛兵に突き出そうかと思う」

リーナさんを直接誘拐した奴らだし、正直そのまま放置でもいいんだけどさ。

衛兵に突き出しておいたほうがいろいろ今後の処理が楽になる気がする。

それにこの世界ではパラコードのような細くて丈夫な紐は貴重品なのでみすみす無くしたくはない。

「リーナさんに誘拐犯を会わせるなんて事はしたくないから、僕が行ってくるよ」

「主……。気をつけるのだぞ」

「大丈夫大丈夫。合流は町でいつか、なにかあつたら念話で情報共有しよう」

実際問題、僕はリーナさんと一緒にいないほうがいい。

それは僕が嫌われているとかそういう問題に近いのだけど、野盗に誘拐されてあとちょっとで奴隷商に売られるところだったから、近くにいくら童顔で小さいとはいえ男がいると怖いんじゃないかなって思っただよな。

「エル、リーナさんを頼んだよ」

「任された。完璧を期待してよいぞ」

「エルシディアさん。ありがとうございます」

「うむ、リーナ殿には指一本触れさせるつもりはないから安心して欲しい」

「その・・・リーナって呼んでもらってもいいですか？ そんな風には呼ばれると恥ずかしくて・・・」

「む、それならば妾のことはエルでよいぞ」

「命の恩人にそんな呼び方できません！」

「そ、そんな大声を出すでない。驚くではないか」

ん、コミュニケーションはエルに任せておけば大丈夫そうだな。

今はなんだか硬い感じがするけど、徐々に軟化するでしょ。

辺りはかなり暗くなっており、昼の場所を掴むのには随分と手間取った。

なんとか僕がそこにたどり着くと昼と同じように彼らはそこにいる。手足を縛られて木に括り付けられている彼らが全員横になっている

光景はなんともシユールで笑ってしまいそうになる。

「お待たせしました。リーナさんの救助は無事に済んだので次はあなた達の移動です」

「仲間はどうなったっ!」

「一人を除いて全滅です」

「・・・っ」

気が滅入るな。最初が仲間の心配か。

テンプレートな悪役が相手ならこういう気分にならなくて済むのに。僕の一言のせいでもなんとも嫌な沈黙があたりを包む。

ともかく移動したいので彼らの足の拘束を解いて歩かせる。剣は捨て、もちろん腕の拘束はそのまま。

「さあ、歩いてください」

「・・・いつか殺してやる」

「早く歩いてください」

血走った目で一人が僕を見ている。

・・・ああ、僕一人で本当に良かった。

こんなところにリーナさんをつれてくる事が無くて本当に良かった。

きっとトラウマになってしまっただろう。そうならなくて本当に良かった。

それにしても歩き出すのが遅いな、少し脅しておくか。

僕は地面に向かって氷柱を射出し、地面にちよつとしたクレーターを作る。

一人を除いて怯える全員を見てもう一度言っ。

「さあ、早く歩いてください。僕は後ろであなたたちを監視しますので」

時刻は20時、空の二つの月が輝いて辛うじて大地を照らす。

月明かりに照らされた風景はなんとも綺麗だけどこういうのは出来ればかわいい女の子と見たいところだ。

残念ながら側にいるのは鬱陶しい男が5人。理想と違いすぎて涙が出るね。

西の森からガルトの西門はそれほど遠くない。

身体能力の低い彼らと歩いたとしても3時間もあれば着く。

確か衛兵の詰め所は門のすぐ側っていつてたな。

というかあれか、門のこの衛兵の人に話せばいいのか。

「夜分に申し訳ありません。僕はユート、冒険者です。リーナさんの誘拐の件でご報告したいことがあります、ただいま少々お時間よろしいでしょうか？」

「なにか分かったことがあったのかっ!？」

なんかもお、凄い反応。

一瞬でこちらの側に来たかと思うとつばがかかるともいられないくらい近づいてきたんだけど。そんなに近寄らなくても聞こえるって。

「分かったというか解決というかですが。まずはその5名がリー

ナさんの誘拐の実行犯です、彼らのアジトの場所も聞けば答えてくれます。リーナさん自身は救助済みですので、もうしばらくしたら町に到着します」

ぽかんとした表情で野盗たちを見る。

おそらく子供みたいな外見の僕がつれてきたもんだから狐につままれたような気持ちになっているんだろう。

「この後の彼らの処遇に関してはお任せしてしまっただけでよろしいでしょうか？」

「あ、ああ。すまない、ちょっと驚いてしまっただけ。彼らの処遇に関しては私たちに任せてくれれば問題ない」

「ありがとうございます。お手数ですが拘束具をつけてもらって良いですか？ 今彼らを拘束しているロープは僕の私物なので回収したいのです」

「わかった。少しだけ待っていてくれ」

そういうと衛兵の人がすぐ側の詰め所に走っていく。
今のうちにエルの確認をしておこう。

「エル、そっちは今どの辺？ こちらは西門について野盗を衛兵の方に引き渡してるとこ」

「もう森は抜けた。あと20分程度でそちらに着くぞ」

「了解、西門抜けたとこの池で待ってるよ」

意外と近いぞ、エルのライトの魔術でも使えばもう見えるんじゃないか？

ぬお、衛兵の人も早い。もう拘束具を持ってきてる。

僕は拘束具のつけ方が今ひとつ分からないので衛兵の人たちの使い方を見ているだけ。

どうもギロチンの拘束具のような感じで頭と両手を固定することで自由な動きを拘束するタイプみたい。

確かに両腕と首が一枚の板で固定されたらまともに動けんよね。

でも当然それをつけるためにはパラコードによる拘束を解く必要があるわけ。

拘束具を着けていない最後の一名、僕を血走った目で見ていた奴だ。彼はパラコードの拘束を解かれた瞬間に衛兵の人を振り切ってこちらに突っ込んでくる。

衛兵さんなにしてんのさって思ったら自分の肩抑えてるぞ。あいつ何やった？

彼を良く見ると手には血のついたナイフ。一体どこに隠していたんだろう？

・・・そういえばボディチェックなんてしてないからどこでもありえるか。

はあ、こうなるならちゃんとやっておけばよかった。

「ああああああっ！」

叫び声と共に彼が突っ込んでくるが、低出力のスタンロッドでナイフを防ぐと半ば自爆のような形で彼が感電して動けなくなる。

どうでもいいけど”あああああ！”みたいな氣勢を上げつつ突っ込んできて後半はそれが悲鳴に変わってるとちよっと情けないよね。

「すまない！ 大丈夫か！？」

「ええ、問題ありません。それよりもそちら様の一人は大丈夫ですか？」

「ああ、ちょっと斬られたくらいだ。戻って治療を受ければすぐに治る」

「それは良かったです。さて、僕は仲間と合流するのでここから失礼します」

パラコードを衛兵の人から受け取り、町の憩いの場の池で待つこと5分弱。

僕はエルとリーナさんと合流し、宿に戻った。

宿のドアをくぐった時のリーナさんとタミナさんの表情を僕は生涯忘れないだろう。

怯えた雰囲気を出す少女が、一転して満面の笑みを浮かべて母の元へ走る。母は彼女を見て驚いたような表情を見せたが、次の瞬間にはやわらかい笑みを浮かべて彼女を抱きしめる。

「お母さん、ただいまっ！」

「無事でよかった・・・お帰りなさい、リーナ」

そんな親子が抱きしめあう光景は感動的ではなく、心温まるはずなのに。

すこし、胸がちくりとした。

『うーん、僕たち完全に邪魔者だから部屋に帰ろうか』

『外に出たほうが良いのではないか？』

『そうだね、その方が良さそうだ』

僕とエルは外に出てから少し歩いて町の憩い場の池に戻る。
もう随分と遅いおかげでここには誰もいない。
ベンチに座るとエルも僕の隣に座る。

「ねえ、エル」

「ん、どうしたのだ？」

「なんていうのかな、ちょっと自分でもよく分からないけどさ。
たぶんね、僕はゲーム感覚だったんだと思う」

「・・・主、大丈夫か？ 顔が青いぞ？」

「僕の世界にはね、RPGっていうジャンルのちょうどこんな世界
に生きる主人公を追体験できるゲームがあつてさ。ゲームの中には
いろいろとイベントが用意されていて、たとえば今回みたいな女の
子が野盗に誘拐されました、助けましょう。なんてのもあつて、大
体の場合最終的には女の子を助けてハッピーエンドで終わる。・・・
ぶっちゃけ僕の状況ってそれと大差ないよね。正直言えば僕はそう
いう気分で動いてた。人の命が懸かっているのにね」

「・・・」

「ゲーム感覚であれこれ自分勝手に動いて、人を殺して、いまさら
現実に戻って落ち込んで。なんなんだろう、自分自身が馬鹿すぎて
涙でそう」

一気に喋ってからエルを見るとなんだか辛そうな表情をしている。
そりゃそうか、こんな気分を愚痴られた日には僕だって辛そうな表
情になるだろう。

「妾が思うに、今回の主の行動は賞賛されこそすれ、非難されるよ
うな要素は一つもない。仮に主がいい加減な考えで行動したとして
も、だ。主はこう言われるのは嫌かも知れぬが、何の力も持たぬ者

の矢面に立って戦う姿はなんとも格好よく、確かに物語の主人公のようであったぞ。・・・だから、そんな風に意味も無く自分を責めるのはやめよ。主が悲しければ妾だって悲しい。逆だってそうなのだぞ」

エルに肯定されるとそれだけで心が軽くなる。
そんな自分の浅さが悲しいけど、ちょっと嬉しかった。

エルと同化してから宿に戻るとカウンターには誰もいない。
僕はそのまま自分が借りている部屋に戻る。

ここ最近はなんともバイオレンスな日々だった。
明日辺り休日にもしてしまいたいが、残念ながら今日受けた薬草
採取の依頼が完了していない。気合を入れて明日もがんばろう。

『主、ちよつと良いか』

『いいけど、どしたの?』

『ちよつと顕現するぞ』

『おっけ』

一瞬光ったあとにエルが現れて、僕の隣に腰掛ける。

「最近の主は毎日根を詰めて働きすぎだと思う。こつこつときには
少し遊びにでも行って気を紛らわせるべきだ」

「僕もそんな気分なんだけど、薬草の依頼が終わってないからそれ
だけはやっておかないと・・・」

にやり、とエルが笑ってポケットから手をだす。

その手には依頼の対象の薬草が数束あり、僕の手持ちを考えると依
頼を達成するに当たって十分な量だ。

エルは僕のドロップポーチに薬草を突っ込むと今度はにっこりと笑
う。

「そついうと思って集めておいた。これで明日は遊びにいけるな」

「あ、ありがとう。ひよつとして帰り道に取ってきてくれた?」

「うむ、今日はいろいろあつて数が足りてなかったからな」

「じゃあ明日はギルド行って依頼を済ませてから……。そうだなあ……」

そういえばこつちに来てギルドで依頼を受けるようになってからまともに観光をした記憶がない。

おかげで行きたいのに行つてない場所はいっぱいある。

日本には存在しない武器屋や魔術用品店。それに人々で賑わう市場……ああ、楽しみだ。

時刻は10時前、相変わらずこの時間帯のギルドは閑散としている。僕はカーデイスさんに依頼されていた薬草を渡して代金を受け取る。

「おい、ユート。ちょっとカード渡せ」

「へ？ ああ、どうぞ」

「お前、盗賊に捕まって売られる寸前の少女を助けたんだってな。やるじゃねえか」

Webも無い世界なのにこの人一体どれだけ情報が早いんだ？

まだ朝だよ？ 例の件からまだ一日も経つてないんだけど。

「偶然ですよ。薬草採取をしてたら僕も襲われて、後は流されるままって感じでしたので」

「せっかく誇れることしたんだから誇つておけ、たまにしかできね

えぞ？」

「うーん・・・」

正直僕の行動には改善点が多い。

アジトを発見するまでは良かったけど。その後の行動が特にイケてない。

見張りを殺すことなく待機して奴隷商が来るのを待つ。

んで、奴隷商の取引後に遠距離から関係各位を一方的に射殺してリーナさんを確保、離脱。

これが冷静になって考えたときの理想的なパターン。

実際には特に考えもせずにアジトに突撃、潜入などと無茶をやらかして気づかれて。

運よく済んだから良いものの、失敗してたらリーナさんの命は相当危なかった。

仮にアジトに突撃するのが必須なら最悪でも見張りを無力化した後、死体をどこかに片付けておくべきだったと思う。

「まあともかく、ホレ、ランクアップだ」

渡されたカードの右上がFからEに変わっていた。

あれ？ 僕ってFの仕事3つしか受けてないぞ？

「え？ いや、僕Fランクになってからまだこの依頼3個目ですよ？」

「そうだな。冒険者8日目でEランクなんて珍しいぞ」

「理由はやっぱりリーナさんの救助ですか？」

「救助もそうだが、具体的な理由はお前さんの戦闘能力だな。昨日うちに呑みに来た衛兵から話を聞いたんだが、何でも暴れた盗賊を

一瞬で片付けたらしいじゃねえか。薬草の採取はできてるし、それでさらに戦えるならランクが上がるのも当然ってことだ」

なるほど。情報源は酒場だったのか。

この世界の娯楽って少なそうだし、たぶん何時も呑んでるんだろうな。

……っていつか業務上得た内容って喋っていいの？ 普通だめじゃね？

「ついでにこれが盗賊退治の報酬だ。良かったな、臨時収入だぞ」

「ありがとうございます……ってこんなもらえるんですか？」

僕の手元には銀貨7枚。

難易度が違うだろうとはいえ、薬草系の依頼の倍以上とは。

おかげで当面の目標だった貯金（金貨1枚分）をあっさり達成してしまった。

「あ？ 知らないで盗賊と戦ってたのか、やっぱユートお前変わってる奴だな」

「いや、さっきの通り成り行きでしたので」

「そういえばそうだったな」

「ともかくありがとうございます」

「ああ、またな」

カーデイスさんにお礼をしてからギルドを出る。

さあ、今日は休日だ。まずは朝ごはん代わりに市場にいつて何か食べようか。

「聞いていたけど凄いなこれは。見ると聞くじゃ大違いだ」
「ガルト唯一の市場だからな」

ギルドを出て南へ歩くこと5分ほど。

そこには庶民の台所、巨大な市場が広がっている。

ちょうどヨーロッパの市場のような雰囲気、あちこちで物を売るために声を張り上げる商人たちが場を盛り上げる。

一人の商人が扱う範囲は3×5mくらいの露店で、衛生的な問題か青果と精肉の両方を扱う店舗は無く、さらにそれらの店舗間は少し離れている。

前に来たことがあるエルの話だとガルトの市場は青果、精肉が基本で魚介類は土地柄ほとんど置いてないらしい。その”前”が一体いつなのか微妙に気になるところだが、少し見た限り市場が取り扱う商品カテゴリについてはあまり変化が無いようだ。

(特に果物は)見た目と味が一致しないことを異世界生活初日で知っているので個人的にはかなり楽しみにしている。

「すみません、コレ二つください」

「あいよっ!」

銅貨3枚を渡してリンゴを受け取る。

異世界生活初日に食べたこの果物は僕のお気に入り。

見た目と食感はリンゴそのものだが、味はイチゴ。

どちらも好きな果物だったので、個人的にかなりポイントが高い。ちなみに好きなものを混ぜたからといって必ずおいしくなるわけではない。

僕はカレーとサイダーは好きだが、それらを混ぜ合わせたカレーサ

イダーは嫌いだ。

人が少ないところに移動してから指先に魔力を集中。水を精製してリングゴを洗ってからエルに渡す。杖なしで魔術を使っているが、集中して僕らを見ない限りそんなことに気がつくことは無いだろう。

「主、ありがとう」

「どういたしまして」

「それにしても今後こうやって人前で魔術を使う場合、一つ杖でも持っておいたほうが目立たなくて済むかも知れぬな」

「あー、うん、そうかもしれないね」

別に杖なしで魔術が使えることが露呈すること自体はどうでもいいのだが、下手をすればミリタリーバランスが壊れてしまうような能力を持つ場合、いろいろと不都合が発生する。

首輪のつかない危険物と大手組織に認識された場合、非常に面倒なことになりそうだ。

たとえば暗殺とか。

僕とエルがもつぱら使う防御用の魔力障壁は非常に高速に展開できるが、常時展開しているわけではないので見えないところから撃たれる場合役に立たない。

・・・やっぱ一本くらい買っておくか。無駄に目立ってもしょうがないし。

何より僕は経験が足りていないので身体能力の割りに戦闘能力は高くない。

こんな状態で変に強い、という扱いを受けるのは危険だ。

幸い臨時収入もあるのでブランクの杖の一本くらい買えるだろ。あ、でも魔方阵が入った杖とか興味あるな。使ったことないし。予算的に余裕があればそっちにしようかな。

魔術用品店には後で向かうとして、とりあえずは適当に歩いて回る。いつの間にか露店は青果コーナーから精肉コーナーに移っていた。もういくつか果物とか買うつもりだったんだけど、まあいいか。

さすがに生肉を買ったところでなんの役にも立たないため、僕が見るのは主にソーセージやハムなどの燻製したもの。

前にギルドで食べたあれはソーセージ状だっただけで燻製していなかったなので、出来れば久しぶりにきっちり桜のチップ辺りでスモークした燻製をいただきたい。

さらにわがままを言うなら今すぐ食べたいのでブルスケッタみたいな感じか、またはホットドッグのようになっているとなおよろしい。

意外とそういうニーズがあるのか、数分歩いているとハムを乗せたパンが銅貨2枚という激安価格で販売している店があったのですぐに購入。

パンは相変わらず若干独特の味があるが、香りの強いハムによってそれは殺されて気にならない。思えばパンを使った軽食の類はどれもパン独特の風味を殺して食べやすくするものが多い。

この世界のパンはこういうもので、みんなはそれを食べ慣れているけど僕は食べ慣れない。というわけではなく、どうも仕方なくそういうパンで挟んでいるということか。仮にこの独特の味の無い淡泊なパンとか販売されたらかなり売れるんだろうな。

「ひっさしぶりにハムとか食べたかも、やっぱパンにはハムだよな。燻製は旨いよ」

「うむ、燻製はうまみが凝縮されているからな。さらに日持ちもするのでぜひ旅では持ってゆきたいところだ」

「うーん、重量の許す限り、って感じかな。干し肉に比べるとかなり重いし」

「さすがに妾たちだけで馬車を使う気にはなれぬし・・・そもそもそんな金もないか」

「そうだね。っていつか馬車は無理でしょ。お金以前に馬なんて扱えないよ」

「・・・そうであった」

確かに馬車などで移動できたら移動中の食事がかなり華やかになるなあ。

もっとも前述の通りそんなことは不可能だろうけど。

十分に市場は見て回ったので魔術用品店に向かう。

場所は前に看板を見ているのでなんとなく分かっている。

市場から大通りに出て、町の中心に向けて歩くと右手側に細かい意匠を施した魔方阵の看板があるのでそれが目印だ。

初めて入った魔術用品店の中はなんだか独特の雰囲気だった。

なんというか、こご、意味も無く暗いような高級なような感じで、よく言えばシック。

なんでわざわざそんな雰囲気醸し出してるんですかって店員さん

に聞きたくなるくらい。

店の左手側には大小様々な杖が用意されている。見たところそれぞれにスペックシートなどは用意されていないので、買う前にはいちいち店員さんに内容を聞くのだろう。

右手側および中央には宝石やよく分からないアンティーク調の飾り物。何に使うのかは全く分からない。

「それにしてもこれは・・・」

「どうした？」

「値段がちよっと高すぎやしませんかね」

「魔術用の道具というのは大体こんなものだぞ」

あまりの値段に口調が変わる。

一番安い杖が一本で銀貨2枚。

細くて折れそうでしょう。しかも信じられないことにそれはブランク。

同じ杖で魔方阵を込めたモデルはなんと金貨1枚！

余裕があれば魔方阵を込めたモデルを、なんて考えは一瞬で終わってしまった。

なんでただの木の棒がこんな値段になってしまうわけ？

商品の値段に飲まれて気づかなかつたけどそういえば周りもなんだか結構お金を持っている感じがする。

「周りもお金持ちっぽい雰囲気だね。服とかもなんだかそんな感じだし」

「雰囲気はともかく、主の服は十分に高級品に見えるぞ」

「そう？」

「うむ、特にそのジャケットは縫い目は細かく丈夫そうに出来てい

るし、裏地もしつかりとしている。こちらで購入する場合金貨数枚を考えたほうが良い出来だ」

「そ、そんなに・・・」

日本で3万円も出せば買えるアウトドアメーカー製のフィールドジヤケットがこつちじゃ金貨数枚か。なんかうまいことあつちとこつちを歩き来ることが出来れば僕は一瞬でお金持ちになれるかもわからんね。

しかしマジでどうしようかな。

所持金は銀貨16枚。

「目的を考えるとエルの分も必要だよね」

「うむ」

携行することを考えるとバッグのパルスウェビングに差し込んでおきたいので、若干太い杖を選択するしかない。一番安い奴だと細くてすっぽ抜けてしまう。

その杖のお値段銀貨3枚。ちくしょう、高いよ。

随分と軽くなつた財布と共に店を出る。

時刻はもう夕方。そろそろ帰らないと。

それにしても臨時収入がほぼ吹っ飛んでしまったよ・・・。

だけど気分は悪くなくてなんだか気持ちがつきりした気がする。

これが遊びに行く効果か。

今後は適当なタイミングで遊びに行く日を作ったほうがいいな。

「エル、ありがと」

「と、突然どうしたのだ。妾は何もしておらぬぞ？」

「なんだか気分がすっきりしてさ、エルのおかげで潰れずに済んでるよ」

「妾が大事な主のために頑張るのは当然だ」

片手を腰にやって笑うエル。

綺麗な銀髪が夕日で照らされて紅く輝く。

「……………」

「ん、どうしたのだ？」

「な、なんでもないっ！」

エルがあまりにも可愛くて思わず見惚れてしまった。
なんてとても言えないって。恥ずかしくて。

7 (後書き)

「そういえば大きい杖のほうが高かったけど、コンパクトなほうが取り回しが良くて便利じゃない？」

「大きい杖のほう強力な魔法陣を込めることができるし、込められる魔方陣の数も多い。複数本持つと微妙に魔力の込め方が違ったりして使いにくいので基本的に魔術師が携行する杖は一本だけだ」

「なるほど、となると人前で魔術を使う場合はあまりたくさん種類の魔術を使わないほうが良さそうだね」

「おそらくその方が良さそうだ。具体的には2、3種類に抑えておくほうが良いな」

「魔力障壁と氷柱発射と・・・あとは水の精製か」

「うむ、水の魔術師っぽくて目立たなくてなお良い感じだぞ」

「主、もうすぐ宿だぞ。同化しなくて良いのか？」

「ん、今回はいいや。リーナさんとタミナさんの様子を見ておこうかと思つて。朝なんだかんだすぐ出ちゃって挨拶もしてなかったからさ」

「そうか」

「まあ、リーナさんに顔合わせるのは難しいかもだけどね。普通の女の子からしてみれば死体を量産した人は怖いだろうし。ともかくタミナさんとは会話してみても、今後難しいような結論になったら宿は移動しようかと思つてるんだ」

「妾も散々盗賊を始末したが特に怖がつているような印象は無かつたぞ」

「んー、たぶんエルが女の子だからじゃないかな？」

「ちよつと納得ができないのだが」

「リーナさんは男に誘拐されてるから、”暴力を持つ、または実際に暴力を振るう男”に対して恐怖心があるんじゃないかと予想してるんだ。実際に救助後に僕が近くに寄つたときはかなり怯えてたからあんまり予想は外れてないと思う。その点エルは女の子だからね。前述の条件に合致しないから特に怖がられたりはしてないんだと思う」

「………」

なんだか様子がおかしい気がして、エルの方を見る。

ついさつきまではニコニコとしていたエルが、今はなんともいえない表情で僕を見ていた。

言いたいことがあるのにうまく出てこない、そんな感じ。

「……主は……主は、それで、良いのか？」

「うん、それでいいと思うよ。仕方が無いことだし」

「妾は・・・納得できぬ・・・」

「エル、ありがと。そういう風に僕のことを考えてくれるのはうれしい。・・・だから僕は大丈夫」

「・・・そう、か。大丈夫と言う主を、信じておるからな？」

ああ、もう！

なんで僕はこうエルに心配ばかり掛けちゃうかな。

気にしてないって思ってるし、言っているのに、それがうまく伝わらなくてもどかしい。

心配させてしまって悲しい、なのにこうやって想われていることが嬉しい。

そんなぐちゃぐちゃな感情が体の中を渦巻くと、なぜだか次の言葉が出てこない。

・・・ホント僕ってイケてないな。

なんでうまく出来ないんだろう。

「あ、ユート君、エルシディアさん。こんばんは、お帰りなさい」

宿に戻るとタミナさんは柔らかい笑みを浮かべて僕たちを迎えてくれた。

しかも名乗った記憶が無いのに名前覚えられてるし。

リーナさんに聞いたか、口の軽い衛兵に聞いたか。まあどうでもいいか。

「ほら、そんなところに立ってないで座って頂戴？」

「あ、はい、どうも」
「うむ、ありがとう」

テーブルに着くとタミナさんが大きな声でお茶を頼むと可愛らしい、けれどそれと同じくらい大きな声でリーナさんの返事が聞こえた。リーナさんは強いな。あんな目にあつたのにもう普通に仕事やその手伝いが可能なのか。

僕があんな目にあつたら未だに塞込んでいる気がする。

「リーナさんは大丈夫そうですね。なんだかほっとしました」

「貴方たちのおかげで娘は無事よ。本当にありがとう……。何を
して御礼をすれば良いのか分からないわ」

先ほどとは随分と違う雰囲気か辺りを包む。

正直お礼なんて言われなれてないのでかなりくすぐったい感じがする。

「そんなことはしなくて良い。妾たちは既にギルドから報酬を受け取っておる」

「タミナさんはリーナさんをしっかりと慰めてあげてください。彼女はまだ13歳なのですから。きっと心の奥には恐怖心がまだ残っています」

「うむ、主の言うとおりだぞ。リーナがあんな元気なのに母親であるタミナ殿がそれでは良くない」

「……そうね、ありがとう」

タミナさんの顔に柔らかい笑みが戻る。

やっぱり母親っていうのはこうじゃないと。

「お待たせしまし」
「風よっ！」

リーナさんがポットとカップのセットを持ってやってくるが、僕を見て凍る。

その拍子でポットが転びかけるが、それをエルが風の魔法を使って器用に支える。

ちなみに杖は抜いていた。危ない危ない。

「あ、その、ごめんなさい。エルシディアさん」

「ふふっ、次は気をつけるのだぞ？」

リーナさんがお茶を注いで出してくれる。

僕にお茶を渡すとき少しオドオドとしてたけど、それでもちゃんと渡してくれた。

「凄いのね。そんな風に魔法を扱える人なんて初めて見たわ」

「妾たちからすれば魔法は生活の道具のだが。最近の魔術師たちは武器としての性能ばかりを追い求めてこういった面に力を注がぬ。こんなにも便利だと言つものにな」

「ん？」
「たち」
「ってことはユート君もこういう風に魔法を使えるの？」

「あー、さつきみたいな魔法はできませんよ。精密操作は苦手なので。僕が使うのは料理を作る時の火の変わりにしたり、飲料水を作ったりとかですね」

「それも十分凄くないの！魔法って便利なのね、今まで攻撃の道具で武器そのものだと思っていたけどちょっとその考えは改めるわ。貴方たち若いのに凄いのね。私も負けてられないわ」

なにに負けてられないのかは今ひとつ分からないが、元気なのは良

いことだと思っ。

対照的に僕のせいであまり元気じゃないリーナさんにも話しかけておいたほうがいいかな。

僕に対してなんだか申し訳なく思っているような瞳をしていたし、出来る範囲で心の重石は取っ払ってあげたい。

だから、リーナさんを見て、言う。

「怖い？」

「えっ……？」

「その感情はね、仕方が無いことなんだ。だけどいつまでもそうしているわけにもいかないと思う。だから、少しずつ忘れていけば良いと思う」

リーナさんはしばらく固まったあと、うつむきながらもしっかりとした声で話してくれる。

「ごめん、なさい……。ユートさんが私のことを助けてくれて、守ってくれて……。なのにこんな態度で……」

それはどう見たって辛そうで、でもそれは乗り越えなくちゃいけないくて。

だから僕は考えて相手に負担にならないように言葉を選んで返す。

「毎日少しずつ大丈夫になっていくから。辛いと思ったらタミナさんに頼れば良いと思う。独りで頑張るのは厳禁だよ？」

「はい……。ありがとうございます。あの、お願いしてもいいですか？」

「僕に出来る範囲ならなんでも」

「これからも一緒に話をさせてください」

「え……？ 僕が？」

野盗を大量虐殺をしちゃったせいでトラウマの原因No.2くらいはほぼ間違いない僕がリーナさんと継続して話しなんてしてていいのかな。

どうなんだろう、僕は専門が心理学だったわけじゃないから分からないや。

「嫌……ですか？ 確かに私は男の人が怖いです。でも、話をするならユートさんがいいです」

「ん、大丈夫だよ。と言っても僕は冒険者だから”ここにいる間は”っていう条件はついちゃうけど」

「ありがとうございます。わたし、頑張ります」

パンツ、と両手を合わせる音がする。

「暗い雰囲気はここまで！ ご飯にしましょう！」

そう言ってタミナさんは立ち上がり、厨房へ向かう。

去り際に御代は取らないから楽しみにね、といわれたので非常に楽しんだ。

エルと適当な会話をしつつ30分も待つと中皿の料理が3つもやって来た。

今まで頼んでいたのはもっぱら定食類が基本で、こういう取り分けるタイプの料理を頼んだことは一度も無かったので非常に新鮮な感じがする。

一皿目はから揚げにあんかけのようなソースが全体的に掛かっており、香ばしい香りをあたりに漂わせている。これだけでは彩りが今ひとつに思えたのかから揚げの周りには色とりどりのサラダが並べられており、見栄えも大変によろしい。

二皿目はオムレツらしきもので、卵でとじられているため詳細は分からないが確実に美味しいだろうということとは分かる。湯気の出る半熟の卵が実に美味しそうだ。

三皿目は野菜と何かの肉の炒め物で、醤油に近い香りがして一瞬ホムシツクになった。にらのような野菜がすばらしい香味を出している食欲をそそる。これも一皿目のから揚げと同じで彩りを気にしており、カラフルなパプリカのような野菜などがある程度混ぜられて見栄えがいい。

正直言わせてもらえるならばこれはパンじゃなくてご飯がほしい。いや、ほんとに。

そしてかなりの量のパンが乗ったバスケットがテーブルの中心に乗る。

「どうぞ召し上がってください」

「いただきます」

まずはから揚げを一口。

じゅわつとした肉汁が口の中にあふれて脳内を幸せで満たす。

次に来る香辛料の聞いたあんかけが後味の濃さを忘れさせ、次の一口を容易にする。

なんとというコンビネーション。

これは確実に食べ過ぎて後で動けなくなるフラグがたった。

続いてオムレツをスプーンで一口、中にはひき肉とチーズが入っていてトマトソースで味が調えられている。
ソースやひき肉の味付けは随分と薄味だが、チーズの濃さがそれを補って余りある。

とりあえずパンを取ってからオムレツを乗せて食べる。

・・・至福だ。何もいえない。

最後の炒め物は本当にご飯がほしい。

一口食べるとそれは日本の家庭でおなじみの野菜炒めの味がした。醤油のようなうまみのあるソースにしゃきしゃきとした野菜たち。肉と野菜が織り成すハーモニーは基本的に万人が好む味だと思う。パンで包んで食べるとなんともしゃきしゃきにならない気分になったが、美味しいことには変わらない。

個人的にヒット一位なのはオムレツ。

そして驚いたのはパン。

なんと、何時も食べていたパンと違い、あの独特の酸味が無いのだ！おかげで余計にオムレツが引き立って美味しく堪らない。

僕は無言でバクバク食べる。

エルのほうをたまに見たが、エルもやはりバクバクと無言で食べている。

うん、これは無言になるよね。うまいし。

大学生のころにみんなでカニを食べたら全員カニを食べることに夢中で無言になってたのを思い出してしまった。

「ご馳走様でした。久しぶりにこんな美味しいの食べました」

「すばらしい料理であった」

「喜んで貰えてよかったわ、こんなに美味しそうに食べてもらったのは私も久しぶり」

僕とエルがそれぞれ無言で食べ終わった後にお礼をいう。

ほんとにコレは無料でよかったんでしょうか。

めちゃくちゃ美味しかったです。

ああ、これから先がちよつと楽しみになってきた。

やっぱり人生を最も彩るのは食事だよ、食事。

僕はほぼ毎日何かしらの薬草採取の依頼を受け、終わってからリーナさんとゆつくりと会話をする日々を過ごすこと10日間。

話の内容は依頼中の面白かった出来事や、自分の世界の話をごちら風にアレンジしたものなど。後者の話は比較的面白いらしく、リーナさんだけじゃなくてタミナさんやエルまで聞いていた。

最初はおっかなびっくりだったリーナさんもだんだんと慣れてきて、4日目にはもう僕に笑顔を見せてくれるくらいに。そのときはリーナさんの強さに心の底から驚いた。

表現的にあつてるのかはちよつと分からないが、そこからはもう坂道を転がるかのように回復して、タミナさんいわくもう普段と変わらないくらいだそうだ。

ともかく今日もお仕事頑張りますか。

「おい、ユート。お前ちよつと王都まで護衛の仕事を請けてみないか？」

今日もギルドで採取系の依頼を受けるつもりだったのだが。

護衛ってあれだよな、危険だから必要なんだよな？

あんまり僕に似合ってるとは思えないなあ。

・・・大体僕もエルも人前で戦うのは苦手だ。いろいろと。

「ちなみにそれにはなにか理由があるんですか？」

「お前、”気分だ”って返したら断りそうだな」

「そもそもカーデイスさんはランクE如きの冒険者に一体どんな戦闘能力を求めているんですか？ どちらかと言えば僕は”護衛”される側”だと思いますよ」

「ギルドとしては仕事を見てある程度できそうな奴に相応の仕事を振る。そして全体の底上げを行う。コレが俺たちギルドマスターの仕事だ」

「それは買いかぶりだと思うのですが」

期待されるのは嬉しいのだけど、荷が重くないかな。

人の命どころか物まで守るっていうのは簡単じゃない。

「うーん・・・」

「さすがに一人でやれと言っているわけじゃないから安心してくれ。

お前さんもこの手の仕事が初めてで勝手が分からないだろうから、

今回に関してはちゃんと熟練の冒険者をつける」

「そうですか・・・。それなら大丈夫そうですね」

「主は気にしすぎだ、主と妾ならどんな依頼だって大丈夫だぞ」

「ほら、お前の従者もそういつてるぞ」

「分相応の依頼を受けてないといつか痛い目にあいます。僕は平凡で十分です」

素人が高難易度の依頼を受けての急激なレベルアップとかはゲームの中だけで十分だ。

死んだら教会で復活するわけでもないし、十数秒後に指定地点でリスポーンということもない。

重傷を負って倒れたら衛生兵にAEDを押し付けられるだけで健康体に戻るなんてことももちろんない。

最終的な目的のため、少しずつレベルアップをしていきたいと思
う、が、短時間でのリスクなレベルアップは勘弁こうむる。

「ともかく仕事は頼むぞ。その辺のテーブルで小一時間も待ってい
れば今回のパートナーになる冒険者が来るはずだから仕事の内容は
そいつに聞いてくれ。ついでに王都では武技大会が開催される予定
だ。折角だから楽しんで来い、帰ってくるのはその後でいいぞ」

「武技大会ですか？ それはちょっと楽しみですね」

「ああ、楽しんで来い」

にやりと笑うカーデイスさん。

多分、格闘技とか好きなんだろうな。

僕も格闘技の観戦は嫌いじゃないし、意外と楽しみだ。

異世界だけあって魔法とかで派手だろうし、下手すれば自分の世界
の格闘技よりも見ごたえがあるかもしれない。

ギルドの軽食屋で小一時間をつぶすことになった僕は、フィーネさ
んにジューズとスコーンのようなものを2つずつ注文する。

最近の仕事も安定してきたのでこのくらいの出費なら大丈夫。

しかし小一時間と言うのは何もすることがない場合結構もてあます
なあ。

・・・あ、そうだ。どうせ暇なんだからエルと音楽でも聴くか。

最近異世界談義ネタで携帯MP3プレイヤーの話をしたばかりだし、
バッグのなかにはiPodらしきもの（微妙に形が違う）とイヤホ
ンもある。

バッグからiPodモードキとイヤホンを取り出してエルに見せる。

『ほら、前に話してた音楽を携帯できる機械だよ』

『こんな小さな箱で音楽が聴けるのか？』

周りに聞こえるとちよつと厄介かもしれないので一応会話には念話を使う。

エルにイヤホンの片方を渡してつけ方を教えると興味津々といった具合で早速耳につける。

曲の一覧を表示すると知らない曲ばかりなのでシャツフルの文字を選択。

スイッチONにするとエルの表情が変わった。

『主！ 主！ これは、凄いな！』

『ちよつとした暇を潰すに当たってコレより便利なものはなかなか存在しないと思うよ』

iPodモドキからはどこかで聞いたことのあるクラシックが流れており、エルはとても楽しそうな表情をして音楽を聞いている。

・・・それにしてもバッテリーマークが満タンに近いのは不思議。
リチウムイオンバッテリーって普通長時間放置すると目減りしなかつたっけ？

「こんにちは、ユート君」

暇な時間を知らないクラシックで潰していると突然話しかけられる。顔だけ向けると知らない女性。

年齢は多分20歳くらいだと思う。比較的整ったほうだと思われる顔立ちに青い瞳、茶色の髪の毛をポニーテールでまとめていて、い

かにも冒険者といった服装をしている。
左腰には無骨な剣を吊るしていて、正直似合わないと思っ
てしまっ
た。

「えーっと、どちらさまでしょうか？」

「私はミリア、今回依頼を一緒に行く冒険者よ」

予想してしかるべきだった気がする。
失礼なことしちゃったな。

「……気がつくのが遅れてすみません。僕の名前は……なんだ
かもうご存知みたいですが、ユートです」

エルはまだ音楽に夢中だ。

僕はiPodモードキのスイッチを切って片付けつつ念話で一言。

『エル、今回の仕事のパートナーの人が来たから挨拶してくれ』
『う……うむ。すまぬ、音楽に夢中で気がつかなかった』

「妾はエルシディアだ、主の従者をしている」

エルの言葉を聞くとなんだか驚いたような表情のミリアさん。
一体何なんだ？

「貴族が冒険者をやっているとは思わなかったわ」

へ？

「貴族って……ひょっとして僕のことですか？」

「ええ」

「いや、全然そんなんじゃないですから」
「え？　じゃあ何で従者なんて連れてるの？　それに服装も縫い目とかかなり綺麗だし、どう見ても上等。とても一般的な冒険者の着ている服じゃないわ」

あー、どうしたもんか。

「服装に関しては・・・まあちょっとあれなので割愛させていただきます。エルは僕の従者ですけど、偶然の結果そうなってしまっただけです」

「その言い方だとまるで嫌々みたいに聞こえるのだが」

「ごめんごめん、そんなことないって」

「なんか主従関係を感じさせないわね」

「そもそも僕はエルを従者と思ったことはないです。大事なパートナーですから」

「そういう風に言われるとちょっと恥ずかしいぞ」

何を恥ずかしがってるんだろ？

この世界で唯一僕の秘密を知るパートナー。

そんな存在を従者として扱うなんてつもりは毛頭ない。

「ふーん・・・。まあ確かに冒険者にはいろいろいるし、余計な詮索はやめとくわ」

「申し訳ないです」

ミアアさんは微妙な目で僕たちを見るが、それは当然だろう。

なんせ質問にまるで答えてないし、それで信用しろって言うほうが無茶な話。

でもまあ、知ってる限りを話したところで”なにこの痛い人”ってなるだけだからなあ。

”異世界からやってきました、この世界のことなぞ何も知りません”
なんていう奴が僕の前に現れたら確実に救急車と警察を呼ぶ。

「ともかく仕事をカーデイスから頼まれてるから話を進めるわ」

「はい」

「今回の依頼人はバースという商人の護衛で王都までの移動で、期間は予定だけど5日間。報酬は銀貨14枚。何か質問はあるかしら？」

んー、特に気になることはないな。

『エルは気になることある？』

『特にないぞ、主と妾なら大抵の問題は大丈夫だ』

『ミリアさんや依頼主の前で全力はいろいろ問題があるでしょうに』
『バレなければよいと思うぞ』

・・・そついう問題じゃないと思うんだが。

「ん、特にないです」

「そつ、それじゃあ早速向かいましょうか」

北門に着くと一台の荷馬車が待機していた。

荷馬車はかなり大きい馬を二頭立てで繋いでおり、荷台自体もかなり大きい。

どう見ても大量のものを運ぶことが可能で、荷物の重量の合計はぱつと見て数百キログラムはありそつだ。

ほかには馬車が見当たらないため、おそらくはこの馬車の持ち主が護衛対象だろう。

「こんにちは、君たちが依頼してた冒険者かな？ 私はバースだ。よろしく頼むよ」

「冒険者ギルドのミリアです。よろしくお願ひしますね」

僕たちが馬車に近づくと向こうから挨拶があった。

非常ににこやかな表情をした25歳くらいの男性で、どうみても美形。

赤い髪は清潔感があるように短く整えられていて僕から見てもとても好印象。

服装は今まで見たことがないタイプで、ローブとジャケットを足して二で割ったような感じ。

「こちらこそよろしく頼むよ。最近は何にかと物騒だからね」

「依頼を受けた以上ベストを尽くすわ。安心して頂戴」

「そちらの二人は？」

「彼らは私のパートナーよ、ランクはEだけどギルドマスターが推薦するレベル。実力は心配しなくていいと思うわ」

「へえ・・・あのカーデイスが推薦か。そりゃあ期待ができるね。まだ子供だろうに」

「冒険者ギルドのユートです。若輩ゆえ、ご期待に沿えるかどうかなかなか心配ですが、精一杯頑張りますのでよろしくお願ひします」
「妾はエルシディアだ。主の従者をしている。短い間だと思うがよろしく頼むぞ」

エルの挨拶を聞くと驚いたような顔をするバースさん。

というより僕とエルの関係を初めて聞く人って大抵驚くんだろうな

あ。

そんな感じで軽く挨拶を済ませてから僕とエルは荷台に乗り込む。
ミリアさんはどうも御者台で護衛を行うらしい。

さあ、王都に向けて出発だ！

・・・何もなければいいんだけど、なんだか全然そんな気がしない
んだよなあ。

最初は興味があつた馬車による移動だが、その興味は数時間前にも
う無くなつた。

居室から見える風景は右の窓から森、左の窓から草原。

この風景は王都に近づくまで変わらないらしい。

馬車にはサスペンションが用意されていないため、ちょっとした段
差でもお尻が痛い。

辛うじてクッションが用意されていたためなんとか我慢できている
が……。

変わらない風景、揺れが直撃することによる痛み、一切やることが
ない退屈な時間。

これは……想像以上に苦痛だ。

最初はエルとしりとりでもしてようかと思つてルールを説明したが、
そもそも単語が異なりすぎてゲームにならなかつた。

“カシューナッツ”なら分かるが“ピーナ”と言われても分からん。

「暇だ」

「そうだな」

「馬車の居室で待機することがこんなに暇だとは思わなかつた」

「主よ、あの音楽を出す箱を出してくれ」

「状況が変わつたときに音楽聴いてると気づけないから駄目」

「む……」

僕は気分転換も含めてバッグから杖を引き抜き、杖の先端に氷の玉

を作る。

それを回転させたり好き勝手動かしてみたりするが、まるで面白くない。

大体この杖に魔力を通して使う、というのが凄くやり辛くてフラストレーションがたまる。

個人的に杖は魔術の行使の支援を行う道具という認識があったために違和感が凄い。

何が違和感ってね。もう全然魔力が通らないの、杖に。

もちろん全く通らないわけではないからさっきの通り氷の玉を作るくらいなら余裕をもって出来る、が、いつも使ってる氷柱を射出するような魔術を使用するためにはそれなりの魔力チャージ時間が必要になってしまう。

馬車の居室で試すわけには行かないから細かくは分からないけど、多分魔力チャージには3、4秒の時間が必要だ。

つまり、“撃ちたい！”って思ってから実際に撃てるようになるのは数秒後になる。

常に魔力を込めておけばすぐに撃てるが、そのためには常に杖を握っておく必要があるし、結局連射はできないので根本的な問題は解決できていない。

今後、他の冒険者と共闘することがあると思うが、戦い方はそれなりに考えておくほうが良さそうだ。

「さっきから氷を出したり消したり動かしたり。なにをしておるのだ？」

『魔力が杖に通らないからどうやって戦おうかな、と』

エルがなぜかアホを見るような目でこちらを見ている。何故？

『主と妾は周りの目を誤魔化すために杖を使っているだけだ。杖に魔力を通すのではなく、杖を魔力で包めばよいではないか』

自分の魔力で杖を包む。

目からウロコとはまさにこのこと。

同時に自分のアホさに頭を抱えたくなった。

そっぴや大気中に魔力通すのは簡単だよな。

何で気がつかなかったんだろ・・・。

それから馬車は何事もなく進み、日が落ちてはじめてきたので野営の準備となった。

必要なのは食事を作るためのかまどと寝るためのテントくらい。

バースさんは雇い主だし、そんなことはさせられない。

エルは傍目には華奢な少女なのでやっぱりそんなことはさせられない。

と、いうわけでかまどを作ったりメシを作ったりするのはミリアさんと僕の仕事。

エルは若干不満げだったが、僕も一応男なので女の子の前では見栄を張りたい。

そんなわけで二人には馬車の居室で休んでもらっている。

「え……それ、飲み水なんですか？」
「そうよ、ちよつと汚れているけどこの樽は魔術による加工がされているから長期間中身が腐ることはないわ。ちよつとコケとか生えたりもするけど」

馬車の荷台の一角を専有するのはちよつと汚れた樽、中は飲み水らしい。

しかし、コケの生えた水って飲料水として使用して大丈夫なんだろうか。

少なくとも僕は心配で、可能ならば飲みたくない。

「そんなに驚くことかしら。ユート君は普段どうやって飲み水や料理の水を確保していたの？」

「いつも魔術で水を精製しています。便利ですよね」

ミリアさんの表情が不思議そうなものから驚きに変わる。
アレ？ 僕なんかした？

「カーデイスが推薦するわけだ……」

「え？ 水を精製する魔術はもつとも基本的なものだったと記憶しているのですが」

「その歳で冒険者やつてるなら学校も行ってないだろうし知らないだろうけど……。たしかに水を集める魔術は初歩の初歩だけど、生み出す水は極わずか。そんなもので飲み水を作り出したりしたら、普通の魔術師は魔力が底をついてなにも出来なくなるわ」

「……………」

もうそろそろ外見が子供にしか見えないことはあきらめたほうがい

いかもしれない。

スーパーで免許証出さないと酒が買えないほどなので、子供に見えるのはしょうがない、あきらめるよ。

でも、しかしだ

“学校に行っていないほど”ってというのはひどくね？

「魔力量の件は置いておいて、ミリアさんは僕の年齢をいくつだと思っっているんですか？」

「14歳」

それは即答だった。

迷いの素振りすらなかった。

いっそ清々しい。

でも、分かったことがある。

“学校”というのは少なくとも14歳で卒業できるものではない。

ということはそれなりに高度な教育機関がこの世界にも存在している可能性が高く、古代遺跡について調べるときにひよっとしたら役立つかもしれない。

あとでちよっとエルに聞いてみようかな。

「僕の年齢は21歳です。もっとも証明するものはないのですが」

「ユート君・・・それ、仮に本当だとしてもたぶん信じる人はいないと思うわ・・・」

うわぁ・・・。絶対信じてないよこの人・・・。

でもこの世界免許証とか住民票とかないし、証明する手段がない気がする。

「僕も気にしてるんです……。ともかく水に関しては僕が精製しますから大丈夫です。というかやらせて下さい。コケの発生した樽の水なんていいですから」

「私も綺麗な水が手に入るならそのほうがいいわ。お願いしちゃってもいいかしら？」

「任せてください」

あれから1時間くらいが経過。

辺りはもうすっかり薄暗くなってしまつて、今のところ光源になるのは料理を作ったときに使つた焚き火だけ。

ちなみに食べているのは冒険者の定番、干し肉のスープと携帯糧食。

干し肉のスープはいい。

前に僕も作つたけど、そこそこ美味しい。

問題は携帯糧食。

いや、これホントうまくない。

と言つより不味い。

なんともいえないこのエグ味が後引く素晴らしさ。

だれも好き好んで食べたりなぞしない。

これを後11回も連食するというのがか。

・・・僕は仕事を間違えたかもしれない。

周りをみると皆も黙つて食べている。

ああっ！ 美味しくない食事は全てにおいて悪影響を与えてしまっているっ！

何とかしたいのだが、そもそも馬車の荷台に乗っているのは基本的に香辛料でそれ以外には薬しかない。

他の食料を手に入れるにはそこで動物を狩るかそういうことをしないとだめで、それでも得られるのは生肉だけ。

主食とも呼びたくないが、主におなかを満たす炭水化物系の食べ物が携帯糧食のみであることに変わりはなく、僕の感情だけで言うならば何の問題も解決できていない。

正直に言えば、馬車で移動すると聞いて食糧事情が改善した行動が可能だと思っていたのだが、思いつきり出鼻を挫かれた状態となっていました。

いや、僕とエルだけの場合はクラッカーとか食べてたことを考えるとむしろ悪化していると言ってもいい。

うーん、どうにかならないかなあ……。

蛍光灯もランタンもないこの世界の夜は早い。

キャンプは遊ぶものという僕の中の常識からすると食事後即睡眠とはなんとも気が早いのだが、考えてみてもやれることはない。

「さて、ユート君とエルシディアさんは馬車の居室へどうぞ」
「私が見張りをするわね。さすがに後でユート君と変わってもらおうつもりだけど」

食事を終えてバースさんとミリアさんがいきなり口を開く。

「え、いや、ちょっと待ってくださいよ。馬車の居室が一番寝心地がいいでしょう」

「子供を寝心地の悪いテントで眠らせ、大人がのうのうと寝心地の良い居室で寝るワケにはいかないだろう？」

「仮にも僕とエルは冒険者で、バースさんから依頼を受けた立場なのですが。ついでに言えば僕は21歳でエルは・・・まあ大体同じくらいです。ともかく子供ではありません」

バースさんが一瞬呆けたような顔をした後に笑い出す。

「21歳？ あははっ、君は本当に謙虚だね。ただ、嘘は良くないな」

「あー、うん、本当なんですけどね？」

「はいはい、とりあえず君たちには居室に戻ってもらおうかな。幸い私は旅暮らしが長く、テントなどでも十分に熟睡できるから大丈夫だ」

初めて仕事をしたときのオービスさんもそうだったけど、このバースさんも相当に人が良いっていうか良すぎるくらい。

『悪いことをしている気分になるな』

『うーん、ありがたくご好意と考えておこうか』

僕とエルはそのまま馬車の居室に戻り、毛布を敷いて寝床を作ってもぐりこむ。

が、今日はまともに運動していないのでまるで眠くない。

おかげで30分以上もボケツとしているが未だに寝付けない。

隣を見るとエルも同じなのか、なんとなく暇を感じさせる表情で僕を見ていた。

・・・エルに見つめられてちょっとドキツとしたのは秘密。

「エル、もし眠くないならちょっと聞いても良い？」

「大丈夫だ、今日は馬車の中で一日居たせいで疲労もないし、当然ながら眠気もない」

「今日ミリアさんが学校についてちよろつとだけ話してただけだ。今の僕のスキルでは古代遺跡の探索はかなり厳しいものがあるだろうし、それなら先にそういう教育／研究機関で調査でもしようかな、なんて思ったんだけどどうだろう」

「それは良い考えだと思う。現状ではなんの手がかりもない以上、取れるべき手は取ったほうが良い。それに書籍を調べれば似たような状況の者が居たかもしれぬからな」

「ちなみに学校ってどこにあるの？」

「ウイリスという都市で、王都から乗合馬車で7日くらいの場所にあるな」

「一個だけ？ 普通一國に複数個はあるものじゃないの？」

日本って大学とかいくつあったっけ？

少なくとも国立大学だけでも80個くらいあったと思うんだけど。

「主の国がどうなってるのかは知らぬが、この国では専門の教育機

関というのはウイリスに一個あるだけだ。・・・というよりウイリス自体が巨大な教育機関そのものといえるな」

「なんとまあ・・・町自体が教育機関ってちょっと僕には想像できないな」

「多分主からすると観光的な楽しみも出来ると思うぞ」

「それは楽しみだ。是非観k　「ユート君！　エルシディアさん！　敵よ！」」

敵襲を知らせるミリアさんの声が聞こえた。

ああ、寝なくて良かった・・・。

僕はバッグから、エルはどこからとも無く杖を取り出して居室から飛び出す。

外に出るとミリアさんは剣を抜いて辺りを油断無く確認している。

耳を済ませてみると辺りからまだ複数の狼の声と、知らない音が聞こえる。

どうやら敵は狼と何かの混成部隊らしい。

「早かったわね」

「眠ってなかったので（な）」

ミリアさんはにやりと笑う。

「冒険者は眠れるときに眠るのも仕事のうちよ」

「あまり体を動かしていなかったのだから」

「じゃあちょうど良い運動相手が現れたとみるべきね。相手はオークとガルトウルフの混成。ガルトウルフはともかくオークには気をつけなさい、あの馬鹿力で殴られたら怪我じゃすまないわ」

「分かりました」

狼に全力でかまれても怪我じゃすまないと思うが、今は戦闘中なので特に口を挟んだりはいしない。

それにしても暗い。

照明弾でも使っておくか。

「光よ」

ああっ！ 恥ずかしい！

出来れば無言で使いたいけど、無詠唱で魔術を使うのは不自然すぎるなあ。

ともかく呪文（笑）唱えてから3mくらい上に光球を展開。

辺りが明るくなり、何かと戦闘がしやすくなる。

杖に魔力を再展開。

辺りが明るくなったことで僕の正面の10mくらい先に6匹の狼、その右5mほどの位置に2匹のオークが居るのが見える。

オークは初めて見るが、暗いので緑色の筋肉お化けにしか見えない。あんなのに殴られた日には命がいくつあっても足りないだろう。

「はあああああっ！」

敵を見つけたミアアさんが気合の入った声と共にオークが居る辺りに突撃。

アスリート並みの速度で走れる僕がびっくりするくらいの速度。

信じられないが、この人がオリンピックに出場したら短距離走で優勝できると思う。

「ん なっ・・・」

さらに驚いたのは剣速。
なにせ目で追えない。

僕が何とか見えたのは白い閃光。

オークの首の辺りにその閃光が走り、ワントンポ遅れてから首がゴ
トリと落ちる。

・・・凄い。

「主！ ポケツとするでない！」

あ、しまった。

ミアさんがあんまりにも凄かったもので集中力が全部そっちに行
ってしまっていた。

前にもこんなことあった気がするし、もっと成長しないとなあ・・・

「氷よ」

恥ずかしいのでボソツと詠唱し、展開済みの魔力を使って氷柱を作
成。

自分にもっとも近い位置の狼の頭にそれを叩き込む。

さらに次に近い狼に狙いを定めるが、僕が撃つ前にエルの魔術で吹
っ飛ばされたので3番目の狼に対して氷柱を叩き込む。

残りは狼3、オーク1。

残存する狼のうち一匹が僕に飛び掛ってくるが、それを後ろにステップして避ける。

お返しにスタンロッドを抜　けないので、左足を軸にして全力で蹴りつける。

頭蓋骨を砕く感触と共に狼は地面に転がって動かなくなる。

次の敵に備えて辺りを見回す。

が、既に残りの敵はエルとミリアさんで迎撃されていた。

戦闘が終わり、辺りに静寂が戻る。

「ユート君、凄いわね」

「なにがですか？」

ミリアさんの言葉は略され過ぎていて意味が良く分からない。

「どうみてもEランクの冒険者には見えない戦いっぷりだったわ。そりゃカーデイスも推薦するわけね」

「ありがとうございます」

「これなら心配なく任せられそうね」

「基本的に経験が不足しているので荒事を任されると微妙に不安なのですが」

「ふふつ、大丈夫よ。・・・さあ、とりあえずユート君とエルシディアさんは寝ときなさい。見張りの続きは私がやっておくわ」

にやりと笑うミリアさんが妙に印象的だった。

移動二日目、もう外を見ても何の感情もわかない。飽きた。見渡す限りの大草原を見ているのは暇でほかにやるのが何も無いからに他ならない。

前にオーストラリアを旅行したときも似たような道が続いていたのを覚えている。

あの時はレンタカーを使い、時速160km/h近い速度で地平線の彼方までかつ飛んでいくという日本じゃあまり出来ないことを体験できたために飽きたりはしなかったのが今と違うところ。

やはり速度というかなんというか、自分で操作している感が重要なのだと意味も無く思った。

「暇だ」

「昨日もこのくらいの時間に同じような会話をした気がするぞ」
「・・・そうかもしない」

そろそろ脳みそが腐ってきそうだ。

何とかして暇を潰したい。

昨日はしりとりをやるうとして敗北してしまった。

山手線ゲームは・・・同じ理由でだめか、単語が違いすぎる。

あつ、そうだ、テーブルゲームだ。

特に材料、ルールを考えるとオセロが良いんじゃないか？

早速いつも日記を書いているノートを一ページ切り取る。

それを正方形に切り取った後に64分割する。

ボールペンを使って分割済みの紙の片面だけにバツテンを書き込む。ここまで10分も掛かってない

台に関しては無くてもなんとかかなりそうだし、必要ならノートにマスを書いたページを作れば良い。

・・・これはいけるぞ！

「なにをニヤニヤしておるのだ？」

「暇を潰せるかもしれない」

「楽しみにしてよいのか？」

「期待してくれ」

あとはエルにルールを教えれば準備は完了。これで相当遊べるはず。ここのところ娯楽の欠片も無い生活をしていたから楽しみでしようがない。

「うーむ・・・」

熟考するエルの顔には汗が浮かんでいるのがありありとわかる。

今、ボードの上のかなりの量の石（紙だけど）がエルのものとなっている。

ただ、端や角に関しては僕の石が置いてある状態。

オセロで怖いのはこの状態だ。

エルからすると石を置ける場所がほとんど無い。

しかし、僕はほとんどどこにでも置くことができる。

エルはかなり頭がいいようで、途中の段階で既に状況が如何にまづいかを理解していたようだ。

どこにおいても若干の石を反転させることが出来るが、その次のターンで僕がそれを取り返す。

「参った」

「さすがに初めてのエルに負けたら僕が泣く」

というわけで初戦は勝利したものの、エルは角と端の重要性に気づいており今後勝利し続けるためには相当に考えながら戦う必要があると考えられる。

というか一回しかやってないのに途中から僕の行動を邪魔するような設置をしたり応用力ありすぎでしょ。

「面白いゲームだ。主が考えたのか？」

「さすがにそれは無いって。これは僕のところで非常にメジャーなテーブルゲームだよ」

『主の世界には一度行ってみたいものだ、きっと楽しいのだろうな』
『是非案内するよ。こっちもいい所が一杯あるけど、あっちは娯楽が多くて楽しいよ』

『楽しみだぞ、絶対だからな？』

内容が内容だけに途中からは念話。

はたから見ると無言なのでとても奇妙な光景に見えるんだろうなあ。

「そろそろお昼よ、準備手伝ってくれないかしら」

ミリアさんの声と共に馬車のドア代わりになっている分厚い布が捲られる。

「あつ！」
「え？」

常識として、窓が一箇所だけ開いている場合は風があまり入っていない。

だが、それが二箇所になると空いている場所の間を風が抜けるようになる。

日本家屋などはそれを良く考えて作っていて、アホみたいに湿度の高い日本の夏をなんとか快適に過ごすという努力があちこちにあつて感心したのを覚えている。

馬車の居室から荷台の部分は閉めるものがないので常に解放状態なので、御者台と居室を仕切る分厚い布がなくなると非常に風が通りやすくなる。

その結果。オセロの石たちは紙ぶぶきとなって外へと飛び立ってしまった。

「ああ、紙で作ったのは失敗だったか……」

「まさか風で流されるとは……」

「私なにかしちやっただかしら……？」

落ち込む僕とエル、意味が分からず首を傾げるミリアさん。

「いや、大したことじゃないです。大丈夫です」

「あ、あまり大丈夫そうにみえないんだけど……」

「お昼の準備ですよ？ 水の準備は任せてください」

「え、ああ、うん」

こういうときは、勢いが重要だと思う。たぶん。

料理を作るために魔術で水を精製してなべに注ぐ。

エルには魔術で焚き火（というよりはガスコンロのほうが近い）を出力してお湯を作ってもらってもいい。

無意味に目立つ必要は無いが、枯れ木を集めるような無駄な行動は勘弁。

「それにしてもあなたたち二人は一体どれだけの魔力を持っているのかしら・・・」

「私も同感だ、こんな風に魔術を使う冒険者は商人を10年もやっているが初めて見た」

杖なしによる魔術は暗殺やテロなどで物騒な方面で非常に有用なため何とか隠し通す必要があると思うけど、ほかのことに関してはほとんど問題ない。

むしろちょうどいい目くらましになるんじゃないかと思う。

「僕たちとしては二人で旅をする上での必須技能なのですが」

「むしろ二人で旅をするからこそ戦闘のために魔力を温存するものだと思うんだがね」

僕の発言に納得しかねるような表情のバースさんはそういうが、魔力がほぼ無限にあるといっても過言ではない僕やエルからするとその感覚はよく分からない。

仮に魔力による水の精製がなくなった場合、川があれば携帯用浄水器で対応できるが、それすらない場合は戦闘以前にどうしようもなくなってしまうのではないか。

「そうは言っても重い荷物をもって歩き回りたくはないですし、幸い僕もエルも魔力だけは十分にあるので大丈夫ですよ。敵が来たのに魔力切れで何にも出来ません、なんてことはないです」

「ユート君がそういうなら大丈夫なんだろうが、無理だけはしないようにしてくれよ」

“戦闘面で役に立たなくなったらめるぞ”的な感じは全く無く、単純に心配されているのでなんともくすぐったい。

見た目の都合もあって心配されやすいっていうのはあるんだろうけど、それでもこの人の心配性は結構なレベルだと思う。

「主よ、お湯が沸いたぞ」

「ん、ありがとう」

なべに干し肉とスープのもとを適当に投入して完成。

元の世界で良く作ったトマト缶とコンビーフのコンソメスープは凄く美味しいのに、今日作ったそれモドキはなんともうまみが不足していて満足感に欠ける。

魔術でフリーズドライとか作れないかな・・・。

手順としては僕が全力で凍らせる。次にエルが真空を作って乾燥させる。

うーん、敵しそうな気がするが一度試してみても良いかもしれない。

夜の見張りをしていると少し離れた森の中から爆発音が聞こえた。僕の世界ではほとんど映画の中でしか聞く事の無かった音だが、こちらの世界では結構頻繁に聞く。

ため息と共に時計を見ると時刻は20時。

この世界はなんて治安が悪いんだろう。これで二夜連続だぞ・・・。
本日の見張り担当は僕とエル。

最初、エルが見張りを担当することについてバースさんは渋った。華奢な見た目の女の子に見張りをさせるといふのはなかなか男として来るものがあるんだと思う。

最終的にエルが押し切るが、僕と一緒にという付帯条件がつくことに。そんなわけで普通一人で行う見張りを二人でやることになったのだが、それが大正解になるとは思ってもいなかった。

音がしたのは巨大な森の中のため、音が聞こえたからといって具体的な位置は分からない。

「ミリアさん、危険があるか分からないのでちょっと確認してきます」

「昨日の戦いを見る限り大丈夫だと思うけど気をつけてね」

「一応馬車の準備だけをお願いします」

「わかったわ」

戦わずに逃げられるならそれに越したことは無い。

特に今回は敵か味方に魔術師が混じっている可能性が極めて高い。荷台にキズをつけたいとは欠片も思わないので安全に逃げることに

出来るならそうするつもり。

なんとなく音の方向に向かって走るとチラチラと明かりが見える。
おそらく戦闘用魔術によるもの。

「それにしても僕らが馬車で使ってる街道があるのになんで森の中を移動してるんだろう」

「それはわからぬが、油断だけはしないほうが良さそうぞ」

ぶつちやけ疑問でならない。

直線距離で300mも進めば比較的安全な街道だというのに、わざわざ森の中を歩いて襲われるなど僕からすれば理解不能。
なにか口くでもない目的があるとしたか思えない。

ステルスで明かりのほうに近づくと二人組みが背中合わせになって多数のなにかと戦っている。

暗いために状況はよく分からないが、若干押されているようだ。

『ゴブリンだな。一匹ずつの戦闘力は低いものの、低ランクの冒険者などから奪った剣などで武装して数で押してくるのが特徴だ』

『とりあえず助けようか』

『うむ』

久しぶりに杖を使わずに魔術を使う。

右手に魔力を集めるとなんともいえない高揚感。

『エル、僕の護衛をお願い』

『主には指一本触れさせぬから安心して撃つとよいぞ』

なんとも頼もしいエルの言葉を聞きながらいつぞやと同じように狙撃を行う準備を整える。

体育座りになってからひざでひじを固定。準備完了。

数が多いので速射を行う。

気の抜けたような特徴的な発射音が連続して鳴るたびにゴブリンの頭が吹き飛んでいく。

『さすが主だ、ゴブリン共はどこから撃たれているのかも分かっていないぞ』

『ありがとう』

命を奪って褒められることに何も感じないわけではないけど、僕個人としては人の命とゴブリンの命では前者に天秤が傾く。

結局十数匹のゴブリンの頭を吹き飛ばして戦闘は終了した。

二人組みは正体不明の援護に随分と驚いているようだが、これ以上この場に居てもしょうがない。

“危険な場所に入っちゃいけません”なんて説教できる立場でもないし、別に感謝がほしかったわけじゃない。僕らの安全が確保できたのならそれで満足。

むしろ変に顔が売れるほうが面倒なことになりそうだ。

僕たちはそのままコソコソと馬車に戻る。

出来れば明日こそは安全な日であってくれ、と思いつつながら。

移動五日目。

先日の僕の願いが通じたのかは果たして不明だが、ゴブリン襲撃以降は特にトラブルもなく順調に進み、無事に王都（オルキスという立派な名前があるのだが、もっぱら王都と呼ばれているらしい）まで到着した。溢れるほどの時間の処理はどうにもならなかったが、終わってみればいい思い出といえるのかもしれない。

しかし、帰りってどうなるんだろう。乗合馬車とかになるのかな。今はバスさんにかなり快適な居室を提供してもらっているが、それすらない状態でこの道を帰るのか。

乗合馬車が今よりも快適な居室を提供してくれるとはとても思えない。

前に海外旅行で経験した乗合馬車はかなり狭かった。

エコノミー症候群も考慮しなければならぬほどの狭い空間でやることも無く、五日間。

じよ、冗談じゃ……。

「どうしたのだ？ 顔が青いぞ？」

「大丈夫、ちょっと下らない妄想をしただけだから」

「ならよいのだが、無理は禁物だぞ？」

微妙に心配した様子のエルに笑って返す。

まさか帰りの乗合馬車を心配していたなんて恥ずかしくて言えない。

「いやー、さしたる問題もなく無事に着いてよかったよ」

「危険な野生生物に襲撃されてますし、ゴブリンの集団ともニアミスしてるのですが」

馬車を止めたバースさんが御者台から居室に顔だけ出して僕に話しかけてきた。

バースさんは笑顔だが、僕からしてみればさしたる問題がなかったなどとはとても思えない。

きつと外から見た僕の顔には縦線が三本くらい入ってると思う。

「それくらいは旅における重要なスパイスだと思っな」

「妾もそう思うぞ」

「そ、そうですか・・・」

そうですか、うん、何も言えないや。

僕にできるのは商人とエルは肝が太いっていうことを頭に刻むくらいだよ。

だけど危険な目にあってもそれを気にせず、むしろ楽しめるっていう性格はちよつと羨ましい。

楽しめる、までいかなくてもいいから気にしないというレベルには到達したいなあ。

「それにしても今回はありがとう、君らのおかげで無事に到着できたよ。依頼達成証明書にサインをしたいから渡してもらっても良いかな」

「あ、ちよつとまっってくださいね・・・、えーつと・・・」

するりと居室に入ってくるバースさんに依頼達成証明書を渡すと、慣れた手つきでサインをしてから僕に返してくれた。

「次の機会があれば是非また君たちに頼みたいな」

「そう言っていただけだと嬉しく思います」

「もうちょっとフランクになってもらえればより嬉しいんだけどね」

「それは、ちよつと難しいですね。申し訳ありません」

「いや、うん。礼儀正しいって言うのも美点だと思うな」

バースさんは苦笑した様子で僕を見るが、目上の人にフランクって難しいんだよなあ。

コレばかりは性格だからしょうがないと思う。

「それにしても証明書にサインということはこれで依頼は完了という認識で問題ないですか？」

「そうだね。でも、ミアはなにか用があるらしくてユート君を待つてみたいだよ」

ミアさんが僕に用事、ねえ。

一体何だろう、特に思いつくことは無いんだけど。

バースさんに挨拶をしてから馬車を降りるとミアさんがすぐ側で僕を待つていた。

「お、来たわね」

「お待たせしました。なにか用事があると聞いたのですが」

「大したことじゃないんだけど、とりあえずギルドまで来てもらってもいい？」

「いいですよ。むしろギルドの場所が分からないので助かります」

王都ということでも都市観光なんかを期待してただけで、残念ながらその期待を満たすことはできそうにない。正直な感想を言ってみれば町並みに関してはガルトと何も変わらない。

ただ、風景自体は中央にそびえる巨大で綺麗な城のおかげで期待できるもので、後で高台でも見つけてからジャンクフードをパクつきつつ楽しみたい。

そんなどうでもいいことを考えながらギルドに入るとそこには予想を超える不思議な光景が広がっていた。

清潔感のある広い空間に整然並んだイスと机、大き目のU字型カウンターには複数のオペレーター。

掲示板もしっかりと管理が行き届いていて、依頼の紙が無造作に張られていて読みにくかったガルトとはレベルが違う。

飲食店が併設されていないので、酒を飲んで騒ぐような不届き者も居ない。

全体的に掃除が行き届いていて、ガルトのギルドに慣れた僕としては随分と違和感がある。

僕の世界の銀行、いや、市役所が雰囲気としては近いかと思う。

「随分驚いてるわね」

「ガルトのギルドと違いすぎてちょっと驚きました」

「大体のギルドって言うのはガルトみたいな感じなんだけど、大都市のギルドはそれだといろいろトラブルとかが増えるの。だから必然的にこういう雰囲気の場合になるわ」

たしかに依頼の紙が無造作に張られていたら管理するのが大変でし

ようがないだろうし、人数が多いからオペレーターが居ないとギルドの作業が回らないんだろう。言われてみればなるほどと納得できる話だ。

ミリアさんは人の多い掲示板付近から最も離れたテーブルに着くと、キョロキョロと辺りを見回す僕にイスを勧める。

「そんなキョロキョロしないで座りましょう、それじゃ話もできないわ」

「すいません、こんな風に清潔感のあるギルドだとなんだか落ち着かなくて」

「それ、カーデイスが聞いたら泣くんじゃないかしら・・・」

僕がファンタジー小説とかを読んで想像していたギルドっていうのはガルトのギルドみたいなのがごちゃごちゃごみごみしたちよつと荒々しい雰囲気のところだったわけで。

それがこんな風な雰囲気だと、今から銀行か市役所でなにか手続きをするような気になってしまっても落ち着かない。

「それはできれば心にしまってもらえればと思います・・・それにしても、僕たちに用事って言うのは一体なんでしょうか？」

ミリアさんの表情が真剣なものに変わる。

「うーん、正直に言ってしまおうとね。あなた達何者？」

「妾たち？ ただの冒険者だぞ」

「そうですね、ただの冒険者ですが」

「ただの冒険者なワケないでしょう、莫大な魔力量に戦闘でも慣れた様子なのにエランク？ なのに使う杖はどう見ても新品のエントリーモデル。少なくともあなた達みたいな魔術慣れした魔術師が最

近になってから買うような杖じゃないわ。私から見れば違和感の塊なのよ、あなた達」

「.....」

あー、うん、どうしようか。

どうやって誤魔化そうか。

まさか見ただけで杖の種類が分かるとは思わなかった。

僕から見れば店においてあった杖なんてどれも同じような木の棒か金属の棒に見えたんだけどな。

『主、どうする？』

『ちよつとまって、何とか誤魔化すから』

『あまり誤魔化す意味も無いのではないか？』

『異世界の話なんてしても“こいつ頭大丈夫じゃないな”で終わっちゃうし、なし崩しのミリタリーバランスを吹き飛ばすような存在であることがばれるかもしれないのでマズイ』

嘘って言うのは全部嘘だとばれやすいから一部に事実を混ぜるべき、と聞いたことがある。

.....よし、こつこつしよう。

「えーつとですね、ちよつと驚かないで聞いて欲しいんですけど」

「ちよつとやさつとじゃ驚かないから安心していいと思うわ」

うわー、めっちゃ探りをいれるような目だよ。

「僕はですね、記憶が無いんですよ。一番古い記憶は30日くらい前のものです」

「は？」

ミリアさん、舌の根の乾かぬうち驚いてるじゃないですか。

「朝、いや、昼だったかも……。ともかく目が覚めると僕はウイスタ大森林に居ました。その後エルと出会ってから日々の生活の糧を得るためにギルドで仕事しています。幸い記憶を失う前の僕は魔術師だったらしく、荒事にもそこそこ対応できるみたいですけどね。もっとも、お金が無かったので買った杖はこんなんですけど」

「いろいろ驚くことが多いのだけど」

「さつき驚かないって言ったじゃないですか」

「限度があるわ。よくウイスタ大森林から生きて帰ってこれたわね。あそこは凶暴な生き物こそ居ないものの無駄に広くて野垂れ死にする奴が多いのよ」

「その辺はエルも居ましたし、何とかなりました」

「……一体どこでエルシディアさんと出会ったのかしら？ 話から推測するとウイスタ大森林で出会ったみたいに関こえるのだけど」

「え？ あーっとですね……」

話の展開失敗したかも、と思ったら

「主と妾が出会ったのはウイスタ大森林で間違いないぞ。そこで主と契約したのだ」

エルの爆弾発言でミリアさんの動きが止まる。

「契約って……あなたまさか」

「うむ、ミリア殿の予想通り妾は精霊だ」

「信じられない……人型を保つくらいの高位精霊が人と契約？」

「それほど驚くことでもないと思うのだが、サイレル・ウィングストンやカイン・アルドニスも契約しておったぞ」

「前者は400年前の世界大戦での英雄、後者は御伽噺の主人公じゃないの……」

ミリアさんはもはや驚くのにも疲れたような表情で僕とエルを見ている。

「はぁ……それにしてもなんでエルシディアさんは杖なんて使ってるの？ 精霊に杖なんて不要でしょ？」

「主はあまり目立つことを好まないのにな、理由としてはそれだけだ」

「できれば僕たちのことは伏せておいて貰えればと思います、エルは凄いですけど残念ながら僕は一般人のため、昔の英雄とかそういう凄い人と比べられると困ってしまいます」

「わかったわ。っていうよりこんなの話したところで信じてもらえないわよ」

良かった。何とかこの場は収まったぞ。

若干クリティカルなところがばれてしまったような気もするけど、まあ許容範囲でしょ。

ちよつと露骨かもしれないけど話を変えてしまおう。

「そういえば武技大会が開催されるんですね。ちよつと楽しみですよ。ミリアさんも観戦したりしますか？」

「ええ、折角このタイミングで王都に来たわけだしもちろんよ。応援してるわよ」

え？ ちよつとまで、今、なんか不穏なセリフが聞こえたぞ。なぜ、僕が応援されるんだ？

「ちよ、ちよつと待ってください。僕の聞き間違いじゃなければ今

「ミリアさんは僕を応援する、と言いましたよね？　なんでですか？」
「何を驚いているの、ユート君は今回の武技大会に参加するんですよ？　カーデイスから聞いてないの？」

「僕がカーデイスさんから聞いたのは武技大会が開催されるから楽しんで来いってことだけです。大体参加なんて一体いつ決まったんですか？」

「王都に出発する前よ。カーデイスの奴、早馬出してたからこっちに参加表明が届いたのは2、3日前じゃないかしらね」

「参加拒否とかって出来ないんですか？」

「ギルドマスターの推薦だと本戦からのスタートだし、かなり難しいわね」

「そうですか・・・」

ああ、あの出発前にやりとした笑いの正体はコレだったのか。

カーデイスさんは格闘技が好きとかそう言うのじゃなくて、単純に僕が慌てふためくだろうその姿を予想して笑っていたんだな・・・。大会というくらいだし、命の危険はないだろうからいいっちゃいいけどさ。

しかし、拒否は出来ない以上、武技大会参加は確定か。

一回戦敗退になるだろう人物を推薦してはカーデイスさんに被害が行くんじやないかと思ってしまうんだけど、果たして大丈夫なんだろうか。

っていうより戦士でもなんでもない魔術師が“武技”大会に参加ってどうなんだろ。

「ま、予選も通らずに武技大会に出れるなんて結構荣誉なことなんだから頑張りなさい」

「主なら大丈夫だ、妾は楽しみだぞ」

二人はニコリと笑って僕を応援してくれているが、外から見た僕の肩はがっくりと下がっているに違いない。

・・・はあ、エルの期待が痛いなあ。

（僕の勝手な予想では）有象無象が集まる予選ならともかく、本戦じゃどうせ一回戦で負けちゃうだろうし、期待してくれているエルになんて言い訳しよう。

相手を殺してもいいならスタートと同時に射撃でもすればいいと思うけど、大会である以上殺しは禁止だろうし、一体どうやって勝てばいいのか想像もつかない。

まさか生粋の戦士相手に低出力のスタンロッド一本と魔力障壁で挑めどもいっただろうか。

ホント、どうしよう・・・。

あの後、ミリアさんはがっくりと頂垂れる僕の肩を叩いてから去っていった。

多分、しばらく休んだ後に再び何か依頼を受けるのだろう。

“応援してる”なんて言われたので大会の日にはまた会えるかもしれない。

とりあえず僕も再起動。

当面知らなくちゃいけないことは武技大会のこと。

ルールも知らない、日時も知らない、場所も知らないじゃ話にならない。

さすがにもう始まってるとして事は無いと思うけど、早いところ聞いておかないと。

「エルは武技大会についてなにか知ってる？」

「んー、毎年国がやる大会というくらいだな。詳しくはギルドの受付嬢に聞くと良いのではないか？」

エルの話になるほどとうなずいてからオペレーターの人に話を聞きに行く。

そもそもまず、本当に僕が武技大会の本戦に参加することになっているのかも確認しないといけないだろ。ひよっとしたら大会参加者じゃないかもしれないし。

「こんにちはは、すみません。ちょっと伺いたいことがあるのですが」「こんにちはは、かわいい冒険者さん」

ギルドのオペレーターさんがにつこり笑って対応してくれるが、完全に子供扱い。

先ほどの件でがっくりと落ちた肩が元に戻らなくなるんじゃないかと思うくらいズーンと沈む。

が、ここで落ち込んでいてもしょうがない！

「武技大会についてなのですが、本戦出場者にユート・カンザキという人が居ないことを確認したいのですが」

この後ろ向き発言から僕がどれだけ出場したくないかが分かってもらえると思う。

「本戦出場者のリストを見たのかしら？ ユート選手のランクは他に比べて一際低いし、ほかの冒険者さん達からすれば信じられないでしょうけど本戦出場は本当のことよ。びっくりするかもしれないけどガルトのギルドマスターからの推薦状があるの」

そうですね、現実はそのままで甘くないよね。

「実はですね、僕がそのユートなんです。お手数ですが本戦の詳細について伺っても良いですか？」

「えっ、その・・・え？」

「あ、これギルドカードです」

名前が刻まれたギルドカードを渡すとオペレーターさんはたっぷり10秒以上は見つめた後、何故か真っ青になって僕を見る。

「もっ・・・申し訳ありませんっ！」

「いえ、いいです。分不相応なのは自分でも重々承知ですし・・・」

結局この人から十分な回答を得るまでにはかなりの時間が掛かってしまったことを報告しておきたい。

「しかしさあ、このルールむちゃくちゃじゃない？」

「そうなのか？ 別に普通だと思っただが」

「殺さなければなんでも有りってなんなのさ、けが人続出じゃない？」

「治療術師が側に居れば問題なかつた」

「そ……そうなのかな……」

結局のところ、オペレーターさんのしどろもどろな回答をつき合せると大会について以下のようなことが判明した。

- 1 ・本戦は明日開催、ギルドから歩いて20分くらいのところに闘技場があるとのこと。
- 2 ・組み合わせの都合、僕の初試合は明後日の午前中。
- 3 ・参加者は32名で優勝者には金貨100枚という莫大な賞金が渡される。
- 4 ・相手を死に至らしめるような魔術は禁止、武器に関しては刃を潰す。
- 5 ・殺さなければ何をしても良い。敗北条件はリングアウトまたは戦闘不能。
- 6 ・本戦出場者および関係者はほかの試合を無料で観戦できる。

「優勝賞金が金貨100枚とかもそうだけどさ、この武技大会つめちやくちや大規模だよね」

「国家規模の大会だからそれくらいにもなる。参加者だって予選を含めれば相当な数のはずだぞ」

うわ、予選とかは聞いてなかったけどそんな規模が大きいものだったのか。

「僕はそんな大会に参加することになってしまったことがおっかなくてしょうがないんだけど」

「参加することになってしまった以上仕方あるまい。それに、主なら勝てるのではないか？」

「うーん・・・前にミリアさんが戦つてるとこ見たけどさ、剣が目で追えなかつたんだ。もし本戦であんなのと打ち合った日にや一方的にポッコボコだよ」

「魔力障壁で満遍なく防御してしまえば良いではないか」
「それ、どうやって相手に攻撃するのさ」

ぐぬぬ・・・って感じのエルの表情はちょっとかわいいと思う。

「まあ、そんなどうでもいいことは置いておいて」

「戦いに勝つ方法を考えるのがどうでも良いことなのか？」

「うん、考えても意味ないし。それよりちょっと試したいことがあるから面白い物に行こうか」

「何を試すのだ？」

「食糧事情の改善を計画中。コレがうまくいけば移動中の食事がかなり華やかになる」

「そつ・・・それは素晴らしいぞ！ 今すぐ向かおう！ さあ、何をすればいいのだった？」

おーおー、食い付きがいいなあ。
さて、それではフリーズドライ計画のスタートと行きますか。

王都の町並みの雰囲気ガルトに良く似ていることから予想はしていたが、市場の雰囲気もガルトと変わらない。
きっと王都の市場 ガルトの市場と瞬間移動しても気づく奴はほとんど居ないだろう。

そんな王都の市場で各種青果および肉類を購入してから意気揚々と北門へと向かう。

エルは食糧事情の改善が楽しみでしょうがないのかさっきからずっと笑顔になっている。

「何時も外で作るのは干し肉のスープばかりだったが、料理もできるのだな」

「一人暮らしの大学生ならほとんどが料理くらいできるよ」

「そういうものなのか？」

「そういうものだよ」

北門を警備する衛兵に「お疲れ様です」と挨拶してから外へ出る。
ガルトでもそうだったけど、この世界の門番（検問？）はザル過ぎるでしょう。

こんなんでテロとかちゃんと防げるのかな。

そんな下らないことを考えながら少し歩いてから料理の準備を始める。

グリル台を組み立てて携帯用フライパンを用意してその隣に魔術で分厚い氷の板（まな板）を作っておく。

これで準備は完了。後は作るだけ。

まずは豚肉を携帯用のクツカーに突っ込んでから指先に魔力を集中。コンパクトな氷の刃を5枚作成し、それを高速回転させる。クツカーに穴を開けないように注意しながら豚肉をかき混ぜるとあっという間にひき肉になる。

次に、緑色のナスのような野菜を乱切りにしてからやたらに真っ赤なニンジンのような野菜を短冊切りにしておく。

材料はまさしく麻婆茄子のだが、香辛料や調味料は胡椒と塩しかないので似たものにしかないのが残念でしようがない。

フライパンでひき肉を炒めるとあたりにお腹の減る香りが広がる。エルが早く食べさせろという目で僕を見ているが、つまみ食いは拒否しておく。

ひき肉に火が通ったあと、野菜も同じように炒めてから味付けして完成。

魔術によるコンロは家庭用コンロよりもはるかに高出力なため、野菜を入れても温度が落ちないので非常に便利だと思う。

最後にデザート用の果物を切る。

桃っぱいなにかと紫のオレンジ（今、言ってて激しく違和感があった）を食べやすいように切ってからまな板の上に並べておく。

後で野菜をフリーズドライするつもりだけど、まずは食事を取りたい。

なんせ今日はまだ何も食べてないしね。

エルにスプーンを渡すと、とてもニコニコとした表情でそれを受け

取る。

「じゃあ食べよっか」

「うむ、楽しみだぞ」

といっても一品しかないのちょっと悲しい。

こう、料理って言うのは複数あってそれぞれがお互いを引き立てるようなものだと思うんだ。

自作の麻婆茄子モドキを一口。

・・・うーん、決して不味くは無いんだけど、やっぱり麻婆茄子からはかけ離れた味だなあ。

「とても美味しいぞ。主は料理もできるのだな」

「そう言ってくれると作った甲斐があるよ」

まあ、エルが喜んでくれるからいいか。

そのうちソースになるものとかも見つけてもっとレパートリーを増やしておきたいな。

「さて、お腹も膨れたところで実験といこうか」

氷のまな板の上に置かれた果物をつまみつつ、野菜を薄めにスライスしていく。

「妾にできることなら何でも言ってくれ」

「野菜をスライスしてからはお願いすることがあるからちょっと待ってね」

まな板をもう一枚精製し、スライスした野菜を綺麗に並べる。

意識を集中。魔力を上手いこと制御してまな板の野菜を包むように氷の箱を作成。

次に箱の中を全力で冷却。

一瞬で凍りついた野菜を見るに相当低温の環境を作ることができたはずだ。

「エル、ちょっとこの箱の中の空気を完全に抜いてもらっていい？」
「わかった、ちょっと箱に穴を開けるぞ」

どうやったのか今ひとつ分からないが、エルが腕を振ると箱に1cm程度の穴が開いてそこから急速に空気が漏れる。

真空になるにつれて氷が直接気体へと昇華していつてしまうので、氷の箱を魔力で強化しておく。

野菜を見るとフリーズドライに変化し・・・ない。

あれ？ おかしいな。

真空の環境下ではすぐに水は沸騰するし、あっという間に氷が昇華するんじゃないかと思ってたんだけど、どうやらそうでもないらしい。

よく見ると凍った野菜が非常にゆっくりと変化していくのがわかるが、これ、一体どれだけの時間が必要なんだろう。

「これを毎回やるのは大変だぞ・・・」
「僕もそう思う・・・」

結局フリーズドライにするまでには2時間近い時間が掛かってしまった。

普通の魔術師ならとくに魔力切れでダウンしているに違いない。いくら莫大な魔力を持つ僕たちだとはいえ、これはさすがに疲れる。

「でも、完成してよかった」

「これは結局なんなの？ 妾には萎れた野菜にしか見えぬが」

「フリーズドライっていうんだけど、お湯を注ぐと元に戻るんだよ。水を含まないから腐らずに長期保存ができるし、何より軽いからいくらでも持ち運べる」

「本当に戻るのか？」

「ちよつともつたいないけど少し戻してみようか」

クツカーに水を注いでコンロでお湯にする。

その中にフリーズドライのニンジンをぱらぱらと入れてから待つこと数分。

カラカラのニンジンが瑞々しいニンジンに戻る。

かじってみると若干食感に変化があるものの、しっかりと食感は残っている。

うん、ニンジンだ。

「ほら、凄いでしょ？」

「信じられん。カラカラになっていた野菜が完全に元に戻っているではないかっ！」

エルの驚く表情を見るとイタズラに成功したような気分になってちよつと嬉しい。

でも、スライスした野菜でこれほどの時間が掛かるとすると出来上がった料理をフリーズドライするには一体どれだけの時間が必要な

のだろうか。

少なくとも現実的ではない時間が掛かるのはほぼ間違いない。
できれば店で売ってるスープとかまとめ買いしてフリーズドライし
ておきたかったんだけどね。

それでもこうやって野菜がフリーズドライできる以上、前みたいな
灰色の食生活は終わったと考えるのも良いだろう。

・・・もちろん作るのには相当の気合が必要になるが。

王都までの移動における食生活があまりにも灰色だったからか、フリーズドライにすっかり夢中で今後の生活を行う上で重要な点を二つほど忘れていた。

まず一点目、宿の確保。

今までは馬車の居室で寝ていたから問題ないが、今日からはどこかに泊まる必要がある。

現在は武技大会ということもあり混雑極まりない状況である可能性が高いので、早い段階で宿を見つけないと野宿という悲惨な目にあってしまう。

次に二点目、生活費を稼ぐ。

現在財布には銀貨が22枚と銅貨が数十枚ある。

これは日本円に直すと20万円以上の大金になるが、宿に泊まる生活を続ける以上お金の減るペースは元の世界に居たときよりもずっと早い。

最悪一人部屋を取ってエルには同化してもらおうという方法で銀貨一枚でおつりが来る生活も可能だが、ちょっと罪悪感があるので可能なら二人部屋を借りて生活したい。

そのためには十分な生活費を稼ぐ必要がある。

あ、そういえばバスさんの護衛の件の依頼料を貰ってなかった。確か銀貨14枚だったはずだから、これで全財産は銀貨36枚になるのか。

これなら最悪ちょうど良い仕事が無くともしばらくは大丈夫かな。もちろんお金はあって困るものじゃないし、ギルドで掲示板の確認はしておく必要があるけどさ。

そんなわけで僕たちはギルドに戻ってきている。
依頼も見ておきたいし、宿の位置は分からないのでオペレーターさ
ん辺りに確認しておきたい。

「それにしてもこれは・・・」

「主よ、お金は大丈夫なのか？」

「と、とりあえず銀貨で36枚あるから当面は大丈夫だと思う」

王都の付近というのは南側に川が一本流れているくらいであとは完
全な草原となっている。

そのため工業生産品の材料となる野生生物も居ない。

安全である以上採取の依頼はほとんどなく、またあつたとしても単
価が非常に安い。

だからまともな賃金が出る依頼のほとんどが遠出のものになってし
まっているのだ。

一応街中作業もあるが、単位時間当たりの報酬を考えるとやりたく
ない。

「最短でもいってこいで二日掛かるね」

「依頼を受けるのは不可能だぞ、主は武技大会に参加せねばならぬ
のだからな」

ちよつと想定外だったけど、銀貨が36枚もあれば十分生活できる
でしょ。

なら宿の位置でも聞いておこうかな。

王都のギルドはガルトのと違い、こつこつおやつどきの時間でも冒
険者の数が多い。

それでもオペレーターの数十分に多いため、ほとんど並ばずに対応してもらえるのが凄いなと思う。

「すいません、今日王都に着いたばかりなので宿を取りたいのですが、宿屋街の場所を教えてくださいてもよろしいでしょうか？」

「今からですか……。今は武技大会もあるのでなかなか大変かと思いますが……」

哀れむようなオペレーターさんの顔を見て、宿が取れずに野宿というとても悲惨で暗い未来が脳裏に浮かぶ。

思わず隣に居るエルの顔を見ると、エルも僕を見ようとしていたらしく目が合う。

そして同時にオペレーターさんの顔を見る。

……こっちみんなのAAって現実だとちょうどこんな感じなんだろうなあ。

「あつ、その、幸い当ギルドは宿を保有しており、二人部屋も空いておりますが」

「武技大会の期間だけ借りたいのですが」

「あの、よろしいのでしょうか？」

即答した僕に対してオペレーターさんは怪訝そうな表情を浮かべる。何故にそんな表情？ どんな場所でも屋根があるだけ幾分マシだろうに。

「ひょつとして凄く高いとかですか？ その場合すいません、あきらめてほかを探します」

「そうではないのですが、武技大会前なので普段物置だった部屋を戻したんです。だからちよつと汚れていまして……」

「大丈夫ですよ、自分で掃除しますので。結局いくらになります?」
「武技大会の期間ですと6日間ですね。銀貨3枚になります」

え? なんかもちやくちや安くない?

一人単価で考えると一泊2500円程度ってことになるんだけど。
安い分には構わないのでそのままお金を払って鍵を貰う。

「汚い部屋で申し訳ないのですが・・・」

「いえいえ、大丈夫ですから」

いやー、ラッキーだった。

二人部屋を一人部屋とほぼ同額で取れるなんてなんてツイてるんだろう。

「運が良かったな」

「そうだね」

ギルドを出て正面にある三階建ての建物がどうやら宿らしい。
民宿のような雰囲気だが、王都の雰囲気とマッチしているし、外観の美しさはなかなかのもの。

こんな宿に泊まれるのに一日半銀貨一枚でいいとは、かなり嬉しい。

「あれ?」

「どうしたのだ?」

「んにゃ、なんでもない」

中に入って驚いた。

外観はあんな風だったのに、中は僕の世界の一般的なアパートのよ

うな感じ。

両脇には部屋が複数、たぶん左右に10以上。

中央には階段がある、おそらく2、3階も同じような構造だろう。

少なくとも今までの建物のような雰囲気の内内ではない。

「そついえば部屋はどこを取ったのだ？」

「ちよつとまつて、えーと、301号室か」

「階段が面倒だぞ」

「安いからしょうがない。それにしてもなんでこんな上の階を倉庫にしてたんだらう」

やはり3階も1階と同じような構造だった。

この世界の技術レベルを考えると柱とかの並びがやたらに綺麗な気がする。

・・・まあ、どうでもいいか。気にしても意味ないし。

階段上がつて右の部屋が312号室、左の部屋が311号室。

301号室は左奥か、余っていた部屋だけあつて交通面では微妙だ、正直ちよつとメンドクサイ。

だけでもこの宿に入る瞬間つて結構好きだな、わくわくする。

「なんかこういつ初めての部屋つてわくわくするよね」

「楽しみだぞ、早くあけるのだ」

「ちよつとまつてね・・・」

楽しげな様子のエルを視界の端に捉えつつ、鍵を外してドアを開ける。

「これは・・・」

「これは、なんとかしたほうがよいのではないか？」

もともと物置だったという301号室は想像を絶するほどに汚れていた。

埃は積み重なって地層となり、汚れていない部分がどこにも無い物を置く上で邪魔だったのか、廊下と部屋を分けていたはずのドアは無理やり剥ぎ取られて廊下に立てかけられている。

手前には水浴び用の部屋が用意されているが、ひどく汚れていて無残な状態だ。

・・・このままでは入る気にならない。

ちょっとゲンナリしつつも奥に入るとそこには申し訳程度にベッドが2つだけ置かれている。

ベッドは綺麗なので、たぶん物を全部外に出した後新しく置いたのだろう。

っていうかベッド置く前に掃除くらいしようよ。

あっという間に埃だらけになっちゃうじゃないか・・・。

「とりあえず窓開けて埃を全部捨てようか。エル、風の魔術をお願いしてもいい？」

「任せてくれ、こんな部屋は一秒でも早く綺麗にしたい」

そういうとエルは風を操作してこの部屋の積み重なった埃を根こそぎ取り去って窓の外へ吹き飛ばしていく。

吸引力が変わらない唯一の掃除機よろしく埃を分解しているらしく、

ワサつと溜まった埃が他人の頭上に落ちるといふ惨劇は防げそうだ。

「しばらく換気し続けてもらってもいい？ 僕が魔術を使って部屋の汚れを取ると室内が蒸し暑くなっちゃうんだ」

「それは構わぬが、一体どうやって汚れを取るつもりなのだ？」

「まあちよつと見てくれ、うまくイケると思うんだ」

部屋の隅や壁などには汚れが完全にこびり付いていて、とてもじゃないが風では吸引しきれない。

それらのしつこい汚れ対策のため、右手に魔力を集中。イメージするのは高圧洗浄器。

ちよつとテストしてみると右手の人差し指から高圧縮で高温の水を出力できるようになったので、それを使って次々に汚れを落とす。

もちろんこのままだと辺りが水浸しになってしまつので左手ではドライヤーを出力してすぐさま乾かしていく。

実物の高圧洗浄器に比べて水の出力量が非常に少ないから出来る荒業だと思う。

ついでに言えば汚れが浮くだけなのでエルが魔術を使っていない場合、部屋がサウナになるだけで意味がない。

「一体何をどう考えたらそういう風に魔術を扱えるのだ？」

「僕の世界ではわりと一般的な掃除用具をイメージしてみた」

「・・・本当に主の世界は便利なもので満ち溢れているのだな」

エルは呆れたような感心したような表情を浮かべつつも、魔術の制御は正確で今もちゃんと風が流れているのが凄いと思う。

汚れを浮かせた瞬間にエルの魔術で汚れが外に吹き飛んでいく光景はまさに圧巻！

僕の世界じゃまずお目にかかれないぞ、こんなの。

ともかく魔術を前面に押し出して掃除を行うと非常に高速に部屋を綺麗に出来ることがわかった。

調子に乗って301号室全体を掃除すると劇的ビフォーアフターのよくな状態に。

・・・なんとということでしょう、汚かった部屋があつという間にピカピカになっています！

今、ギルドのオペレーターさんを連れてきたら絶対にびっくりすると思う。

これ、商売になるんじゃないかなあ。

あなたの御家を綺麗に掃除いたします。

お時間は取らせません、2時間だけで綺麗さっぱり埃の一つも逃さない！

さらには風呂場などにこびり付いてどうしようもなかった汚れまで！

さあ、悩める暇はありません。今すぐ当社までお電話を。

TEL： 0120-ABC-DEF

「主、なんか変な顔をしておるぞ？」

「なんでもない。ちよつと疲れてるのかな」

「あの携帯食料を作ったり部屋を掃除したりとかなり無理をしたし、少し休んだほうがよいぞ」

「うん、そうするよ」

ベッドに腰を下ろし、バッグからカップを二つ取り出して市場で買っておいたジュースを注ぐ。・・・テーブルが無いから置き場に困るなあ。

「ありがとう」
「どういたしまして」

自分の隣に座るエルにカップを渡してからジュースを一口。
シヨッキングイエローで激しく毒々しい色だがちゃんとストレート
ジュース。

味は甘みよりも酸味が強調されているが意外と美味しい。
本当はコーヒーか紅茶が欲しいのだが、コーヒーは見たことがない
し、紅茶は50gぐらいの量で銀貨3枚とかとられるのでちよつと
買えそうに無い。

「すっぱいけど結構美味しいね、疲れた体にはやっぱりクエン酸だ
よ」

「くえんさん」とはなんだ？ たまに主の言う単語の意味がわか
らぬ」

「クエン酸っていうのは体に溜まった疲れを取る効果があるんだ。
もっとも、科学的に実証された話ではないから気のせいかもしれない
いけどさ」

「一つ説明されると知らぬ言葉が増えるのだが・・・」

ジト目で見られるが、なんと説明して良いのかわからない。
どうしたもんか。

結局のところ、僕は疲労と筋肉痛について一時間以上語ることにな
ってしまった。

理系とはいえ所詮学生なので細かいところは“ワカラナイ、シラナ
イ”で通したけど、エルは結構満足していたみたいなのでよかつた
と思う。

2 (後書き)

「そういえばさ、エルみたいに人型を取れる精霊って高位なんだよね」

「うむ、妾たちは人からそのように呼ばれているぞ。上下関係があるわけではないので高位とか低位とかってというのは少し間違っているのかな」

「あれ、そうなんだ。ちなみにほかの精霊たちってどんな姿をしているの？」

「妾たちのような精霊はみな人型だが、そうでないものたちは光の玉のような感じだな」

「見てみたいなあ」

「彼らはちよつと恥ずかしがりやなのでなかなか姿を現さないと思うが、主ならそのうち見れると思うぞ。なんせ主の魔力は妾たちとそっくりなのだからな」

「うーん、どうしようかな・・・」

「名詞を言ってくれないと何がしたいのかわからぬぞ?」

「あんまり大したことじゃないんだけど。杖を新しく買ったほうがいいかなーと思って。なんだか魔術師のレベルと杖が見合っていないなんて言われちゃったからさ」

すっかりピカピカで快適になった宿で一晩過ごした僕はいまさらリアさんに言われた一言を思い出していた。

そう、この安物の杖でホイホイと魔術を使うと怪しまれるということである。

(あの時、光って目立つスタンロッドは扱わないように注意してたのになあ)

もちろんEランクの冒険者如きがホイホイ魔術をつかって怪しまれるとは思いが、「前からどこかで修行をしました、ギルドに登録したのは最近です」なんていってしまえば問題ないと考えている。

だが杖は違う。

杖は低品質な場合は高度な魔方陣を組めないらしい。

そんな中、安物の杖でスタンロッドだの氷柱の射出だの殺傷力の高い魔術を使っていたら不自然極まりない。

銀貨3枚も出して買った杖が安物なんていうと、まともな杖は一体いくらするのか戦々恐々としてしまうのだが、武技大会に出てあれこれつかれないようにするにはソレを買う必要があるだろう。

杖の品質が見た目には判らないならこんなことで悩まずに済んだというのに・・・。

ミリアさんはあっさりで見抜いてしまったからなあ。

大体スタンロッドだって出来ることなら軍用懐中電灯から出力した
いのだ。

夜の森で高出力かつスポットのキツイ懐中電灯を点灯すればわかる
と思うけど、光の柱が出来るんだよ。これでイメージを補強してス
タンロッドを出力していたからやり易かったのに、単なる木の棒と
か金属の棒なんかでスタンロッドをイメージするのはなかなか難し
いしフラストレーションが溜まる。

金属の杖の場合なんか下手すりゃ自分が感電してしまうんじゃない
だろうか。

普通の魔術がどういうステップなのかは知らないけど、僕の魔術は
明らかにイメージが重要だ。

そういうことが無いとはとても言い切れない。

と、ここまで考えてからエルの顔を見るとちよつと悩んだ顔をして
いる。

「妾は人が扱う魔術については詳しくない。だから、どのくらいの
杖を買えば主の魔術が普通に見えるのかがわからぬ」

「ブランクの杖なら金貨2枚も出しておけば良いんじゃないかな」

「即答だったが何か根拠はあるのか？」

「全く無い」

「・・・堂々と言うことではないと思うぞ」

絶句している間、次々とエルの額に縦線が入っていく様が見えた気
がした。

「ごめんごめん、実際のところ根拠はないんだけどさ、今の僕の所

持金を考えた時に払える精一杯の額が金貨2枚なんだよ。これ以上は逆立ちしたって払えない」

「なるほど、そうだったのか」

「納得してもらえて何より。・・・さて、武技大会が開催されるくらいだからそつちのほうに向かって歩いていけば魔術用品店くらいいくらでもあるでしょ。食事のついでに杖も買いに行こうか」

「・・・主よ、杖の話をしていたはずなのにどうしてそれが食事のついでになっているのだ？」

「え？ そりゃ重要度の違いって奴でしょ」

武技大会が開催されるのは王都中央付近にあるコロシラムのような建物。（日本語的に“殺しあつ”みたいな感じがあるから物騒だよね）

武技大会が開催されるからかまだ午前8時過ぎだというのに道行く人の数は多く、あちこちに露店が開かれていることもあつて混雑に拍車が掛かっている。

活気があつて大変良いと思うのだけど、身長の低い僕とエルは随分と歩くのに苦労してしまつて非常にかつたるい。

おまけに先ほどから「（聞き取れない）が一枚」や「リグの（聞き取れない）」など、大声で商人たちが売りに勤しんでいるおかげでまともに会話すらできやしない。

ちよつと売ってる物を見たいのだけど、人が多すぎてそれも困難と
きてる。

『すごい活気だよね、驚いた。歩くのにも困難なほどの人っていう
のがちよつと鬱陶しいけどさ』

『主の世界と違ってこの世界では娯楽がほとんどないし、皆が楽し
みにしておるのだ』

『娯楽っていうには結構バイオレンスな感じがしてならないんだけ
ど、そういうものなのかな』

『そういうものだぞ』

この通り僕らは念話ができるので会話が難しかったり、迷子になっ
てしまったりという心配は無いのは救いだと思う。

『歩くにくいしちよつと一本裏でも入ろうか、魔術用品店も定食屋
も定期的にメインストリートに戻って左右見れば済む話だし』

『うむ、賛成だ。そこから裏道に入れるぞ』

エルの指差す方向に向かって歩き、裏道に入ると一気に雰囲気の変
わる。

左右に建物が並ぶせいか圧迫感のある細い道。

道を歩く人は少なく、やや薄暗い。

耳を澄ませばメインストリートの喧騒が聞こえるのだが、別の世界
に入り込んでしまったかのような錯覚すら感じる。

全体的に暗くジメジメとした雰囲気は治安も悪そうだし好きにはな
れそうに無いが、メインストリートの混雑っぷりを考えると幾分マ
シか。

「言いだしっぺがいうのもどうかと思うけど、危ない雰囲気だよね」

「妾も居るし、こんな場所で主が危なくなるはずがないぞ」

フンツ、と無い胸を張るエルが頼もしい。

実際に襲われたらさすがに自分も戦うけどさ。

「今、なにか不埒なことを考えなかったか？」

「ソナナコトナイデスヨー」

「そんなことあるぞ、今妾を見て何を考えた？」

心を読めるのか、それとも念話みたいに漏れたのか。はたまた女の感か。

まさか“エルって胸無いよね”なんて正直に言えるはずも無く、どうやって言い訳しようか考えながら歩いていると

「おわっ！」 「キャッ！」

軽い衝撃と共に少女の声。

どうもエルの方を見ながら歩いていたら気づかなくてぶつかっちゃったみたいだ。

「すみません、大丈夫ですか？」

「ちよっと！ 何してくれるのよ。荷物がバラバラになっちゃったじゃない！」

辺りを見ると荷物がバラバラと辺りに散乱している。

オレンジ、タマネギ、ピーマン、キャベツ、紙に包まれた何か（たぶん肉類）。

散乱している荷物の種類と量を見る限り定食屋さんか何かの関係者かな。

「ポケットと見てないで手伝いなさいよ」
「あ、はい、すみません……」

散乱したタマネギを拾いつつ、自分より小さな少女のほうを見る。ややツリ目気味だが、純朴そうな顔立ちに肩まで伸ばした淡い青色の髪の毛と白いワンピースの姿はおとなしそうな印象を回りに与えると思うのだが、ハッキリとした話し方や気の強そうな声、僕に対する態度などからそんな印象が消し飛ぶまでに時間は掛からなかった。

「ほら、エルも手伝ってよ。僕だけだと時間が掛かっちゃうから」
「ん、ああ、済まぬ。主がタジタジとしているのが少し可笑しくて……」

ふわりと笑うエルとムスツとした知らない少女と僕で荷物を集める。かなり大きい麻袋（？）に集まった荷物はやはりほとんどが食材で、少女が持つと一抱えにもなる大きさ。そりゃ前も見えないしぶつかるわけだ。

「ほら、主。荷物を持つのを手伝ってやったらどうだ」
「そうだね。……よいしょっと」
「ちよ、大丈夫？ それ結構重いのよ？」

あまりにもあつさりと持ち上げる僕を見て驚いたのか、少女は少年間の抜けた顔をしてこちらを見つめている。

「少なくともキミが持っていられるくらいなんだから余裕だよ。冒険者をなめちゃいけません」

「へえ……。あなた達冒険者なんだ。やっぱり武技大会でも見に来たの？」

「・・・非常に不本意なんだけど参加者なんだ」

「主はいい加減覚悟を決めたほうが良いと思うぞ、だから今日も杖を買いに来たのだろう」

「え・・・本戦参加者、ですって？」

やっぱそうだよな。

身長は四捨五入で160cmしかないし、年齢だって低く見える。体つきも傍目にはかなり華奢。

どーみても僕は強そうに見えない・・・っていかむしろ弱そうだ。

パートナーのエルだって似たようなもんだ。

少なくとも強そうには見えない。強いけど。

「名前聞いてもいい？ 私はアーミルよ」

“聞いてもいい？”の次に名乗られたら拒否とか結構難しいでしょ。出来ればかつこ悪いところ見られたくないし、教えたくないんだけどなあ。

大会で負けて結果が出た後（多分出るよね、こういうの結果って）

“あ、やっぱり初戦敗退だったんだー”なんていわれたら僕の脆いハートが砕け散ってしまう。

でもまあ、名乗られて名乗らないのは失礼だししょうがないか。

「僕はユートです。さっきの通り冒険者やってます」

「妾はエルシディアという。主の従者をしているぞ」

「エルシディアさんは冒険者じゃなくてユートの従者なの？ 逆じゃないかって？」

「うむ、そうだぞ」

何故に僕は呼び捨てなんだろう。
いや、うん、別にいいんだけどさ。気にすることじゃないし。

そんなわけで裏道を10分も歩くとアーミルさんの目的地に到着、
予想通り定食屋だ。

肉が焼ける香りなど、お腹の減る香りがあたりに充満しているので、
朝から食事を取っていない僕たちにはある意味毒ガスのような効果を
発揮している。

表口から普通に荷物を抱えたまま入ると左手側にちよつとしたテー
ブルがあったので荷物を置かせてもらおう。重くは無んだけど前が
見えないので結構辛かった。

荷物を置いて店の中を見回すと予想以上に清潔な店内で、細かいと
ころまで掃除が行き届いていて埃などがほとんど無い。

雰囲気や清潔感などを考えると良い店だと思う。

「ただいま」という可愛らしい声と共にアーミルさんが店の奥に入
っていったあと、しばらく待つとがっしりとした体つきの男性がや
ってくる。

「うちの娘の買い物の手伝いをしてくれたって言うのはアンタか」

「え、ええ。まあそんな感じですよ」

「主、妾は空腹だぞ。早く食事を取りたい」

「エル、遠まわしに食べ物要求しない・・・」

この食い意地のはった精霊は全くもう。

でも、アーミルの父は満面の笑みを浮かべていて、なんだかとても

楽しそうだ。

「何だ、腹が減ってるのか。ウチで食っていくか？」

「いただきます。そこいらの座席に座っていても良いですか？」

「おう、そうしていてくれ」

適当に選んだ二人用のテーブルに腰掛けてしばらく待つとアーミルさんがメニューを持ってやってきてくれたのだが、僕もエルもあまりメニューを読まずに毎回お任せにしまっているのも悪いことをした気分になってしまふ。

そろそろ各食材の名前くらい覚えたいなあ。

単語が違いすぎて料理の内容が揚げるか焼くか炒めるかくらいしかわからないんだよね。

“ウダエの炒め物” 正体不明の肉。豚肉っぽいのだが、微妙に臭い。

“ミーマのから揚げ” 前に食べたホロワ鳥のから揚げと同じ味。何が違うのかわからない。

こんな例は挙げていけばキリがない、文字が読めても意味が全く無いのだ。

今後の食生活の改善のためには是非覚えるべきであることくらいわかるのだが、いかんせん面倒なのでついつい“おまかせで”なんていってしまう。

「メニューを持ってきてくれてありがとう。でも、あまりこの辺の料理に詳しくないからお任せしちゃってもいい？」

「んー、何か嫌いなものとかある？ メニューが多いから嫌いな食べ物とか混ざるかもしれないわよ？」

「僕もエルも好き嫌いとかは無いから大丈夫。アーミルさんに任せ
る」

「妾も楽しみだぞ」

「そうなんだ。ちょっと待っててね」

そういつてアーミルさんが厨房に戻っていく。

と、思ったたら2、3何かを話したあとに戻って来る。

顔には満面の笑みを浮かべているのだが、全くどうしてそうなっ
ているのかがわからない。

「どうしたのだ？」

「今あんまり忙しくないから好きにしていって言われたの」

「何で僕たちのところへ？」

「武技大会の出場者に会えるなんてめったに無いから話を聞いてみ
たかったの」

・・・話すようなことが思いつかない。

「ちなみに、どんな話題を期待してるの？」

「武技大会の本戦に出れるくらいならいろいろ語れることがあるで
しょ」

「・・・隠してもしょうがないから白状しちゃうけど、僕って冒険
者ランクがEなの。だから、そういう武勇伝とか話題とかがってほと
んど無いから」

啞然とした様子のアーミルさん。

確かにその気持ちはわかる。

僕も武技大会に参加することが確定したときは口からエクトプラス
ムが出てたくらいだし。

「え？ は？ Eランク？ なのに本戦出場者？」
「うん、驚いた？」

僕の問いに対して回答はない。こりゃガッツリ混乱してるよ。常識的に考えてありえないもんね。
そんなわけであーでもない、こーでもないとくだらない話をするのと大体五分くらい。

「おーいっ！ アーミル、出来たからもって行ってくれー」

ようやくアーミルさんと呼ぶ声が厨房から聞こえる。
ああ、良かった。

これ以上突っつかれるとなんと回答して良いのか大分悩んでしまうところだった。

「なんだか疲れておるな」

「うん、無理やり話題を引き出したから疲れた。でもご飯だから大丈夫」

「ふふっ、全くもって主は食い意地が張っておるな」

「外から見た場合、エルも十分に食い意地がはってるタイプだと思うよ」

「おまたせっ」

「待ってました」「楽しみだぞ」

アーミルさんがテーブルの上に料理二皿とバスケットを並べていく。

一皿目は肉野菜炒め。

二皿目は分厚い玉子焼き。

バスケットにはバスケットがたくさん入っている。

エルが早速バケットに手を伸ばして一口。

「うまいぞ、主も食べたほうがよい」

「頂くよ」

僕もバケットを一つ取る。

バケットは食べやすいように2cmくらいで斜めにスライスされており、さらに表面を焼いてあるので大変香ばしくて良い。一口齧るとリーナさんのとこのパンと違って若干例のエグ味があったものの、十分に美味しいといえる。

もきゅもきゅとバケットを齧りつつ肉野菜炒めも食べる。

こちらは肉のうまみをうまく利用していて、野菜炒めにありがちなうまみ成分の欠ける味にはなっていない。美味し。

さらに野菜がしゃきしゃきとしていて、炒めてあるはずなのに瑞々しくて美味しい。

こういう風にするには高出力のコンロで一気に炒めてやらなくちゃだめ。

比べるのも失礼な話かもしれないけど、僕が作った家庭料理とはレベルが違うな。

相変わらず食い意地のはった僕らの食事は静かだ。

最初にエルにバケットを勧められた以外、僕らの間に特に会話は無い。

次にスプーンで玉子焼きを掬って食べる。

・・・そのとき僕に電流走るっ！

これはアレだ、なんていうんだっけ。

玉子焼きの中に刻んだタマネギとひき肉を炒めてBBQソースで味

付けしたフィリングを詰めた料理。

どうでもいいや、感想を言うのもメンドクサイ。美味しい、食べたい。オムレツを掬った部分にちよっとソース溜まりが出来るので、バケツトをディップして一口。

ソースとバケツトの相性がいいのは昔から定番として決まってる。当然美味しい。

いやいやいやいや、これは美味すぎるでしょう。

こんな生活を続けていたら太ってしまうね。

この後バケツトを二つほどおかわりしてアーミルさんを十分に驚かせた後、ようやく僕たちは満腹になって満足したのだった。

「いやあ、満足したなあ」

「こここのところ定食屋など入っていなかったからな。満足したぞ」

王都に着てから、というより五日ぶりのマトモな食事だったせいかちよつと食べ過ぎた気もする。

異世界に来たからといって爆発的に運動量が増えたわけではないのであまり無神経に食べ過ぎるといろいろと危険だ。今後はある程度注意せねば。

「んじゃあそろそろ杖でも探しに行こうか」

「了解だ、会場のほうに向かうのか？」

「そのつもり。終わったら観光したいし」

食事を終えてメインストリートに出ると食事前に比べて人が増えた気がする。

この中を掻き分けて店を探すのはちよつと厳しいのでやはり裏道か。

「とりあえずまた裏道に戻ったほうが良いと思うぞ」

「そうだね、露店も増えちゃってるみたいで混雑っぷりがヤバイ」

僕はエルに連れられて再び裏道へ。

空腹で辺りをしっかり見回す余裕が無かった先ほどと違い、今の僕にはかなり余裕がある。

雰囲気のあまりよろしくない裏道だが、まったりと見て回るとお店があつたり生活臭のある家などがあつたりして意外と面白い。

ただし店舗の雰囲気はかなりアヤシイ。

何を売っているのかわからないが明らかにやばそうな感じだったり、一見さんお断りとしか思えないような飲み屋などが大半を占めるが、たまにファンシーな雑貨屋などがあるので油断ならない。途中、武器屋らしき場所があったのでちよつと寄ってみたのだが、こういう雰囲気の場合で冷やかしかもどうかと思ってあきらめてしまった。

そんな風に周りをじろじろと眺めながら道を歩いていると突然肩を叩かれて死ぬほど驚いた。

地元ならともかくこの世界で肩を後ろから叩かれるとは欠片ほども思っただけよ。

「ユート君じゃないの！ それにしてもそんな驚くことかしら」

「ミリアさんでしたか。驚いてしまっすいません」

「気づいていなかったのか？ あまり驚きすぎるのは失礼だぞ」

相手がミリアさんでよかった。

コレが悪意のある人物だったとしたら結構危なかったんじゃないだろうか。

「こんなところでどうしたの？」

「ちよつと杖の買いに来てたんですよ。ミリアさんはどうしてこんなところに？」

「私は武技大会でも見に行こうと思ってね。でもいくらお祭りだからってさすがに今のメインストリートを歩く気にはなれないわ・・・」

額を押さえつつメインストリートを見るミリアさんだが、その気持ちには僕もかなりわかる。

会場から結構離れているこの場所ですらこの状態。

これが近づくほどに悪化していくわけだし、とてもじゃないが歩こうという気にはなれない。

混雑した道ってというのはお祭りの醍醐味のような気もするけどね。こつ、女の子と歩くときに手を握ったりとかさ。

「もう買っちゃった？」

「まだ買ってないですよ。お店の位置がわからなくて迷ってるんです」

「ちょうど良かった！ それならいいところがあるわよ。ちょっと雰囲気暗いけど」

「本当ですか！ 場所を教えてくださいても良いですか？」

渡りに船とはまさにこのこと。

宿といい食事といい最近ツイてるなあ。

いつか反動が来なきゃいいけど。

「その角を左に曲がって歩くと右手に酒屋が見えるから、そこを右に曲がってすぐ。看板があるからわかると思っわ」

「一本目の角を左、右手の酒屋を目印に右折、その後目的地周辺ですな。わかりました」

「ユート君の試合は明日だし、そこでいいやつ買って頑張んなさいよ」。知り合いが出るのは久しぶりだし期待してるんだからね」

「え、ええ。なるだけ頑張ります」

「さて、あんまりツレを待たすのもあれだしもう行くわ。またね！

ユート君、エルシディアさん」

唐突に現れて嵐のように過ぎ去っていったミアさんをちよつと呆然としたまま見送り、僕たちは交差点を左へ。

すぐに右手側に酒屋、というよりちよつと洒落た感じの酒場を見つ

けたのでその角を右へ曲がる。

僕はあまりお酒は飲まないのだけれど、樽で作ったテーブルとイス。その奥には無数の酒が並んでいてなかなか雰囲気良く、たぶん探せば日本でも似たような店があると思う。

「どうやらここのようなのだぞ」

「こ、これなの？」

エルが指差す先を見ると確かに魔術用品店っぽい看板が掲げられているのでそうなのだろう

だが、裏道のお店のご多分に漏れず雰囲気は真っ暗アンダーグラウンド。

ミリアさんに教えてもらったとは言え、果たして一見如きの僕が入って良いのか甚だ疑問である。

「どうしたのだ？」

「いや、どう見ても微妙な雰囲気を漂わせてるし入っていいものかな」と

「良いに決まっている。紹介されたのに行かないほうが失礼だぞ」

そのままずるとエルに引き摺られるようにして店内に入ると、予想通り暗い雰囲気。

あまり広くないが、大量の杖が所狭しと並ぶ店内はなんとも威圧感がある。

ガルトの魔術用品店と違って単価が高いのが特徴で、安いものでも銀貨8枚から。

信じられないことに高いのは金貨40枚というのがある。

こんなものをキャッシュでポンツと買える人がいるというのが信じられん。

長い杖ばかり置いてるので随分悩んだけど、ブランクと思しき30cmくらいの杖を選択。そのまま他人をしばくにも使えそうな金属製でチタンのように軽い。ただし強度のほどはわからないのでしばいてみたらポッキリ折れた、なんてこともありえるけど。

値段は金貨2枚。僕の払える限界。ああ、びんぼうが近づく……。正直な話今僕が使っている杖との差が素材以外わからないのでスペックシートが欲しい。

安物の杖（魔力+30） アプレンティスの杖（魔力+50）みたいなのがあればわかりやすくていいのだけど。

・・・いや、意味ないか。どうせ魔法陣とか使わないし。高けりやいいんですよ高けりや。

カウンターに杖を持っていくと店長がこちらに振り向いて口を開く。

「見ない顔だな」

「知り合いに教えてもらったんです」

店長は落ち着いた雰囲気のスミスドルのだが、長いローブのせいでそれ以上はよく分からない。

僕が持ってきた杖を掴むと威圧感のある赤い瞳で僕を見る。

「お前さんは冒険者みたいだが、これを戦闘で使うつもりか？」

「はい」

「その体格で長杖トロンを持ち歩くのはきついかもしれないが、戦闘で使う以上多数の魔方阵を仕込めるほうがいい。事実、戦闘主体の魔術師で長杖を持ち歩かない奴は居ない。短杖ワンドは携帯性こそいいが汎用

性が無くて戦闘に不向き、研究者向けだな」

やや僕を馬鹿にしたような口調。

見た目の都合もあるしコレばかりは仕方ないか。

「主を馬鹿にしているのか？」

「馬鹿に？ 事実を述べているだけだ。重い杖を持って歩けないならば魔術師として戦うのは難しい」

「エル、落ち着いて。大丈夫だから」

僕が怒らない代わりにエルが怒る。

申し訳ないけどちょっと嬉しく思ってしまう僕がちょっと嫌だ。

「すみません、短いのを選んだのには理由があるんです」

「・・・・・・・・」

ここで店長を説得すればエルの鬱憤も晴れるだろう。

店長は目を細めて僕の言葉を待っているかのようだし、折角だから説明させてもらおうかな。

「僕たちは冒険者ですが、見ての通りのパワーファイターじゃありません。というより両方とも魔術師です。当然どちらか・・・もしくは二人ともが近接戦闘を強いられます。こんなときに長くて取り回しの利かないような杖では魔力障壁を展開しつつ近接戦闘を行うことが困難でしょう？ 僕たちが短い杖を使うのは携帯性ではなく戦闘時における取り回しの良さがどれだけアドバンテージになるかを理解しているからなのです」

ちよっと息継ぎするタイミングがわからなかったので、一気に言い切る。

杖を抜いてから小さくつぶやき、杖でスタンロッドと魔力障壁を展開。

店内で魔術を使うのもどうかと思ったが、今のところ店には僕ら以外誰も居ないしまあいいでしょ。

「この通り、近接戦闘を行う上で短い杖は非常に有用です。長杖の場合魔力障壁と干渉してしまって上手に戦えないことがわかってもらえます?」

店長の顔を見ると目を見開いていて、随分と驚いているようだ。説得に成功したっばいのはいいけどそんな驚かれるようなことしたかな。

「ちょっと待ってる。お前向けの杖がある」

そういうと店長はそのまま店の奥のほうへ。

いや、そういうの微妙なんです。

店の奥にわざわざしまっような杖ってたぶん高価ですよな? 僕買えないですからね?

「さすが主だ、ちょっとスカッとしたぞ」

「あんまりこっぴうのって良くないけどね。脅してるみたいでさ」

「あけてみる」

どう見ても高級そうな化粧箱を持ってきた店長はそういって、こんな多分買えないぞ。

「ちよつと予算オーバーな気もしま」

「どうした？」

「い、いえ。何でもありません。あまりに美しい杖なので驚きました」

化粧箱に包まれた杖は長さ30cmほどで、青みがかつた金属製。エルゴノミクスデザインなグリップが異彩を放っているがそれ以外は極めてシンプルな棒状の杖で、先端に近づくに連れて徐々に細くなっている。

何より僕が驚いたのは杖に刻まれた「COLT DEFENDER」の刻印。

もちろん刻印の両側にはコルト社のマークである馬が刻まれている。そして杖の底面に刻まれた「S/N 100003478」というシリアルナンバー。

シリアルナンバーが記載されている以上それは明らかに工業生産品つまり、コルト社が冗談で作ったワンオフではないということ。

なんで異世界にコルト社製の武器があるんだ？

しかもピストルやライフルじゃなくて杖だぞ？

僕が呆然と杖を眺めていると店長は満足げな表情を浮かべている。

「綺麗な杖だろう。同時に複数の魔術を扱えるような高度な魔術師には良く似合う。お前が持ってきた杖はウェルダの製品でそれほど性能が低いわけではないが、お前には合わん」

ん？ 同時に複数の魔術を使うのって難しいのか？
エルが普通にやっているからなんてことない簡単な技術だと思ってた。

それよりあれだ、この杖の出所と値段が気になる。
まあ半分くらい予想はついてるんだけどさ。

「この杖は一体どこのものなんですか？」
「古代遺跡だ」

やっぱり……。

この分だと古代遺跡には僕の世界との接点がかなりありそう。
早いところ探索できるだけの技量等を身につけたいなあ。

「それってじゃあ、この杖ってむちゃくちゃお値段が張るんじゃないんですか？」

「金貨60枚。意外と安いだろう？」
「ブツ！」

噴出す僕とエル。誰が買うんだ誰が。

そして金貨60枚のどこが安いっていうんだ。
この人完全に金銭感覚がかつとんでるぞ。

武技大会の優勝賞金をいくらだと思ってるんだ、金貨100枚だぞ！
その優勝賞金の6割もの値段をつけておいて安いとはコレ如何に。

「残念ですが完全に予算オーバーですね。とても買えません」

「ウエルダーのミッドクラスを持って来るくらいだから金が無いのはわかっている。お前、予算いくらだ？」

「金貨2枚で限界ですね、これ以上は少しも出せません」

今度は店長が固まった。

たっぷり5秒は固まった後に呆然とした表情のままぼそつとつぶやく。

「・・・複数の魔術を同時に使用できるような魔術師なのに、なんでそんななんだ」

というか僕はEランク程度の微妙極まりない冒険者なんだけどそれを言ったら完全にフリーズしそうだなあ。

当たり前だがポケットを叩いても増えるのはビスケットだけでお金は増えない。

店長はいくらか負けるつもりで例の杖を持ってきたっぽいのだが、さすがに金貨2枚で売れる品じゃないのは僕にだってわかる。

そんなわけで結局僕は自分で選んだ杖（ウェルダーだっけ？）を購入入。

店長は最後まで納得してない表情だったがそんな表情をされても困る。

しかしコルト社製の杖が古代遺跡から発見、か・・・。

予定通りといえば予定通りだけど、今後の指針はほぼ決定だな。

杖を買ってしまったので現在所持金が銀貨で9枚とちよつとになつてしまった。

ここいらで依頼を受けることが難しい以上、これからはなるべく節約して過ごさないとなあ。

だが、現在は武技大会が絶賛開催中。

スパイシーな香りを漂わせるホットドック屋や最近少し暑くなつてきたからかジュースを販売する屋台、昔から男をびんぼうにさせるアクセサリーシヨップなどが当然大量にひしめいている。

是非それらを堪能してみたいのだが……。

「なんでそんな落ち込んでいるのだ？」

「節約生活をするに当たつて屋台の堪能はあきらめなきゃかなーと」

「さ、さすがに食べ物くらいは好きに買つても良いのではないかつ

！？」

「そりゃ食べ物くらいならイケドさ、それ以外にもいろいろありそうじゃない？」

食べ物くらいは買うという僕の言葉を聞いて明らかに安堵するエル。ここに来るまでに発生した10回以上にわたる携帯糧食の連食が効いたのか、最近のエルの食に対する執着はかなりのものになってしまっている。

今後旅行を続ける上でフリーズドライの必要性が跳ね上がったかもしれん。

エルも大変そうだったけど僕も大変なんだよなあ。

この世の摂理に真つ向勝負な方法で生産する以上、魔力の消費量も半端じゃないし疲れるのも当然っちゃ当然なだけだね。

それでもなんとか改善方法はないんだろうか、出来れば楽に作りた
い……。

「そういえば杖も買ったし食事も取ったしどうして会場のほうに来たのだ？」

「え？ 観戦に行くんだよ？ 幸い僕らは無料で見れるみたいだし
「観戦？ 主が？」

何をそんな驚いたような表情をしているんだらう。

日本人の全員が好きかと聞かれたらかなり微妙だが、少なくとも僕は格闘技の観戦が結構好きだ。

当然、こんなファンタジーな世界で格闘技をやってるならばそれも見てみたいと思うわけで。

「なるほど、敵情視察というわけだな？」

「いや、全く違うから。っていうかトーナメント表の反対側の人たちの試合を見て敵情視察って全く論理的じゃないから」

「そんなに否定しなくとも良いと思うのだが……。主は自分が思っているほど弱くは無いぞ？」

「そういわれてもなあ。完全に身体能力に頼りきりの状態だし」

そういつて試合が行われているであろう会場に眼を向ける。

先ほどから度々歓声が響き渡る武技大会の会場はローマのコロッセウムとよく似ているが、アレよりも幾分装飾が少なくしてシンプルな造りになっている。材質はコンクリートだと思うが、継ぎ目の無い巨大な石と言われても納得しそうなほど綺麗。ブルドーザーもショベルカーも無いようなこの世界では完成までに途方も無い時間が掛

かったのは間違いない。

前に見たときの記憶が曖昧で間違ってるかもしれないけど、多分こちらの会場のほうが若干小さいと思う。それでも人の背丈をはるかに越えるサイズのアーチが大量に組まれた形となっており、見るものを圧倒させるような見事な景観だ。

たまに歓声が飛び交っている辺り、中では試合が進んでいるらしくて非常に楽しみだ。

・・・明日僕が出なきゃいけないことは忘れてしまいたい。

「すみません、大会の観戦に来たのですが」

「チケットをお見せいただいてもよろしいでしょうか？」

「主は本戦出場者だぞ」

「は・・・？」

大会スタッフは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして僕を見る。

この反応は想定範囲内です。

「あつ、これ、ギルドカードです。僕みたいな低ランクのカードを偽造する人は居ないでしょうし身分証明書代わりにはなると思いますが」

スタッフの人がカードを見る。僕を見る。カードを見る。・・・そして再び僕を見る。

「いつまでじろじろと見ているのだ？」

「す、すみません。ちょっと驚いてしまって・・・。間違いなく本人ですね、ギルドカードはお返しします」

「通っても良いですか？」

カードを受け取り、バッグにしまってから尋ねるともうスタッフの人は平常心に戻っていた。
どこかのギルドのオペレーターとは違うね。

「はい、どうぞ。専用の場所が用意されていますので、右手側の階段を上がって3階へどうぞ。そこからは看板がありますのでそちらをご利用下さい」
「わかりました」

会場へつながる廊下には、当然ながら蛍光灯なんてものは無いのであまり明るくは無い、と思っていたのだが外壁に巨大なアーチを使ったり、採光用窓（ガラスが嵌っていないので採光用穴かもしれない）を用意しているために意外と明るい。

階段を上がり、武技大会関係者用という文字列と矢印の書いた看板を頼りに会場へ。

「凄い・・・な」

それは凄まじい光景だった。

およそ奥行き200m、幅150mくらいの卵型の会場は大量の人で埋まっついていて空席が見当たらない。

人数はあまりにも多くて正確にはわからないが、3、4万人くらいだと思う。

・・・ひよつとするとローマのコロッセウムより大きいかもしれぬ。よく分からなくなってきた。ちやった。

直射日光を避けることが出来るように客席には布製の屋根が張られていて非常に快適。

単に人の入る会場を作ったというだけでなくアメニティにも気を使っているとはなんと素晴らしいのだろう。

「少し遠いな」

「まあ無料だしね」

関係者用の観戦スペースは若干端のほうに位置していて、試合の行われている会場まで50m近くあるので少し見辛い。

それでも周りの観客たちはわーわーと周辺に喧騒と熱気を振りまいているのでおそらく楽しめているようだ。

僕としては出来ればオペラグラスでも……ってそうであるじゃん。エルには何時もお世話になっているし、喜んでくれるといいのだが。

「エル、今から両目の視界が拡大されるからちよつと注意してね」

「そんなことが出来るのかっ!？」

「うん、僕だけ楽しむんじゃ申し訳ないし、多分エルの視界も調整できると思う」

どうせ外部に影響が出るような魔術じゃないし、杖は使わずに意識を集中。

対象はエルと僕。

イメージするのは双眼鏡。

指を鳴らしてスイッチON、もう一回でスイッチOFF。

……よし、準備OK。

魔力を外に流して指を鳴らすと予定通り魔術が発動、視界がおよそ5倍程度まで拡大されて試合が良く見えるようになる。

「おおっ！ 相変わらず主は無茶が利くのだな」
「イメージの限りなら結構いろいろ出来るみたいだよ」

光源が無い環境下でもわずかに反射する光を増幅して暗闇で活動したり、熱源をもとに視界を取得することなんかも出来るかもしれない。

「凄いな、彼らは戦闘のプロだ」

「確かに凄いな。剣が生き物みたいだぞ」

今戦っているのは長剣を振るう重戦士、全身にアーマーを着ておりなんとも威圧感があつておっかない。

対する相手は軽装の魔術師で、長い杖を振って魔力障壁を展開して相手の剣を弾いたり避けたりして、たまに攻撃魔術を放って攻撃しているようだ。

重戦士が剣を振るったり、魔術師が何か攻撃的な魔術を使うたびに歓声上がる。

僕もエルも剣による戦闘に詳しいわけではないが、それでも振り方が洗練されていて無駄が無いことくらいわかる。

全体的に見ると徐々に魔術師が押されているような印象を受けるが、もともと遠距離型の魔術師がこんな面と向かってヨードンな試合でマトモに戦えている時点で凄いなと思う。

というか全身にアーマーを着込んだ人間に非殺傷の魔術でどうやってダメージを与えればいいんだろ。これ、反則じゃね？

「ねえ、全身にアーマーを着込んでいたら勝ち目無くない？」

「そんなこと無いぞ、斬撃は防いでも衝撃自体は防げない以上ダメージは通る」

「んな無茶な・・・」

そうこうしているうちに重戦士がラッシュを掛ける。

右へ一振り、左へ一振り。

魔術師は素早く魔力障壁で弾いては居るものの徐々に後退している。あと少しでリングアウトだ。

「あー、決まっちゃうかな」

「押されておるな」

ぎりぎりまで魔術師が押されて、決まったかな、と思った瞬間だった。

魔術師が魔力障壁を展開したまま突撃、くるりと重戦士の裏に回って攻守逆転。

重戦士はラッシュによる体力の消耗で鎧が重いのかちょっと反応が遅れている。

もちろん反応が遅れているといっても数秒も時間は掛かっていない。それでも魔術師には十分すぎる時間だ。

大き目の魔術の発動の結果大気が揺れ、緑色のエネルギーの塊が重戦士に直撃。

貫通能力は低そうだったので確かに殺傷力は無いと思うが衝撃は十分にあったらしく重戦士がふらついて後退する。

今戦っているのはリングの端、そんな場所で後退すれば当然リングアウトだ。

会場は凄まじい歓声で包まれた。

ギリギリまで押された状態での一瞬での逆転劇。
観客を興奮させるには十分なものだった。

僕だってもちろん興奮している。

やはり僕も日本人なので牛若丸よろしく重武装の人間をひらりと倒す様にはあこがれるものがあるのだ。

「勝者はギリギリからの一瞬で勝利を掴んだあつ！ ヘルミ・ロンドバーグだあああああああ！！！！」

なにか魔術を使っているのか会場全体に審判の音が響き渡る。そして会場は再び耳を覆わんばかりの大歓声。ちよっとづるさい。

『凄かったねー』

『久しぶりに手に汗を握ってしまったな、知らぬ者同士の試合でこ
うなのだから主の試合が楽しみだぞ。周りの観客たちと同じように
妾もきつと声を抑えられぬだろうな』

あー、そうだった・・・。

試合に見入ってしまったって完全に忘れていたけど僕ってコレに参加な
んだよね。

でも、あの分だと意外と何とかなるかもしれない。

重戦士も魔術師もそうだったけどミリアさんほどの速度じゃないの
で十分に目で追える。

もちろん攻撃が認識できるからといって対応できるかとは別問題な
のだけど、それでも無抵抗にやられてしまう心配だけはなさそうだ。

仮に負けてしまったとしても、エルに申し訳くらしいは立ちそうかな。

「あー、うん、まあ頑張るよ」
「そうどうぞ、なんととっても妾の主なのだからな」

それから5試合を観戦して本日の試合は全て終了。
その全てが見ごたえのある試合で非常に面白かった。

「来て良かった、帰り道のこの人ごみに目を瞑ればだけど」
「多分それはあきらめるべき内容だと思うのだが……。それよりも妾はお腹が減ったぞ」

行きの段階である人ごみだったのだから帰り道だって混むことくらいは予想してた。
ただ、これは異常だろう……。人波に乗ると帰ってこれないぞ、たぶん。
幸いエルがご飯を要求しているし、どこかの屋台で時間を潰してしまおうか。

「屋台は結構種類がありそうだけど、なにか食べたいものとかある？」
「この人ごみだし、探すのは面倒だから近いところで良いぞ」
「おっけ、じゃああそこにしようか」

僕が指した先には串焼きの屋台。
こちらの世界では初めて入るので結構楽しみかな。

「こんばんは」

「イラツシャイ！　そこに席があるから座ってくれ。飲み物はどうする？」

「適当にお勧めでお願いします」

よいしょとイスに座りメニューを拝見。

・・・毎回のことながら不明なものばかり、知ってるのはホロワ鳥の串くらいか。

かなり不思議に思ってることなんだけど、僕のところだと肉といえ
ば牛か豚か鶏の3種類。

ほかにもいのししや熊、鹿など肉の種類は少くないが常食されて
いない。

この世界では常食される肉の種類がめちやくちが多い。いろいろ楽
しいからいいけど名前を覚えるのは無理かもしれない。

若干淡泊な味わいながら歯ごたえがとてもよいホロワ鳥のモモ肉な
どは僕のお気に入り。

とりあえずコレの串は確定。

あとは・・・そうだな、エル次第かな。

「エルは何か“コレ”っていうのはある？」

「うーむ・・・。ウダエの串があれば後はなんでも良いぞ」

「おっけ。すいません、注文良いですか？」

「おう、なんにする？」

言葉遣いはちょっと荒いが人の良さそうな30くらいのオヤジさん
に串を注文。

ホロワ鳥とウダエの串以外は適当に頼みますというとても嬉しそ

うに対応してくれた。

「串のほうもすぐに焼きあがるから先に飲み物でも飲んで待っててくれ」

「ありがとうございます」「ありがとうございます」

テーブルに置かれたのはビールのような飲み物。

入れ物がグラスじゃなくて灰色の陶器なので色がよく分からないが、多分赤っぽい。

「主、これは酒だぞ」

「こういうとこだし、普通ジュースは出ないでしょ。それに僕らはちゃんと成人してるんだから大丈夫だよ」

カップに注がれた酒を一口飲んでみると予想通りビールっぽい味なのだが、その次に来るのは酸味と甘み。ベルビュークリークなどのチェリービールが近い味だと思う。

ヒューガルデンホワイトやベルビュークリームみたいなタイプのビールは日本だとやや女性向けの扱いであまり好んで飲む男性は居ないらしいが僕は結構好き。

クリーミーな泡と華やかな果物の香りが嗅覚と味覚を同時に刺激して大変美味しいのだ。

やや甘めなので串にはちょっと合わないところがあるかもしれないが、食前酒としては最良かな。

「そういえばお酒飲むのってこっち来てから初めてだ」

「そうだな、てつきり主は呑めないと思ってたぞ」

「結構好きなんだけど今まで機会がなかったんだよね。比較的高いしな」

エルがリスのようにカップを両手で持って呑む姿を堪能しつつ僕もぐいっと二口。

うん、このビール美味しいな。

いまさら気づいたけどちゃんと冷えてるし。魔術万歳。

「いい呑みっぷりじゃないか、串も美味いぞ」

楽しそうな表情の店主がそういつて4本の串をテーブルに並べる。

日本の串焼き屋や焼き鳥屋の串と違い、一本一本のボリュームが凄まじい。

ちよつと高速道路のサービスエリアで食べられるような大きさ。

出来上がりを見るとどれがどの肉だかはさっぱりわからないが、一番近い串を一つとってバクリ。

外側はきつちりと焼き上げられているのだが中央部は少し生に近く噛むごとに肉の脂とうまみが口の中に広がり大変美味しい。

やや塩気が強いが、ビールとあわせていただくとソレがまたちよつと良い感じだ。

「お酒を一つ下さい。出来れば同じような感じで甘くないのがあればいいのですが」

「二つだ、妾も呑むぞ」

「いいね、いいのがあるぞ」

すぐさま新しいビールが注がれて僕の前に。

一口飲むと先ほどのものと違って日本のビールに近い味わいで、苦味が強調されているのだがのど越しがよく串との相性が非常に良い。

先ほどと違う串を手にとってバクリ。

やや淡泊な味わいの中に見え隠れするさらりとしたうまみ。
先ほどの肉と違って脂がじゅわっと出るようなことは無いが、これ
はこれで美味しい。

「美味しいなあ」

「そうだな」

「明日は武技大会だけど、思わず忘れちゃいそうだよ」

「・・・明日に残るほど呑むのはためだからな」

エルに窘められた気がするが、こつ美味しいものが出てきちゃったら
どうしようもないでしょ。

「喜んでもらって何よりだ。さあ、満足するまで食っていってくれ」

「いただきます」

「主、聞いているのかっ!」

「聞こえてるし大丈夫だよ、コレくらいじゃ酔っ払ったりしないか
ら」

明日、頑張らなきゃなあ。

エルはこちらをジト目で見てくるし、負けたらお酒禁止令とかでち
やうかもだしね。

ああ、ついにこの日がやってきてしまった。

今日は武技大会二日目、つまり僕の出場日である。

会場を見上げて憂鬱な僕と楽しそうなエル。

何故にこの精霊はこんなに楽しげな表情なのだろう。

なんとというか、こつ、戦いに赴くパートナーに対する心配とゆーか
そういうのはないのか？

「そついえばなんで僕が本戦に出るのが楽しみなの？」

「主のこと違ってこちらは娯楽が少ないのだ。そんな中でほとんど唯一と言っても良いくらいの巨大なお祭りである武技大会に主が出場者としているのだぞ？ 楽しみにならないわけがないっ！」

巨大イベントにかける心意気ってことなのかな？

納得できるよーなできないよーな。

「楽しみにしているからな？ 妾は主のカッコいいところが見たいぞ」

「・・・期待に沿えるようなるだけ頑張るよ」

昨日と同じスタッフの人に挨拶をしつつ入り口を通過。

会場には本戦出場者用の案内看板がでかでかと置かれているので道に迷う心配は無い。

観戦場所もそうだったけど、なんてユーザフレンドリーな仕様なんだろう。

この世界のこついうところは非常に素晴らしいと思う。

「あ、そうだ」

「どうしたのだ？」

「バッグを持ってもらってもいい？ さすがに試合中に背負っているわけには行かないし、全財産がそこに詰まっている以上置いていくのは怖すぎる」

「うむ、了解だぞ」

僕は半銀貨を一枚だけ取り出してからバッグをエルに渡す。
エルはさっとバッグを肩にかけてからくると回る。

「どうだ、似合っているか？」

「ばっちりだよ」

僕の言葉に満足げな表情のエルを見ながら廊下を歩いて控え室の前へ。

「じゃあ一旦ここで別れようか。お金は銀貨1枚の範囲でなら自由に使ってくれて構わないから」

「わかった。妾は観客席で応援しているぞ」

「ありがと、頑張るよ」

エルが階段を上っていくのを見送ってから僕は控え室の中に入る。
控え室の中は既に何人かの参加者が待機していてなんともピリピリとした空気が辺りに漂う。

ああ・・・胃が痛くなってきた・・・。

遅くとも数時間後にはこんな剣呑な雰囲気あたりには撒き散らすよ
うな人たちのうちの誰かと戦わなくちゃいけないのか。

エルには頑張ると言った手前できないけどさ、可能なら今すぐ帰りたい。

一番端のイスに小さく座って待つこと30分くらいだと思う。
ようやくスタッフの人がやってきてルールの説明を開始するが、一度聞いた話なので全く面白みが無い。
要するに殺しは禁止ですよっていうのを念押ししているんだけど、そんなことは百も承知である。

ふっと周りを見れば今日の参加者である16人が揃っていて驚いた。
人がこんなが増えてるのにも関わらずそれに気がつかないなんて・・・。

どうやら僕は自分で思っているよりも周りの雰囲気吞まれているらしい。

どうしたら落ち着けるかな、このままときつとまともに戦うことすらままならないぞ。

あまりに間抜けな試合運びをしてしまったらなんだかんだ僕を買ってくれているエルが悲しむ。

それだけはなんとか避けたいところなんだけど。

「トさん、ユートさん。聞いていますか？」

「え？ ああ、すいません、ちょっとポケットとしてました。なんでしょうか？」

「ユートさんとスイクさんの試合は2番目です。よろしいですか？」

「あ、はい。了解です」

だああああ。

完全にやられてるよ。

思考がどつばに嵌って周りが見えてない。

時おり聞こえる笑い声はきつと今の僕の醜態によるものだろう。恥

ずかしすぎる！

それから僕はただでさえ小さく座っていたにもかかわらず、余計に小さくなって待機。

ああ、早く出番よ来てくれ。恥ずかしくて死にそうだ……。

小さく縮こまって待機すること1時間弱。

一試合目が終わり、ついに僕の出番がやってくる。

対戦相手のスイクさんはうらやましいことに身長が180センチ以上、彫りの深い顔には青い瞳。同じ色の髪は短く整えられていて、身に纏う雰囲気はエライ渋くてかっこいい。

扱う武器はその身長より長い槍。

シンプルながら金属製のそれは殺しに最適化されているようでなんと物騒。

そんな大型で重そうな武器の割りに防具のほうは比較的軽装で、皮と金属で作られた胸当てと前腕につけている金属製の籠手くらいしかない。

対する僕は知つての通りの普段着。

武器は短い杖が一本、防具にいたっては軽装どころか何も無い。

・・・およそ武技大会に参加する服装と装備ではない。

傍から見たら“あいつは試合を舐めてるのか？”などと思われてい

そつだ。

「さあ、両者揃ったところで紹介と参りましょう！」

相変わらず不明な魔術を使っているので会場全体に声が響き渡る。

頼むから僕の紹介はさらつと流してくれ。

しっかり語られたところで待っているのは笑いきらいしかないので目に見えてるつてば。

「まずはスイーク・カンディア選手だつ！ 冒険者ギルドに所属するスイーク選手はギルド内でも有数の実力者！ 自らの身長より長い槍を自在に操り数々の危機を乗り越えてきた選手です。今回の試合でもその力を存分に発揮して皆様を興奮の渦に巻き込んでくれることでしょう！」

うわー、ギルド内で有数の実力者だつてさ。

こりゃしんどいかもしれないぞ。

ただ、取り回しの悪い武器を使っているので十分に接近すればなんとかなる、かなあ……。

「対する相手はユート・カンザキ選手。聞き慣れぬ名前だと皆様もお思いでしょうかそれもそのはず、彼は今大会が初出場となります。経歴、経験は一切不明。ですがここに立っている以上相当の実力を保持していると見てもよいのでしょうか！」

『主！ 主！ 頑張るのだぞ！』

『あはは、怪我しない程度にね』

「両者準備はよろしいでしょうか！ それでは武技大会二日目第二試合」

審判の人が手に持った黄色い旗を振り上げる。
準備がよろしくない場合この人はどんな対応をするつもりなのだろう。

微妙に気になるところではあるけど、残念ながらその時間はなさそうだ。

「始めっ！！」

スイクさんは審判の声と同時にこちらに突撃。

そりゃどう見ても魔術師の僕と距離を置こうとは思わないか。

こちらへ走る速度はやや鈍重というところがあるが、あのやたらに大きい槍を持っていることを考えればかなり早い。

さて、本来なら氷柱でも撃ち込んでおきたいところだけでも仕様上の問題でそれは御法度。

相手の武器は槍だし、接近すれば使いにくいだろっからとりあえずは突っ込んでみるか。

現在の相手との距離はおおよそ3m程度。

全力で飛ばせばスタンロッドの射程圏内までワンステップで届く。

先手必勝って言葉もあるし、僕はスタンロッドを構えつつステップイン。

そのままスイクさんを無力化するつもりで横なぎに振るうが、石突の側を器用に使って受け流されてしまう。

さすがに最小出力だと武器に当てただけで相手を感じ電ってワケにはいかないか。

もちろん最高出力にすればそれも余裕で実現できるのだろうけど、そんなことをしてもし皮膚に当ててしまったらその時点で僕が失格になるのは間違いない。

こんなところで人殺しや大怪我とかは勘弁こうむる。

僕の攻撃を受け流したスイークさんが後退しつつくると器用に回って槍を振るう。

遠心力で十分に加速された槍による薙ぎ払いは広い範囲に対して十分な殺傷能力を誇っており、受ける僕からしてみたら洒落にならない。

「うわっ！」

あわてて魔力障壁を展開してそれを受けるが、少し体が浮く。

信じられないことに魔力障壁の衝撃緩衝能力を上回るほどの衝撃だったらしい。

・・・いや、ちょっと待て、こんなものをクリーンヒットした日にや複雑骨折と内臓破裂であの世行きだぞ。仮に首に当たってたら文字通り首が飛んでる。

翌日のニュースでは“武技大会で事故！安全管理に問題は無かったのか？”っていうテロップと同時に現場の映像が流れるに違いない。（もしくは“ポロリもあるよ”か？）
ともかく文句の一言でも言っただろう。

「殺す気ですかっ！」

言った、言っただけ。

ここが武技大会ってことも忘れて思いつきり。

あ、集中力が途切れたからスタンロッドが消えた。

「おいおい、真正面から魔力障壁で弾いた奴がいうセリフじゃないぞ」

「そういう問題じゃありません」

「そういう問題だろう？ 俺は楽しい。真正面から俺の一撃を受け止めるような奴を見たのは久しぶりだ。・・・全力で行かせて貰うぞ」

今の一撃は全力じゃないのか!?

じよ、冗談じゃ・・・。

エルには怪我をしない程度に頑張ると言ったし、こんなところで怪我なんてしてられないぞ。

やってられないのでスタンロッドを再展開してスイクさんの方へ切り込む。

先ほどと同じように器用に石突を使ってそれをかわしてくるが、今度は後ろに逃がさない。

右へ薙ぎ、突き、さらに一歩近づいてからすくい上げるように左斜め下から右上に叩きつける。

さらに最後の打撃の際の勢いを利用して相手のすねを蹴りつけるが、残念ながらいずれの攻撃も有効打となることはなくて全て受け流される。

おまけに最後の蹴りの隙を突かれて距離を取られてしまった。

身体能力に物を云わせての攻撃で技の欠片も無いからこういう結果になるんだろくなあ。

「やるな、その年齢からは想像も出来ん。今度はこちらの番だ」

わざわざ喋ってから攻撃に移るあたり本当に楽しんでやっているらしい。

表情も凄く楽しそうで、僕からすればおっかないことこの上ない。

そんな恐怖の笑顔のまま振りぬかれた槍を魔力障壁で受け流す。先ほどとは違って斜めに弾いてやるので体が浮くようなことはない。それでも衝撃が腕に伝わって来るあたりとんでもない威力なのがよくわかる。

次々と振るわれる槍をなんとか斜めに弾いて受け流す。

たまに突いてくるので、それはスタンロッドで弾いてから体をステップさせることで避ける。

剣と剣で戦った場合はお互いが打ち合うサッカーのような試合になるんだろうけど、近接戦闘に向いたスタンロッドと中距離戦闘に向いた槍の場合は武器の特性の都合、どちらかが攻撃に入りだすとそれを逆転するのが難しい。まるで野球のようだ。

それでもあんな金属製の槍を振り回せば当然疲れる。

一体何合受け流したのかもわからないくらいだけど、徐々に槍を振るうスピードが落ちてきてるのは間違いない。

「はぁ……はぁ……。想像以上だな……」

「一撃でも貰ったら死んでしまいそうですし、僕としては生きた心地がしないのですが」

「息も、切らしてないのに、よく言う……。だが、これからだっ！」

突然、スィークさんの速度が上がる。

速度だけ見たら最初よりも明らかに早い。

『主！ 相手は生命力を使って身体能力を強化しているぞ』

『それってまずくない？ 放置したら死んじゃうんじやないの？』

『いや、明日の筋肉痛が酷くなるくらいだな』

『・・・そうなんだ』

一瞬スイクさんの心配をしたんだけど、凄く損した気分になった。まあここまでやらなかったくらいだ、あまり持続しないとかなそういう別の問題もあるんだろう。

つまり、ここさえ乗り切れば勝てる。

足元目掛けた高速の横薙ぎを下に弾いてから跳んで避け、続けるの突きの乱打はそれぞれを冷静にスタンロッドで弾く。

遠心力を利用した袈裟切りは弾くのが難しいのでまっすぐ垂直に魔力障壁を展開して受けると同時にバックステップで受け流す。

後ろに下がった僕に対して追撃を行うためにスイクさんがやや大振り気味に槍で突く。

・・・来た！

ついに僕が待ち望んでいたタイミングがやってきた。

疲労で判断能力が下がったのか、らしくない大振りの一撃を受け流しながら前進し、スイクさんの右肩にスタンロッドを押し付ける。

「があっ・・・！！」

全身の運動能力を一時的に無力化され、スイクさんは立っていることすら困難でフィールドにしりもちをついてから動けない。

「僕の勝ちですよね？」

「ああ、降参だ」

ややぎこちない感じの喋りだが、とりあえず僕もスイクさんも怪我無しで終われてよかった。
しなくて良い怪我はしないに限る。

「勝者は刃の嵐を乗り越え一瞬の間を突いたユート・カンザキだああああああ！！！！」

フィールドの端で待機していた審判がこちらにやってきて僕の勝利を宣言。

一瞬の静寂の後、次に来るのは熱狂的な歓声。

ふう、なんとか勝てた。これで次の試合に負けたとしてもエルに申し訳くらいは立ちそうだ。
良かった良かった。

6 (後書き)

「そういえばさ、この世界の単位ってどんななの？」

「単位？ なんの単位が知りたいのだ？」

「基本的にあれこれ全般なだけどさ、特に時刻が知りたい。武技大会で長時間待機してただけどこれが結構しんどくて・・・」

「教えるといつても・・・、時刻については前に見せてもらった主の腕時計と同じだぞ」

「ありや、そうだったの？ それにしてはあまり“何時”みたいなセリフを聞かないね」

「それは当たり前だぞ。時計は高いし、およそ個人が持てるようなものではない。主のこの道具はいつだって非常識だ」

「じゃあどうやって時刻を知るのさ、概念だけあってもしょうがないでしょ」

「大体は教会の鐘だ、朝と昼と夕方に一度ずつ鳴るからそれで大体の時間がわかるのだ」

「・・・それってめちゃくちや不便じゃない？」

「町に住む者たちからすればあまり不便は無いぞ、ただ、妾たちのように冒険者は待ち合わせが多いから不便に感じる人が多いだけだ」

「そ、そういうものなのかな」

「そういうものだぞ」

「僕の個人的考えだと現在時刻が30分単位でわからないのはかなりのストレスなんだけど」

「主のところは一体どれだけ時間に厳しいのだ？ 妾からすればそれ

はむちゃくちゃだぞ」

「んー……。学校に一分遅刻したら大目玉食らうくらいかな」

「そんなにか……。主のところは大変なのだな……」

「そんなことないよ、遅刻する人なんてほとんどいないし慣れちゃえば余裕だよ」

「そ、そうなのか？ 妾は朝が弱いしちょっと自信が無いぞ……」

『エルー、どこいるー？』

スタッフの人に明日の流れを聞いてからエルを探す。

時刻はお昼前には少し早いぐらいの午前中。

もうあと一時間もすれば飲食店には長蛇の列が出来上がるだろう。

そんな中でお昼御飯を買うのは面倒極まりないのでとつとつこの辺りからは離脱しておきたい。

『今観客席を出て階段を下りた辺りだ。主は今どこにいるのだ？』

『ありやー。まだ中にいたのか。こっちはもう外にいるから一度中に戻ろうか』

『こっちは混雑が凄くてまともに歩けぬ、妾が行くから主はそこで待っていて欲しいぞ』

『ん、なら今朝通った入り口の辺りで待ってるよ』
『了解だぞ』

外はまだあまり混雑というほどではないが、会場内の廊下はあまり広くないのでスループットが比較的低い。

そんな状況なのにもかかわらず僕らを含む少し気の早い人たちが一斉に動いているもんだから廊下が詰まってしまうているらしい。

僕は都内の通学ラッシュで押し合い圧し合いにある程度慣れているが、たぶんエルは慣れてないだろうししばらく掛かるかな。

来た道を戻り、会場入り口で待つこと5分弱。

綺麗な銀髪が人の波に溺れているのを発見、これを確保。

「お疲れ、大変だったね」

「大変だったぞ・・・窒息するかと思つたのだ・・・」

「頑張つたエルに質問、お昼は何がいい？」

「うーむ・・・お腹も減つたしなんだか戦つてもいないのに疲れたし肉々しいのが良いな」

「おっけ、じゃあ早速探しに行こうか」

会場周辺だけでなく、今の時間帯ならばそこかしこで飲食店が開いている。

リクエストは肉々しい料理とのことなのでそれっぽいお店を探すこと30分。

知らない町でどうやって探すんだって話なんだけど、コレには秘策があるっ！

狙うのは看板に食肉の絵かステーキなどの肉々しい料理が描いてあるお店だ。

ガルトでそうだったからこちらでもそうだと思うのだけど、肉料理メインの店は看板が肉料理だったり食肉の絵だったりしてるのだ。そういうお店は内に入るなり鉄板が置かれたカウンターが並んでいたり、もしくはベーコンやハムなどがギャフのようなもので吊るされたりして見ているだけでヨダレが出た。

当然料理も美味しかった。・・・ちよつと高かったけど。

もちろんほとんどの店で肉々しい料理 例えば鳥のから揚げや肉汁滴るビーフステーキなど の注文が可能だが、やはり専門店とそれ以外ではかなり大きな味の差がある。

今回は試合にも勝てたし、どうせなら美味しいものが食べたいわけ

「お、あの店はどつだろっ」

「ここからでも香辛料と肉の焼ける良いにおいがするな。とてもおいしいそうだぞ」

よし、今日のお昼はここで決定。

やや重そうだけど今日は既にかなり運動してるし大丈夫だろう。

「こんにちは、二人なんですけど入れますか？」

「こんにちは。ぜんぜん大丈夫ですよ」

なんかぼやっとした女の人だな。

果たして大丈夫なんだろうか。

店内はやや落ち着いた雰囲気。

カラフルな装飾品などは少しも無くて基本的には茶色か黒なのだが、壁のみが白でアクセントになっていてとてもゆっくりとした気分になれる。

案内等は無かったので適当に角に座るとすぐにメニューを抱えて先ほどの女性がやってくる。

なぜ抱えているのかというと、ここは紙で出来たメニューじゃなくて黒板に文字が書いてあるタイプなのだ。

これは当たりを引いた確率が高いぞ、黒板に文字つてことはその日仕入れたもので美味しい物を使うからこそなワケで。

こういうところではお任せにせず、この黒板の料理を選ぶのが僕の中での常識。

「エルは何にする？」

「ん、本日の肉料理のセットでトーフベーコンとオレーシアのパス

夕にするぞ」

「僕も本日の肉料理でお願いします。セットの Pasta はポロネーゼで」

「かしこまりました」

そういつてパタパタと戻るのを見送ると驚いた表情のエル。

「主がお任せじゃないのは珍しいな」

「いや、ごういうところなら僕も選ぶよ。黒板ってことは毎日の仕入れでよかったものを書いてるんだろうし。何よりこっちにもポロネーゼがあるとは思わなくて」

「ん？ 主のところにもポロネーゼはあるのか？」

「あるよ。ひき肉メインのトマトソースなんだけどこれが凄く美味しくてさ」

「ひよつとしたら主のところと同じような料理かもしれないぞ。トマトというのはちょっとよく分からないが、ひき肉メインのソースなのはこちらでも同じだ」

「エルの一言で凄く楽しみになってきた」

「お店もいい感じだし、きっと美味しいと思うぞ」

やや空腹に耐えつつ待つこと20分程度。

先に僕らのテーブルの上に来てきたのは Pasta。

エルの前に置かれたのはベーコンとレタスを塩ベースで味付けしたであろうもの、若干にんにくの香りがするので後に残りそうだけど実に美味しそう。

僕の前に置かれたのは確かにポロネーゼだった。・・・色が緑であることを除けば。

「久しぶりにこのタイプのカルチャーショックに出会ったな・・・」

「どうしたのだ？」

「僕の知ってるボロネーゼは赤いの、これは緑だから違和感が凄
んだよ。多分味は一緒だと思うんだけど……」

フォークを使って一口。

うん、確かにボロネーゼだ。

ひき肉のとソースのうまみが合わさって舌の上で絶妙なハーモニー
を奏でる。

……これは相当気合を入れてソフリットを作ったと思う。旨みが
かなり強い。

パスタはやや細めのスパゲティで肉が絡みやすくなっていて大変よ
ろしい。

湯で加減もちょうどアルデンテになっているので文句なし。

そういえばこつち来てからはじめてのパスタだ。

これ、もし乾麺なら旅行に持ってけるんじゃないか？

普通の冒険者たちは水の都合難しいだろうけど僕の場合関係ないし。
(どこかの軍隊は砂漠の真ん中で茹でたおかげで行動不能になった
らしいが……)

「どうなのだ？」

「やっぱり予想通りボロネーゼだった。美味しい」

見ればエルの目線はボロネーゼに集中。

「ちょっと食べる？」

「いいのかっ！」

小皿にスパゲティを乗せて、スプーンでソースをすくってからエル
に渡すとニコニコしながらそれを食べつくす。

毎度思うけどこのエルの表情は料理人冥利に尽きると思う。

「お待たせしました、本日の肉料理です」

「ありがとうございます」

テーブルに置かれた肉はおよそ250g程度のサーロインで、霜があるかは定かではないが見た感じ実にジューシーで素晴らしい。

料理を乗せているのも金属製のプレートで肉を冷まさないための配慮があつてとても嬉しい。

早速ナイフで肉を切って一口。

「これは・・・美味しいぞ」

「肉料理の中では今まで一番のヒットかもしれない」

サーロインの端は脂身と肉のバランスが対一程度で脂が多めなのだが、舌の上でとろけるような味わいがソースと混ざり合って絶妙な味わいになっている。

さすがに若干の脂っこさがあるので昼にはちょっと重いけどこれなら食べきれそうだ。

食べきつても大丈夫。そんな風に思っていたときが僕にもありました。

「ちょっと食べ過ぎたかも知れない・・・」

「うえっぶ・・・」

「エル、そういうのは女の子らしくないからやめたほうが良いよ」

「そうはいうがな・・・少しポリウムが・・・」

昨日のやや遅い朝食の後に暴食はやめようと思ったのに、次の日にはこの様である。

ややどころでは済まないほどに満腹になった僕らはお会計を済ませて散歩がてら公園へ。

ちなみに代金は銅貨40枚、美味しかったから文句は無いけどかなり高かった。

腹ごなしのために歩こうと思って二人で公園に来たのだが、お腹が重くしょうがない。

結局ここまで来たのはいいけどこれ以上歩くのは困難でベンチに座ってしまう。

「もう絶対暴食なんてしないぞ・・・」

「それは結構難しいことだと思っただが」

「いやでもほら、こんなに食べてばかりだと太っちゃうよ」

「妾は食べたものを全て魔力に変換しているから大丈夫だ」

エヘンとエルが胸を張る。

「・・・すっごい羨ましい体質だね、それ」

「ただし、変換速度は決して速くないからこのようにふらふらになるのは主と変わらぬがな・・・げぶ・・・」

「大丈夫？」

どう見ても大丈夫そうではないのだけど、こういうときは聞くのが

お約束でしょう。

「大丈夫だ・・・それよりも武技大会での主はかつこよかったぞ」
「ありがとう。試合は見てて楽しかった？」
「最高だったぞっ！ 主の最後の一撃は素晴らしいものだったのだ！・・・うえっぷ」

「あはは・・・。なんだかエルが僕に対してそこそこやれる的なことを言つてたけどさ、なるほど理解できたよ」

「そうだぞ、主は主砲が使えなくとも強いのだ。もっと自信を持つてもらいたいぞ」

「主砲つてそれはまた強烈な表現だね。あながち間違つてないけど」
個人的に思うのだが、最大の勝因は武器の重量差だったと思う。

相手の武器は最低でも10kgはあっただろうが、僕の武器は300gもない。

どちらの武器もクリーンヒットが一発決まれば相手を無力化できる威力を持っているのに重量差は最低でも33倍もの開きがある。

これは圧倒的なアドバンテージだった。

（スイクさんの槍がフルにスチール製だったとしたら20kg弱だけど、さすがにそこまでの重量があったとしたら人には振り回せないでしょ）

この武器の差があつたから体力的に有利に立ち回ることが出来た。仮に僕が同様の武器を持っていたら同じかもっと早いタイミングで息が切れていただろうし、重い武器ゆえに動きが遅れるから攻撃を避けることすら出来なかつた。

この辺が魔術師の強みだと思う。

武器も防具も超軽量、というより杖が攻防一体で僕の場合は300

g弱。

相手からしてみたら反則だっ！って叫びたくなると思う。

・・・少なくとも僕が相手だったら叫んだ。

「試合に関しては明日以降も頑張るとして。結局、一体なんで僕は武技大会に参加することになったんだらうね」

「カーデイス殿の推薦を受けたからであらう？」

「いや、そうなんだけどその推薦を受けた理由だよ。僕とカーデイスさんとの接点って考えてみても多くはないよ？」

「そういえば戦闘能力を見せた場面なんてリーナの救出のときくらいしかないな」

「そうなんだよ、いつつも薬草採取ばかりだったしね。仮に若干実力が見えたとしてもミリアさんを含め実力がハッキリした人なんていくらでもいるでしょ？」

二人して頭をひねるが情報が少なすぎて仮説すら浮きやしない。

馬鹿の考えなんとやらだし、気分転換にジュースでも買ってくるかな。

「ちょっとそこいらでジュースでも買ってくるよ。なにか欲しいのはある？」

「ありがとう。主と同じのが良いぞ」

「ん、了解」

「そんなに泣くでない、きつと大丈夫だぞ」

「グスツ・・・ヒック・・・ホント？」

両手にカップを持ちながら先ほどまでいたベンチに戻るとなぜかエ

ルが7、8歳の少女を慰めていた。
買い物時間なんて10分も無かったんだけど一体その間に何があつた？

「どしたの？」

「主が買い物に行つてすぐにこの子が現れたのだが、あまりにも泣いているものだから見ていられなくて思わず声を掛けたら余計に泣き出してしまつてな……。ようやく落ち着いてきたところだ」

やや憔悴したような表情のエルを見るに、随分苦労したことがよく分かる。

「その原因つてわかつた？」

「ちゃんと聞き取れているかが微妙なのだが、どうもプレゼントで貰つたヌイグルミを近所の悪ガキに取り上げられてしまったらしいで、どうしようもなくなつて泣いていたみたいだ」

「なるほど、了解」

僕は思う限りなるべく安心感を与えられる笑顔を浮かべてから少女のほつを向く。

「こんにちは」

「・・・ヒック・・・こんにちは」

クリツとした茶色の両目にいっぱい涙を溜めながらの挨拶は精神的に結構辛いものがある。

悪いことをしているわけでもないのに悪いことをしている気分になるぞ。

「ヌイグルミの場所つてわかるかな？」

「こくん、と少女が肯く。

「どうやら場所はわかるらしい、これならさくつと済みそつだ。」

「じゃあそこまで案内してもらっても良いかな？」

「うん」

ゆっくりと歩く少女の後ろを歩くこと10分弱。

少女が指差す木の上には確かに猫っぽいヌイグルミが挟まっていた。木はやや細いがなんとか登ることができそう。

「というかあそこにヌイグルミが挟まっている以上実績があるので大丈夫。」

「よし、やるか」

「どうするのだ？」

「木に登って取ってくる」

「・・・大丈夫なのか？ 登るにはいささか木が細いように思えるのだが」

「んー、多分大丈夫でしょ。仮に落ちても死ぬような高さじゃないしね。あ、ジュースは持っててもらえる？」

ジュースをエルに渡し、地面にバッグを置いてから木登り開始。

有り余る身体能力をフルに生かしてすると登りヌイグルミをゲツト。

楽勝って思った瞬間。

「あぶない！」

足元からボキリという音。

続いて浮遊感、その次の瞬間には地面に不時着。

強烈な衝撃が全身に伝わって視界にノイズが走る。
イタタ・・・結構きついな・・・。

「主！ 大丈夫か！」

「けほっ・・・。うん、大丈夫大丈夫。それよりもコレ」
「お兄ちゃんありがとう！」

又イグルミを少女に渡すと今までの表情から一転、花が咲くような笑顔に戻って凄く嬉しそうだ。

「もう取られないように気をつけるんだよ」

「うん、お兄ちゃん、お姉ちゃん。ありがとう！ またね！」
「またね」「またな」

走り去る少女を見送ってから満足げな表情のエルと僕。
今日はきつと良い気分で眠れそうだ。

7 (後書き)

1 ソフリット：甘味野菜をオリーブオイルで炒めて飴色にしたもの。洋食の定番

2 砂漠パスタはジョークです。弱小で有名なイタリア軍もさすがにそんなことはしてません。

8 (前書き)

あれ？ 変な時間に起きちゃったな。

時刻はよく分からないが、夜の帳があたりを包み込んでいるのでまだ深夜だろう。

寝なおせる時間なのか腕時計を確認しようとしたのだが、なぜか体が動かない。

あ、金縛りか。

国内海外問わず旅行に行くと結構頻繁に発生していたし、今回のだつて広義に解釈すれば海外旅行みたいなものなんだからそりゃ金縛りにもなるか。

毎回重いんだよ……。

金縛りの経験者はご存知だと思うけど、やたらに重いナニカが乗ってきてプレスされるような独特の感覚があつて地味ながら大変鬱陶しい。

大抵の場合数分もこの状態を我慢すれば体が動くようになるので我慢が何より重要だ。

だけど、いつもと違うものが視界の端に映る。

目を凝らして見ればそれは月の光で艶かしく光るナイフの刀身。

世界は全てが黒で染まっっていて、唯一ナイフの刀身だけが白く煌く。なぜかナイフを持つ人は見えない、そこだけが黒で塗りつぶされたようになつていて酷く不自然な光景が僕の目に映る。

ナイフを操る黒い塊はゆっくりと僕の上にまたがり、見せ付けるようにナイフを振り上げる。

ちよ、ちよ、おまつ・・・！

「うわっ！」

ガバツと布団をまくりながら上半身を跳ね上げる。

僕がいるのは王都の宿、隣を見れば小動物のように丸まったエルが気持ち良さそうに眠っている。

狭い部屋の中を見回したところでナイフを持った不自然な黒い塊なんてどこにもいない。

「ああ、酷い夢だった……。はぁ・・・寝なおそ。まだ2時じゃないか・・・」

いくら治安が悪いこの世界だからといって、金縛り+ナイフを持った犯罪者の夢なんていうのは勘弁してもらいたい。

こんなのが続いたら不眠症になりかねないぞ。

武技大会三日目。

一度やってしまえばそれに新鮮味はなくなるし、どきまぎすることもない。

僕は昨日とは打って変わって落ち着いた雰囲気維持したまま控え室で待機。

もちろん試合の順番が決まった時にもきっちり対応、同じ失敗を二度しないことはこの世で生きるために何より重要だ。

今回の順番は三番目。

どうも無名の選手や予選を突破した選手は前のほうになる傾向があるらしい。

三番目だとギリギリお昼前か、前二試合のタイミングによってはお昼過ぎに開始となる。

四番目以降の場合はお昼の後が確定するので一度控え室から出て好きに行動して良いみたいなのだけど、僕はぎりぎりそれが許可されない順番だ。

なんて微妙なタイミングなんだろう。

周りを見るとぶつぶつと独り言を呟く魔術師の男性や目を閉じてじっとする剣士などしかいなくておよそ世間話が出るような雰囲気ではない。

ちなみに今日の相手はこの独り言を呟く魔術師の男性。正直大分怖い。

茶色の髪に整った顔立ちなのでしゃんとすればかっこいいだろうになにかに追われて憔悴しきった表情はかなり残念なことになって

いる。

たまに聞こえる“納期が・・・”や“今のうちに予定だけでも・・・”などの声から何かに追い詰められているのは間違いないのだけどそんな状態ならそもそもここに居るべきではないのではないかと思ってしまう。

そんなわけで、僕のやる事といえばエルと念話して時間を潰すくらいだ。

『主、体調は大丈夫か？』

『どしたの急に？』

『今朝の主の顔色は相当に悪かったのな。まるで病気のようにだったぞ』

ああ、やっぱり顔色は悪かったか。

ってというか病気のようってそれ土気色ってことだよな。

あれ？ 結構やばくない？ この良好な体調はダメージを知覚していないだけか？

『いやね、ちょっと変な夢を見ちゃってさ。別に病気ってワケじゃないから大丈夫だよ』

『夢って・・・一体どんな夢を見たのだ？』

『殺されそうになる夢』

『・・・』

『いや、ほんとだから』

僕のことをジト目で見つめるエルの顔が容易に想像できる。頼むからレスポンスを返してくれ。

『主が無抵抗に殺されるようなことはありえないぞ、少なくとも妾が気づくのだからな』

『あはは……。ありがと。期待してるよ』

嬉しいような悲しいような。

可能なら女の子に守られるのではなく、女の子を守りたいっていうのは贅沢なのかな。

『うむ。任せて欲しいぞ。だからちょっと面白い話をしてくれ』

『ん、ひよつとして暇な感じか。でもエルには武技大会があるし見なくていいの?』

『主が居ないと遠くてよく見えぬのだ』

『そっか。うーん……。じゃあ今回は僕の世界における近接武器の歴史についてでどうだろう』

『おおっ！ それは面白そうだぞ』

楽しそうなエルの声。掴みはばっちりのようだ。

よし、これで暇な時間の対処はばっちりだな。

長々とエルと雑談することおよそ2時間強。

時刻はお昼を食べるのにちょうど良い時間。

そういった時間帯なので昨日に比べて観客の数は少ないのではないかと思ったのだが、予想に反して昨日と変わらぬ超満員でどこにも空席が見当たらない。

パ・リーグの野球選手辺りが見たら号泣するのではなからうか。

「さあ、両者揃ったところで紹介と参りましょうー!」

昨日と同じセリフ。

僕にしる相手にしる一度説明されているだろうにまた説明するのか。特に必要性を感じないのだけど、これがこの世界の様式美って奴なのかな。

「まずはユート・カンザキ選手だ。魔術師らしからぬ身体能力で魔剣を振るい、非常に高出力な魔力障壁で鉄壁の守りを見せるちよつと変わった魔術師だ。この試合でもきつと皆様を驚かせるような戦いを見せてくれるでしょう！」

あ、ちよつと内容が変わった。

さすがにでもこれ以上は変わらないかな。やること一緒だし。

「対する相手はユリス・カルシック選手だ。こちらは正統派の魔術師でなんと23歳の若さで宮廷魔術師の新人として活躍しています！一発の攻撃の重さは無いものの多数の魔術を効率よく使うその戦闘スタイルには目を見張るものがあり、一瞬たりとも目が離せません！」

戦闘向けの比較的長い杖を持ったユリスさんは先ほどから相変わらずうつむきながらボソボソと何かを呟いている。

周りの喧騒で上手く聞き取ることが出来ないが、少なくともプラス思考な呟きでないことくらいはさすがの僕にもわかる。

「さあ！ それでは武技大会三日目第三試合・・・始めっ！！！」

開始と同時に突撃するが、ぞわつとした感覚が背筋に走る。

慌てて右にステップアウトするとほとんど同じタイミングで足元から火柱が吹き上がり、辺りに炎を撒き散らす。

続いて正面から飛来する氷の礫を魔力障壁を使って真正面から受け止め、さらに飛んできた火球を潜り抜けるように前進してユリスさんの距離を詰める。ほとんどタイムラグ無しで次々に魔術が飛んでくるので休む暇がない。

先ほどの魔術を受け止めた感じ一撃でダウンというほどのダメージは負わない程度の威力だが、全て避けきるのはちょっと難しいかもしれない。

おまけにこういう魔術師つてもっと大きな声でキーワードを叫んでくれると思ったのに、ボソツとした呟きで発動するもんだから見てからじゃないと避けようがない。

ユリスさんが振るう長い杖に果たしてどれだけの種類の魔術が格納されているのかはわからないが、このまま初めての魔術を連発されると結構つらい。

火球を潜り抜けるように突撃したのはいいけど足元から出力される氷の刃にたたらを踏んでるうちに再び距離を取られた。

今の距離は開始時から少しだけ離れて大体15m程度。

距離を縮めるところか離れちゃったよ。

「僕はこんなところで負けられない！ 負けたらポーナスが無くなっちゃうんだああ！」

今、悲痛な叫びが聞こえた。

給料どころかポーナスが飛ぶって一体なにがあったんだろう。

しかし、悲痛な叫びと同時に複数の火球が発生してこちらに向かっ

てくる。

え？ それ、発動キーワードなの・・・？

慌てて魔力障壁を再展開して火球を防ぐが、再びゾクリとした感覚。背後で発生したそれに反応したときにはもう全てが遅かった。

避けようがないタイミングで発動した魔術は強烈な衝撃波を辺りに撒き散らして僕を吹き飛ばす。

「けほつ・・・」

どういう手品を使ったのかはさっぱりわからないがどうも僕の背後で魔術を炸裂させたらしい。

幸い威力は低かったのでやや脳が揺さぶられたくらいで今後の戦闘に支障はない。

正面からの火球は防いでいるのでよかった。

アレは直撃したらちよつと不味いことになったと思う。

魔力障壁を全方位に展開しながら進むのは強度的な問題で結構厳しいし、その内側で魔術を炸裂されたら目も当てられない。

止めといわんばかりの氷の礫をごろごろ転がって避けつつ立ち上がりステップイン。

これはあれだ、全部の攻撃を避けるのはあきらめよう。

被弾したら決定打になりそうなやつだけ弾いて突撃、後は野となれ山となれだ。

先ほどの魔術が直撃したのに突撃してくる僕に驚いたのかやや慌てたような様子で火球を放つが、精度が甘いので何をするまでもなく命中しない。

すっころんだ際に消えてしまったスタンロッドを再展開してから杖を横に一振り。

向こうは僕のことを知っているのかやや余裕を持って弾かれてしまっ
うがそれでも構わない。

こういうときは何より距離を取られないようにするのが重要だ。

対戦ゲームなどでは自分のレンジで戦うことが非常に重要だったが、
それは現実でも変わらない。

ユリスさんはちよつと戦ってみた感じミッドレンジで効率的な戦闘
行動を行うことが出来る。

僕はもちろん1m以内のショートレンジだ。

だから一回近づいたら離されちゃだめだ。

この距離で全ての魔術を全て捌くのは事実上不可能だと言ってもい
い。

つまり、相手が魔力障壁を展開しながら他の魔術を扱える場合それ
を避けきるのがかなり困難ということ。

新人とはいえ相手は宮廷魔術師だ。たぶんそれくらいはやってのけ
るだろう。

それでも距離を取られたら手がつけられないし、お互い消耗が少な
い場合一方的に叩かれるので先に僕が精神がやられかねない。

それにこの距離なら爆発系の魔術は自爆するから使えない。
ダメージは最小限に抑えられるはず。

やや適当気味に右へ左へとスタンロッドを振るう。

割とサクサクと弾かれるが、ユリスさんの顔からは明らかに余裕が
消えている。

「氷の礫よっ！」

ステップアウトしながらの魔術は予想通り殺傷能力が極めて低い氷の礫。

ただど予備動作のない魔術が複数発同時に発動されればそれを避けきるのは困難。

右手の辺りにやっつけて展開した魔力障壁を使って決定打となりえる頭部と鳩尾への直撃を防ぎ、左肩への直撃は甘んじて受けるが距離は取らせない。

・・・イタイ。

ただどこれでいける。

ユリスさんは僕が距離を取ってからしっかり防ぐと思っていたのだろう。

今のユリスさんは次弾装填のために魔力障壁を展開していないからいまさら間に合わないし、間に合わせさせるつもりもない。

「かはっ・・・」

僕の振るった横なぎの一閃は薄皮のような魔力障壁を一瞬で食い破り、わき腹辺りに命中。

ユリスさんはそのままぐらりと崩れ落ちる。

よし！ これでベスト8進出決定だ。

確かコレ以降は負けたとしても賞金が出るはず。

なんだかんだこの大会に参加できたのはラッキーだったかもしれないなあ。

「武技大会第二回戦勝ち抜きおめでとうございます。少々お怪我をなさっているようですので治療師を用意してあります。こちらへ」
「ありがとうございます」

控え室に戻るとすぐにスタッフの人の声。
どうも左肩の怪我を治してくれるらしい。
そういえばこの世界に来て初めての怪我だ。
未だにアドレナリンが出ているのか痛みはそれほどでもないが、ほつとくと多分痛くなるのでこのサービスは結構嬉しい。

控え室の隣のカーテンで区切られたスペースに入ると緑色のローブの男性が待っていた。

30に満たないくらいの年齢の男性は僕と同じような短い杖を持っていて、およそ治療師という言葉のイメージからはかけ離れた鋭い眼光で僕を見る。

もつともそのイメージは僕が勝手に持っているものなので、この世界の常識的にはこういうものなのかもしれないけど。

「さて、ちょっと肩を見せてもらいたいから服を脱いでもらってもいいかな」

「わかりました」

ジャケットとシャツを脱いでから男性の前に立つと肩をむんずとつかまれる。

「あたたたたたたた・・・。ちょっとちょっと。イキナリにするんですか!？」

「すまない。ほとんど後が残ってないな。痛みがないかと思って確認のため掴んでみたのだが」

「痛いに決まってるじゃないですか！　そういうのはもうちょっとゆっくりやってください!！」

脳内で痛みの信号がちかちかと点灯してまともに思考ができず、思わず口調も荒れる。

全く、患部を鷲掴みとかなんてことしてくれるんだろう。

「もうしないから安心してもらいたい。・・・といってももうつかまれても大丈夫になるがね」

男性が杖の先端を肩に向けて一言なにかを呟くと杖の先端に緑色の光が集まる。

緑色の光は杖の先端から肩へと流れていき、妙にあったかいような気持ちいいような、まるで温泉にそこだけ浸かっているかのような感覚がしてなんと不思議だ。

「もう大丈夫だろうか？」

再び肩をぐりつとつかまれる。

「イタツ!・・・くない？」

「そうだろうっそうだろうっ」

いつの間にか男性の表情は悪戯っ子のような表情になっており、とても満足げだ。

「これは・・・凄いですね。こんな経験は初めてです」
「私はこれでも一流だからな。その他の治療術と一緒にされては困る。もう大丈夫だろうから帰ってくれて構わないぞ」
「本当にありがとうございます。びっくりしました」

治療術か・・・これ、凄いな。

僕にも扱えるのかな？ 可能ならば是非取得したい技術N01だよこれ。

コレさえあれば料理の際のちょっとした切り傷ややけどなどを簡単に治せるし、あのちくちくとしたストレスフルな時間から金輪際オサラバできる。

そういえばエルも使えるみたいなのを前に言ってたし、ちょっと相談してみようかな。

大会のせいで対して広くも無い道は超満員だが、少し歩いてしまえばいつもよりやや人が多くくらいだ、というのはエルの話。

実際会場から離れるように1kmも歩いてみれば町並みはかなり日常に近づき、路肩では婦人の方々が世間話に花を咲かせてその周りを子供たちが走り回る。

そんな日常を謳歌する人々のためにあるような小さな噴水とベンチ、そこで僕らはジュースを飲みながらだらけていた。

天気は晴天、日差しはほどほど、気温は最適。

どうでもいい話題やネタをだらだらと話すには最適だ。

「それで治療術か」

「そうなんだよ。何とかならないかな？」

「なんとかといわれても魔術と治療術は根本から異なる技術だから一から勉強するようだよ」

「魔術がさらつと使えたから治療術もいけるかなって思ったんだけどなー」

「先ほどやってみて駄目だったではないか」

そう、あまりにも便利な治療術というメソッドを見た僕は早速エルにやり方を聞いて試してみたのだが全く発動しない。

どうも体内の生命力を相手に同調させてから重ねるといふ僕からすれば全くもって意味不明な行為をする必要があるらしいのだ。

「うーん、一から勉強すると時間が掛かりそうだしあきらめるしかないかなあ」

「それでいいと思うぞ、治療術は妾も扱えるしそもそも主はあまり

怪我なぞしないであろう」

「そうだね、あんまり怪我はしれないと思う。危険なことをするつもりも無いし」

話がまとまったところでジュースを一口。

青色一号をだばだばと入れたとしか思えないような真っ青なジュースは実にさわやかな酸味と甘みを持っていてなんとも美味しい。

ちなみにこのジュース、金属製のカップごと販売しているのだが一つ銅貨8枚もする。

ただしカップを返却すると銅貨5枚を返してくれるのだ。

紙コップやプラコップがないこの世界ならではの知恵だと思う。

「主が気になるならばここの図書館にでも行くとよいと思うぞ。観

光地の紹介や小説などもあるから少なくとも暇はしないはずだ」

「そんなところがあるんだ、ちょっと行って見たいから案内してもらってもいい？」

「昨日もそうだったが武技大会はいいのか？」

「どういっわけだか自分が実際にあの場に立ってからはあまり見る気にならないんだよ。なんでだろう、格闘技は嫌いじゃないはずなんだけど」

「妾に聞かれてもわからぬが……。まあ、主がそういっなら図書館へ向かうか」

図書館は本当に入っているのか何度も確認してしまうほどに立派だった。

建物自体に意匠を凝らしたレリーフが彫られているわけではないが、石造りの太い柱で構成された建物はシンプルで質実剛健、硬い雰囲気をあたりに漂わせている。

これがある程度の身分証明書を持つ人間には全て解放されているというのだから凄まじい。

図書館の中は大量の本棚が整然と並んでいて、その一つずつにみっちり和本が詰まっている。

一応文学や歴史、児童書などの分類に別れてはいるものの、大分類以外の仕分けが一切なされていないために目的の書籍を探すには随分と苦勞しそうだ。

とりあえずこの図書館で見つけない資料は三つくらい。

一つは僕のような人がほかに居ないかのチェック。これは住所不明で不思議グッズを保有する人物が登場する本でも探して見ればいかと思う。

次に適当な学術書、できれば物理がいいけどそこまで別れてなさそうなので学術書。これは生活するうえで単位とかの詳細が気になるので必要。

最後はちょっと見つかるかわからないが、この辺の地理の詳細を知れる本。こういう世界では地図は軍事上の問題で公開されていない可能性が高いのであればという位でよし。

観光名所についても調べておきたいが、見渡す限りのジャンルだとどれに該当するのが不明なため見つかればラッキーくらいのつもりで探しておこうかな。

「主はどんな本を読みたいの？ 探すのを手伝うぞ」

「ありがと、じゃあまずは歴史書かな。長い歴史があれば僕みたいなのが一人二人くらい居てもおかしくないような気がするんだ」
「なるほど、了解だぞ」

まとめて言うとジャンル入り混じりでドサツと来そうなのでさしあさっては歴史書メインでいいかな。目的志向で考えればこれが最重
要だし。

無事にあっちとこっちを行き来する方法が見つければベストなんだけど、そう上手くは見つからないだろうしとりあえずヒントだけでも得られれば御の字か。

「妾は向こうからそれっぽいのを探してくるぞ」

「ん、了解。でもあんまり沢山だと僕が読みきれないから2、3冊も見つかればもうそれで十分すぎるほどだと思つよ？」

「さすがに持ってきたものを全て主に任せてしまおうとは思つておらぬから大丈夫だぞ」

「なるほど、じゃあよろしく頼むよ」

向こうのほうに歩いていくエルを見送りつつ本棚に目を通していく。
“ファルド王国の歴史6000年について”だと範囲が広すぎてちよつとつらいかな。というかこの国の歴史って6000年もあるんか。滅茶苦茶平和な国だなこゝ。

“28年度版 宮廷魔術師認定試験対策 問題集編”ってこれ歴史のジャンルなの？ ために中をぺらぺらめくってみたらこの国の歴史とか偉人の名前とかが4択問題になってた。なるほど。

この世界でも勉強は重要で大変だ。

しかも国立大学って一個しかないらしいしその苛烈さはきつと東大以上な気がする。

そんな風に立ち読みしながら探してみるものの、なかなかこれだというものが見つからない。

見つかるのは年表や試験対策本、または現在までを300ページ弱でまとめた教科書のような歴史本。

最後のはある程度人物などの紹介もあるが、そんな広く浅くな本に異世界に行く方法や、そこから来た人物の紹介なんかが載っているとは到底思えない。

本棚を占める割合で特に多いのが試験対策本で、本棚によっては年度別の試験対策本で埋まってしまっている。

さすが歴史の長い国だと思ってしまうが、探す側からしてみれば溜まったものじゃないってどうか昔の試験対策本なんて誰も読まないでしょ。

もし僕が試験を受けるのなら読んだとしても5年前、これ以上古いのはまず読まないぞ。

それっぽい本を見つけることが無いまま時は過ぎ、気がつけば向こうのほうに居たはずのエルがすぐ側まで近づいていた。

小脇に本を抱えている辺りどうやらそれっぽい本はあったらしい。

「エル、こっちは駄目だった。見た感じ本もあつたみたいだし一度に沢山読むのは時間的に困難だからその辺で切り上げてちよつと確認作業のほうに入ろう」

「了解だぞ」

この図書館は結構ユーザビリティが考えられていると思う。

壁には複数の長机が並んでいるので手に取った本をすぐに読み始めることが出来るし、あまり明るくないものの魔術による光源だつて用意されている。

長机の利用者は結構まばらで、見た感じ僕と同じかちょっと若いくらいの人たちが多い。彼らは必死に本を読みながらなにかを書いていたり、ぶつぶつと呟いたりしている。

ちよつと不気味なんだけど、この光景には思い当たる節がある。

そう、受験勉強だ。

僕だって3年前には毎日予備校に通い、休日は図書館で勉強したもんだ。

・・・なんだかよくわからないが負けてられない気分になった。

「さて、早速エルの持ってきた本を見せてもらっても良い？」

「うむ。どれから読むのだ？」

エルの持ってきた三冊の本を見る。

“デインナの軌跡”

“ナンセナ村の悪夢”

“魔術の歴史”

どうみても最後以外の小説に見えるのだが……。

でもエルが折角持ってきてくれたのだし、何らかの理由があるんだろう。

「これから読もうかな」

そういつて一番近かった“デインナの軌跡”を手に取り、ざつとページを開く。

厚みはちよつとした辞書並みだが、紙一枚の厚みがあるので実際のページ数はそこまで多くない。

これなら2時間もあれば斜め読みくらいできるだろう。

「ふう」

デインナの軌跡を読み始めて2時間弱、予想通り斜め読みが完了。ページ数は500弱、異世界特有の言い回しが多く内容はあまりつかめなかったが、とにかく僕と同郷らしき人物が登場しているのは確認できた。

まずこの物語の舞台は500年前（！）の名も無き小さな村。同郷らしき人物の名前はジウン・イノウエ。

最終的に彼は元の世界に帰るのをあきらめて宿屋の娘と結婚している。

魔術に関する描写は無かったが、そもそも戦闘に全く巻き込まれることなく話が展開しているのでその辺は不明。

ちなみに作中で使用されている単位系が完全にSI単位系だった。ひよつとすると昔に僕の世界の学者か何かがこっちに飛ばされて広まったのかな。

「はぁ……。この人帰ってないよ。第二の故郷を自分で作っちゃってるよ……」

「そうであったか……。ナンセナ村の悪夢に関しては妾が読んだから説明するぞ?」

「ありがとう、お願い」

「うむ、この作品はナンセナ村の村長が書いたものだが、ある日村にサクラという黒目黒髪でこの世界の一般常識をほとんど知らない少女が登場する。興味を持った村長が村に泊めてどうのこうと話が進むのだが、最終的に大量の魔獣に襲われて村が存亡の危機に

晒されたとき、彼女が強力な魔術を用いて村を救っている。この後サクラという少女は帰る方法を探すといって村を出るので詳細は不明だ」

おうふ。

彼女も帰り道を探す旅には出るけどその後の詳細は不明か。

「なんというか僕と似た境遇の人が結構居ることになり驚いた。出来れば会いに行こうかと思うんだけどどうだろうか?」

「それは難しいと思うぞ、この話はおよそ800年前のことで、吟遊詩人の語りを本にまとめたものだし、サクラ自身も旅に出てしまっているのだからな。むしろディンナの軌跡のほう会いに行きやすいのではないか?」

「この人帰る方法探してないから意味無いし、それにこの話も500年くらい前の話みたいなんだ」

エルには悪いから言わないけど、この世界の技術レベルの進歩は遅すぎるっていうか完全に止まってしまっているんじゃないだろうか。

おそらく中途半端に便利な物によつては現代日本よりも便利

魔術のせいじゃないかなと思うんだ。

もしこの世界で科学技術が十分に発展すればコンセントのいららないノートPCとか、念話を利用したどこでもインターネットとか開発できそうだよなあ。

なんだかそうやって考えると凄くもつたいないような気がしてならない。

「ちなみにこの本はどうやって探したの?」

「ぺらぺらめくってあまり見ない名前の登場人物を探したぞ、見逃しているのも多いだろうし探せばもうちょっとあるはずだ」

「なるほど・・・」

名前か、意外な盲点だった。
こりゃ探せば100年に1人はこっちに来ているんじゃないだろうか。

ただ、不思議なのは最近風の名前だというのに話の舞台が何百年も前ということ。

こっちに飛んでくる際に時間も合わせてかつ飛ぶのかな。

まあ、考えてもわからないからどうでもいいや。

「うーん……。これ以上のことはちょっとわからなさそうだね」

「そうだな。残念ながら主の帰り道はわかりそうに無いぞ」

「だとまあとりあえずコレに関する調査はクローズで良いや、あとは観光本みたいなのがあればちょっと読みたいくらいかな」

「観光本？ どこそこの地方では景観地として何があるか、というような本か？」

「うん、一度ガルトに戻るのは確定として次の目的地が無いからそれつかって探そうかと思ってるんだよ。どうせぶらぶらするなら楽しい場所のほうがいいでしょ？」

「主、予定が決まってないなら東のテューイに向かわないか？ ここから乗合馬車で乗り継いで二日くらいのところにある港町なのだが、魚が美味しいと評判だぞ」

「それはいいねえ。是非そうしよう」

魚か、久しく食べてないな。

塩焼きにムニエルに香草焼き、それと魚介類のスープに地酒。

港町ってことは景観も今までの山と草原から随分と変わるだろうし楽しみだ。

「ふふつ、主は食いしん坊だな。顔がにやけておるぞ」

「あはは・・・。否定できない。よしっ、こんな話してたらお腹減ってきたからご飯食べに行こう。今日はまだお昼ご飯も食べてないのに15時回っちゃったし」

「もうそんな時間になっていたのか。そういわれると凄くお腹が減ってくるから不思議だぞ」

「とりあえず図書館出て来た道戻ろうか、確か定食屋があったはずだ」

「了解だぞ」

いまさら空腹に気づいた僕らはいそいそと図書館を出て定食屋へさて、今日は何を食べようかな。

武技大会四日目、ついに準々決勝である。

大会開始当初はここまで勝ちあがれるとはとても考えておらず、正直あまり現実感がない。

フィールドでは対戦相手の少女がこちらをまつすぐに見据えているようだが、僕はふわふわとした気分少女を眺めている。

相手の少女はエルほどじゃないがかなり整った顔立ちをしていて、深い海の色の瞳とあわせてみればどこかのお嬢様のよう。

しかし、冒険者らしい動きやすい服装に長剣をぶら下げ、艶やかなチョコレート色の髪をポニーテールでまとめているためか少女の雰囲気は快活という言葉がぴったりと当てはまる。

身長は僕よりも若干高いくらいなので女性としては高いほうだと思う。

細い両腕からはどうみても剣を振り回すだけの筋力があるようには見えないが、この世界では生命力を変換して身体能力を強化できるので体格から筋力を予想することは困難だ。

「さあ、いよいよ準々決勝となりました！ フィーリア・ナルベル選手対ユート・カンザキ選手です。準々決勝まで戦い抜いた彼らにもはや紹介は必要ありません！」

審判が黄色のフラッグを振り上げる。

「武技大会準々決勝戦・・・開始！」

開始と同時に相手が距離を詰める。

小柄な体格からはとても想像が出来ないほどの速度、まるで砲弾のようだ。

「セイツ、ヤッ！」

掛け声は姿相応の可愛らしい声だが、繰り出された内容は凶悪そのもの。

ほとんど白い閃光にしか見えないほどの袈裟切りは魔力障壁を使つてなんとか弾くが、連続した切り上げは途中から円軌道を描いて足元へ。

慌ててスタンロッドでそれを受け流して距離を取る。

なんだあのむちゃくちゃな剣の動き方は……。

振り上げてきたはずの剣がグリツと回つていつの間にか足元を狙つてきたぞ。

間違いなく今までで一番キツイ。

何がキツイって相手の武器もショートレンジ向けだから近づいても一方的に叩けない状況がキツイ。

攻撃するのか防御するのかどちらか一方なら良い。これは結構慣れた。

だけどサッカーのように防御しつつも攻撃するような行動にはまるで慣れてないから判断が遅れるし凄くやり辛い。

とはいえ防御だけじゃ詰んでしまう。

なんとか攻撃出来る状態に持っていきたいのだけど先ほどから続く相手の剣がそれを許さない。

再び距離を詰められての胴薙ぎを魔力障壁で受けてからスタンロッドで引っ叩こうとするが、そのときには既に距離を取られてしまつていて当たらない。

さつきから完全に翻弄されている。

袈裟切り、胴薙ぎ、足払い、切り上げ。

その何れも単体で避けるのは難しくないが、そうあるのが自然であるかのように連続して技を振るわれるとどうにもこっにも相当厳しい。

結局できることといったらスタンロッドでの牽制くらい、まともに攻撃に移れん。

もう何合避けたかわからないくらいに避けているが相手の動きは僅かすらも遅くならないし、元気なままだ。

このままじゃ相手が疲れる前に僕が一撃貰ってダウンだな。ちよつと変り種でいってみよう。

一度相手の攻撃を受けてから大きめにステップアウト。

5 mは距離を取ってから意識を集中。

杖の先から4つの魔力球を生成。

イメージするのはスモークグレネード。

相手が僕を警戒して近づいてこなかったのはラッキーだった。

そのまま相手と僕の間を線に引くようにスモークグレネードを射出。着弾と同時にイメージ通りの勢いで煙があふれ出してあつという間に相手が見えなくなる。

これで準備はOK。

さらに魔力を流して集中。イメージするのはサーマルスコープ。

熱源感知式に切り替えられた視界はグレースケールで距離感を掴みにくいという欠点があるものの相手の姿をハッキリと視認できる。

どちらの魔術も初めての使用だったが上手く発動してよかった。

物によってはいくらイメージしても上手くいかないのもあるんだよね……。

たとえばテザーとかをイメージすると非殺傷のはずなのに対象が黒焦げになってしまう。

ま、そんなことはどうでもいいか。

すっかり煙に包まれたであろうフィールドを走り、相手の後ろに回ろうとするのだが足音に反応しているらしく必ずこっちを向いてくる。

・・・僕の相手は果たして本当に人間なんだろうか。

通常の視界だと2m先も見渡せないほど煙いんですけど。

そんなわけで後ろに回るのはあきらめ、正面から突撃してスタンロッドを振るう。

相手からしてみれば僕が突然現れたかのように見えるはずなのに対処は恐ろしく冷静。

肩口を狙ったスタンロッドを最小限の動きで受け流すと相手はやや大きめにステツプアウト。

続いて大振り気味にこちらへ突撃。

「ヤアアアアッ！」

気合一閃なんて言葉が思わず出るような一撃を魔力障壁で弾こうとしていきさら気づいた。

相手の武器が見えませんが。温度が無いので。

気にせずに正面に展開していれば問題なかったはずなのだが、敵の武器が見えないということに驚いているうちに間に合わなくなってしまう、気づけば相手は目の前。

振りぬかれた剣とわき腹への強烈な衝撃。

こういうのなんていうんだっけ・・・そうだ、自縄自縛だ・・・。
暗転する視界の中、最後に思ったのはそんなくだらないことだった。

気づけば僕はベッドの上。

明るく清潔感のある室内はどこか病院のようだったっていうかここは多分病院だ。

右腕が妙にしびれて重いので見てみれば、頭を乗せたエルがすやすやと眠っていた。

右手でタオルを掴んでいるあたりどうやら側に居て看病してくれたらしい。

そう思うととても嬉しくて、思わずそのさらさらな銀髪に触ってしまっ。

指に一切絡みつかないさらさらとした髪、一体どうやって維持してるのか微妙に気になるところではあるなあ。

「んっ・・・あれ・・・主？」

「ごめん、気持ち良さそうに眠ってたのに起こしちゃった。宿に戻ろうか、まだ眠いでしょ？」

「くあ・・・。大丈夫だぞ。しかしもう朝か、どうやら一晩眠ってしまったようだな」

・・・え？

「ちょ、ちょっと待って。一晚？ 試合が終わって倒れたまま日が変わっちゃったの？」

「そうだぞ。なかなか目を覚まさないから心配したのだぞ」

「それはなんとというか・・・うん、心配かけてごめん」

「主が無事ならそれで良いのだ。しかし起き抜けにしては随分と元気だな、痛いところとかはないのか？」

「ん〜」

首を回して腰をひねる。

丸一日眠っていたせいaka体が凝ってしまったみたいで結構気持ちいい。

背筋を伸ばすとバキバキと音が鳴り、自分の体ながら驚いてしまった。

腹部の辺りに鈍い痛みがあるものの歩けないほどじゃないな。

「うん、大丈夫。問題ない」

「じゃあ出るとするか、一応挨拶くらいしたほうがよいと思うから担当の治療術師を呼んで来るぞ。主はちょっと待っていてくれ」

そう言つてエルは部屋から退出。

・・・急に部屋がさびしくなった気がする。

改めて部屋を見回してみるとベッドとイス以外には何もなく、辛うじてエルが座っていたであろうイスの側に僕のバッグがあるくらい。あとは本当に何も無い殺風景な個室だ。

起き上がって靴を履いてから待つこと5分弱だったと思う。

ノックの音と共に先日お世話になった治療術師の方とエルが戻ってきました。

「また会ったな」

「お世話になっております」

「あまりお世話にならないほうがいいと思うがね」

「・・・全くその通りだと思います」

うわ、この人結構キツイ。

全くもって事実だから反論できない辺りがより厳しい感じだ。

「体調はどんな感じだ？」

「腹部に鈍い痛みがありますがそれ以外は大分良い感じですね。意識が飛ぶほどの強烈な一撃を貰ったとは思えないほどです」

「そりゃあよかった。だが、あんまり従者を心配させるんじゃないぞ。お前さんがここに運ばれてきたときの彼女の取り乱しっぷりは見ていられないくらいだったしな」

「なっ・・・。そ、そんなことは無いぞ。妾はいつだって落ち着いておるぞっ！」

「まあ、そういうことにしておこうかね。ともかく体の調子がいいならここに居る必要もないな。宿も別に取っているんだろうし戻ってくれて構わないぞ」

「ほら、主。術師もそういつているし早く行こう」

「わかったわかった。だから手を引く張らないで・・・。すいません、ありがとうございます」

ずるずると手を引かれながら辛うじてお礼だけを済ませて部屋から退出。

倒れたときに心配してくれたって言うのは僕としては嬉しいことなんだけどエルのには恥ずかしいことなのかな。

それでもここは一つきつちりと感謝の言葉を言うべきだろう。常識的に考えて。

なにより思ってるだけじゃ伝わらないしね。

「エル」

「どうしたのだ？」

「看病ありがと、それだけじゃなくて何時も感謝してるよ」

「なっ、何をイキナリ言うのだ。妾は主が無事ならそれで良いのだ！ 改めて言われると恥ずかしいぞ！」

「こづいうのは実際に口に出して言うことが大事なんだよ。今後もよろしくね」

「今後もなんていうのは当然だぞ。主と妾は契約によって結びついているし、何より妾は主のことが好きだからな」

“好き”といわれて一瞬思考が止まったが、冷静に考えてみれば今の話し方の場合の“好き”はLikeの好きであってLoveの好きではないだろう。

落ち着け、こんな美少女に言われるとLoveのほうと勘違いもしたくなるけど現実を見るんだ。

現実には甘くないぞっ！

幼馴染にいけると思っただけで告白して失敗して凄く気まずくなったことが昔あったじゃないか。

二人旅という状況でそんなことになったら気まずいってレベルじゃすまないぞ。

「今後も“契約で縛られているから一緒に居る”にならないように頑張るよ」

「別段頑張っただけを必要は無いのだが……。むしろあまり無理をして今回みたいに倒れられたらそっちのほうが駄目だぞ」

「うーん……。それならとりあえず今日は真っ直ぐ宿に戻るうか。」

「やっぱ体がちよつと重い」

「うむ、そのほうが良いと思うぞ。妾は市場で果物でも買って帰るから主は先に戻っていてくれ」

「了解、先戻ってるよ。お金は大丈夫？」

「前に貰った銀貨がまだ残っているから大丈夫だぞ」

そんなわけでエルと別れて僕は宿へと一直線。

無視できるほど小さくはないが、声を上げるほどでもない鈍痛に辟易しながら歩くこと30分程度でようやく自分の部屋へ到着。

うん、予想よりかなり時間が掛かった。

エルには問題ないって言ってしまったけど、やっぱダルいな。

どうせなら治療術で全部治してくればよかったのにも思ったけど、（自称だが）腕の良い治療術師でも治らないってことは内臓系へのダメージは治りが遅いとかそういうのがあるんだろうか。

やれることがなにもないのでベッドの上で考えてみるが、治療術に関しては調べることを放棄してしまったからよくわからない。

内出血系が駄目って言う理由なら前の試合の怪我はあんなにすぐに治らないしなあ。

ともかく痛みが残っている以上何らかの制限があるのはほぼ間違いないなさそうだ。

世の中そんなに上手く出来てないってことなんだろう。

・・・お、ドアが開く音だ。

「主ー。ただいまだぞー」

「おかえり、エル」

「いくつか果物を買ってきたのだ。ほら、主の好きなやつだぞ」

そういつてエルから渡されたのはリンゴ。
真っ赤に熟していて見るからにおいしそうだ。

「ありがと。今剥くからちよつとまってね」

バッグからコップフェルとナイフを取り出して受け取ったリンゴの皮を剥く。

この世界の果物はもちろん無農薬なのでそのままかじっても問題ないが、剥いたほうが美味しいのは間違いない。

ナイフを使って皮を剥き、8分割してから芯を抜く。

ベッドの上で作業をしているので果汁をこぼさないようにするには結構な集中が必要だ。

あんまり果汁をこぼすとベタベタなベッドの上で生活することになってしまう。

「おっけ、出来た」

「何度見ても凄いな、皮が途切れていないではないか」

「慣れれば結構簡単だよ」

そういいながら手づかみでリンゴを一口。

シャリシャリとした食感と共にイチゴ特有の甘みが広がって実に美味い。

・・・毎回脳が混乱する味だなあ。

「うん、美味い。数ある果物の中でもやっぱりコレが一番美味しいな」

「確かに甘みと酸味のバランスが良いな。食感も悪くないし」

「お腹にたまるのもポイント高いね」

「そうだな。朝食くらいならこれだけでも良いかも知れぬ」

エルが買ってきたリンゴは三つ、それを二人でバクバクと食べると意外とお腹に溜まる。

うん、朝食にはやはりリンゴだな。ヨーグルトがあればなお良いけど今のところ見かけたことはないので諦めるしかないか。

「明日以降体調がよければちょっと依頼でも請けに行こうか。武技大会の賞金が出るといっても8位程度じゃあまりたいしたお金じゃないだろうし稼ぐに越したことは無いと思うんだ」

「そうだな、確かにもう銀貨数枚しか残っておらぬしある程度仕事を請けないことには別の町に行くことすら出来ぬぞ」

「あはは、すっかり武技大会貧乏だよ。ここ来たときには銀貨30枚以上もあつたのに・・・」

「大会期間中は仕事を請けられなかったし仕方が無いだろう。幸い主は賞金が出るから一方的に損というわけでもあるまい」

「そうだね・・・。そこだけは良かったと思う。というわけで明日以降の予定が決まったところで僕は少し寝るよ。暇だったら音楽でも聴いていてくれて構わないから」

コツフェルを床においてベッドに横たわるが鈍痛は消えない。

はあ、この鈍痛が明日以降に治ればいいんだけど。

こういうあざみみたいなタイプの痛みって長続きするんだよなあ・・・。

「おやすみ、エル」

「おやすみ、主」

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。さすがに丸二日も寝てれば全く問題ないってば」

武技大会で負けてから早三日目。

なんとあの鈍痛は一日寝ただけじゃまるで治らず結局丸二日という長い時間をベッドの上で過ごす事になってしまったのだ。

おかげで武技大会の準決勝も決勝も見れずに終了。残念極まりない。実は昨日痛いのを我慢して立ち上がったらエルにひっぱたかれて悶絶した拳句倒れこんでしまい、言われた言葉は「ほら、まだまだ怪我人ではないか」である。

正直文句の一つでも言いたかったのだけど、甲斐甲斐しく看病してくれたりするもんだから全く強く出れなかった。

決勝戦くらいは見るつもりだったのになあ……。

今だって痛みが完全に消えたわけではないし、全く問題ないって言うのは嘘なのだけど行動に問題があるほどの痛みは無いので今度こそばれないだろう。

そういえば大会の賞金である金貨2枚はエルが持ってきてくれた。普通こういうのって本人じゃないと受け取れないと思うのだが、エルが意気揚々と僕のギルドカードを持って出て行ったら一時間くらいで賞金を持って帰ってきた。

大丈夫かこの世界。オレオレ詐欺とか心配だぞ。

「主は今日からギルドで仕事を請けるのであろう？ 体の調子が悪

いと安全な仕事も危険になるのだぞ？」

「さすがに一回怪我したくらいで心配し過ぎだつて。危険度の高い依頼を請けるつもりなんて欠片ほどもないから大丈夫だよ。いずれにせよ宿の期限も今日で終わりだし、とりあえずギルドに向かおうか」

そんなわけでちょうど良い依頼はないかなーなどと考えながらギルドへとやってきたのだが、なんだかいつもと様子が違う。

王都のギルドでは各種手続きを専用のオペレーターが担当しているはずなのだが、なぜか今日はギルドマスターと思しき身なりの良い服装の男性が対応をしているのだ。

あれか、“お前じゃ話にならんつ、上司を出せっ！”って奴か。

そんなギルドの男性相手に啖呵を切っているのは冒険者というにはいささか若いような気がしてならない少女。たぶん13、4歳程度かな？

薄緑の透明感ある髪を短めにカット、勝気な瞳にキリツとした鼻立ちでなんとも性格にマッチしていると思う。

その後ろには同じくらいの年齢と思われる金髪ショートヘアの少年。若干たれ目で彫りの薄い顔はやさしそうな、という表現がぴったりだ。

「どうして駄目なのよ？」

「その金額で受ける冒険者なんて居ませんよ。ギルドに依頼をするのだから無料ではありませんし、それではあまりに意味が無いでしょうっ？」

「そんなのやってみないとわからないじゃないの！」

「一度学園に戻ろうよ。そうすればお金だつて何とかなるし」

「そんなことするくらいなら私達だけに行くに決まってるでしょう」

「かっ！」

「どうやら安値で冒険者を雇おうとしているらしい。」

「この世界の常識を無視した個人的な考え方だけど、少年少女を相手に高額な報酬を期待するほうが間違っていると思う。」

「場合によっては命が掛かる以上無償でやれとはとても言えないが、冒険者は基本的に大人なんだからある程度考えてあげればいいのに。」

『エル、ちょっと話を聞いてあげても良いかな？』

『主ならそう思うと思うぞ。ただ、あまりに危険な依頼だった場合は反対させてもらおうぞ』

『その場合はエルに反対されるまでも無く請けないから大丈夫だよ』

「話がまとまったところでじっくりと笑顔を作ってからご挨拶。」

「笑顔って超重要、たったそれだけで話し合いが簡単にまとまったりするからね。」

「こんにちは」

「えーっと……どちら様？」

「少女は胡散臭い人物を見るような目で、少年と男性はやや驚いたような目で僕を見る。」

「あ、あれ？ 笑顔の効果が薄いな。こ、こんなハズじゃなかったんだけど。」

「依頼のこともめていたので、ひよっとしたら力になれるかなーなんて思ってるんですけど」

「依頼を請けてくれるの？ ほら見なさい。やっぱりやってみないとわからないじゃないの」

「ちょ、ちょっと待ってもらえます？ 内容を聞かないとなんとも」

「言えないですよ」

少年と男性に対してエヘンと胸を張る少女に慌てて突っ込みを入れる。

「あんまり流されるのは困るのだっ！」

「依頼の内容については私が説明します。端的に言ってしまうえばチエネス周辺を探索する彼女達の護衛です。期間は移動込みで4日間、報酬は銀貨12枚になります」

ん？

別に安くは無いいんじゃないか？

前にやったガルトから王都までの護衛で銀貨14枚だったし、期間も一日短いのだからそんなものだと思うんだけど。

「もめるほど依頼料が安いとは思えないのですけど？」

「報酬自体はそれほど安くありませんが、食費や医薬品などの補助が無いためご自身で購入する必要があります。そうなる事実上の報酬は銀貨8枚を割るか割らないかという程度まで落ち込んでしまつたため、この手の依頼の中ではかなり割安になってしまつています」

「あー……、そういうことですか」

確かに銀貨8枚を割つちやうときついな。

一日単価で考えると請けるのはFランクの冒険者くらいなんだろうけど、それを護衛につけるとするのはさすがに不安があるだろう。

ただ、この依頼にも利点はある。

まずは食料品が自分もちということ、これならあのありえないほど不味い携帯糧食を食べなくて済む。代用品はフリーズドライやクラッカー、干し肉に燻製なんかもありだろう。

どれにしたってあの携帯糧食よりは幾らかマシ。仮にお金が掛かったとしても、だ。

医薬品に関してはバッグの中に衛生キットがあるし、エルの治療術だってある。

少なくとも買う必要は無いので欠点にはなりえない。

なによりこちらを見つめる少年少女の瞳を見ればもうあまり断る気になれないんだよなあ。

「最後の質問なんですけど、わざわざお金を出してまで護衛が必要な理由って何でしょう?」

「彼女達がチエネス周辺でゴブリンの集団に襲撃されたからですね。ちなみにギルドはゴブリンの集団を調査するために冒険者を派遣しています。なので別にユートさんがこの依頼を請けなかったとしても後数日もすれば結果が出るでしょう」

「ん? 彼女達の依頼で、ではなくてギルドが自主的にですか?」

「ええ、チエネス周辺は商人が多く通る地域でもあるので放置するのはギルドとしても問題がありますから」

周辺の治安維持って僕のファンタジー知識だと国お抱えの騎士団とかそういうのが担当しているような気がするんだけど、この世界だとギルドが受け持つのか。

なんたる、国とギルドの間で何かしらの契約でも結んでるのかな。

「思ったより結構いろいろやってるんですね。単純に依頼を仲介するような組織かと思っていました」

「意外とこういった仕事も多いですよ。ユートさんもそのうち担当することになると思います」

「そうですね・・・。それにしても良く僕の名前なんてご存知です

ね

「ユートさんはある意味有名ですから。ランクこそ低いものの仕事ぶりは優秀、納期が早く丁寧とのこと。戦闘能力も武技大会を見れば明らかです」

「そうだったんですか」

「そうなんです、多分ご自身が考えているよりはギルド内で名前が挙がっていると思っていただいで大丈夫ですよ」

「えーっと、そこに大丈夫な要素が特に見つかりませんが」

「・・・ちよつと脱線しました。話を戻しますとこの依頼を請けていただけますか？」

今、さらつと流されたが重要なことが混じってたんじゃなかるうか？別にこちらから何かできるわけじゃないから気にしてもしょうがないけどぞ。

『どう思うっ？』

『ゴ布林如きいくら現れようと主と妾の敵ではないし請けてしまつていいと思うぞ』

『ん、了解』

エルから見ても特に問題なさそうだし、断る理由が無いな。

「ええ、請けます。よろしく願います」

「こちらも助かります。ユートさんなら大丈夫でしょうけど無事を祈っていますよ」

にっこりと笑つてうなずくと、男性は書類を片手にギルドの奥のほうへと戻つていつてしまった。

場に残るのは少年少女と僕達の4人。

とりあえずあれか、挨拶だな。

さつきちよつと失敗気味だったとはいえ、第一印象はヒジョーに重要。

笑顔を作ってからぺこりと頭を下げる。

「それではしばらくの間ですがよろしく願います」

「よろしく頼むわ」「よろしく願います」

軽い口調の少女と丁寧な口調の少年。

僕が言えたことじゃないけど少年に関してはもうちよつとフランクでもいいような気がする。

なにせほら、僕は雇われて彼らは雇い主なわけだしね。

「まずは自己紹介ということで。僕の名前はユート。冒険者ランクはEで主に魔術を扱います」

「妾はエルシディアだ。主の従者をしているぞ」

僕らの自己紹介ってパブリックな部分がほとんど無いのであまり言うことが無い。

エルに至っては一言だけだしほとんど自己紹介になってない。

これじゃあ暗く冷たいような印象をもたれてしまいかもしれない。今後を考えると何か話のネタでも詰めたほうがいいんだろうなあ。

「私はアリアよ。ウイスリスの魔術学園中等部で主に攻撃魔術を学んでいるわ」

「僕はウィルと申します。アリアと同じクラスで魔術について学んでいます。今回は依頼を請けていただいております」

・・・うーん、なんだろう。

こう、なんていうかさ、この集団ってむちゃくちゃ攻撃力過多だよ

ね。

魔術師4人で近接武器を扱える人がゼロって結構凄くない？

王都の市場をウィルが操作する馬車でゆっくりと進んでいく。どうも学園が長期休暇の際、学生に格安でレンタルさせてくれるらしい。

・・・っていうか今は長期休暇の最中だったんだ。

ウイスリスはエルから聞いた限りだと乗合馬車で7日間も掛かるから二人が王都に居るのは不思議だなーって思ってたんだよ。

馬車の中から市場へと目を向ければ相変わらず商人達が声を張り上げて様々なものを販売している。

完熟しているのに緑のトマトとか色違いのナス、常識的な見た目のキャベツなど。

ともかく市場にはまだまだ驚きが沢山あるのでちょっとした娯楽だというのは間違いない。

今回のお買い物目的は食料品。出来れば保存が利いて美味しそうなのが狙い。

期間は4日間なので予備込みで6日分程度があれば十分かな。

んっふっふ・・・。

ちょっと前にスパゲティを食べた段階であるんじゃないかと思っ
ていたけどやっぱりあったよ。

乾麺がつ!!!

素晴らしい！ 素晴らしいすぎる！ エクセレンツ！

コレさえあれば後は食用オイルとにんにくと唐辛子と塩とベーコン
があればペペロンチーノが食べられる。

これらは全て市場で見かけたことがあるし、値段だって高くない。
むしろ需要の少ない携帯糧食のほうが高いくらいだ。

確かに毎回ペペロンチーノだけでは飽きてしまうかもしれないが、
ソースは工夫次第でいろいろとなんとかなるレベルだ。

なによりあの携帯糧食と違って“飽きる”ことが出来るのだ。

つまりそれは決して不味くないということ。ああ・・・なんて幸せ
なんだろう。

「ねえ、ユートの顔がおかしな風にやけてるわよ」

「たまに食べ物の前で変になるのは主の特徴だから気にしないで欲
しい」

「・・・貴方の主って大丈夫なの？」

「うむ、立派でやさしい主だぞ。・・・食べ物が絡むといささか様
子が変わるが」

・・・向こうのほうで微妙にひどい事を言われた気がする。

だが気にしない、今の僕はそれどころじゃない。

ニコニコしながらスパゲティのような乾麺を5kgほど購入し、大

事に抱えて馬車の中へしまいこむ。
お値段なんと半銀貨1枚。なんて安いんでしょう。

次に隣の店から大量のタマネギとにんにく、ジャガイモをあわせて半銀貨1枚で購入。

僕の知っているそれらと同じであるならば常温で比較的長い時間保存が利くので大変よろしい。

よしっ、あとは塩とか肉とか調理用オイルだな。

コレさえあればフリーズドライが無くても携帯糧食の悪夢から抜け出せるぞっ！

そんなわけで仲間達から若干白い目で見られつつも1時間半ほどで食材の調達が完了。

当たり前だが水は用意していない。

「ねえ、コレどうするのよ。水も用意してないのになぜか大なべがあるし、乾麺が大量に積んであるし、携帯糧食はないし、これが冒険者の準備なの？」

「あ、そういえば話してなかった。水と火に関しては今回心配してもらわなくて大丈夫」

「なんでよ」

「僕とエルが魔術でなんとかするから」

啞然とした様子の二人。

「ハハツ・・・何言ってるのよ。乾麺を調理できるくらいの水を何度も作り出しても大丈夫なわけじゃないじゃない」

「いやいや、大丈夫だから。少なくともあの不味い携帯糧食は食べなくて済むよ」

「確かにアレが無いのはちょっとほっとしますけど、大丈夫なんですか？」

「うん、水出すくらいならいくらでも大丈夫だよ」

バッグに突っ込んでいるカップと杖を取り出して水を注ぎ、氷を投入してからごくごくと飲む。

魔力によって精製された水はなぜか若干硬めなので冷やしたりしないとあまり美味しくない。

煮込み料理には向いてるから欠点ばかりではないけど、できれば選択式がよかったなあ。

「いずれにせよ後でご飯を作るときにも使うからその辺で信じてもらえらと思うよ」

「……………」

1 (後書き)

「どうでもいい話なんだけどさ、魔術で水を精製すると驚かれるよね」

「うむ」

「ウィルから聞いたんだけど氷の礫とか氷柱を撃ちだす魔術はワリと一般的らしいよ」

「うむ」

「じゃあ何でこんなに魔術で水を精製すると驚かれるんだろう」

「主、あれは魔力を冷却してあの形にしているだけで水から作った氷で出来てるわけじゃないぞ」

「あれ？ そうだったの？」

「ひよつとして主が今まで使ってたアレは全て水から作った氷柱だったのか？」

「うん、そのままだと折れやすいからちゃんと魔力で表面を覆って強化はしてたよ」

「・・・さすがの妾もそれには気がつかなかったぞ」

チエネスという場所はどうも王都とガルトの間くらいで、そこまでは大体一日とちよつとで着くらしい。

依頼終了後にその辺で降りしてもらってガルトまでのショートカットだ、なんて思ったんだけど周辺に集落なんてものは存在しないらしくて完全にぬか喜びをしてしまった。

ちよつと考えてみれば食べ物をもつて4日分も買っているし当たり前か。

交渉次第で分からないところもあるけど、おそらくこの依頼を終えてから一度王都に戻り、その後乗合馬車であちこち経由しながらのんびりとガルトに戻ることになりそうだ。

馬車の乗り心地は意外なことに前よりもかなり良好で、速度の割りに振動が非常に少なくて快適。

さらに木で出来た居室の上に座ったり寝そべったり出来るので風景をパノラマで楽しむことだって出来る。

こんなだったら馬車の旅も悪くはないなあ。

・・・自分より若い人間に御者台を任せてポケットとするといいのかと思うんだけど、実際問題できることは何一つ無い。

僕に出来ることといえばご飯を作ることと何らかの敵が現れたときにそれを迎撃すること位だ。

依頼の内容的には全く問題ないはずなんだけど、それでも心情的に・・・ね。

御者台に座るウィルとアリアの方に目と耳を向ければ相変わらず適当な会話を続けているが、よく話の種が尽きないものだと思う。

あんまり聞き耳立てるのもあれなので微妙に聞こえる会話のみが頭に入るが、学校の話が多くて思わず自分の大学生活を思い出してしまった。

「主が学生だった頃はどんな生活をしていたのだ？」

「いや、今も学生なんだけど・・・」

既に一ヶ月以上自主休校してるけど僕は大学生ですからね？

「そういえばそうであつたな」

『なら、主の学生生活について教えてくれ』

エルは学生二人の話に触発されて随分と気になっているらしい。

わざわざ念話でつてことはもう包み隠さず話してくれつて事に違いない。

が、今はともかくとしてただの大学生の生活にそれほど面白い点があるかというとまた微妙なんだよなあ。

『基本的に学生なんだから勉強してるだけだよ？』

『どんなことを勉強していたのだ？ ほかに“ゲーむせんたー”だったかで遊んでいたと言っていたではないか』

『うーん・・・。まず僕はいわゆる情報系で主にコンピュータに関する勉強をしていたよ。コンピュータっていうのは・・・なんだろうこちらの世界に対応するものが無いからちよつと説明しづらいんだけど、人の生活を豊かにする形の無いものを作るための道具だと思ってくれればいいかな』

『形が無いのに豊かになる？ 魔術のようなものか？』

『ある意味近いのかも。たとえばこの世界で商売するときには、買い物してもらった相手の性別、年齢、季節、金額なんかを全て記録しておいてさ、来年からはその記録を使って“コレを沢山仕入れと

けば売れる”とか“これはちょっとでいい”なんて自動的に判断してくれたりしたら便利でしょ？」

『そ、そんなことが出来るのかっ！』

『いろいろ手続きが必要だけど出来るよ。とにかくコンピュータっていうのは膨大な量の情報を集めて丸めて扱いやすい形にするのが得意なんだ』

『・・・凄い、な。主はそういったことを勉強していたのだな』

『うん、でも学生だからまだそんなにあれこれ出来るわけじゃないけど。あとは一般教養とかだからこっちと同じだと思う』

あれこれ聞き続けるエルに対して律儀に答え続けること30分くらい。

話題はいつの間にか大学の内容から普段の生活に移り、僕のぐーたら生活が半分以上あらわになってしまった。・・・エルが相手じゃなかったらまず話してないな。

『なるほどな。じゃあ“ゲーむせんたー”とはなんだ？ ゲームとこういうくらいなのだから遊ぶ場所なのだろう？』

『ゲームセンターは僕らの世界における割りと一般的な娯楽施設で、たとえば魔術で作られた仮想のターゲットが次々出てくるからそれを魔術で迎撃し続けるとか、やっぱり魔術で作られた仮想の馬でレースしたりとか、そういうゲームが出来る場所だよ』

たぶん、間違ってないはず？

微妙に違っただとしてもエルは興味津々といった具合に目を輝かせているので期待には沿えたと思って良さそうだ。

『魔術で遊ぶ、か。今まであまり考えたことが無かったが言われてみればいろいろ出来そうだな』

『出来ると思うよ。たとえば今から出来る手軽なので考えれば・・・』

。そうだな、一人が空に円盤状の氷を撃ちだしてもう一人はそれを何らかの魔術で撃ち落とすとかさ。やるとしたら円盤を投げるのは僕じゃ無理だからエルにお願いすることになると思っけど」

僕が投げると多分超高速でかつ飛んで行ってしまふ。調整の出来ない自分の体がちょっともどかしいなあ。

『それは面白いかも知れぬ、ちょっとやってみたいぞっ』

『僕らだけでやるといろいろ問題かもだからアリアとウィルも巻き込んでみようか』

『うむ』

のそのそと居室の上から御者台に頭だけ出すと暇そうなアリアにそれを優しい目で見えるウィル。
なんと仲が良さそうだ、というより長期休暇と一緒に旅行に行くくらいなんだから当たり前か。

「暇ねー。なんか面白いこととか無いのかしら」

「さすがに馬車だからね。でも魔獣の襲撃とかがないのはほっとするよ」

「来たら来たで片付けてやるわよ」

「そういつて前も危なかったじゃないか」

「・・・まさかあんなにゴブリンの群れが襲ってくるとは思ってなかったのよ」

ん、幸い暇してるな。

これなら食いついてくれるかもしれない。

「暇ならちょっとゲームを考案したからやってみない？」

「暇だしやるわ、ウィルは？」

「僕は馬車があるから・・・」

「それさ、ちよつと教えてもらえないかな？　簡単そうなら僕が代わるよ」

ちなみにこの質問は最初馬車に乗るときにもしているのだが、ウィルに「唯でさえ安い値段で手伝ってもらってるのに」みたいなことを言われて断られてしまったのだ。そんな気にならないうちにね。

「え、でも、ほんと申し訳ないですから・・・」

「いいじゃない、ウィルだってずっと手綱を引いてたら暇でしょ。」

折角代わってくれて言うてるんだから」

「そうそう、ウィルも遠慮しないで使えるものは使ったほうがいいよ。あとね、僕は今までの人生で馬なんてロクに触ったことがないから凄く興味があるんだ」

にっこり笑ってそういうとウィルはかなり悩んだあとにようやく僕に手綱の引き方を教えることに納得してくれた。

馬車の手綱の引き方は意外と単純で、少なくとも直線がひたすらに続くこの道ではほとんど操作がいらぬことも同時にわかった。

これなら裏方作業（魔術で氷の円盤を作る役）をやりながら馬車の操作も出来そうだ。

「さて、それじゃあそろそろゲームの説明を始めるよ。ゲームのルールはとても単純。エルがこのくらいの大きさの円盤を空に投げるからそれを魔術で撃ち落すだけ。速度のある円盤に魔術を命中させるのは簡単じゃないと思うけど、その辺の難易度は円盤のサイズを調整することで解決するから後で感想を聞かせて欲しいな」

「わかりました」「やってやるわ」「待っていたぞ」

馬車の速度をやや落とした後、杖から直径40cmほどの氷の円盤を作り出して皆に見せるとすぐに納得したような表情で頷いてくれた。

おっけ、掴みはよし。あとは実戦だな。

「じゃあとりあえずデモってことで僕が一度やるよ。エル、円盤はコレを使ってくれ」

「了解だぞ」

そういつてからエルに作成した氷の円盤を渡して準備完了。

「準備おっけ、いつでも飛ばしてくれて構わないよ」

「主、行くぞっ！」

エルが前方というにはやや斜めに円盤を撃ち出す。

円盤を確認してから魔力を練り上げて直径3mm程度の極小の氷の礫を無数に作成、着弾までのタイムラグから円盤の場所を予想して発射。

相変わらず気の抜ける音と共に撃ち出された無数の礫は僕の狙い通りに命中し、円盤を粉碎して空に氷をばら撒く。

・・・あー、命中してよかった。これで外したらカッコがつかない。

「と、いう具合かな。ルールは単純でしょ？ ちなみにいまさら気づいたけど馬は大丈夫かな。僕の知識だと馬って音に敏感らしいんだけど」

「いつも魔術が飛び交う学院の馬なので大丈夫です、安心してください」

「そ、そうなの？ そりゃよかった」

え……。いつも魔術が飛び交う？

ま、まあ、あのおとなしいウィルが言うくらいだから僕が思ってるほどの危険地帯ってワケではないんだろうけど……。

「んじゃ僕は円盤を作っておくから適当に遊んでみてくれ、エルは投げ方とか調整してあげると楽しみやすいかもしれないからよろしくね」

「うむ、了解だぞ。さて、どちらからやるのだ？」

「アリアからやったら？ さっきから目がキラキラしてるよ」

「ありがと、ちょっと待って、今杖を用意するから」

楽しそうな声を背中に受けながら僕は馬車の操作、ちょっと地味かもしれないがコレが意外と面白いのだ。

たまに変な方向に進もうとしてしまうのを手綱を引いて調整したり、速度をいじったりするのは単純ながらも奥深い。

これをきちんと操作できるようになるには結構な量の訓練が必要になりそうだ。

「投げるぞ？」

「大丈夫よ。……っ！ 風よっ！」

僕のとくに比べるといくらか低速の円盤めがけてアリアが魔術を放つ。

風の塊と思しき（大気って普通見えないから）緑の塊は円盤めがけて吸い込まれるように進んで行くが、斜めに飛ぶ円盤の動きを予想しきれなかったために失中してしまった。

「おしい。これ、時間があれば杖の魔方陣を書き換えたいかも」

「確かにユートみたいな散弾状の魔術に切り替えたほうが当てやすそうね。ただあんまり威力を下げると今度は円盤が割れないかも知

れないわ」

「その辺は調整していくしか無いと思うよ」

なんだか凄く魔術の学校の生徒らしいセリフが聞けた気がする。僕もエルもそついつのいらぬから気にしたこと無かったよ。

「さあ、もう一度行くぞ。準備はいいか？」

「もちろんっ！」

途中ウィルと交代してもらって四人で遊びながら進むと時刻はすっかり夕暮れ。

エルは自分で投げて自分で命中させるのを嫌がったので僕が試しに投げてみたら予想通り円盤が空へと向かって高速でかつ飛んで行き、あつという間に見えなくなってしまった。

ま、その代わりにウィルとアリアが交代で投げたので結果オライだとは思う。

「いやー。面白かったわ。あんな大きい円盤に当てるのがこれほど難しいとは思わなかったわ」

「そうだね、面白いだけじゃなくて魔術の制御能力の訓練にもいいかもしれないくらいだった」

クレー射撃もどきはかなり好評、楽しんでもらえたようで何よりだ。最初はなかなか命中しなかったのに、後半からはかなり当ててくる

ようになったので円盤の直径を途中から小さくしたくらいだ。

「楽しんでもらえてなにより、さて、とりあえずこの辺で野営しようか」

「わかったわ」「はい」

と、いつても前と同じでやることは意外と少ない。

今回は全員が馬車の居室で寝れるほどなのでテントすら不要。

やることといえばかまどくらいだが、これも僕のバッグから取り出した携帯用のグリル台でほとんど解決する。

大鍋はグリル台に乗らないので地面を掘って竈を作成したけど作業量としては凄く少ない。とてもアウトドアしてるとは思えないくらいだ。

「エルー、鍋に水を張っておくから沸かしておいてくれー」

「了解だぞ」

エルに鍋を任せ、その間に僕はソースを作る。

グリル台の上に置いたクッカーに食用オイルと若干のんにくと唐辛子を投入。

オイルに十分に香りが移った段階で角切りのベーコンと塩を入れる。数分でベーコンがカリッと焼き上がり、辺りに香ばしい香りを振りまく。

非常におなかが減る香りだが、状況としてみるならばまだ中盤もいところ。

お湯が沸くまでじっと我慢で待つこと数分。

「主、鍋の水が沸いたぞ」

「よっしゃ、待ってた」

スパゲティはどれくらい食べられるかわからないのでとりあえず4人で1kgくらいでいいか。
どうせあまったら僕かエルが食べるし。

鍋の中に塩をどばつと入れてからスパゲティを投入し、待つこと7分。

60秒ズレるだけで麺のコシがあつという間になくなってしまふので茹で時間というのは正確に測るのが非常に重要。

「どれどれ……。ん、まあまあ」

麺を一本取り出して食べてみると大体アルデンテな感じ、太さがばらついているので若干危険かもしれないが食べれないほどじゃないと思うので全然おっけー。

「主……」

「いや、これは試食っていうよりも確認だから。そんな目で見ないでよ」

ジト目でこちらを見つめるエルに苦笑しながらも、茹で汁と固形鶏がらスープをクッカーに投入し、残りの茹で汁を全て捨ててほぼ完成。

スパゲティがさめないうちにクッカーの中のソースを沸騰させ、今度はスパゲティを茹でた鍋にそれを投入してかき混ぜる。

これでベーコン入りのペペロンチーノが完成。いえい。

「いい香りだな。やっぱり主は料理が上手いと思うぞ」

「ありがと」

バイト代が入る前とか、そういうびんぼうな時は毎回スパゲティだったからなあ。

その経験がまさかこんなタイミングで役に立つとは全く思っていなかった。

人生何が役に立つかなんて全くわからんね。

ついでにクッカーに再度水を張り、携帯スープとベーコンを入れて暖めておく。

凄く投げやりだが、これでスープも完成。

「・・・今私が見ているのは現実かしら?」「・・・たぶん」

「大丈夫? ご飯できたよ?」

「え、ええ。作ってくれてありがとう。ほら、ウイルスもいつまでもそんな風になつてないでちゃんとしなさい」

「すみません。今お皿の準備をしますね」

いそいそとウイルスが馬車の中から食器の類を取り出して僕に渡してくるので、それにペペロンチーノをよそって出来上がり。

残念ながらアウトドアなので3品以上作る余裕は無いが、それでもこの世界における野外料理よりは遙かにマシな物に仕上がったと思う。

全員に食事がいきわたった後に一口食べてみる。

ベーコンとにんにくの旨みが染み込んだスパゲティはシンプルながらも唐辛子のアクセントが後引く感じで結構上出来かな?

「このスパゲティは凄く美味しいぞ。塩味のソースなのに辛味が絶妙で飽きが来ないようになっているところが特に良いな」

「そういつてもらえると工夫した甲斐があるよ。二人は大丈夫?

抑えたつもりだけど辛すぎたりはしてない?」

「そんなことないです。まさか野外でこんな美味しいものを食べられるとは思いませんでした」

「そうね。十分すぎるほど美味しいわ。もし好みを言わせてもらえるならばもう少し辛くてもいいと思うわ」

うん、どうやら好評のようだなにより。

自分が作った物を食べてもらうときって結構緊張するんだけど、こう言ってもらえると胸のつかえが取れた感じがして凄くほっとする。

「ユート達って携帯糧食とか食べるの？ いや、食べられるの？」

「食べられるけど食べたくないよ。あれ不味いし」

「そうだな、あれを食べるのは追いつめられてからで良いぞ」

「ま、そりゃそうよね。こんな美味しい食事をする冒険者なんてたぶんユート達くらいよ？ ほとんどの冒険者達は携帯糧食で、運がよければ罨で取れた動物が食べられるくらいだもの。全くとんでもない冒険者に仕事を依頼しちゃったかしらね。これからは一体どうやって携帯糧食を食べればいいのよ」

「その辺は・・・たぶん努力じゃない？ ユートさんみたいな真似は僕らじゃ出来ないし」

「うわっ、正論過ぎて言葉もないわね。確かに対応策なんて思いつかないけど」

わいわいと会話をしながらも食事は続き、結局やや多めに作ったつもりのスパゲティとスープは少しも残ることなく完食。

こんなにも綺麗に平らげてもらうのは嬉しくて、つついっ気合を入れて食器類を洗ってしまう。

水はね防止のために魔力障壁を展開しながら高圧洗浄器で汚れを落とし、エルの魔術で一気に乾燥。

新品のようにぴかぴかになったそれらを馬車に片付けて食事の後始末も終了。

前と違って美味しいものも食べれたし、今日はきつとよく眠れそうだな。

ただいま調査二日目のお昼過ぎ。

エルによるとどうも結構前からチエネスに入っているらしいのだが、昨日から変化の無い景色が続いているためにそれがどこからなのかが僕には全くもってわからない。

この世界では一体どういう基準で地図を区切っているのだろうか？
謎は深まるばかりなり。

「風が気持ちいいね」

「そうだな、天気といい気温といい実に清々しくて良い感じだ」

居室の上で涼やかな風を受けながらまったりと和んでいると、ヒョコッと頭だけを出したウィルがこちらを見つめてくる。

なにか言いたげなその様子はまるで小動物かなにかのようでなんとも微笑ましい。

・・・男の子に対してこの表現はどうかとも思うのだが、思ってしまったのだから仕方が無い。

「そろそろ調査目標の洞窟が近いです。ここからは徒歩になるので馬車は留めちゃいますね。・・・ほら、アリアも準備して」

「あれ、この辺だったっけ？ ごめんごめん、すっかり忘れてたわ。先に準備してるわね」

そういうとウィルはその辺にあったちようど良い太さの木に馬車を留めて居室の中へ。

30秒もしないうちに似たようなバッグを斜めにぶら下げた二人が居室から降りてくる。

おそらく杖もバッグも学校指定の何かだと思う。ややデザインが異

なるのは男女の差かな？

それにしても準備が早いなあ。

僕らと違ってきっちり居室内に荷物を置いているのにこの速度。旅慣れってというのはまさにこういうことを言うんだろっね。

「エル、準備は……って荷物もないし大丈夫か」

「うむ、妾はいつでも良いぞ」

僕らは基本的に準備というものがないのでそのまま降りるだけ、非常にイージー。

精々手に持っていたバッグを斜めに掛けるくらいか。

「洞窟までは遠くはありませんが、なにかあったときはよろしくお願ひします」

「了解、任された」

大自然の森の中を歩くのはとても健やかな気分になれて非常に良い感じだ。

主にブナのような木で構成されたこの森林は意外と明るくて開放感があるし、木漏れ日の光はまるで乾麺のような一筋の光となって大地を明るく照らし、森全体がキラキラと輝く様はまさに圧巻の一言に尽きる。

こんなの日本で見ようと思ったら白神山地とかの奥まで行かなくちゃだぞ。

それをこんな手軽に見られるなんてっ！

途中にやたら太い木があったり、どこかの配管工を彷彿とさせるようなキノコがあったりとかかなり新鮮な風景が広がっているのだが、

学生二人組みからしてみれば別にどうでもいいものらしく、さくさくと歩いていってしまうのであまりゆっくりと見ていられないのが残念だ。

「そういえばさ、ウィル達は目的地の洞窟で一体なにを調査したいの？」

聞く機会がなかったのでなかなか聞けなかったのだが、実は結構前から気になっていた。

ギルドで話し込む彼らに割り込むようにして依頼を受けてしまったから詳しいところは良くわかっていないのだけど、ギルドへ報告を入れなくちゃいけないようなゴブリンの群れに襲われているにもかかわらず再びその場所に足を踏み入れて調査をしたいって言うくらいなんだからそれなりの理由はあるんだろう。

「あー……。笑いませんか？」

「大丈夫。笑わない」

これは本当。

僕の事情を考えればこの世界ではどんな非常識なことがあったとしても全くおかしくないし、それを馬鹿にせずに受け止める自信がある。

なにより考え込むような表情のウィルを笑うとかまずありえない。

「えーっとですね。今回の調査の目標はですね……」

「なにを言いよどんでるのよ。ほかの荒っぽい冒険者達ならともかくユート達なら笑わないでしょ」

アリアに背中を押されたウィルは何かをつぶやくと意を決したように口を開く。

「今回の調査の目標は、“チエネスの洞窟には精霊がいる”という噂の真偽を確かめることです」

「ハツキリ言ってしまうと私たちはその噂を事実だと思ってここまで来たの」

・・・なんと、まあ。

「すっごい興味があるんだけど。なにか理由とかあるの？」

「実はこれだという根拠はありません。ただ、洞窟内にある湖には大量の魔力が集まっているので昔からそういう噂があって、僕はそれを実際に見てみたいんです」

「誰か遭遇した人とかいないの？ それだけ昔から噂になってるなら誰かしらが知ってるんじゃない？」

「たまに酒場とかで話題になってるらしいんですけど、まともに調査されたことなんて一度もないんです」

「調査されたことないんだ・・・」

「ええ、お金も掛かりますし、確度の低い情報だとしても優先順位が下がってしまつて・・・」

「世知辛い現実を考えるのはやめよう。せつかくのロマンにあふれる探索なのに悲しくなってくる」

あれか、まともな調査機関がチェックしてないってことは扱いが徳川埋蔵金レベルなのか。

うーん・・・。そんな扱いだと正直そこで精霊が見つかるとはとても思えないなあ。

『エルはどう思つっ？』

『どうだろうな？ 精霊なんて全員好き勝手にしておるしな。ただ、魔力が集まっている場所を好む者は多いからひょっとするといるか』

も知れぬぞ』

『精霊が好む場所なのに確率の表現が“ひよっとして”なの？』

『うむ。そういう場所はほかにも沢山あるし、何より妾たちは数が少ないからな』

『なるほど。じゃあ会えるかどうかは完全に運しだいってことか』
『そうなるな』

まあ会えればラッキーくらいでいいのか。

幸いこの辺の風景を見ながら歩くのは楽しいし、仮に何一つ見つからなかったとしても無駄足ではないんじゃないかなんて思うよ。

お、あの花綺麗だな。5cm弱の細長い花卉の先端は深い蒼なのに中心に近づくとつれて白くなっているのがいい感じ。

この風景を心の中でしか保存しておけないのはすごく残念。

バッグにコンデジが入っていればなあ。・・・んにゃ、あっても電池ないし駄目か。

そんな風に楽しみながら歩くことたぶん一時間とちよっと。

僕の目の前には広くも狭くもない洞窟の入り口。

岩と岩で挟まれるようにして作られたそれは暗く、明るい外から中を伺うことは出来そうにない。

さすがに蛍光灯とかが設置された日本の鍾乳洞とかとは違うからなあ。

「どうしたの？ ひよっとしてユートって暗いところが怖いとか？」

「そんなことないよ。ただ、崩落したらどうしようかなーって思っただけ」

「・・・そんなこと言われると入りたくなくなるんだけど」

「昔からある洞窟みたいだし、たぶん大丈夫でしょ」

「じゃあなんでそんなこと言ったのよ？」

「特に意味はないけど」

「……………」

さすがにここからは僕とエルが先頭だ。仮にも護衛だしね。

まずは杖の先端に魔術による照明　便宜上松明と呼ぶことにしよう　を作成して光源を確保。

最初は軍用懐中電灯でも使おうかと思ったのだけど、アレはあまりにも明るい上にスポットがきついのでそこしか見えなくなってしまうのでたぶん駄目。

洞窟の中で明かりを使うたびに暗順応を待つとか面倒くさ過ぎる。

ついでに視界を熱感知式に切り替えるとか、光を増幅して視界を確保するのも駄目。

あれをやると遠近感が無くなるので洞窟内では歩きづらいいし、それだといざって時に動けないので非常に困る。

「んじゃ、先入るね」

洞窟の中に足を踏み入れるとひんやりとした空気が僕を包み込む。

二人はここに来る途中でゴブリンの集団に襲われているわけだし、こういう洞窟に危険な化け物が潜むのはある意味お約束だから注意深く進まないといけない気がする。

「暗いね」

「そうだな、今のところ魔術の照明の範囲以外はほとんど見えないぞ」

「何かに襲われて怪我するより、つまずいて怪我する可能性のほうが高そうんだけど」

とりあえずこの入り口の辺りは安全そうだ。

化け物に出待ちする知能があるとは思えないけど、同時にやられたら一番危険な場所だから何もなくて良かった。

「こういう洞窟なんて始めて入ったけど涼しいね」

「そうね。これで湿気がなければ完璧なんだけど」

二人は杖の先ではなく空中に光源を設置して明かりを確保しているようだ。

ふよふよと浮かぶそれは20W電球程度の明るさもなく、闇を切り裂くとはとてもいえないが同時に必要十分。

おまけに彼らの動きに追従するので利便性は相当なものだと思う。

「明かりとかも含めて大丈夫そうだね。先に進もうか」

「わかりました」

ようやく目も慣れてきて薄暗いながらもなんとか辺りを見渡せるようになってきた。

松明を直視しちゃうとまた見えなくなっちゃうからその辺は注意して、と。

洞窟内部の横幅は比較的広くて四人が並列に歩けるくらいなのだが、いかんせん足元が悪くていけない。

30cm程度の石（岩？）が無造作に転がっていたりするので油断すると転んで捻挫とかになりそう。

こういう場所ですらこういう怪我はヒジョーにかつたるので極力注意して進まねば。

「きゅあつー」

「アリアっー！」

思った舌の根も乾かぬうちにこれだよ。
原因はわからないが何かにつまずいたのは間違いない。
隣にいたウィルがあわてて体を支えたおかげでひざを打ったりとか
そういうことはなかったものの、足を捻ったりしてないか微妙に心配。

「大丈夫？ 足とか捻ってない？」

「大丈夫、全然問題ないわ。体支えてくれてありがとう」

大丈夫そうではよりなんだけど一応見たほうがいいかな？

「少し休憩じゃないけど止まろうか。エルはアリアの足を見てあげてくれない？」

「了解だぞ。・・・ほら、そこらへんにアリアは座ってくれ。そうじゃないと足が良く見えないのだ」

「え、ええ。わかったわ」

洞窟の地面が乾いてて良かった。

これでジメツとしてたらなかなか座り難かったと思う。

目を閉じて集中するエルが何かをつぶやくと杖の先端に緑色の光が灯る。

その光がゆつたりとアリアの両足首に流れていく様子は薄暗い洞窟の中ということもあってなんとも神秘的な光景だ。

「うむ、大丈夫そうだな」

「ありがと。エルシディアさんのおかげでもうばつちり大丈夫よ」

「それは良かったぞ。こんなところで怪我をして進めなくなったらつまらぬからな」

「そうね、もうちょっと気をつけるわ」

ん、どうやらすっかり大丈夫らしい。

本当に治療術ってチートだよな。

山歩きでマメが出来たとしてもまったく問題なく一瞬で治療出来そうだ。

この世界の外科技術って下手をすれば僕の世界より優れてるんじゃないだろうか。

「ユートさん、アリアも大丈夫みたいですしそろそろ進みませんか？」

「そうだね。進もうか」

それからは特に何か変わったこともなく順調に進み、10分もしないうちに目的地の地底湖に到着。

僕は一般的な地底湖を予想していたのだが、さすが異世界。レベルが違った。

サイズは直径30m程度の楕円形。

深さは不明。底が見えないのでおそらく相当深いかと思われる。

「.....」

「驚いた.....」

「綺麗、ね.....」

「こんなに精霊が集まっているのは久しぶりに見たな」

この地底湖には驚くべき点が多い

まず一点目、小さい光の玉が無数に存在している。色は様々だが、薄い蒼の光が一番多い。

次に二点目、おかげでこの辺だと松明がなくとも十分な視界を確保することが出来る。

さらに三点目、エルの発言からこの光の玉は精霊であるらしい。

なんだこのニートは。
何もしてないとかドンだけなんだろう。
それにしてもエルのこと知ってるということは……。

「ねえ、エル。ひよっとしてこの人って……」

「こいつはアーウエ。一応精霊といわれる存在だな」

「さっきの忘れさりっぷりとか、今の表現とかなかなか傷つくんだけど」

ああ、やっぱりそうなのか。

じゃあ精霊と戯れてたのも不自然ではないんだな。ちょっと納得いかないけど。

「大体エルはこんなところで何をやってるんだ？ 人間を連れて歩

くなんて珍しいじゃないか」

「なに、妾は主と契約しておるからな」

「はあ〜？ エルが契約？ あれだけ縛られるのを嫌がってたじゃん」

「主は妾を縛ったりしないし、美味しいものは食べられるし、パートナーがいるというのは心地よいぞ？ 少なくとも一人で旅をするよりはずっと良い」

じろり、とアーウエが僕を見る。

その視線がとても嫌なので思わずウィルを見る。

「え、ユートさん。その視線は何でしょうか？」

「せっかく噂の精霊に会えたのにさつきから何もしゃべってないからさ。なにか聞きたいこととかそういうのがあったんじゃないの？」

「正直こんなにあっさりと会えるなんて思ってなかったので何も考えてなくて……」

「それよりも私はエルシディアさんのことのほうが気になるんですけど。さっきの話しからするとエルシディアさんも精霊なのよね？」

まあ、もはや隠すことでもないよね。大々的に言うことでもないけどさ。

エルもまったく気にした様子を見せずにうなずいてるし。

「うむ。妾は精霊だぞ」

「歴史上になかなか出てこないからあんまりわかってないんだけど、契約ってどういうことなの？」

「うーむ。説明するのが難しいな……。単純に言ってしまうえば相手の魔力をもらって魔術的にながりを持つことだぞ。そうするといろいろ出来るようになるのだ」

ああ、ついにアーウエが放置されてエルによる精霊説明会が始まってしまった。

「……アリアに“それよりも”とか言われて放置されてるアーウエが落ち込んでるぞ。」

「せつかくなんだから普通俺に聞くんじゃないの？俺も精霊だよ？」

「じゃあいくつか質問」

「よしきた。何でも答えよう」

フンツ、と胸を張るアーウエ。

エルと初めて会ったときもこんなやり取りだったよーな気がする。

「12、3日前に二人がこの地底湖を探索しようとしたときにゴブリンの群れに襲われてるんだけど何か知ってる？」

「……すまん、それはたぶん俺のせいだ。ここは魔力濃度が濃い

からそういつやつらが集まりやすい。俺がここに来たときにそれらを全員追っ払ったのが原因だと思う」

「おかげで冒険者が調査のために派遣されてるんだけど会ってないの？」

「そんなことになってるのか。そいつらには会ってないな」

「来たらどうするの？」

「適当にその辺のものに同化してやり過ごす。ここにいるほかの精霊たちも一斉に隠れるだろうな」

前にエルが“精霊は恥ずかしがりや”なんて行ってたけど本当にそうなのか。

エルなんてあっけらかんとして人前に姿をさらしてるし、初めて会ったときからそんな仕草しなかったからなあ。

「エルはあんまりそういうの気にしない性格なんだよ。普通精霊っていうのはもっと人前を嫌がるもんなんだけどあいつはいろんな意味で別格。まったく気にしないで一人旅だぜ？」

「・・・まったくしゃべってないんだけど」

「さすがに顔見ればそれくらいわかる」

「今回僕らを見て隠れなかったのは？」

「エルがいるなら隠れても意味ないし。仮に隠れたとしても“そこで隠れてる馬鹿。出て来い”とかって言われて引きずり出されるだけだ」

「なんとまあ・・・」

エルの意外とパワフルな一面を見た気がする。

まさか知り合いを引きずり出すような性格だったとは。

アーウエに聞くこともなくなってしまったので一息ついてぽけーっと地底湖を眺める。

視界の端には相変わらずエルに何かを質問し続けるアリアの姿。・
・
・良く質問が尽きないなあ。

「ウィル。これからどうしようか」

「とりあえずアリアが飽きるまでちよつと休んでませんか？」

「じゃあちよつとゆっくりしてようか。・・・お茶とかあればなあ。こつというところでまったりするには最適なんだけど」

「そうですね、でもゆっくりとこの光景を見るのもなかなかですよ。こんな大量の精霊なんてこの先もつ一度見る機会があるかわからないくらいですし」

「確かに凄いやね。水の中とかが蒼く輝いてる様はまさに神秘的って感じだよ」

「大自然の驚異を感じますよね」

ああ、まったりだ。

出来ればお茶とお茶菓子があれば完璧だったんだけど。

今後の短期目標はお茶を携行出来るくらいのお金を稼ぐ、だな。

4 (前書き)

「そういえば襲われた原因がハッキリとじゃないけどわかったのに全然落ち着いてたよね。こう、もうちょっと怒るかとも思ったんだけど」

「あれはそんな命の危機ってわけでも無かったですし、何よりこんな経験が出来たなら悪くないなんて思ってしまった。だから僕にとって今回の一連の出来事は幸運だと言っても良いと思います」

「そういうものなの？」

「アハハ……。何を言ってるんですかユートさん。いつつもありアに振り回されてればこんな慣れっこですからね。ゴブリンこときむしろマシなくらいですよ」

「……大丈夫？ 目が虚ろだよ？」

「そうだ、今回だってそうなんだ。前回だってランドウルフに襲われたし、その前だって……」

「……」

「きつと次だっつてこうなるんだ。安全なはずの場所を選んで通っているはずなのになんでこんなトラブルばかり……。なんで……」

「……」

前回の精霊説明会が開始されてどれだけの時間がたったのだろうか。時刻はすっかり夕方だ。

徐々におながが減り始めてきた頃によくやくアリアが一息入れるとすかさずウイルが帰りの相談を持ちかける。

二人とは少し離れていたのも話を話していたのかはわからないが、最終的に馬車に帰ることが決定。

そのあとアーウェと別れの挨拶を済ませてから僕らは馬車に戻り、今こうして王都方面へ戻る馬車の上でまったりとした時間を過ごしているというわけだ。

「ねえ、エル」

「どうしたのだ？」

「エルってさ、実はご飯を食べなくても生きていけるってホント？」
「・・・・・・・・」

あれこれアーウェと話した結果、非常に衝撃的な事実が明らかになった。

精霊というのは高密度の魔力で構成された生き物なので魔力さえ供給されていれば生きていける。

つまり 精霊に直接的な食事は不要。

冷静に考えてみれば当たり前だが普通の精霊は人里に下りてこない。なので普通の食事だって無い。あつて果物とか木の実とかそれくらい。

じゃあどうやって生活しているのかといえばその辺から魔力を回収していれば大丈夫なんだそう。

僕からすれば点滴で生きるようなものに思えるので酷く味気なく感じてしまうが、精霊にとってはそれが普通なのだから気になるわけも無い。

“宿はどうでも良いから食事は取りたい”なんて最初のころから言っていたエルを考えればこの衝撃的な事実を理解するのに時間が掛かってしまったのは仕方が無いことだと思う。

ちなみに食べ物を魔力に変換する場合、変換に必要な魔力と得られる魔力の差がほとんどないので酷く非効率とも言われた。ナンテコツタイ。

「えつとだな、確かに妾はそこら辺で魔力を取り込めば食事をせずつとも生きることが出来る。ただ、生というのとはただ無為に過ごすだけではなく楽しむことも重要だとどこかの先人も言っているし」
「エルの分の食事をカットするとかありえないからそんな焦らずとも大丈夫だよ」

やたらに焦ったようなエルを見たら頭で考えるよりも先に脊髄反射で言葉が出た。

大体散々世話になってるエルに対してそんな仕打ちは出来ないだろう、常識的に考えて。

「・・・実際問題、主の負担になってるのは間違いないのだぞ？」
「負担つてもそんな高いわけじゃない。それにいまさら一人で食事なんて悲しくなっちゃうよ」

「ホントかつ！？ あーもう・・・、心配して損したではないかつ」

まるで捨てられた猫のような姿から一転、花が咲くような笑顔を浮かべるエルを見るとこちらまで嬉しくなってしまう。

これはがんばって料理を作らねば。

「あはは、心配させたお詫びに今日もがんばって料理を作るからさ」「ありがとう。すごく楽しみだぞ。今日のメニューは何にするのだけ？」

「オイル漬けのドライドトマトで作ったスパゲティと昨日と同じタイプのスープかな」

「ドライドトマト？」

「あー……。そういえばその辺の固有名詞も違うんだよね。ほら、ポロネーゼにも使うあの緑の丸っこい野菜だよ。あれを乾燥させて食用オイルと塩と香辛料で漬けた食べ物。なんにでも合うから便利なんだよ」

小首を傾げるエルだったが、僕の説明で納得したのか「ああ、ソラクムの実か」とつぶやいてから再び表情に笑顔が戻る。
なるほど、トマト＝ソラクムね。ひとつ賢くなった。

……とても全てを覚えきれぬ気はしないが。

「それは凄くおいしそうだぞ。確かにあの香辛料の香りはなんにでも合いそうだな」

「そうそう、あれは結構なんにでもいけるよ。パンに挟んでも良いし、塩を控えたタイプのチーズとの相性も抜群。ほかに今回みたいにスパゲティに使ったりね」

ドライドトマト使い道は極めて多い。

そのまま食べることだって出来るし、サラダにも良い、ピザに良い、基本的に和式な洋食にはなんにでも合う。

元の世界に居たときにはしょっちゅうデパートとかで購入していたものだが、こちらの世界にもあるとは思わなくて見つけたときには思わず飛びあがってしまった。

お値段は一瓶で銅貨13枚、美味しさと汎用性を考えると非常に安いんじゃないだろうか。

「うむ、どれも美味しそうだな。王都に戻ったらお店をめぐりたいぞ」

「ちょっと警戒してなにか食べに行きたいね。・・・そういえばエールって昔からそんな風に食べ歩きとかを好んでしてたの？アーウエに聞いた限りだと人前を出歩く精霊なんて珍しい、というよりエールくらいしか見たことが無いって言ってただけど」

「そうだな、確かに人前を出歩く精霊は少ないぞ。妾とあと誰だったか・・・もう300年くらい前のことなので名前が出てこないがそのもう一人くらいだったな。食べ歩きは最初から好きだったぞ。」

自我がしつかりと出来上がった段階で既にあつた外に対する興味が食事に向いたのではないかと思う」

自我が出来上がる？

ひょっとしてあの光の玉の状態では自我が薄いのか？

アーウエを認識して集まっていたりしたから無いってわけじゃなさそうだし。

あ、でも確かに会話する能力とかは無かったな。

「自我がハッキリしたっていうのはいつぐらいからなの？」

「この姿になってからだな。人で例えるなら物心ついたころって言うのだと思う。その前の記憶も無いわけではないからなんとなくは覚えてはいるのだが、ちゃんと筋道立てて思い出せるのはこの姿になってからの記憶だぞ」

「ああ、やっぱり光の玉の状態だとそういう自我っていうのは薄いんだ」

「そうだぞ」

「僕のところじゃ全然そういう存在が無かったから、すごく不思議

な感じ」

「妾からしてみれば主の所の人達は全員が精霊みたいなものなのではないかと思っっているのだがな。ほんと主は妾たちと魔力の質が似ているのだ」

僕の世界の人々……。

魔術とか魔力なんて御伽噺の世界の住人だよな。

ガスコンロや電子レンジ、冷蔵庫のおかげである意味全員魔術師のような存在だけどさ。

「こつちじゃ魔力なんて全然だよ。前にも話した科学技術が発達しているからね」

「ふふっ、そうであつたな。早く見つけたいぞ。妾は凄く主の故郷に行つてみたいのだ」

「前にも言つたけど歓迎するよ。こつちはこつちで良い所だけどあつちも楽しいところがたくさんあるからね。……さて、そろそろおなかが減つてきたな。ご飯作ろつか」

あ、そういえばエルと最初に会つたときつて半透明だつたな。

魔力の供給が、なんてこと言つてたから魔力不足に近い状態になつてたんだろうけど、そもそもなんでそんな状態になつてたんだろ？
……ま、どうでもいいか。今はご飯を作るのが最優先事項ですよつと。

ナイフを握るのは何のため？

そりゃあ飢えた三人組を満足させるためだね。

少なくとも武器としてナイフを握ることは今後も無いだろうと思う。

昨日と同じように大鍋に水を張り、火をかけてお湯を作ってから塩をだばつと入れてスパゲティを茹でる。

普段より塩の量が少し多いが、今回のソースはスパゲティ側の塩気をきつめにしておいてソース側を薄味にしておくのと味のバランスが取りやすいためだ。・・・やりすぎると大惨事になるので要注意。

魔術で作った氷のまな板を少し削って皿状にして、この中にオイル漬のドライドマトを投入し、細かく刻んでおく。

次にタマネギをスライスしてからフライパンに投入。

面倒くさいので火力は強め、さつさとしんなりするまで炒める。

ちなみに僕の好みでにんにくを使用していないが、使用したほうが好きな人は多い。

数分でしんなりとしてくるので、そうになったら細かく刻んだドライドマトをオイルごと投入。

今度は火力を下げてからタマネギが完全にあめ色になるまで炒める。水分が少なくなつて焦げそうになった場合は水を投入してあげるといい。

そうやってタマネギがあめ色になるまで炒めた後に塩で味付け。本音を言えば胡椒が欲しいが、無かったので仕方が無い。

同時にスープも作る。

こちらは簡単で、携帯スープを投入してから先ほど刻んでおいたタマネギを投入するだけ。

すごく・・・インスタントです・・・。

ただ、それでも作るのには数分の時間が必要なので、そろそろスパゲティもちょうどいい頃のはず。

ためしに大鍋から一本取り出して味見してみるとやはりちょうど良い具合になっている。

本来はフライパンにスパゲティを入れるが、今回はフライパンのサイズの問題でなべにソースを投入。

ソースを絡めてからしっかりと混ぜればタマネギとドライドマトのスパゲティの出来上がり。

「よし、いい感じだ。これで出来上がり、かな」

馬車の傍で食事を待つ三人を呼んでお皿にスパゲティとスープを盛って食事の準備は完璧。

「香りが凄い食欲をそそるわね・・・」

「毎回思うけどコレは反則的な出来だと思う」

「おおっ・・・。毎回美味しそうだ。主の料理の幅は凄いな、同じ物食べた記憶が無いぞ」

「なるべく飽きられないように頑張るよ。さすがにそろそろ限界が近いけどね」

フォークでズルズルとスパゲティを食べる三人組みを見るとニヤニヤしてしまう。

自分の扱えるものが良い評価を受けるといっのはやっぱり凄く嬉しいな。

「野菜の甘みとドライドマトっていうんだっけ？ あっさりしてるのに妙にうまみがあるもんだから量があるのにぺろりといけそう」

「ソース自体は薄味なのに噛み締めるとちょうど良い味加減になるのが不思議です」

二人の感想でさらに顔がニヤける。

ちなみにエルは無言でバクバクズルズルと食べ続けているので感想は食後じゃないと聞けそうに無い。

顔が楽しげなのでたぶん今回もなかなかの高評価を得ることが出来ただろう。

結局、あっという間にスパゲティもソースも片手間で作ったスープも完食されて鍋にはわずかな油が残るのみ。

これを高圧洗浄器でキレイにして馬車に積み込んで今日も無事に終了了。

明日は何を作ろうかな。

いや、ほんとそろそろレパートリーが底を突きそうだ。

パスタの具に使ってないのはフリーズドライのキャベツくらいしか残ってないし、これも量があるわけじゃないからなあ……。

「いや、着いたね」

「本当にありがとうございます。ユートさんとエルシディアさんのおかげで凄いものを見ることが出来ました」

「ほんとね。果たしてほかの人に信じてもらえるか微妙なくらいよ」

馬車を走らせること一日と半分。ようやく僕らは王都に帰還。

学生二人組みとの付き合いはごく短い期間だったが、イベント自体は胸焼けしそうなほどに盛りだくさんでおなかいっぱい。

クレー射撃モドキで遊んだりとかエル以外の精霊が居たりとかバクバクと料理を食べる三人組とか。

終始そんな感じだったものだから、終わってしまうのが少しさびしい。

「ユートさん。依頼の証明書を出してもらっても良いですか？ そういえばすっかりサインするタイミングが無くて今になっちゃいました」

「あ、そうだった。よろしくお願い」

バッグから依頼の証明書を取り出してウィルに渡すと、ボールペンのようなものでさらさらとサインを書いて渡してくれる。・・・お、達筆だ。読みやすい。

前の依頼のときはハンコで今回はボールペン。

ファンタジーな世界だけに違和感が凄いのだが、たぶんこれを感じるの僕だけか。

ついでに前回と違う点はほかにもあって、証明書がちゃんと紙で出

来てるのだ。

ガルトだと木札だったのに王都だと紙。

なんだか田舎と都会の技術格差を見せ付けられた気がするぞ。

「ありがと。にしても字綺麗だね」

「ありがとうございます。字の練習をしていたときはこんなのが役に立つのかと思っていましたが、こういう機会が増えるたびに練習していて良かったと思います」

子供の頃に思った“こんな勉強が何の役に立つんだ？”っていうタイプの知識は大人になると意外と役立ことを知って驚くよね。

漢字はもちろんのこと三角関数とかもたまに使うし、歴史なんかも話のネタになって大変便利。

受験に不要だった地理をちゃんと勉強しなかったから大学で恥をかいて赤面したこともある。

ホント勉強って奴は馬鹿にならない。

「子供の頃の勉強は大事だね。僕も21になっていまさら実感してるよ」

「そつで・・・え？」 「は？」

おうふ、久しぶりのこの反応。

そろそろ慣れてきたけど旅をする間は永遠にこの反応を見続けることになりそつだ。

「21ってことは・・・ひょっとしてユートさんって学園の卒業者ですか？」

「んにゃ、違うよ。二人の通ってる学園じゃなくてもずっとずっと遠くの学校を卒業してる」

大学は留年か中退になりそうだけどね。

それでも高校はちゃんと卒業してるし、今言ったのはたぶん嘘じゃない……はず。

「そうだったんですか。すいません、驚いてしまっただけです。」

「このナリなのは自覚してるし、慣れてるから大丈夫だよ。でも実際一番年齢と外見がかけ離れてるのはエルだと思　　イタツ！　　ごめんっ！　　足踏まないでっ！」

「いくら主でも言っただけのことと悪いことがある。妾は永遠の15歳なのだぞ」

ジト目でこちらを見つめるエルだが、その口調は軽快そのもの。

おかげで気にしてるんだか気にしてないんだか良くわからん。

大体15歳ってナニさ、冷静に考えなくとも60倍もの開きがあるぞ。

「あはは、それにしてもユート達ってなにか目的があって旅してるの？」

「古代遺跡に行ってみたいなんて思っただけのもの、ほっとんど観光目的だよ。基本的に美味しいものがあると観光名所は回るつもり」

「じゃあそのうちにウイスイスにも来る？」

「うん、そのつもり。古代遺跡のヒントがあるかもしれないし、何より都市全体が教育機関って聞いているから凄く興味がある」

さらに馬車の乗り心地とかを考えれば技術レベルがほかの場所に比べて優れている可能性が高い。

それならば当然興味が沸く訳で、行かないという選択肢はありえないだろう。観光の常識的に考えて。

「ならそのときは是非僕のところに来てください。名所の案内くらいならきつと出来ると思います」

「そうね、ユート達にはかなり世話になったから私も歓迎するわよ」「今地図を渡しますのでちょっと待ってください」

素早くメモを取り出したウィルがガリガリという表現がぴつたりな速度で筆を走らせている。

・・・子供の頃の訓練の賜物ってレベルじゃないぞこれ、僕がこんな速度でモノを書いた日にはあらゆるものがスプーのようになってしまっがな。

「どうぞ。ちょっと大雑把に描いてしまったのでわかり辛いかもですが、たぶん大丈夫だと思います」

「ありがとう。多分そんな遠くないうちに行くことになると思うけどそのときはよろしくね」

一分もしないうちに書きあがった地図は確かに大雑把な感じなのだが、曲がる場所などを比較的詳しく書いてあるので意外とわかりやすい。

字が綺麗なだけじゃなくて絵心まであるのか、正直うらやましい。

・・・あ、そうだ。

エルのことは黙っておいてもらうようお願いしておかないと。

あんま目立っても意味が無い上にトラブルの種になりかねない。

もっとも精霊が居るっていつて信じる人間がどれくらい居るのかよくわからないけどさ。

「そうだ、ちょっと今後つながりで最後に2点ほどいいかな」

「別にそんなかしこまったような言い方しなくてもいいんだけど。たまにユートって変ね」

「かしこまったっていうか、人にモノを頼むときはいつも大体こんな感じだよ。最初に重要な点がいくつあるのか言っておくと話がわかりやすくすすきりするからね」

「そうなの？　なら今度私も使ってみようかしら」

「結構オススメ。特に目上の人と交渉ごとをするときに便利だよ」

だが2点とっておきながら3点4点話すと激しくげんなりされるから使用には若干の注意が必要。

少なくとも前もって話すことはきっちりまとめておかないと逆に悪印象となってしまうだろう。

ちなみに頭がまとまっていなるときに話す場合は“ちょっといいですか”でゴリ押しすると楽かも。

「とりあえず一点目。馬車の食料は好きにしてもらって構わない。

僕らが持つて歩くにはいささか重過ぎる」

「それは助かります。でもスパゲティはちょっと食べられそうに無いですね……」

「あはは……。スパゲティは水がむちゃくちゃ必要だから確かにきついかもしれないね。ともかくそれが一点目で、二点目はエルのこと内々に収めてもらいたいんだ。悪目立ちするのはトラブルの種みたいなものだし、そういうのはあんまり好きじゃない」

「わかりました。有名になるのは利点もありますが、ユートさん達の場合それ以上に欠点のほうが目立ちそうです。特に精霊とその契約者なんて事実が大っぴらになったら……」

能力的にたぶんどこかの軍属にされてから火力支援役になるんだろーな」。

給金はいいかもれないがアチコチ回れないといつまでたっても自宅に帰る目処が立たないので困る。

「そそ、意外と面倒なことになりそうだからよろしくね。さて、それじゃあそろそろ僕らはギルドに戻るよ。二人とも気をつけてね」

「はい、ユートさん達もお気をつけて」

「いい経験させてもらったわ。またね」

馬車に乗る二人を見送って今回の依頼も無事に完了！

あとはギルドに行ってお金を貰ってからご飯だな。

「僕らもギルドに行って換金してからご飯を食べに行こうか」
「うむ。了解だぞ」

ロータリー状になっている王都の入り口近辺からギルドまではそう遠くない。

精々20分も歩けば到着するのでゆっくりのんびりと歩いていたのだが。

「露店・・・減ったね」

「さすがに武技大会が終わって数日も経ってしまつとな。だがこれが王都の日常だぞ？」

「わかっちゃいるんだけどなんとなく納得出来ないうつていうかなんというか・・・」

武技大会期間中はアレだけ詰まっていた露店が今となってはほとんど無い。

実際にはこれが日常で武技大会の期間中のほうが異常だったのだから、僕がここに来たときの第一印象があつた露店の数だけ、今のこの風景がやたらと閑散としたものに見えてしまつのは仕方ないことだと思つ。

「前に食べた串焼き屋とか美味しかったけどあれももう無くなつちやつてるかもしれないのか」

「どうだろう、食べ物系の屋台とかはこの辺の店が出した可能性があるからわからぬぞ」

そんな感じで表通りを観光しながらゆつくりと歩くとまもなくギルドが見えてくる。

相変わらず市役所のような佇まいのそれはなんともいえない威圧感。こつ、背筋が伸びるような？

ギルドの中は武技大会期間とそう変わらない感じで、掲示板の周辺で次の依頼をどうするか考えている冒険者や、僕らと同じように一仕事を終えた冒険者がU字型のカウンターで事務手続きをしながら仲間達と談笑している。

やはり全体的に人が減っているのでややすつきりとした印象だ。

「こんにちは、仕事を無事に終えたので換金していただきたいのですが」

「かしこまりました。カードと依頼証明書を出していただいてもよろしいでしょうか」

バッグから取り出したそれらを渡すとオペレーターがにこやかな笑顔でそれを受け取り、カウンターの内側で確認作業となんらかの操作をするのだが、なにやら様子がおかしい。

「しよ、少々お待ちください」

何度も僕のカードを確認したオペレーターが焦ったような顔をして奥に引っ込む。

・・・あれ？　なんかあった？

「どうしたんだらうね？」

「まったくわからぬぞ」

二人で首を傾げるが、実に覚えがまったく無いのだから答えなんて出そうにない。

オペレーターがあまりにも帰ってこないので一度U字型のカウンターを離れてテーブルでしばらくほけーっとしてると誰かが近づいてくる。

「すみません。お待たせしました」

やってきたのはウィルとアリアへの対応に苦慮していた男性だった。

「ギルドの方ですよ。先ほどの方は？」

「自席に戻ってますよ。今回の件は私が対応しますので大丈夫です」

「そうなんですか。あ、イスをどうぞ。気が利かなくてすみません」

「これはありがとうございます。前回のときにも思っていましたけど丁寧な方ですね」

そんな丁寧なんかな？

日本人的には普通だと思うし、こっちに来てから徐々に口調が荒くなってる気がするんだけど。

最初の頃はもうちょっと誰にでも丁寧だったよーな……。

「あまり自分ではそう思っていないのですが、そう見えますか？」

「ええ、とても」

「主は普通の冒険者と比べると異常だぞ。酒を飲んでもろくに騒がないし静かだし」

「……」

まあ、とりあえずマイナスポイントではないしいつか。

異常といわれつつも別に貶されたわけじゃないからね。

「……失礼、話がズレました。とりあえず報酬とギルドカードをどうぞ」

「ありがとうございます。……あれ？　なんか色が違いますけど間違ってますか？」

報酬は銀貨12枚。これはおつけー。

違うのはギルドカード、今までの茶色っぽいのと違ってやや青みがかったそれは光の反射で微妙に紫っぽく輝いていてなんとも不思議で綺麗だ。

「今回の件でランクを二段階上げさせてもらい、ユートさんのギルドランクはCになりました。カードの色が違うのはそのためです」

「え？ さっきまでEだったはずなんですけど、なんで急に？」

「いくつかありますが最大の理由は武技大会での結果です。対戦相手のランクなどを考えればBランクにするのが正しいのですが、残念ながら事務処理上の都合でそれは出来ません。なので今回はCまで上げさせていただきました。このまま依頼を受け続けて下されば次の昇格審査の時点でBになるかと思われれます」

「なんだか僕らのことを高く評価してくださってありがとうございます」

「いえ、実力のある方にそれ相応のランクと仕事を振るのがギルドの仕事です。今後ともよろしく願いますね」

「こちらこそよろしく願います」

男性がにこりと笑ってかえしてくれるが、端正な顔立ちと相まってなんともいえぬ格好良さ。

ふとずいぶん前に見た自分の顔を思い出して思わずため息が出てしまった。

この子供っぽい顔のおかげか女友達はたくさん出来ても彼女なんて一度も出来たことがない。

友達としてはいいけど彼氏には・・・って言われるこの悲しさ、たぶんこの人は経験したこと無いんだろうなあ・・・。

「どうしました？」「どうしたのだ？ ため息なんてついて」

「すみません、くだらないことを思い出しました。なんでもないですし大丈夫です」

ため息の理由が理由だけに恥ずかしくてたまらんぞこれ……。

「それなら良いのですが。さて、これで一応今回の依頼は完了という事で閉めてしまいますね」

「了解です。では僕らも失礼させていただきます」

冒険者ランクも上がり、タスクもひとつ完了。

あと王都でやることはご飯を食べてから乗合馬車でガルトのほうに向かうだけだな。

こういう世界だから山手線のようなペースで馬車があるとは最初から思っていないけど、日に一本とかだったりすると今日はひよっとしたらお泊りになっちゃうかな。

ま、その辺はたとこ勝負でいっか。

「ん~~~~っ!」

ギルドを出てから背伸びを一回。

バキバキとなる背中と肩が気持ちいい。

別に肩肘張って何かをしたわけではないのだけど、市役所っぽい空間に長く居ると肩がこってしょーがないのは僕だけなんだろうか。

「お昼はなににするのだ?」

「どうしようか。パスタの類は今回の依頼で十分に頂いたからいらないうとして、それ以外の食べ物ならなんでもいいかなって思ってるよ。エルはなんかリクエストとか無いの?」

「そうだな……。妾は新鮮な生野菜を豊富に使ったものが食べた

いぞ」

新鮮な野菜というとなんだらう。

サラダだけだと寂しいし、サラダ食べ放題のステーキハウスとかこの世界にあつたっけか？

「ん、じゃあその方向でどこか探そう」

「了解だぞ」

と、いう方針を決めてお店を探しているのだが、これだというお店が見つからないままかれこれ30分以上も歩いてしまっている。

どうやらこの世界には健康志向とかヘルシーなものを食べるという習慣が少ないらしく、考えてみれば僕が食べたものも油を十分に使ったものが多くて生野菜がメインなのは少ない。

辛うじて思いつくのはサラダの種類が複数あつたような気がする定食屋なのだが、そちらは場所が出てこない。たしか王都の裏道一本入って武技大会の会場のほうに歩いていくとあつたはずなのだが。

「どこだっけか。たしかこの辺だつたはずんだけど」

「ギルド近辺の食事処はほとんど行ってしまつたし、どこがどんなメニューを用意しているかなんて妾は覚えておらぬぞ。というより主はよく注文してないメニューまで覚えているな」

「中身はわからないけどね。ほにやらのサラダっていうのが確か何種類かあつたはず」

辺りを見てもあるのは不気味なお店ばかりで僕らが入ろうと思うような店舗はどこにも無い。

ああ、こりゃ駄目だ。

「一度大通りまで戻ろう。この辺りじゃなさそうだ」

「主よ。妾のために探してくれるのはうれしいのだが、そろそろどこかに入らないか？」

「あー・・・。それでいい？ 実は僕も結構おなかが減ってきて・・・」

適当なタイミングで裏通りから大通りに戻ると既に時刻は13時。そろそろ食事を終えた人たちが定食屋から出て行くタイミングなのである意味ちょうどいい時間ももれない。

「んじゃ、そこのお店に入ろうか。確か野菜炒めとかが美味しかったはず」

「主の料理も美味しいが、久しぶりの定食はやっぱ楽しみだぞ」
今回入ったお店は王都の大通りに面した木造二階建ての定食屋。スタンダードなメニューが売りで、比較的量が多くビジネスマン(?)の胃袋をがっちりつかんでいるタイプのお店だ。
値段的にもそう高くないで日本円換算で一食800円から、もっとも高価なステーキでも確か1500円くらいで食べることができる。

「こんにちは」

「いらっしやいませ。お二人ですか？」

店に入ると迎えてくれるのはお店の主人の娘。

ほかのお客さんに可愛がられていたりするので、日本ではあまり見かけない“看板娘”って奴なのだろう。異世界らしくて大変よろしい。

「はい、席は大丈夫ですか？」
「大丈夫ですよ。奥のほうが開いてるのでどうぞっ」

言われるがままに奥のほうに進むと確かに二人分の席がぎりぎり空いていたのでそれに座る。

周りのテーブルには食事を終えて水やワイン（！）を飲む男性などが居て楽しそうに何かを話している。

「ぎりぎりだったね。これで満席じゃない？」

「そうだな。ちょうどいい感じだ」

テーブルの備え付けのメニューをとりあえず眺める。

さすがにスタンダードなメニューなだけあってそろそろ僕でも味が予想できるものが多い。

から揚げ、肉野菜炒め、オムレツ、ソーセージ、サラダ。

・・・ん？ サラダ？

「あ、エル。さっき探してたサラダのあるお店ってここだ」

「探すのをあきらめた瞬間にこれか。運がいいのか悪いのかわからぬな」

「だねえ・・・」

“探し物は最初に探した場所にある。ただし最初に探したときには見つからない”

こういうのをマーフィーの法則っていうんだっけ？ まったく身をもって体験しちゃったよ。

「僕はメルバドの肉野菜炒めにするけどエルは決まった？」

「うむ。コルム茸のチーズオムレットと今日のサラダにするぞ」

「おっけ、じゃあ呼んじゃうね」

喧騒にあふれる店内なので比較的大きな声を上げて呼ぶとすぐに応答。

「えっと……。チーズオムレットと今日のサラダ、あとメルバドの肉野菜炒めを一点ずつで、パンを二人分ください」

「わかりました。料理が出来るまでもうちょっと待っていてくださいね！」

「ありがとう、よろしくね」

とたとたと厨房のほうに戻っていく少女を見送りながらほっと一息。店内の客は見た感じ食事を終えているようだし、料理自体は比較的早く出てくるだろう。

「ねえ、エル。キノコとか詳しくない？」

「突然どうしたのだ？」

「道中で材料を確保できればいいなって思ってたさ。その第一案」「あ……。なるほど。確かにそれはいい考えかもしれん」

まあ、キノコなのであまり栄養価は無かったような気もするけど、美味しいというのがなにより重要だ。

「でしょ？ 取れたてのキノコとか絶対美味しいと思うんだよね」

「そうだな。今後あるだろう徒歩での移動のときには少し探してみよう」

その後も適当に今後について話してみたりして時間をつぶすと、看板娘とは別の人が料理を持ってこっちに向かって歩いてきた。

「お待たせしました。料理はテーブルの上に置いてっちゃんいますね」
「ありがと、お願いします」

こうしてテーブルの上に並んだ料理はもちろん出来ててほやほや。都内の定食屋などとは違って作り置きなんてことも無くて実に美味しそうだ。

まず目を引くのはどんと置かれた肉野菜炒めとチーズオムレット。次にバスケットにたっぷり入ったパン、そしてサラダ。

サラダなんてこっちに来てから初めて注文したけど、意外と大きな。

直径40cmくらいの皿にどかんと乗っている様はまるで野菜嫌いの子供を威圧するかの如し。

「適当に取り分けて食べようか。せっかく複数種類を頼んだしさ」

「そうだな、このチーズオムレットなんて凄く美味しそうだぞ、ほら、中にチーズときのこが詰まってる」

「んじゃ早速一口……。ん、きのこの香りとチーズの相性がいい感じだね。美味しい」

半熟のために黄色に輝いているチーズオムレットはその見た目だけでなく味も良い。

それ自体の味付けは薄めにセットされているのだが、チーズの塩気がいい感じにマッチしていてとろけるような美味しさ。

もし主食がコメだったりした場合だとちょっと薄味に感じるかもしれないが、パンにあわせるならこれくらいがベストだろう。

「オムレットもいいが、肉野菜炒めも美味しいぞ」

左手にロールパン、右手にフォークを持ったエルがニコニコと食べている姿はなんと微笑ましい。

つられて肉野菜炒めを食べると、コレもまたうまい。

ぶつちやけ自宅で作った肉野菜炒めに近いのだが、こっちに来てからなかなかそういうのを作る機会がなかったし、オイスターソースっぽいこの調味料の効果もあつてたまらない。

「うん、うまい。コメが欲しくなるけど」

しゃきしゃきとしたキャベツのような野菜とよくわからない固めの野菜。

そして若干の甘みを持ったタマネギのうまみ。

パンとあわせても決してまずいわけではないのだけど、やっぱりパンよりもコメが欲しくなる味だ。

・・・旅の目的を変えてコメを探しに行こうかな。

続いて珍しく注文したサラダをバクリ。

ドレッシングはシーザードレッシングライクなもので、トッピングには細かく刻んだフライドオニオン。

ややどろっとしたドレッシングがレタスっぽい真っ赤な葉っぱによく映える。

「うーん・・・。エルはこれ好み？」

見た目的にはなかなかいい感じなのだが、僕はこのドレッシングはちょっと苦手かもしれない。

決してまずくは無いのだが、味が濃くてクドイ。

僕としては脂っこいモノの後のサラダなんだからもっとさっぱりとしているほうが好みだ。

「む、主は駄目か？ 妾は結構好きだぞ」

「駄目ってわけじゃないんだけど、油モノの後に食べるなら塩とハーブベースの味付けのほうが好み。これは正直ちよっと味が濃い」

ドレッシングの影響が無い部分のレタス（赤）を3枚ほど取り出してパンの上に載せる。

さらにチーズオムレットを載せて挟み込むようにして一口。

レタスとかはこうやって食べるのが一番うまいかもしれないなあ。

しゃきしゃきとした食感のレタスと、うまみの強いチーズ、そしてほのかに香るきのこの風味。

それらがマッチして実に美味しい。

店で食べるご飯ってなんでこんな美味しいんだろう。

暴食しないの誓いを崩すには十分な破壊力を持っているよ。間違いない。

「あー、もう、駄目。おなかいっぱい」

「うむ……。久しぶりだったから少し食べ過ぎてしまったな」

結局武技大会前と同じようにパンを四人前ほど平らげて食事は終了。胃の中で水を吸って膨らむパンに“うえっぷ”となりながらも久しぶりの店での食事で大変満足。

さあ、乗合馬車の駅のほうに向かうとするか。

次の駅はどこなんだろう、いずれにせよ初めての場所になるのは間違いないから凄く楽しみだ。

1 (後書き)

「前々から思っていたのだが、コメって何だ？ 主のところの食べ物なのか？」

「至高の主食だよ。単位面積当たりの収穫量も小麦より多いし、味も良い。腹持ちも良いといいことづくめなんだけど育てられる条件が厳しいから一部の地域でしか生産してない」

「主がそんな表現をするなんて・・・是非食べてみたいな。この辺にはないのか？ 市場をずいぶん歩いていたではないか」

「穀物袋をいちいち開けて確認してないから言い切れない部分はあるけど、たぶん無かったと思うよ」

「うう・・・。それでは食べられないではないか」

「そうだけどさ、テューイは港町なんですよ？ ひよつとしたら輸入されてるかもしれないじゃないか。期待して探しに行こうよ」

「そうか、その手があるな！ 楽しみになってきたぞ。わくわくするなあ、主！」

雲ひとつ無い美しい夕空の下に広がるのは草原と小さな川、そしてその向こうには低い山と森。

蝶のような昆虫がパタパタと花から花へと飛び交い、小川を眺めればたまに水面を跳ねる小魚を見ることが出来る。

後ろを向けば王都やガルトと比べると大分地味な家々が立ち並ぶ。おそらく権力者のものと思われる家だけは石造りである程度立派だが、それ以外は塗装などをしている家も少なく、どれも木の色の落ち着いた佇まい。

「王都やガルトと比べるとどこかでこてん、と落ち着いちゃうなあ」「確かにこの雰囲気は・・・のんびりとしたくなるものがあるな」

僕らは今、王都から馬車で5時間ほどの距離にあるトリビットという町（村？）までやって来ていた。

「にしてもやっぱり馬車はお尻に優しくない構造だと思う。ウィルたちのあれに乗ったあとだから余計に感じちゃうんだけど」

「そればかりは仕方があるまい。ウイスリスは技術的にも優れているからああなっているだけで馬車なんていつたらどこもあんな感じだぞ」

王都から発車した乗合馬車は僕ら以外に4人の乗客を連れて出発したのだが、荷馬車じゃないので速度がエラク速くてその分振動もきつい。そして当たり前のようにサスはナシ。

当然ケツの辺りが痛くなってくるわけで……。ほかの4人はぶらり途中下車だったし、こんなに長く乗るとい

は馬車の運用上考えられていないのかもしれない。

「あのシステムを売ったら大分儲かりそうなんだけど売ったりしないのかな」

「たぶん売っても作れる場所が少ないのではないかと思う。金属製の板で衝撃を吸収しているようだったが、あんな風に綺麗に金属を加工できる職人はおそらく少ないぞ」

「貴族とかお金持ちはどうしてるんだろ？ さすがにアレに乗ってるとは考えにくいんだけど」

「大方何かしらの魔術でも使って緩衝しているのだろう。魔術師とかなりのお金が必要になるが衝撃吸収能力としては最優秀だからな」

「ここでも魔術か。」

「もう少し不便ならば技術が発展するというのに……。」

世の中ってやつは権力者の不便がないと技術にお金流れないから発展しないのよね。

「僕もそれが出来ればいいのだけど、うまく出来ないのが最大の問題か。」

「仮に空気のクッションみたいなのを作った日にや魔力のハンドリングを終えると同時に中に詰まった魔力が大爆発してしまう。」

「そんないちいち魔力障壁が必須でデンジャラスなクッションなぞ全くとって欲しくない。」

「そもそもそんなものをクッションと呼んでいいのか甚だ疑問である。攻撃手榴弾とでも名前を改めてしまおうかと馬車の中で無意味に悩んでしまった。」

「ちなみにエルがやっても同様の結果になるらしい。ナンテコツタイ。」

「しかし主よ。どうするのだ？ 確かに風景は綺麗だし落ち着きたくなる気分もわかるが現実逃避をしても始まらぬぞ」

「僕も悩んでる。どうしようか、どうしようもないんだけどさ」

このひじょくのどかな場所では僕らにとってクリティカルな問題があった。

ここは観光名所もなく、ギルドも無い。完全に片田舎。

馬車の駅があるものの外部から人が来るといよりはココの人たちが帰ってくるためのものだ。

ガルトへの最短ルートでもあるのだが、そもそもそのガルトに向かう人間なんてほとんど居ない。

そんないくつかの事実が重なった結果、この町には宿屋が無い。不要だから。

もちろん僕みたいな奴も多少は居るので完全に100パーセント不要というわけではないのだが、明らかに需要と供給のバランスが釣りあわないので利益にならず、誰もやりたがらないようなのだ。

一応、近隣住人の協力の甲斐あって宿屋を併設している飲食店を見つけることは出来たのだが、店主が旅行に出かけていて一時閉店中。オーマイガッ！

アチコチ回りながら帰るのも悪くないと思ってた数時間前の僕を今すぐ殴り倒しに帰りたい。

「たぶん、現状二つの選択肢があると思う」

「うむ」

「一つ目は町の中で野営というわけにはいかないので一度離れた森に移動してから野営するという案。暗くなると準備するのが大変だからやるなら早い段階でやったほうがいい」

「二つ目の選択肢にもよるが、選択肢としては悪くないと思うぞ。」

街中でそんなことをしたら衛兵に連れられてしまつからな」

治安のよくないこの世界の森で野営なんていうのは出来れば避けたい選択肢だけど、街中でホームレスのように過ごすよりは世間の目を考えたときに幾分気が楽だ。たぶん。

・・・衛兵の詰め所とか宿貸して いや、無理か。

「二つ目はさっきの人すら知らない併設の宿屋を探して歩き回る」

「時間的に見つけることは困難かも知れぬ。それに地理に明るくない主と妾では店を探すのだけでも一杯いっぱいになるな。妾の意見を言わせてもらえるならば悲しいが野営が良いのではないか？」

「ぶっちゃけ僕もそれが良いと思う。幸い雨も降らなさそうだし、準備は早いほうがいいからとりあえずそこらのお店で夕飯の材料を集めつつ向かおうか」

「うむ。日があるうちに準備などをしてしまおう」

今日の夕飯はどうしよう。すっかり定食を食べるつもりだったから何も考えてなかったよ。

ジャガイモとベーコンとサラダでジャーマン風とでも言い張ることにでもするか。

地味に定番なカレーとか作りたいんだけど香辛料が手に入らないんだよなあ・・・。

「こんばんは」

「いらつしやい。見ない顔だね。旅人さんかい？」

先ほどの黄昏てた場所からすぐ傍、年季の入った古ぼけた看板のもとで八百屋を開くのは同じように年を重ねたお婆さん。

だが商品は見るからに新鮮でそのどれもが美味しそうだ。

特にそのレタス（赤）は瑞々しさが半端じゃないし、土のついた

ジャガイモは芽が出てないところをみるに取れたてっぽくて大分良さそうな感じ。

「ええ。今さら夕飯の材料の買出しです」

「材料の買出しって今から外に出るのかい？　いくらこの辺りの治安がいいからといってわたししゃやめたほうがいいと思うがねえ」

「しょうがないですよ。たまにはこんなことだってあります。．．．あ、これとこれください」

「はいよ。でも野営するなら気をつけなさい、世の中なにがあるかわからんからね」

エル以外に心配されるのってずっとこい久しぶりな気がする。なんかちょっと嬉しい。

「心配してくださってありがとうございます」

「うむ、主と妻ならこれくらいどうってことはないぞ」

お代の銅貨6枚を出してから商品を受け取り、にっこり笑ってからその場を退出。

さて、お次はベーコンでも買いに行くか。

おそらく規模的に不要なのだろう。ガルトや王都などとは違い、この村には市場“も”ない。

一応辛うじて僕らが居るこの辺りは商店が並んでいるものの、都内のコンビニくらいの間隔なのでおよそ市場には見えないのが悲しいところ。

近くのお店でベーコンとチーズを購入して野営の準備はとりあえずレベルで完了。

まだ辛うじて日が残っているので今のうちに向かって出来れば野営

の準備もしてしまいたい。

買い物を終えてから町を出て歩くことおよそ30分。

若干予定が変更になったものの、ほぼ予定通り森の入り口まで到着。既に日が落ち始めているので準備を急がねば。

「そつえばなんで森の中でやるのだ？ 安全を第一に考えるならば草原でやるほうが良いと思うぞ」

「いくつか理由があるんだけどさ、最大の理由は草原でやった場合町の人たちから僕らが見えるじゃない？」

「そつだな」

「“なんであの人たち町のすぐ傍で野営してるんだろう”って思われるのが嫌でさ。この辺りの危険度はそれほどでもないらしいし、それならこの辺で人目につかないように野営しようかな、と」

「なるほど、確かにそれならこの辺りでやったほうが良さそつだ」

とりあえず納得した様子の子のエルを見ながら僕は野営の準備。

まずはテント といいたいがツェルトを広げてからパラコードで木と木の間に吊るして組み上げる。

この世界の良くわからない皮で作られたものと違い、僕の世界謹製の高性能ツェルトは軽くて水も通さないし畳めば信じられないくらいコンパクト。

ロゴなどが無いのでメーカーは不明だが、役に立つことは間違いない。

「ほかの理由としてはちょっと弱いところがあるかもしれないけど、僕の世界の一品をあまり見せびらかしたくないっていうのと、久しぶりにちゃんと魔術の練習がしたいってくらい」

「主の世界の一品はどれも非常識だから見せびらかさないほうがいいのはわかるが、魔術の練習？」

「こそ、最近はずっかり練習してなかったからそろそろ練習しないと腕が落ちる」

射撃の精度っていうのは撃った数に比例するし、撃たなくなればすぐ落ちる。

僕はトイガンによるマッチでそれを嫌というほど経験しているので練習量が落ちるのは怖い。

マッチなら負けるだけで済むが、この世界の戦闘で負ければ待っているのはろくでもない事実のみ。

「あれだけ高精度な魔術を放てるにもかかわらず練習か、主って意外と細かいのだな」

「ごういうのって言うのは日々練習だと思っよ。焦らず急いで精確にっていうのが魔術に限らず閉所での射撃の基本だから」

「・・・妾からすればそれは無茶を言っているようにしか聞こえないのだが」

「そうでもないよ。たぶん」

会話をしながらグリル台を組み、フライパンとクツカーを準備。

クツカーに水を注いでお湯を作ってジャガイモを投入、ベーコンを炒めるのはこれが茹で上がってからじゃないと冷めちゃうので後回し。

「ん、エル。適当にその野菜を水洗いしておいてくれない？」

「了解だぞ」

エルが両手でレタスを持つと40cmくらいの水球が現れてジャブジャブと空中でレタスを洗う。

僕にも出来るとはいえ、なんと非科学的な光景だろう。現代の物理学者が見たら頭を抱えて倒れるに違い無い。

「これでいいか？」

「ありがと、ばっちりだよ」

水を吸って十分に膨らんだレタスを受け取り、適当な大きさにちぎってから魔術で作った氷の皿に並べる。

今回のソースは超絶手抜き版なので粉末状にしたパルミジャーノのようなチーズを上から掛けて終了。

既にソースというかフリカケだが、最後にカリカリに炒めたベーコンチップを掛ければ十分に美味しいので時間が無いならコレで十分だろう。

ジャガイモのほうも大体良い感じに茹で上がってきたのでそろそろベーコンも炒めようか。

この世界のベーコンは当たり前だがスライスしてパッキングされているわけではないのでなんともし迫力があって美味しそうに見える。

これを適当な大きさにスライスしてフライパンで炒めるといい香りがして美味しそうなのだけど、これを単体で食べるとなると少し悲しい。

一応細切れのベーコンはサラダと和えるつもりだが、やはりなにか一手間足りてない気がする。

「おっけ、とりあえず出来た。用意の時間が無かったからあれだけと明日はうまいもの食べよう」

「そついいながらもサラダは結構いい感じに出来ているではないか」「ありがと。でもチーズとベーコンしか入ってないからやっぱり手抜きだと思うよ」

「いいではないか、美味しそうなことには変わりないぞ。食べてもいいか?」

「うん。召し上がれ」

早速エルがサラダを食べるのを見ながらジャガイモに手を伸ばす。収穫されてからほとんど時間がたつてないと思われるそれはメークインと男爵芋とサツマイモを足して三で割ったような感じで、ホクホクさには欠けるところがあるものの特有の甘みがあったりして地味に美味しい。

そついえば冷蔵庫とか無いから買ってなかったけど、バターとかがあればおやつとかにちょうど良いかもしれない。

いつもより大分さびしい食事を終えてから食器を洗えば太陽はすっかり沈み、辺りは闇に包まれる。

光源となるのはぼんやりとした魔術による光と動物対策の焚き火だけ。

バッグの中にはガスランタンも入っていたのだが、ガス欠になると同時に捨ててしまったので今はもう無い。

「毎回見ても飽きないな・・・」

「主は星を見るのが好きなのだな」

それでもこの満天の星を見れるのは結構良いところだと思う。

元の世界では天文系に対してほとんど興味が無かったのが悔やまれる。

恥ずかしながら北斗七星の場所もわからない、もう少し知識があればエルに小話でも出来たのにな。

「僕のところじゃ星なんて全然見えなかったから新鮮で、なんか圧倒されちゃう」

「むしろ妾からすれば星が見えないというのが不思議なのだが。瘴気でも溜まっているのか？」

「瘴気？」

エルの口ぶりからして異世界ジョークに近いのだろうけど、瘴気ってなんだ？

納期寸前のシステムエンジニアやプログラマが吐き出すものとして扱ってる人が多い気がするけど、正しくは病気の原因となる悪い空気だっけ？

昔Webで読んだ携帯電話の開発部隊の話なんて文面からも瘴気があふれ出していたような気がする。

「黒い霧のように見える気体で、発生原因は良くわかっていないが、一説によると大気中の魔力が変質したものらしい。大半の生き物に有毒なのだが同時に攻撃魔術の媒体としては有効なために好事家の間では瘴気を利用した杖などが凄まじい値段で取引されているな」

「利用して杖にすることは瘴気を回収する部隊とかが居るんだ？」

「うむ。国の騎士団などが住民のためにいたり、もしくは死んでも戦死者リストが不要ということで冒険者を利用することもあるぞ」

戦死者リストが不要ってそれどこの民間警備会社なんだろう。

あ、でもそうか。考えてみれば昔の戦争って結構傭兵とか使ってたもんな。

別に考え方が現代風ってわけでもないのか。

「報酬は良さそうだね。危険度も半端じゃなさそうだけど」

「危険度は極めて高いな。瘴気で気が狂った魔獣は普段よりも恐ろしく戦闘能力が上がるし、未制御の瘴気は攻撃魔術を暴発させやすくするからこちらの戦闘能力が下がる。おまけにさっきの通り有毒だ。妾は冒険者として動いたことが無いからわからぬが、おそらく報酬のほうもそれ相応だろう」

「魔術の暴発ってちよっと人事じゃないんだけど」

「確かに魔術が使いにくくなると戦闘能力が落ちる主と瘴気の相性は最悪だ。基本的に瘴気を見つけたら逃げることを推奨するぞ」

全くその通りだと思う。

魔術が使いにくい環境下で普段よりも強化された敵と戦うとか命がいくつあっても足りないがな。

「全力で逃げるから大丈夫。さて、僕は魔術の練習でもしてるから先に寝てて良いよ」

「良いのか？ じゃあちよっと失礼して・・・」

光の粒子と化したエルが僕の中へと入り、同化完了。

最近は宿もお金もあつたからこの感覚も随分久しぶりだ。

「相変わらず主の中はあつたかくて気持ちがいいな。おやすみだぞ、主」

「おやすみ、エル」

時刻は9時前だから交代まで5時間くらいかな。魔術の練習時間としては十分すぎるほどだ。

まずは近くの木と木の間にパラコードを張ってそこから木の枝をぶら下げ、それを魔術で凍らせて円形のターゲットを5枚作成。

このときターゲットの氷は魔術を当てても割れにくいように魔力で

コーティングして強化しておく。
同時に複数の魔術を扱うのも訓練になるし、何よりいちいちターゲットを作り直すのは面倒くさすぎる。

光源は上空に照明弾を打ち上げて確保。これでおっけー。

準備は完了、あとはひたすら撃つだけだ。

目的は焦らず急いで精確に撃てるようになること。

両手を挙げた姿勢でカウント開始。

心のカウントがゼロになると同時に素早く射撃の姿勢へ。

右手の人差し指と中指に魔力を集中、左手は右手を包み込んでそれを安定させる。

一番左のターゲットに照準（なんて物はないけど）合わせてからイメージ上のトリガーを引く。

気の抜ける音と共に撃ち出された氷柱がターゲットに命中。軽い音を立ててターゲットが跳ね上がる。

続けて一番右のターゲットに照準を合わせて射撃を行うが、ゆれるターゲットに混乱して失中。

気にせずもう一度、今度はきっちり命中してターゲットに氷柱が突き刺さる。

同じように残りのターゲットにも命中させ、掛かった時間は5秒くらい。

氷柱は大体一秒に二発程度の射撃が可能なので理論上は2・5秒が最短。

もちろん早いに越したことは無いが、3秒を切れば相当に早いといっても良いんじゃないだろうか。

今後はそれを目指して頑張ろう。

あとは精度もか。

現実では撃てるチャンスは今よりも遥かに少ないし、そういう場面で外したら目も当てられないことになってしまう。

今回は早速一発外してしまっただが、これからはなるべく精確に当てていきたい。

最後に最も重要なのはコレを定期的に行うことなんだろうなあ。

一日でどうにかなるほど上手くなれるとはとても思えないし、継続こそ力なりって言うもんね。

昨日の野宿　　気持ちとしては野営と言いたい　　からトリビ
ットへと戻り、そこから馬車に乗って大体6時間とちよつと。

僕らが到着したのはリディーナという比較的大きな町で、規模感
はっと見の評価なので間違っているかもしれないけどおそらくガル
トと同程度。

この分だとギルドのほかに観光名所や名産品だってあるかもしれ
ないのでちよつと楽しみだ。

「ふう、ようやく着いたね。とりあえず適当に観光しながらご飯
も食べつつ、ついでくらいで宿でも探そうか。さすがにこの規模の
町なら宿無しかさそういうことにはならないでしょ」

「うむ。了解だぞ」

馬車の運転手に「ありがとうございます」と一言お礼をしてから
正面のメインストリートへ。

街中を出歩く人の数はそれなりに多く、それに伴って露店なども多
いのでご飯の種類はより取り見取りで何にしようか悩んでしまっ
た。

肉類や野菜を使用したサンドイッチや謎肉の串焼き、惣菜パンにカ
ットフルーツ。

この時間だからなのか酒をメインで販売するところは無いが、夜に
なればおそらく居酒屋のようなものも増加するはずだ。

もしこの町を食べつくしたいのならば一日だと確実に時間が足りな
いな。

「なににしようか？　　ありすぎて悩んじゃうんだけど」

「妾が決めて良いならアレにしないか？」

ぴしりとエルの指差す方向にあるのは一軒の露店。

直径30cm、長さ60cm程度の謎肉を串にさしてゆっくりと遠火で焼き、その表面をこそぎ落とすようにスライスしたものをパンに挟んで売っているようだ。

「先ほどから香辛料と肉の焼ける香りを外に振りまいておるものだから溜まらぬ」

「うん、僕も我慢できなくなった。アレにしよう」

早速お店のほうに近づくと40くらいのおじさんが人の良さそうな笑みを浮かべて挨拶してくれる。

その間にも肉を焼く手が止まってない辺りプロの仕事って感じがして実に良い。

「こんにちは、その美味しそうなパンを二つ貰ってもいいですか？」

「あいよ、御代は銅貨で12枚だよ」

ん、意外と高いな。

この世界って僕のとこに比べると食料品の値段が幾分安いのに。

これだと秋葉やお祭りの露店で買うのと値段がほとんど変わらないじゃないか。

とは言ってもいまさら買いませんなんていうつもりもないのでお金を出して魅惑の異世界版ドネルケバブを二つ購入。

受け取ったその中には大量の肉と申し訳程度の野菜が薄い生地で包まれていて、野菜はともかく肉に関してはかなり強力に香辛料が振りかけられており、食欲を過剰に掻き立てられて涎が出るのを止められない。

受け取ったうちの一つをエルに渡してからその場で早速一口。強烈な香辛料の香りと共に口の中に肉の脂が広がって実にジャンキーで美味しい。申し訳程度の野菜は風味としてほとんど残らず、あまり意味が無いのが残念な所か。

「これは旨いね。こんな香辛料がカツチリ効いたのを食べたのは久しぶり」

「確かにこれは良いな、この香りが食欲をそそるぞ」

これはサルサソースベースで野菜多め、肉少なめとかにしたらまた変わって美味しいと思うんだけどな。

もしくは野菜を抜いてヨーグルトを掛けるとか。そういえばヨーグルトって見かけないな。僕の世界だと昔からある食べ物だからこの世界でも出回ってると思うんだけど……。

361

「もうちょっと野菜を多めにして辛みの強いトマトベースのソースと合わせるとまた違った感じになって美味しいかもしれないけど、肉の部分の自作は無理っぽいのが残念だ」

「……どうしたらそんな風に新しい料理の発想がポンポンと出てくるのだ？」

「地元に似たような食べ物があつたから思い出しただけで僕が発明したわけじゃないよ。そんな風にはこぼこ新しい発想が浮かぶなら冒険者辞めて料理人してると思う」

メインを頂いたあとはデザート目指して町巡り。

先ほどからどこからともなくメープルのような甘い香りが漂ってきていてたまらない。

甘いにおいにつられてとはまるでどこかの昆虫のようだが、それも

致し方ない。

ぶっちゃけてしまうとこの世界には甘味が足りないっ！

なんせ蜂蜜か果物くらいいいしか甘いものが見つからないのだ。

蜂蜜は製造コストの都合凄まじい値段がするし、果物ベースのフルーツソースも蜂蜜ほどじゃないが一般人である僕が手軽に食べられるほど安くは無い。

たぶん上流階級の方々が紅茶などと合わせて楽しんでいるのだろう、そんなものは一冒険者に過ぎない僕には高級すぎて話にならない。

「うーん、さつきからメープルっぽい甘い香りがするんだよなあ・・・どこからだろう？」

「確かに言われてみると何か甘い香りがするな。これをメープルといいのか？」

「僕のところだとね。たぶんこっちじゃ別の名前になってるはず」
僕の嗅覚が間違いないならばこれは久しぶりにメープルシロップとご対面出来るはずだ。

・・・僕の世界では高級品のメープルシロップが果たしてこの世界で僕の手が出せる範囲の値段に収まっているかというと甚だ疑問だが。下手すりゃ蜂蜜より高いかもしれない。

メープルの香りを追いながら街中をフラフラと歩くと徐々に香りが強くなってくる。

目的地に近づいているのは嬉しいんだけど、まるで犬か何かのよう

だ。
「ど、どうしたのだ？　なんだか落ち込んでいるように見えるぞ？」

「んにゃ、なんでもないし大丈夫」

自分が犬みたいなんて考えを頭の中から削除してから再び歩くと随分と高級そうな雰囲気のパン屋を発見。開け放たれた窓からメープルの香りがするので目的地はここで間違いない。

「なんかやたらに高級そうなんだけど、これ僕入っていいのかな」
「そんなしり込みしていても仕方あるまい。ほら、主。行くぞ」

エルに連れられて店に入るとやはり雰囲気がおかしく違ふ。

なんていうんだろう、見れば中の店員さんもお客さんも縫い目の綺麗な高級そうな服を着ていて、お金持ちな雰囲気を纏っているせいか凄く落ち着かない。

だけど店の中はメープルの良い香りで包まれていて、売っている物も実に美味しそうだ。

だが

『ちょっと、高すぎる、かな？』

『・・・このバターカップケーキというのはどうやら一個で銅貨40枚だそうだ』

エルが指差すマドレーヌ（商品名：バターカップケーキ）は直径10cmほどの白い陶製のカップに入ったまま売られていて、バターとメープルの溶け合ったなんとも甘くて美味しそうな香りがする。自作した頃は一個300円もしないで作れたのにここだと銅貨40枚。日本円でおよそ4000円。

『何も買わないのは悲しいからどれにする？』

『そうだな、一番安いのはクッキーのセットがひとつ銅貨24枚か。これなら二人で食べられるしちょうど良いのではないだろうか』

おそらく現代日本でも探せばこの値段のカップケーキやクッキーを見つけることが出来るとは思いますが、まさか異世界に来て最高級品のお菓子を食べることになるとは思わなかったぞ。

小さいが随分と洒落た紙袋に入ったバタークッキーをひとつ購入してすぐごと退場。

あの雰囲気には長居は無理だ。僕という存在はあまりにも場違いで居心地が悪すぎる。

さすがにあの店の傍で袋を開けて中を食べる気にはなれなかったので、クッキーを食べるのにちょうどいい場所を探して歩くとメインストリートの真ん中に比較的大きな噴水とベンチが用意されていたので二人で腰掛ける。

「凄い場所だったね」

「妾もあんなところ初めて入ったぞ。まさかこんな小さなもので銅貨24枚とは」

「でも美味しそうだ。封あけてみようか」

紙袋をちぎると中には3cmくらいの小さなクッキーがおよそ10個。

うわぁ。これで銅貨24枚かよ……。確かに良い香りはするけどさ……。

「ほら、エル」

「う、うむ」

エルは恐る恐るという感じに紙袋の中のクッキーに手を伸ばして一つを口に入れると、黙ってむしゃむしゃと噛み砕く。

するとエルの表情からいつもの凜々しい感じが消え、にへらあとい

う表現がもつとも正しいと思われる蕩けたものになる。

「これは、凄く、美味しいな。果物よりもずっと甘くて香り高くて蕩けるようだ」

エルの感想を聞きながら一つ手にとって口に放り込むと確かに手の入ったバタークッキーであることがわかる。

口の中でクッキーがぼろぼろになって崩れるということはきっちりとサブラージュしてから生地に行っているということだし、その結果メープルの香りと甘み、そしてバターの風味が全体に広がってなんとも美味しい。

特にクッキーというのはバターの比率がかなり高いタイプの菓子なのにべたついた感じが全く無いのはどういうことなんだろう。さすが高級品と言わざるを得ない。

「高級なだけはあるよやっぱり。メープルの香りとバターの香りがこつこつマツチするなんて」

「凄く凄く美味しいのだ。もう一ついいか？」

「せっかく買ったんだしどんどん食べちゃっていいよ」

「そ、そうか。なら頂くぞ」

エルはすっかりクッキーに毒されていてなんとも蕩けた表情。

女の子は甘いものが好き、というのは全国共通どころか異世界でも共通らしい。

気づけばクッキーはすっかり消えうせてエルと僕のおなかの中へ。満足げなエルの表情を見れてとても嬉しい。

いっつもお世話になってばかりだもんな、こつこつので少しずつでも返していければいいのだけど。

二人で高級クツキーを貪って満足してから宿探し。

何件か見つけた上で最終的に決定したのはメインストリートから一本入った所にある二階建ての宿で、外観がかなり綺麗なのに二人部屋が一晩で銀貨一枚と比較的リーズナブルな上に食事まで付いているとすればほかに選択肢は無かったというのが正直なところ。

宿の女主人にお金を払ってキーを受け取り、部屋に入ればたとベッドに倒れ込む。

ポケットコイン式のベッドではないので少し硬いが、それが今では逆に気持ち良い。

「んあゝ・・・。なんとというか、ちと、疲れたな」

「昨日は野宿であんまり寝てなかった上に馬車での移動までしたのだから仕方ないぞ。先に水浴びでもしてきたらどうだ？」

「そう、だね。このままだとベッドを汚しちゃうから先にちょっと浴びてくるよ」

当初驚いたのだが、この世界のお風呂事情はそれほど悪くない。

入浴の習慣こそ無いものの水浴びをする習慣くらいはあるし、石鹸もある程度普及しているのでおいが気になることも無い。

全身とついでに衣類を洗ってから宿のガウンに着替えて再びベッドに倒れ込む。

実は客商売の冒険者家業をやる以上、少なくともある程度の清潔感が必要不可欠だ。

「エルも入ってきたら？」

「うむ。行ってくるぞ」

ガウン片手にシャワールームに向かうエルを見送ってしまったと、話し相手が居なくなってしまうのでやる事が無くて結構暇だ。こついうときに携帯電話とかがないこの世界だと手持ち無沙汰で困る。

何かしようかと思いつつも結局何もせずにごろごろとベッドの上で過ごす10分もしないうちにガウンを羽織ったエルがこつちにやってくる。

その動きはどこかぎこちなくフラフラとしていて、傍目にもものぼせたのは明らか。

「熱いのだ……」

僕がお湯を浴びると快適なことを教えてからはエルもお湯を使っているようなのだが、ちょっとやり過ぎな気がしてならない。なんでシャワーしかないこの世界でこんな状態になるんだろう？ とはいえ放置しておくのも良くないので、エルのカップをバッグから取り出してそれに水と氷を注いでから渡してあげる。

「ほら、水でも飲んで」

「ありがとう、冷たくて美味しいな」

しばらく二人でお風呂の余韻をポケットと楽しむ。

たまにエルが魔術を使って冷たい風を発生させるのだが、それがまた大変に気持ちが良い。

あ……。なんて贅沢な時間の使い方なんだろう。

「そついえばギルドには行かないのか？」

ふと、エルが思い出したかのように呟く。

「うん、今のところ仕事が必要な状況じゃないし、それならガルトまで急ぎたいかな」

「そうか、確かにそうだな」

「正直ガルトまで戻る意味ってあんまり無いんだけどね」

あれこれ考えたところでガルトでのTODOってというのは結局のところ二つしかない。

一つ目はカーデイスさんに文句の一言でも言っただけで今後こつこつという仕事の振り方をやめてもらうこと。

二つ目はリーナさんにある程度付き合おうとっておきながらほとんど挨拶も無しにこつこつまで来てしまったことを謝ること。

「意味なんてどうでもいいではないか。妾は久しぶりにリーナに会いたいぞ」

「そうだね。僕もあの落ち着いた宿に行きたいな。あとはあの人生史上最高に旨いパンが食べたい」

そしてその後は本格的に古代遺跡の調査　の前にテューイに行つてから魚料理を堪能だな。

・・・あれ？　プライオリティが古代遺跡の調査よりも食事が上になつてる気がする。

ま、いいか。美味しいご飯というのは明日への活力につながるしね。

3 (後書き)

1 サブライジユ:

冷えたバターと小麦粉をすり合わせて砂状にしたもの。こつするこ
とでグルテンになりにくくなるのでボロボロと崩れやすい生地にな
る。バターの比率が高く、香り高いのでクッキーやタルト台に向く。
タルト台として使用する場合は砂糖を少なめにしておくほうがアパ
レイユとの相性が良い場合が多い。

朝の8時にリディーナを出た馬車は3時間も掛からぬうちに次の町であるキームへ到着。

昨日はちゃんとした宿で寝たもんだから元気もあつたし、まだ午前中なら次の町まで移動しても夕方前には着くからいいだろうということ。ことでカーダス行き馬車に乗ったのが失敗だった。

途中からぽつぽつと雨が降り始め、あつという間にバケツをひっくり返したような雨に変わってしまったせいで道はデロデロ。馬車はノロノロ。

おまけにゴブリンとその巨大バージョンのホブゴブリンという生物にエンカウント。

迎撃自体は大口径の魔術をぶっぱするだけで大した問題もなく完了したのだが、そいつら謹製の落とし穴に引っかかった馬が怪我。

これをエルが治療術で治すまでに1時間。

雨と馬の怪我という二点の問題が発生した結果、カーダスに到着したのは日も落ち始めた午後6時。

幸い、一緒に迎撃作業を行った女性に宿の場所を教えてもらったので宿無しの憂き目には遭わなくて済みそうだ。

もしこれで何の情報も無いままに馬車からほっぱり出された日にはとんでもないことになっていたのだけは間違いない。

「えっと……。この辺のはずなんだけど」

「主、たぶんあれだとおもっぞ」

エルの視線の先にはベッドと小麦が描かれた宿屋っぽい看板。

中に入ってみると大学時代に頻繁に行った大衆居酒屋とよく似た雰囲気、客の数がかなり多い上にお酒の力も相まって結構うるさい一応、こぢんまりとした宿屋のフロントっぽいところがあるので間違えて居酒屋に入ってしまった、ということはなさそうだ。

「こんばんは。宿を一晚借りたいのですけど空きつてありますか？」
「いらつしゃい。一人部屋が二つなら銀貨一枚と半分。二人部屋なら銀貨一枚だけはどうする？」
「二人部屋でお願いします」

人受けしそうな笑みを浮かべるとしりとした店の主人に銀貨を渡してキーを受け取る。

ああ……。宿が取れて本当によかった。これで満室ですなんて言われた日には僕は泣く。

「部屋は階段上って右手側の202号室だ。綺麗にはなっていると思うが気になるところがあれば言ってくれ。それと食事はどうする？」

「あ、是非いただきたいです」

「それなら先にそこらへんで座って待っていてくれ、すぐに注文を取りに行かせるから」

「わかりました。よろしくお願いします」

店の主人が指差すあたりに座ってまずはメニューを確認。

……。うん、酒以外なんも書いてないわ。なんぞこれ。

「これさ、見出し部分に酒って書いてあるってことはメニューの身は全部お酒なのかな？」

「あ……。どうやらそのようだ。ま、どうせオススメで適当に頼むのだから問題あるまい」

「確かにその通りで」

こちらの様子を伺うボーイさんを見ながら手を上げるとすぐにこちらに向かってやって来てくれるあたり、教育が行き届いてるなっと思っ。

「いらっしやいませ。注文はお決まりですか？」

「料理はなにかオススメの肉料理と野菜料理をそれぞれ二人前ください。お酒は・・・正直あまり詳しくないのですが、果実酒は少し苦手なのでオススメのビールなんてあります？」

「ございますよ。ローデルキューやカルディアなどは香りがよく、少し甘いために比較的華やかで食前酒としてぴったりです。肉料理とあわせるならシクラヤカルティなどがどっしりとしていて良いですね。料理に負けません」

おうふ。

固有名詞が連続して出てくるとわけがわからん。

えっと、どうしたもんかな。とっさに覚えきれたのがローデルキューくらいなだけだ。

「じゃあとりあえず食前なのでローデルキューを一つで。エルはどうする？」

「むっ……。妾も主と同じのにするぞ」

「かしこまりました。それでは料理をお作りして参りますのでもう少々お待ちください」

そういつてにこやかにキッチンの方へ向かうボーイさんを視線で追いながらため息を一つ。

「ちょっと聞いただけであれだけしゃべられると内容を理解するだ

けで精一杯。固有名詞を覚える余裕がないよ」

「そうだな。メニューに酒しかない時点である意味お察しなのかもしれないが、どうやらここは酒飲みのための店のようだぞ」

「っぼいね。ビールだけであれならワインなんかも含んじやうとどれだけの種類があるんだろう」

「無数に、という言葉がもっとも正しいのではないだろうか。これだけあるならこの常連はさぞ楽しい思いをしているのだろうな」

エルの言うとおりほかの客を見ればみんながみんな凄く楽しそうだ。左手に金属製のカップで右手には大きな肉と野菜が刺さった30cm近い串をもって騒ぐ男性。

1リットルは入りそうな特大の陶製ジョッキを逆さにして一気飲みをしている女性。

そしてそれをやんややんやと囃し立てる周りの男性達。

きつと普段の生活で溜まった鬱憤の類を酒の力で一掃しているのだと思う。

こういう場に居ると、少し、大学生のときの友人に会いたくなる。あいつら元気かな。今でも酒飲んでるかな。

「主？」

「どした？」

「なにかあったのか？ なんだか遠い目をしていたが？」

「普通の大学生だったときはよくこんな場所に呑みに来てたからさ、友人を思い出しちゃって」

「そうか……。やはり早く帰る方法を見つけたいものだ」

「ん、大丈夫だよ。そんなに焦っても結果は出ないし、僕は僕なりにゆっくりと確実にやってくから」

あーっ！ もうっ！

わずか一瞬でテーブルの雰囲気がしんみりしちゃったよ。

実際問題それほど気にしてるわけじゃないんだけどな。ちょっと感傷的になっちゃっただけで。

酒よ早くカモン。このままじゃ場が持たないぞ。

そんな僕の願いが通じたのかボーイさんがトレイを持ってこちらにやってくる。

なんていいタイミングなんだろうって思ったけど、ビールだけならそりゃ1、2分で来るわな。

「お待たせしました。ローデルキューです」

「ありがとうございます。それじゃあエル、乾杯しよっか。主に今後の旅行の成功を祈って」

「う、うむ」

よどんだ雰囲気壊すように軽くかんぱい、とカップをぶつけてからビールを一口。

ローデルキューはややオレンジがかった明るい黄金色のビールで、花のような香りがしてとても華やか。

味わいは柔らかかな甘みが主体ながらややスパイシーな風味だけが後に残るのでクドくないのが素敵。

前に飲んだベルビュークリークみたいなとは違って果物っぽくない甘みが非常に新鮮で面白いビールだ。

「ぶはっ、これはなんというか旨いの一言に尽きる」

「食前には最適といえるな。軽いから肉料理には合わないかもしれないがジュースのように飲めるぞ」

「だね。これはほかのメニューが楽しみになってきちゃうな」

がぶがぶとビールを飲みながら少し待ってやってきたのは野菜料理

が二品。

何かのチーズが乗ったグリーンサラダと薄黄色のみぞれが掛かったなにか。

ついでにビールの御代わりを適当に要求してからフォークでグリーンサラダをバクッと頂く。

サラダのドレッシングは薄めだけどその分チーズの塩気が濃いので意外としょっぱい。

今の僕のビールはやや甘いのでちょっと相性が良くないが、日本のピルスナー系のビールと合わせればかなりの肴になるんじゃないかと思う。

「この黄色いのなんだろう？」

「たぶんラファーナだと思うが本命はその下の卵焼きだぞ。キノコとひき肉が挟んであるおかげでうまみが加算されて実に良い感じだ」

ラファーナという黄色のみぞれはぴりぴりとした唐辛子に近い辛味が特徴的で、その下に隠されたキノコとひき肉を巻いた卵焼きとの相性が素晴らしい。

しっかりと火が通ったせいで卵自体はやや淡白なのだけど、きのこときき肉のエキスが混ざり合って実にジューシー。

「ん〜っ！ この店の酒が多いのも良くわかるよ。これは酒が進む」

最近は肉々しいものばかり食べていたもんだから余計に美味しく感じて仕方が無い。

やっぱり人間肉ばかりじゃ駄目だね。他のものも食べないと。

「やめてくださいっ！」

美味しい料理とお酒を出すお店に響き渡る女性の声。

はあ……。

なんかトラブルの予感。

後ろを振り向けば僕と同じくらいの男女のペアがガラの悪そうな男二人に絡まれているようだ。

「そういわないでさ、そんなのと呑むより楽しいよ」

「そーそー。そんなん置いといて俺らと遊ぼうよ」

うわ、ナンパでももうちょっとやり方があるでしょうに。

なんでどう見ても彼氏持ちの人に声を掛けるのかな。

それとも奪うのが好きな下衆だったりするのかな。

「主！ 主！ あの組み合わせはまるで演劇のようだぞ」

「僕らに限らずテーブルの上の料理に被害が出なければいいけど」

「なんだ、あまり興味がなさそうだな。助けに行ったりしないのか？」

「男女のペアにしゃしゃり出るとかどう考えても泥沼になるから駄目でしょ。見た感じ男性のほうは落ち着いてるし放置でいいんじゃないかな」

どうみてもここは彼女を助けるために男が頑張るシーンであって、僕みたいなのが出てっつてすべてを制圧して帰るシーンじゃない。ブーイングなんて欲しくはないぞ。

さすがに女性が連れ去られそうになったりしたらなんとかすると思っけど、たぶんそんなことにはならずに終わると思う。あの男性強そうだし。

「お待たせしました。カルティと肉料理のオススメとして骨付きト
ーブの香草焼きです」

こんな状況だというのにボーイさんは颯爽と新しい料理とビールを
持ってこちらに登場。

その表情には焦りや脅えのようなものは無く、エラク落ち着いてい
るのが不思議だ。

「店の中で喧嘩が始まりかねないのにエラク落ち着いてますね。ひ
よっとして日常なんですか？」

「そうですね。お酒を多く出すのでどうしてもこういう問題は増え
てしまいます。私も最初は驚きましたが今となっては日常の一つで
す。ま、最悪は店長がシメるので大丈夫ですよ」

「あ、そうなんですか。ちょっと安心しました」

どうやら大丈夫らしいので安心してビールを一口。

今度のはやや色が黒く、ボディが強烈な味わいで単独だと苦味とア
ルコール分が少しばかり強い。

だけど濃い目の味付けのサラダとの相性は比較的良好で、サラダに
混じったチーズのまろやかさがボディの強さを押さえて全体のバラ
ンスを整える。

全くここはビール党の僕には最適なお店だ。

明日にはここを出るのが少し残念なくらいに思えてしまう。

「ビールとチーズの組み合わせって反則だと思う」

「確かに。だがこの肉も相当に良いぞ？」

「エル、アゴにソースが付いてるよ」

骨の部分を指でつまんで豪快にかじりついてしまったせいで口元に

はソースがだらり。
せつかくの美少女が台無しである。

「こういうのはこうやって豪快に食べるものなのだから良いではないか」

「まあ、そうなんだけどさ・・・」

若干変な味のするデミグラスソースのようなものがコレでもかというほどに掛かった骨付き肉を手でつかんでバクツと一口。

肉はとても柔らかくてジューシーで、噛むたびに肉の脂が溶け出して実に美味い。

さらにハーブの香りで肉の臭い部分が殺されているので野性味あふれる肉が苦手な人でも大丈夫。

さらにさらにいうならビールとの相性もバグツン。これはいい。

これで背後のBGMが人の暴れる音とイスか何かが壊れる音じゃなければ完璧だったんだけど。

「しっかしこのビールは美味いね。僕のところじゃビールなんてメーカーこそ違うけど基本的にピルスナーっていうのしかなかったから凄く新鮮」

「それは少し味気ないな。妾はなんでも美味しく頂けるほうだと思うが、それでも毎回同じでは飽きてしま　主っ！　後ろっ！」
「え？」

最初に感じたのはどろりとした何かが僕の頭にだばっと掛かったこと。

次に感じたのは香辛料が効いた美味しそうなスープの香り。

そして最後に感じたのは

熱さ。

「うわっちゃっちゃっちゃ・・・水っ！ 水っ！ うわらばっ！？」
地面にのた打ち回ろうかと思ったあたりで大量の水がだばだばと全身に掛かる。
おかげでやけどはしないで、もしくは最小限に抑えられそうだけど全身ずぶ濡れ。

「す、すまぬ。咄嗟だったから加減が・・・。主、大丈夫か？」
「げほっ、げほっ・・・。うん、ありがと。おかげでやけどにはなっていないと思う」

ちくしょう。ナンテコツタイ。
誰に着せられたかもわからないフィールドジャケットだけど気に入ってたのに・・・。
ずぶ濡れなら乾かせばいいけどこんな真っ赤なスリーブが染み付いちやったら終わりじゃないかっ！

真っ赤に染まった自分のフィールドジャケットを脱いでからゆらりと振り向く。

コレは仕返しの一つでもしないとイケないよね・・・？

「主？」

「ちよつと、仲裁でも、してこよう、かな？」

「あ、その、えーつと・・・。ほどほどに、だぞ？」

気づけば二人だったはずの原因は三人 いや、床に二人ノビてるから合計五人か になつて今もまだ戦闘中。
男性が軽やかに攻撃をかわすものだから彼らのテーブルとイスはバラバラ。

店長さん、これでもまだシメるような状況ではないのですか？

・・・なら、僕がやってもいいですよね。

「ここは美味しい料理とお酒を出すお店ですよ。暴れるなら外でやってくれませんか？」

「やってくれたなあああ！」

「まぬけ。相手は一人なんだから数で押せばいいだろうが」

「・・・・・・・・」

完全に無視である。

これでは暴力に出るもの致し方がないだろう。

ノロノロと動く原因1へ無造作に近づいてその腕を取って背負い投げ。

僕は別に武術の心得とかがあるわけではないので綺麗なものとは口が裂けても言えないが、それでもターゲットを無力化するという目的を十分に果たすだけの威力があったみたいだ。

「いきなり何をしや」

間抜けにもこちらを向いて文句を述べようとした原因2はあっさりと男性にしばかれてダウン。

男性はたぶん僕と同じで20を少し超えたくらい、顔は年相応で普通な感じ。

ビターチョコレートっぽい色の髪を短めに切り揃えていて、額にはガツリと汗が浮いているので結構疲れているみたいだ。

この世界でよく見るポロシャツっぽい服装をしているのでおそらく冒険者などの荒事担当者ではなくて普通の一般市民だと思う。

女性のほうは・・・っといけない、見てる場合じゃなかった。こっ

ちに原因3が向かってきてるよ。

聞き取るのもいやになるような罵詈雑言を吐き散らしながらのハイキックをしゃがむ様にして回避し、軸足を払ってやると簡単に転んでしまったので軽く頭を蹴って継戦能力を奪っておく。とてもイージー。

不屈き者共はコレにて制圧完了。

あとでめんどくさい事にならないように店員さんに説明でもしようかと思っただけど、やり始める前から見られてたし別に必要ないだろう。

「ありがとう。助かった」

正直、この人も問題だと思う。

そりゃ絡まれた以上どうしようもないのかもしれないけど、出来れば外で戦って欲しかった。

だけにこやかな笑顔でそういわれると強く出れないよ……。

「いえ、単なる仕返しだったので……。それよりもまたこういうのに遭遇しないように気をつけてくださいね。次はどうなるかわからないんですから」

「ああ、重々気をつけるよ。お礼としては微妙かもしれないが食事代くらい奢らせてくれ」

「いいんですか？　ありがとうございます」

たぶん今回のお会計はそれなりの値段のはずなので嬉しい、というかいいのかな。

病気と借金以外は喜んで受け付けるつもりなので断るつもりは無いけどな。

「ん、主。お帰り」

「ただいま。ねえ、エル」

「どうしたのだ？」

「明日は馬車を諦めて服でも買いに行かない？」

「そうだな。主の傷を抉るようで申し訳ないがそれはもう駄目だと思っぞ」

「だよねえ・・・」

「はあ、中のポロシャツまで駄目にならずに済んだのを幸運と思っしかないか。」

「それにしても欲しくて服を買うのではなくて必要だから買うなんて経験は初めてだ。」

「この世界の服屋なんて入ったことも無かったし、ちょっとだけ楽しみかもしれない。」

4 (後書き)

(宿の中で)

「あ、忘れてた」

「何を忘れたのだ？」

「ジャケットが台無しになる原因を作った彼らにある程度弁償してもらうつもりだったのに」

「全員連行されたのだからもう間に合わないぞ」

「服って高いんだよね？」

「主の着ていたのと同じ品質のモノを買おうとしたら金貨数枚を出す必要があるな」

「うーん……。それだと適当に安いのを買うしかないか」

「まあ、いいのではないか？ 主ならどれを着てもそれなりに似合うと思うぞ？」

「ありがとう。そういつてくれると少しだけ心が軽くなるよ……」

気に入ってたフィールドジャケットがスリーブまみれになるという比較的不幸な一日があけて本日。

僕は予定通り上着を購入するためのお店を探してアチコチを歩き回っていた。

単純に服を買いに行くだけなら宿屋の主人に場所を聞いてしまったほうが確実に早いんだけど、昨日とは打って変わって天気もいいので散歩がてら探すことにしたのだ。

現在の時刻は10時過ぎ、朝とは違ってこの位の時間帯ならばポロシャツ一枚でもあんまり寒くないので大丈夫。

市場で買ったリンゴを齧りつつ、まったりと店を探す間の話題はやっぱり服について。

驚いたのはこの中世っぽい世界における布のコストがそう高くはないらしいこと。

エルも仕立屋を使ったことが無いので具体的な金額はわからないみたいだが、季節の変わり目に町を歩いていると“新しい服を仕立てなきゃ”なんて会話が普通に飛び交っているそうだ。

ちなみに今の季節は春で、夏になるまでにはもう少し掛かる。

だからあんまり暖かい上着を買いとお金が無駄に掛かるだけであつという間に使えなくなってしまうので気をつけないと。

「結局のところ、主はどんな服が欲しいのさ？」

「そういわれると何が作れるのかにもよるんだけど、ぶかぶかした格好が楽で良さげかな」

特にトレッキングやキャンプ、釣りなどに行くときは今まで着てたようなぶかぶかとしたフィールドジャケットが好み。

やや丈が短いタイプならあんまり見栄えも悪くならないし、ポケットが多いので軍用懐中電灯などのアクセサが多いモノを入れておけば何かと役に立つ。

カーゴパンツなんかもある程度大きいほうが着てて楽し、汗をかいても張り付かなくて良い感じ。

「うーむ……。それなら上着を仕立てるのではなく適当な防具屋あたりで外套を買ったほうがいいのかもしれん。服と違ってやや動きづらいところがあるのは欠点だが、価格も安いし普通の服と違って寒いなら包まり、暑いなら開放することが出来るから結構快適だぞ」

「そ、そんな便利そうなモノが……」

外套って普通の上着とかも含まれるとは思っただけど、エルの言い方からするとたぶんクロークかマントのようなモノのことを指しているのだろう。

そういえば冒険者の内の何人かに一人は使ってたよーな気がする。フィールドジャケットと比べてポケットが少なそうなのは欠点になるが、単価が安いとかベンチレーション機能 構造上当たり前だけど があるというのはかなり大きい。

仕立てるのではなく買うというのも地味ながら利点の一つか。

仮に仕立てに二日掛かるとしたらその間は身動きが取れなくなるし、そうなると財布の具合がかなりよろしくない。

仕立ての間に仕事をすれば財布の問題は解決できるが、この外気温でポロシャツ一枚というのはなかなかしんどいので可能な限り町から出たくはないわけで。

となれば選択肢はおのずと決まってくるというもの。
なによりファンタジーな世界観で冒険をやるならクロークは鉄板で
しょう。常識的に考えて。

「うん、それ良いかもしれない。ちょっと方針転換して外套を探す
方向で行こう」

「うむ、きつと主にはよく似合つと思つぞ」

と、そんなわけでクロークを求めて入ったのは冒険者御用達と思わ
れるギルドに隣接した雑貨屋さん。
比較的大きな床面積な上に、二階建てのおかげで商品の幅はかなり
広い。

一階は主に野外生活用のグッズや武器がメイン。
ちよつどWild-1などの総合アウトドア販売店のような雰囲気
で不覚にも懐かしいと思つてしまったのはここだけの秘密。センチ
な気分を外に出すのは昨日だけで十分だ。

剣や杖などはさらつとしか見てないけど、グッズのところをしてみ
れば虫や動物除けのお香とかコンパクトにたためるカラトリーの類
など、あつたらいいなつてモノが結構多い。

基本的に置いてあるのは冒険者向けのアウトドアグッズになるが、
魔力を利用したランタンなども置いてあるので一般の人にも有用な
モノは意外と多いかもしれない。

全体的に値段はそれなり、あまり安くは無いので衝動買いなんかは
出来そうにないのが地味に残念だ。

階段を上がって二階のメインはシュラフやテントなどの布製品。

テントの類が設営された状態で展示されているので一階と比べて雑然とした様子だが、それでも商品力テゴリごとになんとなく別けられているのでクロークを見つけるのはそんなに難しくなかった。

「うわ、結構あるなあ」

「さすがに店の規模が大きいだけは有る。これなら好みの一着が見つかるのではないか？」

棚に吊るされているのはかなりの数の外套。

袖があつたり、フードがあつたり、ポケットがあつたりとデザイン
の幅は広く、選択肢には事欠かないのは実に素晴らしいと思う。

色もオリーブやセージグリーン、カーキにコヨーテブラウンと地味系カラーに限れば随分と豊富。

値段はピンキリ、明らかに布の品質が違うのとか銀系の刺繍が入ったのとかは恐ろしいことに単位が金貨となっている。

こんなものをアウトドアで使うなんてもつたいなさ過ぎると思うのだが、ここに売られているということは使う人も居るんだろうなあ
。。。

ともかく普通の品質のものに限れば銀貨2、3枚で購入が可能で、なるほどコレなら普通に上着を仕立てるよりは遥かに安く済みそうだ。

「うーん……。あんまり悩んでもしょうがないし、コレにしようかな。。。」

なんとなく手に取ったのはセージグリーンのクロークで、袖やポケットは無いがフード付き。

丈はそれほど長くないので僕が着ても不自然ではないはずだ。たぶん。

不自然じゃないかをエルに確認してもらいたいで羽織ってみると想像以上に軽くて驚いた。

これなら動きを阻害することもないし、戦う上で問題が発生することも無いだろう。

さすが冒険者用品店のクローク。よく出来てる。

「どうだろ、変じゃないかな？」

「どこが変なものか、むしろ主に良く似合っておるぞ」

「ありがと。じゃあコレにしようかな」

うん、地味にこの世界の服装に切り替えられるのは嬉しいな。

ぶっちゃけ今までの格好ってこの世界にはちょっと似合わないと思っでは居たんだ。

きめ細かく頑丈に織られたコットンで出来たフィールドジャケットにカーゴパンツ。

笑っちゃうほど頑丈な1000D　もしかすると500Dかもしれない　コーデュラナイロン製のスリングバッグ。

要するに野球帽を被ってAR15でも携帯していれば「どこの民間警備会社の人ですか？」って格好だったのだ。

それが今日、ようやく異世界に溶け込めるような格好になった気がする。上着しか変えてないけど。

「そういえばエルは大丈夫？　といってもその格好に外套じゃあんまり似合わない気もするけど」

「妾は大丈夫だ。意外とこの格好は暖かいのだぞ？」

「そうなのか。じゃあとりあえず今回は僕のだけであっけーだね」

一度クロークを脱いでカウンターで代金を支払う。お値段は銀貨2枚と半分。
僕の世界でまともなアウトドア用のジャケットを買った場合、軽く数万円を取られることを考えればコレはなかなか安いんじゃないかと思う。

その後はひとしきり一階の商品を眺めて満足した後、隣のギルドへと移動。

目的は当然お金稼ぎ。

今回の出費はそれほど痛いわけではないが、それでも仕事の一つや二つを消化しておかないとそろそろお金がなくなってしまう。
それにギルドのランクがCになってから一つも依頼を受けてないし、ここらで一つくらい受けてもいいんじゃないかなとは思っていたんだ。

だけど

「これは、ちょっとバイオレンス過ぎやしませんかね・・・？」

「ばいおれんす」という言葉の意味はわからんが、さすがギルドランクがCといったところだな」

乱雑で読みづらい掲示板の中からサクツと見つけたCランク冒険者向けの依頼は以下の通り。

“アルダ山で取れるココルスの確保”

“カーダス周辺の魔物の掃討作業”

“スカルナ地方における魔獣の分布調査”

一番上の依頼は採取系のために一見安全そうだが、依頼を受けた冒険者が予定日より7日以上経過しているのに帰ってこないことを示す真っ赤なハンコが押されているのでこの中じゃ地味に一番危険。

魔物の掃討作業は近辺の軍人との共同作業なので恐らく傭兵のような扱いを受けるのだろう。

おまけに期日がはっきりして無いので長いこと引き摺りまわされるかもしれない。

正規兵の変わりに危険地帯に突っ込まれるかもしれないし、出来れば受けたくないタイプの依頼だ。

魔獣の分布調査に関してはまず距離が遠い。

前人未到というほどではないが、それでも馬車で3日以上掛かるとはエルの話。

その間ずっと学者のために炊事洗濯火力支援と行わなければならないのは精神的にも肉体的にも結構大変。

・・・あれ？ 受けない依頼がないぞ？

僕の理想としてはここで仕事を請けて即、もしくは明日早朝に出発。目的地で依頼を遂行してからその場でお金かハンコを受け取り、ガルトに向かうというパターン。

比較的メジャーなタイプのフローだし、理想と言いつつも探せばあるものだと思うのだが。

「報酬面であんまり贅沢言いつもりはないんだけど、せめてガルト方向に近づけるような依頼って無いのかな。別にDとかEの依頼でも全く構わないんだけど」

「むっ……。王都と違って掲示板が乱雑で読みにくいのだ」

「確かにちよつと読みづらいね。依頼票が重なっちゃってるのはいくらなんでもまずい気がする」

「全くだ。カーデイスはこの辺をきっちりとしていたのだがな」

この町の冒険者が少ないのか、それとも依頼の量が多すぎるのか。依頼の紙に募集期間の延長を示すハンコが無いあたり後者なのだろうが、ともかく掲示板はその容量をあつさりとおバーするだけの依頼で埋め尽くされている。

こんな状態だと依頼を出したのいつまでたつても発掘されず、そして依頼を受ける冒険者が居ないという事態になるんじゃないかなーか。

そしてそれはギルドの信用的に考えて凄くヤバイ気がする。どうしようもないけど。

「お、コレなんてどうだろう」

「どれどれ……。ん、ナルキスでの依頼ならガルトにそこそこ近づくことも出来るし、主の目的にぴつたりで良いと思うのだ」

混雑極まりない掲示板と格闘すること約10分。

ようやく見つけたのはナルキス警備の予備要員の依頼。

概要を読む限りだと衛兵が村の周囲の魔物を制圧する間の空白を埋めるのが役割で、期間もわずかに二日間だけ。

何も無ければ村に居るだけでいいみたいだし、それでいて報酬は銀貨9枚となかなか。

エルと同意が取れたところで掲示板から依頼票をはがしてカウンタ
ーへ。

ギルドの規模そのものはガルトのとそう変わらないと思うのだが、受付には何人かオペレーターが居る辺りこの町の依頼の量がうかが

える。

「すみません、依頼を受けたいのですが」

「おおっ！ ちょうど良いところに来てくれたのですねっ！ さあ、
どれを受けるのですか？」

「・・・あ、えーつと、これです。よろしく願いします」

「それじゃあ処理をしちゃいますのでもうちょっとだけ待ってくだ
さいね」

テンション高い人だなあ・・・。

普段からこんなだと疲れちゃわないのかな。

「・・・よしっ。これで処理は完了です。この時期は依頼がわっさ
りと来るので大変なんです。ほかの冒険者さん達もへるへるになっ
ちやいますし。だから機会があればまた来て下さいねっ！」

「そ、そうなんですか。それは大変ですね・・・」

すみません、きつとそのリクエストには色の良いレスポンスを返せ
そうにないです。

「エル、手続きは済んだから早速向かおう。依頼票を見た限りあん
まり遠くないみたいだから上手いこと馬車があれば今日中には着く
と思うんだ」

「うむ。了解だぞ」

5 (後書き)

「ギルドの掲示板を見てたときに思ったんだけどさ、魔獣と魔物って何が違うんだろ」

「あゝ……。きつちりとした線引きは恐らくないと思うぞ。瘴気によって強化される生き物はみんなひつくるめて魔物と呼ばれているし、その中でも普通の野生生物に近いものが魔獣と呼ばれているのだと思うが……」

「そっか、あんまり区別ってされてないんだね」

「うむ。人によっては敵対的な生き物なら何でもかんでも魔獣と言いつ張るような者も居るしな。主のところと違ってあんまりそういう区別がしっかりとしているわけでは無いのだ」

「なるほど、だからホブゴブリンに襲われたときにも魔獣と魔物と両方の呼び方が聞こえたのか。なんか凄く納得した」

ナルキスはカーダス発キューライン行きの馬車に乗って二時間強。前回と違ってトラブルなく進んでくれたのは本当によかった。

既に日も傾いた夕方なので急いで依頼で指定された建物に向かったのだけど、なんと依頼主の隊長さんが外出しているため、応接室で待機しながら紅茶を飲んでいるというのが僕らのスタッツ。

ちなみに建物の看板には“ファルド王国騎士団 ナルキス派出所”とあったので、この村の施設というよりは国の施設のようだ。

地方が保有する自警団とか衛兵とかじゃなくて国所属の騎士が居るといふのには驚いたが、考えてみれば総戸数100にも満たないような小さな村で生産性の無い軍事ユニットを維持するのはそれなりに難しいのかもしれない。経済とか詳しくないので全く根拠とかはないけどさ。

ま、そんなことよりも重要なのはここで出された紅茶が絶品という事実だ。

紅茶を飲むの自体が久しぶりなので採点が甘くなっているとは思いますが、水色はセカンドフラツシュ特有の濃いブランドー色、飲む前から感じられるほどの芳醇なマスカテルフレーバーと円熟した甘く香ばしいコクのある味わいで、これはまさしく最高級品。ハッキリいってコレだけ美味しい紅茶を飲むのは日本でだって簡単じゃない。

「主っ！ このお茶はありえないほど美味しいぞっ！」

「僕もそう思う。こんなに美味しいのを飲んだのはどれだけ振りだ

る」

「ふふっ、気に入ってもらえて何よりだわ。そんなに喜ばれると隊長に習った甲斐があったってもんね」

なのに僕らの感想をジョークかなにかと勘違いしたのか手のひらを振って笑う女性はソフィアさん。

この村に派遣されている騎士見習いの一人だ。

赤い髪は肩の当たりで切り揃えられていて、切れ長で同色の瞳と合わさって快活な雰囲気を漂わせる。

170cmくらいの身長に引き締まった体格のおかげでモデルかなにかのようだ。

ちなみにこの村に派遣されている人員は三名。

ソフィアさんと同じく騎士見習いのネイクさんと、上長である正騎士のクレアムさん。

正騎士一人に見習い二人というのはやや戦力的に不安に感じるところがあるのだが、騎士の戦力を僕は知らないし、そもそもこの地域で凶悪な生物が闊歩するなんて話はギルドでも聞いたことが無いので恐らく問題はないのだろう。

「そうだ、お茶代替わりってわけじゃないけど、もし差し支えなければ二人のことを聞かせてもらえないかしら」

「僕らのこと、ですか」

「ええ、今まで来てくれた冒険者たちと雰囲気とかが全然違うからちょっと興味があるのよね」

うーむ……。あんまり語れるようなことって無いよーな気がする。現状をありのまま話すのは論外だし、記憶喪失ネタとか使った場合は場の空気が重くなりかねない。

どうしたもんか。

「主は何を悩んでおるのだ？ この間の武技大会の話でもリーナを助けたときの話でも良いではないか。確かに主の冒険者として活動した時間は短いかもしれないが密度だけなら誰にも負けておらぬ」

エルはそういつてくれたのだが、リーナさんの話つてある意味トラウマだからねっ！？

あらずじだけ紹介すればそりゃちよつとした物語かもしれないけど、人殺し要素満載だからお茶を飲みながら語るような話題じゃない気がするのは僕だけじゃないはずだ。

武技大会にいたつては何を話せばいいのかわからん。

一戦一戦の様子をラジオよろしく実況出来るならともかく、僕にそんな技術はない。

かといつて一回戦目がどうたらこうたら、二回戦目がうんたらかんたら見たいな話し方をしたところでも面白みがあるとはとても思えないわけで。

「おっ！ ユート君つて今年の武技大会に参加したんだ。どこまでいったの？ 予選突破した？」

「うむ、主は本戦に出場し、二回も勝ち抜いて賞金まで貰ったほどだぞ」

「凄いじゃないの。それなら安心してここを任せられるってもんね。だけど」

だけど？

「ウチの戦闘馬鹿がユート君に模擬戦を挑んでくるのは間違いないからそれをどうにかしなくちゃ。いくら馬鹿とはいってもこの

忙しいときに怪我なんてされたら困るのよね」

「いやいや、ちょっと待つてくださいよそれ。なんかおかしくないですか？」

おかしい、何がおかしいって模擬戦を受けるのが前提になってるところだ。

怪我もなにも僕がそれを受けなければ全く問題ないだろう。

大体僕は模擬戦なんてやりたくないぞ。

武技大会に出る前なら“死なないから問題ない”くらいの認識だったかもしれないけど、終わってみれば鈍痛に耐えながらベッドの上で三日間。これ以上そんな経験はごめんこうむる。

しかもこのタイミングで怪我しちゃうと当然依頼も失敗になるだろうし、今まで少しずつ積み上げてきた信頼を失いかねない。

そうなってしまうたら肉体的よりも経済的なダメージが甚大過ぎてヤバイと思うのだ。

「え？ だって模擬戦受けないの？」

「受けませんよ。ソフィアさんのいう通り怪我をしたりされたりしたらたまりません。依頼が受けられなくなっちゃいます。・・・ってなんでそんな驚いてるんですか」

「ごめん、武技大会に参加する人って模擬戦とかとにかく戦うのが好きな人っていう印象があったもんだから驚いちゃって。でも良かった、それならウチの戦闘馬鹿が怪我をする心配もないわね」

なるほど、ソフィアさんが驚いた顔をした理由はそれか。

武技大会本戦出場という経歴は今後の自己紹介などで自分の能力を証明出来るちょうど良い指標になるかと思っただけで、そんな風に見られる可能性があるならTPOを考えなくちゃな・・・。

「実はですね、そもそも僕が武技大会に参加することになった理由は

あれから約30分程度、僕の話はこの隊長であるクレアムさんがやって来たので一時中断となった。

ソフィアさんは若干不満げだったが、僕としてはボロを出さないように話すのが大変だったので、地味に嬉しかったというのが正直なところ。

クレアムさんは20代後半くらいの男性で、短めの髪の毛は濃いチヨコレート色、力強さを感じられる瞳が青くて綺麗だ。

このヨーロッパライクな色の組み合わせ自体は比較的メジャーなので町を歩けばよく見かけるのだが、顔のパーツ一個一個が優れているので随分とカッコ良く見えて羨ましい。

ただ、みよーに影があるっていうか、なんていうか。

たぶん、一地域の担当者となるまでの道のりは平坦じゃなかったんだろうなあ……。

「待たせて悪かったな。いつもならこの時間帯には帰ってきてるんだが、今回は魔獣討伐の下調べとかをしてたから遅くなっちゃったんだ」

「いえ、ほとんど待つてませんし大丈夫です。クレアムさんが下調べをしたということは明日から早速依頼が開始されるという認識で

よろしいですか？」

「おう。まだ完璧とはいえないが、冒険者を待たせると余計に金が掛かっちゃうしな。明日から二日間でキッチリやるつもりだ」

クレアムさんはそういうとテーブルの上に小さな筒のようなものを置いた。

筒の直径は3cm、長さは20cm程度、表面には小さな文字で

こつちに来てから視力も上がったから読める “緊急時以外使用禁止”と書いてあるので、恐らく発炎筒的なモノか？

「それは？」

「こいつは緊急時連絡用の信号弾だ。まずないとは思うが、もし村に大量の魔獣がやって来てユート君とエルシディアさんの二人で対処が出来なくなりそうな場合にはそれを空に向かって放ってくれ。使いたいときはこいつに魔力を通しながら“発射”といえれば作動する。一発限りだから使うときは注意してくれ」

コレ、横にして撃てば銃の変わりになるんじゃないか？

信号弾として十分な機能を持っているならば弾丸は十分な高度まで打ち上げられるはず。

当然弾頭のエネルギーは相当量で、少なくともゴブリンくらいなら余裕で無力化出来るだろう。

可能かどうかは知らないが、コレの作動条件をファイアリングピンで操作出来るようになれば異世界初の銃が作れるようになるわけか。

魔術を撃ち出す以上バレルは不要だし、最大の問題点はシアとハンマーの作成かな。

あの辺のパーツは磨耗しやすい上に製造には相当な技術が必要だ。特にスプリングとかは熱処理が

「なんか考え込んでるみたいだが、何か気になることでもあったのか？」

「・・・いえ、なんでもありません」

いかん、最近思考が暴走気味な気がしてならない。

この間のジャケットがおじやんになったときも最初に思いついたのが武力行使だったし、気づいてないだけでストレス溜まってるのかなあ？

「と、とりあえず信号弾の件は了解しました。ほかに依頼を受ける上で注意すべき点などはありますか？」

「依頼の範囲からは逸脱しているかもしれないんだが、もし良ければ村の子供達に冒険の話聞かせてあげたり、勉強を教えてあげたりしてくれないか？ 二人とも魔術師ならある程度以上の教育を受けているんだろう？ 村は二人で警戒しきれるほど狭くは無いし、それならいつそ子供達の近くに居てもらいたいんだ」

「教育の件も了解です。算術なら教えられると思います。一心、念のため聞いておきたいのですけど村に魔獣が侵入してきたときの処理の流れはどうなっていますか？」

「あー・・・。ぶつちやけあまり考えられて無いのが実情だ。この村は強力ではないが魔獣などに対して忌避効果のある魔力障壁を常時展開しているせいで襲われたことが一度も無いんだ。だから俺たちが定期的に討伐を行えば問題ないという風な認識を持たれてしまっている」

おうふ、それは結構危険な気がする。

いくらこの近辺にあまり強力な敵性生物が居ないらしいとはいえ、AC130のようなモノが空から常時見守ってくれているわけでもないのだから油断するのは危険すぎる。

平和なのはいいことだと思っけど平和ボケはまずいだらう。常識的に考えて。

これにはクレアムさんも苦笑い、などと現状をどこかの番組のナレーションのようにいつてみてもまるで笑えないというのが異世界の悲しいところだ。

「はぁ……。冒険者をやってるユート君が呆れるのもわかるよ。俺もいろいろ言ってるんだがね。緊急時に自動で連絡が来るような魔道具は高いから買えないのも仕方ないとして、俺らに連絡を取る仕組みくらい何とかかなりそうなもんだが……」

「えっと、なにも起こらないとは思いますがもし魔獣などが侵入してきた際には臨機応変に対応していきたいと思います」

「ああ、そうしてくれると助かるよ。明日からはよろしく頼む」

「はい、こちらこそよろしく願います」「うむ、こちらこそよろしくどうぞ」

あれから話ほとんどん拍子に進んでいき、結局僕らのメインタスクは村の防備における予備要員というよりはすっかり教育担当のような状態になってしまった。

どうせ来ないであろう敵を待ってのんびりさせるよりは村の子供達に勉強を教えさせたほうが費用対効果的に優れているだろうという判断らしい。

なんだかんだ言ってクレアムさん達も結構のんきに構えているような気がしてならないぞ。

その結果、僕らにや個室とお勉強用の参考書の類が与えられてエルと二人で学習計画を構築中である。

とはいっても僕はこの世界の歴史や地理なんて欠片ほど知らないし、国語なんかわからない。

国語に関しては文字の読み書きが出来るから大丈夫かと思ったのだが、エルとの契約による自動翻訳システムやこっちの言語が日本語に聞こえる便利補正とかってというのが異世界特有の言い回しに対応しないために意味が掴みづらいのだ。

例えば“鍛冶屋に桶を投げる”みたいな感じに読めるのだけど、もちろん意味なんてわかりゃしない。

その後の文章を読んでいけば結果として意味がわかることは多いけど、こんな状態ではとても先生まがいの真似が出来るとは思えない。むしろ僕が聞きたいくらいだ。

予想通り物理や化学に関しては資料無し。

前に見た図書館では辛うじてそんな感じのタイトルがあったから概

念くらいはあると思うのだが、子供向けの内容でまとまった参考書などは無いんだろう。

大好きな有機や熱、運動量の勉強とかを教えられないのは残念極まりないが仕方がないか。

その代わり魔術という新ジャンルが増設されているものの、これを教えるのはやっぱり不可能だ。

自称魔術師が魔術を教えられないとかいろいろマズイ気もしたけど、エル曰くメシのタネをおおっぴらに公開するような魔術師なんてほとんど居ない上、エンドユーザとディベロッパが異なるなんていうのは良くあることだというので恐らく問題あるまいて。

それでも聞かれたら中途半端に習うのは逆効果と言ってしまう予定で進めている。

子供達はこれからプロに習うことになっているわけで、やはり餅は餅屋だろう。常識的に考えて。

となればやっぱり教えられるのは数学だけとなる。

参考書を見た限り中学受験レベルを薄めたような印象ではあるものの、売り買いをした結果の利益率を求めるものや徒歩の旅人を馬車
が追い抜くのは何時間後かを問うものが多くて意外と実践的だ。

日本の教科書のように“鶴亀算を使いなさい”というような但し書きも無いので連立方程式とか教えたらきつと楽になるんじゃないかと思う。

「もうそろそろいいのではないか？ 相手の学力がわからぬ以上、あまりキツチリとやってももったいないだけだろう。妾が思うにこ
ういったものは柔軟にやるのが一番だと思うぞ？」

「んー・・・っと。それもそうだね。とりあえずある程度は済んだからオシマイにしようか」

ぐったりとした様子でイスにしな垂れかかるエルを横目で見ながら、同じように体を預けてぐいりと背筋を伸ばすと肩甲骨と首筋のあたりからバキバキと音が鳴り、あまりの心地よさに思わず声が漏れる。うへえ。気持ちいい……。

「ふふっ、随分疲れておったようだな」

「そりゃこんな風な姿勢で長いこと作業したら疲れるよ。さて、それはともかくどうしようか？ オセロでもやる？」

「うむ、それは良いな。最近は何かとあって主と対戦する機会も少なかったし、今日こそは主から5割の勝利を奪って見せるのだっ！」

えいやっ、という具合にエルが腕を伸ばして僕のバックからオセロ用マットとコマのセットを取り出す。

もちろんこの世界にオセロなんてものはないからどちらもお手製なんだけど、コレが意外とよく出来てる。

マットは衣料品店で買った何かの動物の革をエルが器用に魔術を使って焦がすことで、コマはそこらへんで拾った木材を元に片面だけを焦がすことで作成。

さすがに手作りということもあってマットの端のほうがヨレてたり、コマの形がいびつだったりするのだが、これまた愛嬌があっていいと思うのはさすがに身内贗品だろうか。

などと考えているうちにテーブル上の参考書はベッドの上へとシフトし、確保されたスペースにはオセロ用のマットとコマが鎮座する。こうして僕とエルの真剣勝負が幕を開ける、はずだった。

「………むっ、なんと間の悪い」

「僕もそう思う」

コイントスで先攻を決め、さあ勝負となった瞬間に鳴り響いたのは軽いノックの音。

まさか無視するわけにもいかないので勝負は即時中断となってしまう、エルは若干不満そうだ。

「すみません、お待たせしました」

そんなエルの様子に苦笑しながらドアを開けると待っていたのはエプロン姿のソフィアさんだった。

エプロンにはついさっき出来たっぽい油污れなどがチラチラと見受けられるので恐らく夕食の準備などをしていただのたろう。

しまったな。一言手伝うと言えば良かったか。

「や、ユート君たち。ご飯が出来たから居間のほうまで来てもらってもいい？ ついでにネイクの奴も帰ってきたから適当に自己紹介もお願いしたいんだけど」

「了解です。参考書の類をまとめ終えたらすぐに向かいます」

「ありがと、面倒かと思うけどよろしくね」

しかし自己紹介、か。

相手はソフィアさん曰くバトルジャンキーと聞くし。

ううむ、どうしたもんか。

あれから参考書を片付けながら3分ほど考えてみたけどそんな短時間でグッドな自己紹介案が浮かぶはずも無く、ややげんなりしながら居間に向かうとそこにはクレアムさんとソフィアさん、そして金髪碧眼の青年　恐らくこの人がネイクさんだろう　が既に席に座って待っていた。

部屋を明るく照らす魔術の光はオレンジ色の優しい印象で、チラつきもなく非常に目に優しい。

おまけにこの色味の照明というのは食事を美味しく見せかける効果もあるのでこういった環境には最適といえる。

個室の明かりはもう少し白っぽい明かりだったあたりから予想するに、意識してこの色合いの明かりを選択していると見て間違いない。恐るべし異世界、電気も無いのに部屋の雰囲気に合わせて光を選べるとは。

既にテーブルの上には数種類の料理が並んでいて、すっかり食事の準備が整っているのにもかかわらず箸をつけたような様子が無いあたりわざわざ僕らのことを待っていてくれたらしい。

本当に頭が下がります。

「来たわね。そんなところで突っ立ってないでまずは座ればいいんじゃない？」

「あ、ええ……。ありがとうございます」

ソフィアさんは居間に入った僕らに気づくとすぐに声を掛けてくれたのだが、案内された座席はなんと上座。

気にしていないのか、はたまた概念が無いのかは不明だが、中途半端に自分のところのマナーが残っている僕としては多少座りづらい。ただ、イスを勧められておきながら座らないというものおかしな話なので着席はしたものの、違和感アリアリでなんとも落ち着かない

よ「ん」。

「はじめまして、ユートさん、エルシディアさん。オレはネイクです。たぶんソフィアやクレアム隊長から聞いてるとは思うけど、この村の治安維持が主な仕事です。これから二日と短い間だけどよろしく願います」

「こちらこそよろしく願います」「うむ、短い間となるがよろしく頼むのだ」

そんな落ち着かない僕らに対して簡単な自己紹介をするネイクさんの表情は明るく朗らかな好青年といった印象で、これがバトルジャンキーという評価を得ているような人とは到底考えることが出来ないのだが・・・？

「んじゃ、全員そろったところでご飯にしましょつか。ユート君たちはお酒大丈夫？ もし駄目なら水を取ってくるけど」

「ご飯だけじゃなくてお酒まで頂いちゃってもいいんですか？ 結構高いものだと思うのですが」

何故かやや申し訳なさそうにソフィアさんが聞いてくるが、コスト的都合によりあまりお酒が飲めない僕らからすれば思わず顔がにやけるほどの事実だ。

ああっ！ 本当にこの仕事請けて良かったっ！

「そんなこと気にしないで大丈夫よ。呑めるなら一緒に飲みましょ」

「ありがとうございます」

そういつてソフィアさんが注いでくれたお酒は茶色ながらワインの

ような香りがする不思議なモノ。

あまりアルコール臭がしないあたり恐らく醸造酒なんだろうけど、二日酔いしやすいお酒でもあるのでほどほどにしないとヤバそうだな。まさか仕事中に酔っ払ってるわけにはいかんもんな。

「ほら、あんまり気にしないで食べなよ。隊長なんてユート君たちが来たもんだから食べ始めちゃってるわよ？」

「……んぐ。別にいいだろ、ソフィアの作る飯は美味いから冷めたら勿体無いんだよ。それに挨拶とかそういうのはガラじゃないんだが」

「せっかくユートさんやエルシディアさんに来てもらったんだから乾杯の挨拶くらいお願いしたかったんですけどね」

ソフィアさんとネイクさんはなにやら不満げな様子ながらも料理に手をつけ始めたので、これはいよいよ僕らも食べていいよ的な感じなのかな。

それならまずは前菜っぽい奴から頂こう。

ほうれん草とチンゲン菜を足して二で割ったような雰囲気青菜とカリカリになるまで炒めたベーコンを卵で閉じたモノで、直径20cmほどのそれにナイフを入れると透明な汁と共に湯気が立ち上がり、辺りに卵の香りが広がってなんともいえない気分になる。

思わず口の中に溢れる唾液を飲み込みながらエルの分と自分の分を取り分けてまずは一口。

「うわ……。おいしい……」

半熟気味の卵は塩ベースで味が調えられており、それにほうれん草の味わいとベーコンの肉汁がじゅわっと広がって口の中を満たす。単純な塩味だけではなく、複雑な味わいになっているのは恐らく卵

にスーパースカナにかを利用しているからだろう。

次にソフィアさんに注がれたワインっぽい香りのお酒をちびりと口に含んでみると、その華やかな香りの後にやってくる凝縮された果実感が素晴らしい。

ややタンニンがキツくて後味に少し残るような感覚があるのが凄くもったいなく感じてしまう。

もしコレがワインと同等の代物であるならば適切な環境で数年間寝かせることで劇的に美味しくなるのは疑いようがない。

「主、これも凄く美味しかったぞ」

「ん、ありがとう」

小皿に乗って差し出されたのは豚肉　もはや正式名称はどうでもいい　のソテー。

付け合せのタマネギと一緒に独特の香草の香り漂うソースがたっぷり絡み付いていて実に美味しそうだ。

それをナイフで一口大に切り分けてぱくりと頂けばこれはもう説明不要の肉の美味しさ。

柔らかい肉が、ジューシーな脂身が、そのどちらもが素敵なソースと一緒にあって素晴らしい味となって僕の脳内を駆け巡る。

「凄い。肉の焼き加減と味付けが抜群でめっちゃめっちゃ美味しい」

「そうだろう、そうだろう。妾が思うに今回の中で一番美味しいと思ったのだからな」

「そ、そんなに褒められると照れるわね。ユート君もエルシディアさんも冒険者やってるならアチコチで美味しいものとか食べてるんじゃないの？」

「そんなことは無い。いくらアチコチ回れるといってもこれだけ美味しいものを食べるのはとても難しいのだ」

エルがにっこりと笑ってそういうと、ソフィアさんは少しだけ顔を赤く染めながら右手に持つカップの中身を一息に空けてさらに酒を注ぐ。

あれか、恥ずかしいことや嬉しいことがあると酒が入っちゃうタイプなんだな。きっと。

それからしばらく時間がたち、お酒の力も相まってすっかり場の雰囲気がこなれてきた頃。

「突然ですけど、ユートとエルに質問がありますっ！」

「はい、なんででしょう」「うむ、なんでも聞くと良い」

「オレが見た限りお二人は魔術師だと思うんですけど、正面から魔物と戦う際に前衛無しで困ったりはしないんですか？」

突然のネイクの質問はなるほど確かに疑問なところだと思う。

僕らの体つきはおよそ直接剣で殴り合えるようなものには見えないし、かといって強力な魔術を扱える長めの杖を携行しているわけでもない。

「困ったことは今のところ一度も無いぞ。主も妾もある程度以上の近接戦闘が可能でその間に魔術を組み上げることが可能だからな」
「それは、凄いですね。その歳で戦いながら魔術を扱える人というのはほとんど居ませんか？ お二人に来てもらえたのは幸運ですね。安心します」

「うむ、主に掛ければどのような依頼であったとしても完璧にこなすことが可能だ。だから安心するが良い。もし魔獣の類が村に侵入

してきたとしても人々には指一本触れさせぬよ」

うう、エルの信頼が微妙に重い。

確かに僕はこつちに来てからやたら強化された感はあるけど、その強化された肉体を運用する精神はあんまり変わってないわけで。

かといって自信満々にそう言い切るエルを否定するのもなんかあれだし、やっぱりここはひとつ全力で頑張るのが最善か。

「そういつてくれると思っていました。今までの冒険者達とは明らかに雰囲気異なりますからねっ！それで、どうでしょう。ここは一つオレと戦ってみたりしませんか？」

「それはお断りさせてもらうぞ」

酔っ払っているのか、ネイクのワリと支離滅裂な僕らに対するリクエストに対するレスポンスは極めて早いものだった。

まさかこんな風に断られるとはケラほども思っていなかったらしく、ネイクはあんぐりと口をあけてハングアップしてしまっている。

「ん、聞こえなかったか？ 模擬戦などはお断りするぞ。主も妾も明日から仕事をする以上怪我なんてするわけにはいかぬのでな」

「い、いえ。聞こえてます。まさかこんなにあっさり断られるとは思ってなかったのです。しかし残念です。オレとしては是非戦いたかったのですが・・・」

「ネイク、戦って強くなるのも悪いことじゃないが二人の予定を考えるに模擬戦とかをする時間はほぼ無いな。諦めろ、その分俺がキツチリ稽古をつけてやるからさ」

「ク、クレーム隊長・・・」

こうして、エルとネイクの話し合いは穩便に終えることが出来たのである。

微妙に蓄微つぽい光景をその目に焼き付けながら。

8 (前書き)

さんとさんと朝日が降り注ぐ中、ナルキス派出所の門前に並ぶは三人の騎士たち。

もつともそのうちの二人は騎士見習いなので今の言葉はやや事実と異なるのだが、それでもそう思わずにはいられないほどの存在感があった。

やはり統一された装備を纏った兵隊というのは映える。いろいろと

国からの支給品というだけあってあまり高価な装飾を施された武器防具というわけではないのだが、必要な機能が凝縮されたものというのはそれだけで機能美があるもんだ。

バンテージのようなものが巻かれた無骨な長剣はいぶした木で作られた鞘に収まり、ところどころ黒光りする金属で補強された防具は最低限ながら動きを妨げるようなところがなく、ブツシユの多い森林で効率的に活動するためには最適があることが一目でわかる。

さらに腰周りにはコンパクトなポーチ類が取り付けられており、中には最低限度の食料と必要十分なメディカルキットがみっちり詰め込まれているので万が一の事態にもある程度の対応が可能だ。

騎士は馬に乗って白銀のフルプレートアーマー、なんて考えを持っていただけに最初見たときはちょっとだけ面食らったものの、よく考えてみれば平地以外でそんな装備がまともに運用できるとはとても思えないし、なるほど確かに理想的な装備類だと思う。

「それじゃあユート君、後のことは頼む。我々も夕方には帰ってくる予定だからメシの心配はしなくていい」

「了解です。お気をつけて」
「任せておいてくれ」

そういうとクレアムさんはにっこりと笑って頷き、二人の騎士見習いの肩を叩いてからゆっくりと森の中へ入っていく。

「ついでにご飯の材料も取ってくるから期待しててねっ！」
「ソフィアの作るご飯はきつと昨日以上に豪華ですよっ！」
「・・・お前ら、これ。遊びに行くわけじゃなくて重要な仕事なんだからな？」

その、なんたる。
締まらないオチっていうのはきつとこつこつことを言っただろうな。
たぶん。

「ユートさん、これはどうやって解けばいいんですか？」

「ああ、これはまずソラクムひとつの代金をX、ラファーナひとつの代金をYと置き換えてしまえば見知った計算式になるでしょ？文章問題はどうやってたら計算問題に置き換えられるかを考えることが重要だよ」

「初等魔術概論のこの部分なんですけどどうしても意味がわからなくて・・・」

「わかりにくいかも知れぬが魔術回路の起動部分はここだ。コア部分はこの四角いところだな。あとは教科書をしっかり追っていけば大丈夫。面倒くさがらずにちゃんと一行ずつ見ていくんだぞ？」

「この儲けと損の境目の出し方はこれで大丈夫ですよね？」

「ちよつと待った。まずはこの商売に必要なお金の計算が抜けてる。その後はこつやつて線を引いてあげればほら」

「この辺の歴史の流れが覚えにくいんですけど。いい手段があったりはしませんか？」

「暗記物に近道などない。歩きながら復唱するか、復唱しながら書き取りするかしかないな」

「ユート兄、勉強のことより冒険のことを話してくれよ。エル姉から聞いたけど武技大会でもすごい結果を残したんでしょ？」

「いや、今は勉強を教えるところだからね。そついう話は休憩中に話したげるからまずはペンを動かそつてば」

先生ってやつは本当にっ。

想像以上に大変だったっ……！

いや、過去形にするのは止そう。

まだ一日目のお昼休みに差し掛かっただけなのだから。

今までに家庭教師のようなアルバイトをした経験が無かったとはいえ、現代日本のそれなりの大学でまじめに勉強をしていたのでこの仕事に関しては結構自信があった。

参考書も読んだし必要な点に関しては暗記して万全の対応が出来るはずだった。

身も蓋もない嫌な言い方をしてしまえば舐めていたのだ。この世界の教育ってものを。

参加者はウイリスの学校に通うことになる子供だけ、具体的な人数は僅かに3名だというのに学習に関する意欲は一人を除いて非常に高く、質問は留まるところを知らずにヒートアップして気づけば対応し切れなかったタスクが溜まり続けるというとんでもない状況が作り出されるまでにはさして時間を必要としなかった。

しかも、その学習意欲が控えめな子供だって別に勉強が出来ないわけではなく、それどころか単純な数学能力では三人の中で最優秀だったりするから手が付けられない。

自分の状況が極めて劣勢であり、数学以外の質問に対して答えられないことのヤバさに気づいたときには全てが遅く、なんとか参考書を片手に調べながら回答するというおおよそ先生にあるまじき結果となってしまうのだ。

「ふう……。ようやくお昼だぞ。これは想像以上に大変な仕事だ

「たかも知れぬ」

「いやもうホントにそんなだね。こんな忙しいとは完全に予想外だったよ」

「ま、来もしない魔獣を待ち続けるよりはよっぽどかましではあるな」

そういうとエルはソファに沈み込むようにして座り、テーブル上の紅茶をだらしのない体勢で飲みながらすっかりご満悦な表情を浮かべている。

そんなエルを横目にイスに座って紅茶を一口、そして参考書をぺらり。

「なんだ、まだやるつもりか？」

「僕個人としてはお昼以降にやることになっちゃった魔術の練習って辺りが新たな頭痛のタネなんだよ。デモも流さなくちゃいけないから今のうちに冒険者としておかしくないレベルのを見ておかないと再現すらおぼつかない」

「そんなのいつも使ってるあれでいいではないか。その、ばとるらいふる、だったか？」

「あれって高性能だけど凄いい味じゃん？ だからたぶんウケないと思うんだ。実際問題ウケたところでどうなんだって話はあるとはいえ、せつかくの導入部だから傍目にも派手なほうがいいかな、と」

最近使い込んできたせいで高性能化の一步を辿っている僕の魔術ではあるが、地味であるのはもはや疑いようも無い事実だ。

炭酸飲料のプルタブを開けたかのような射撃音と共に毎秒700メートル前後で撃ち出されるのは直径25ミリ、全長100ミリ程度の氷の砲弾で、命中時のエフェクトはただ突き刺さって残るだけ。場合によっては貫通してしまうのでそれすらも残らない。

マニアックな方なら気づいたかもしれないが、これは .3381a
pua というボルトアクションライフルなどに利用されるかなりメ
ジャーな弾丸とほぼ同等のスペックである。

もちろん実弾と比べると遥かに大口径なため距離による破壊力の減
衰は大きい。至近距離でのソフトターゲットに対するインパクト
は強烈の一言で、オークヤレッサーオーガなどの耐久力の高い生き
物ですら命中箇所によっては一撃で無力化することが可能だ。

だが、酷く地味である。大事なことなので二回言いました。

「そんなことを気にしておったのか。もうちょっと気楽に行かない
とこの先もつと大変になるぞ？ さらにいうとだな、主のアレは非
常に実戦的な魔術なのだから気にする必要すらあるまいて」

「そんなもんかな？」

「うむ。・・・ただ、主がもう少し見栄えの良い魔術を使いたいと
いうならばこんなのはどうだろうか」

魔術の練習、と聞いて最初に思い浮かべたのは光を生み出したりと
か、水をちよろちよろと流したりするようなものだったが、実
際にはどうにも異なるようだ。

子供達もそれらの魔術は既に十分扱いなれており、冒険者の僕らに
求められたのもう少し攻撃的な魔術 火の玉を投擲するとか氷
柱を撃ちだすとか の類らしい。

個人的な感想を言わせてもらえるならば、実際にこういった魔術を扱うというのはそれなりの危険性を孕むためにあんまりやりたいような内容じゃない。

仮どころか思いつき武器になるものを子供が持つのはどうかとも思うのだが、すぐ傍に命の危険が転がっているようなこの世界では子供が武器を持つということに関する嫌悪感はないのだろう。

もともと、隣のお米の国では子供にピストルを撃たせたりするのも珍しくないし、“マシンガン撃ての会”に所属する小学生の女の子がパパの保有する軽機関銃をばらばらとばら撒いていたのを見たことがあるのでこの感覚自体が日本人特有のものなのかもしれないけど。

そんなこんなでクレアムさん達も利用している魔術練習用の広場に集まった子供達の様子を見ると、これから攻撃性の魔術を扱うんだという期待感と緊張感が織り交ざった独特の雰囲気を感じる。

唯一の男の子であるアルトは三人の中で最も楽しげな表情で、まるで初めてまともなトイガンを買ったときの僕のように。うん、その気持ちは良くわかる。

勉強中は人が変わったように集中するリンは、ややおっかなびっくりという感じ。

何事にも明るく丁寧な印象のフィーは杖をまじまじと眺めながらも興味津々といった具合だ。

「さて、それじゃあ魔術の練習を始めたいと思うんだけど・・・っと、その前に魔術を練習する上でとても重要なことを教えるのでちょっとだけ良い？」

「はい」

真剣な目つきで聞いたからか、しっかりとした返事がピシッと響く。そんな三人の応答に満足しながら僕は地面に直径1メートルくらいの円を描き、その円の中心から120度前後の扇形をイメージした直線を引いていく。

言葉だとかやイメージし辛いけど、ちょうど円盤投げのフィールドのようなものだと思いますばわかりやすいんじゃないかと思う。

「突然だけど、魔術を練習する上でもっとも重要なのは安全性、これは個人的に譲れない。なので皆も安全性ってモノに対してかなり気を使ってほしい。今から皆が練習するのは間違いなく人が死ぬ可能性のあるものだからね」

そう言うってから円の中心に立って杖を構える。

「大きく分けて三つのルールを皆には守ってもらう。まず一点目は魔術を扱うことが出来る場所は今のところ僕が居る円の中だけとする。二点目は僕かエルの許可が出るまで杖に魔力を流さない。三点目は杖を向けることが出来る範囲はここからここまで、範囲外に杖を向けるのは魔術を使用する気が無くとも禁止だよ」

「……はい……」

うん、予想よりも三人が素直で良かった。

魔術の使用範囲が限定されるとか実戦的じゃないなんていわれてもおかしくないと思ってたんだけど、どうやら素直に従ってくれるみたいだ。

「というわけでまずは練習の内容を僕がやるので少し後ろに下がってちょうだいな。エルも準備は大丈夫？」

「ああ、いつでも良いぞ」

エルが頷くと同時にフィールド上に魔力で作られた直径30センチほどの標的が五つ現れる。

標的までの距離はまちまちだが、もっとも遠いもので10メートル、近いものだと2メートルくらい。

別に空中でふらふら動いたりしているわけではないが、まともに攻撃魔術を撃つたことのない三人がバシバシとラピッドに命中させるのはかなり厳しい。

だから慣れるまでは一発ずつ丁寧に狙っていくことになるので魔力の操作を学ぶ上で非常に良いだろう、というのがエルの意見だ。

「主、準備は良いか？」

「おっけ。いつでもいけるよ」

「それでは。始めっ！」

エルのキリリとした声が響くのと同時に背中のスリングバッグから杖を引き抜き魔力を集中、必要最低限の魔力が集まった段階でイメージを変換して氷柱を出力。

そのまま視線上のラインに杖を合わせるようにして狙点を定めてプルザトリガー。

カツン、とシアが落ちる感覚と同時に放たれた氷柱は標的の中心に突き刺さり、緑の標的が命中を表す赤へと変化した。

普段と違って少なめの魔力で射撃を行っているため、余剰魔力が冷却ガスとなって視界を妨げたりすることも無く、次の標的への照準速度は普段以上に軽快だ。

タタタンと立て続けに脳内トリガーを引いて全ての標的に命中後、杖にまとわりついた魔力を回収して安全を確保した段階でラウンドは終了。

「おおお！ すっげー！」

喜んでいただけで何よりでございます。狙い通りなだけに非常に嬉しく思います。

やっぱりこの手の訓練とかではインタラクティブ性の高さが興味を惹かせる上で一番大事だよね。

声を上げたのはアルトだけだったが、ちらりと見た感じでは残りの二人にもそれなり以上の興味を持ってもらえたみたいだ。

リンはともかくフィーにいたっては杖を握り締めちゃってるもんね。

「と、いう風にするのが今回の訓練の目的です。最初は落ち着いてゆっくりと狙って慣れてもらって最終的には移動射撃なども織り交ぜた実践的なやつも出来るといいなって思ってるよ。さて、世の中百聞は一見に如かずなんて言葉もあるのでまずは皆にもやってもらおうかな。まずは誰がやる？」

「あの、ユートさん。ちょっと待ってください。これを私たちがやるんですか？」

「うん」

「はつきり言ってしまうとユートさんのようなことは逆立ちしたって出来そうにないです。私たちではあんなふうに魔術を速射することも出来ませんし、もし速射出来たとしても魔力があっというまに尽きてしまいます」

リンが困ったような表情を浮かべてそう言うが、それらのことは僕らも十分に理解している。

だから今回に関しては対策だっけばっちりだ。

「魔力量に関しては心配要らぬよ。今回の目的は魔力量の向上ではなく構築速度と精度の向上だ。だから魔力自体は妾のものをある程

度利用することで消耗を低減し、三人にはひたすら魔術を撃ち続け
てもらおうぞ」

「そ、そんなことが出来るんですかっ!?!」

「可能だ。といってもまずは体感してもらったほうが早いだろうか
らな。リンはその円の中に入って準備をするが良い」

困惑した様子のままリンが円の中に入って杖を構える。

ぱっと見ややへっぴり腰ではあるが、相手は女の子だから構えの修
正を僕がやるのは駄目か。

あとでエルにお願いしなくちゃ。

「準備は良いか?」

「はい。大丈夫です」

「それでは始めるとしよう。杖に魔力を込めるのだ」

エルの言葉でリンが魔力を集中し、その表情が酷く驚いたもの
へと変わる。

「えっ、なんで・・・?」

「驚くのはわかるがまずは落ち着いて魔力を操作せよ。そこを妾が
やってしまおうとリンの訓練にならぬ」

「は、はい!」

僕から見るとエルからリンに向かって魔力が流れていることくらい
しかわからないのだが、どうやら想像以上に効果は絶大らしい。

あっという間に炎で作られた矢が出来上がり、それが標的に突き刺
さること五回。

途中3発ほど失中してしまったものの、初めてであるということ考
慮すればかなりのものだろう。

「驚きました。こんな風に魔術を使ったのは初めてです」

「大概の魔術師は最初の一步としてこういう風に魔力の操作を学んでいくのだがな。それなしでここまでやれていたということは随分と才能があるのだろう。魔力量なんてものはこれからいくらでも伸ばしていけるのだから、今日明日くらいは制御系の練習を頑張るが良い」

「わかりました。頑張ります」

リンは先ほどとは一転して楽しげな表情で戻っていったが、エルは大丈夫なんだろうか。

ぶっちゃけなくともエルの負荷は、高い。

訓練者とパイプを結んで魔力を流しながら標的を作りつつ、さらに魔術が命中したら標的の色を変える処理も走らせなくてはいけない。エルが自分でやるからといっていたので任せてはいるものの、ちょっと心配だ。

『ねえ、エル』

『ん、念話なんて珍しいな。どうかしたのか？』

『さっきのぶつつけ本番だったけど大丈夫？ 特に制御系でかなり負荷が掛かりそうな処理をさせちゃってると思うんだけど』

『ふふん、あまり妾を舐めないでもらおうか。この程度であるならば数人をまとめて相手をしたって大丈夫だぞ』

『そっか、ありがと。こんなの僕だけじゃ絶対無理だったよ』

『うむ。主に喜んでもらえたのならなによりだ。それよりもほら、アルトもフィーも興味津々といった具合になっておる。早く続きを進めるとしよう』

『了解、午後頑張りまう』

8 (後書き)

1 マシンガンを撃ての会

これはテレビの番組での紹介名であって、実際の名前じゃありません。

かなり前の番組でしたが、あまりにも衝撃的だったので今でもはつきりと覚えています。

たぶんネバダ州リノで開かれているMachinegun Show
wand Shootだと思っのですが・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6133r/>

異世界で生活することになりました

2011年12月19日01時31分発行